

コロニア文学

第10号

記念特集号

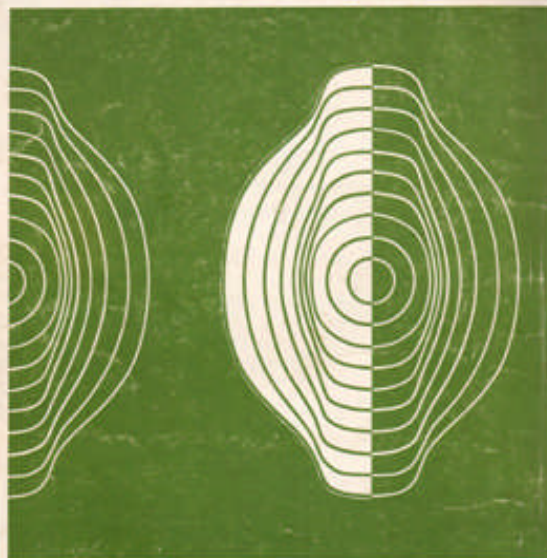


1969年・11月

Grêmio Literário "Colônia"

SÃO PAULO

コロニア文学



小説特集

習い
時と
風・
始めと
終わり・
三都・
正

10

記念特集号

Novembro — 1969

コロニア文学・第十号

コロナ文学・目次・第十号……一九六九年十一月

◆表紙……豊田ゆたか◆扉……田中 重人

◆目次カット………富岡耕村

◆カット……白井久雄・玉木勇治

碧い岬(52枚) ……春日 健次郎 5

時と風(64枚) ……(作) エリコ・ヴェリシモ

(訳) 田畑 三郎 42

嵐(あらし)(53枚) ……矢島 健介 82

橋の外人(26枚) ……猪名 四郎 187

詩

150

老 眼………可児 三平

眠 り………佐藤 博三

ある移民の記録……江尻 潤

花と詩………芳賀 裸人

朝の切符………ヤジマ・ケン

地球脱出………蓼科冴智雄

渚………藤田 勇

あこがれ………小野 政子

飾 緒………もりの・いさむ

私は生きている……真木 衿子

丘……………鹿毛 至

めがね……………水野 浩史

唯あわあわと……………春野 菜花

“いま” 孕んでいる……………横田 恭平

特集・わが住むまち・断章 115

サンパウロの表玄関（サントス市）……………坂 光雄

心ありや教会の鐘（グワラサイ市）……………水野 浩史

美女の多いわがまち（マリング市）……………勝山 呉泉

壮大な天然の公園（ヴィラ・ヴェリヤ）……………まや・あきら

都市計画とイペー……………増田 恒河 302

文学と年齢……………瀬戸 春灯

おくてのオルガ……………鹿毛 至

トントン蛙……………務台 一郎

兄の手紙と我が半生（短篇自抒伝）……………林 伊勢 288

深沢七郎とわたし（訪問記）……………高野 耕 声 416

〔短歌・257 俳句・267 川柳・277〕

分蘖（ぶんけつ） 30首……………新納潤魚

一夢（いちむ） 30首……………瀬崎涛声

羽毛の酔 50句……………殿岡萩花

月へ一歩 50句……………鈴木光威

花言葉

50句……………

勝原文枝

月夜の幻影

10首……………・開沼貴代

菊の花……………南条由喜夫

夜汽車……………陣内しのぶ

妻と共に……………森元三山

近詠……………増田恒河

逃水……………木村要一郎

色めがね……………坪井柳念坊

虫の唄……………小野蛙人

日章旗……………水野浩史

自由の灯……………黒田不知火

樽（旧作再録）

166

砂の城（23枚）

伊那宏

204

座談会 批評について

220

座談会 作家たち

238

評論 詩 川柳

316

10号までの反省・批評

334

創作 風車のある家 三瀬喜代志

426

創作 始めと終り 藪崎正寿

449

選後評

489



創作五二枚

碧い岬

春日健次郎

ヤスオと、漢字でどう書くのか知らない。が、ブラジルでは、比較的発音し易いので、別にブラジル名はつけていない。ヤスオと、スにアクセントをつけて呼ぶ。ごく親しい男友達は、ヤスだけである。

ヤスオは、厚いシーツの裾の方が破れかけているのに気がついている。だから寝る時、破れないように足に力を入れないようにしている。一週間位前から気になっていたが、部屋を掃除してくれるアパレシーダと云う娘には、いつていない。いえば取り換えてくれるか、繕ってくれるに違いないが、何かめんどくさく、その親切がわづらわしい。

「どれ、起きるかー」

まだ完全に明るくなっていない六時過ぎ、ガラス窓から、裏の岩山の肌が、霞んで見える。枕元のタバコを取って、ガスライターで火をつけた。アメリカ製のマルボロ、ロングサイズである。フィ

ルターの所を歯で噛んだ。寝台の頭の方へ上半身をもたせかけて、一服すると眼が覚めてくる。寝衣は着けていない。フィルター付のタバコの三服目位からタバコの味が、グツとのどに伝えてくる。腕に力を込めてみる。ミシミシと音がするようだ。

ブラジルの七月末は冬である。幾ら海岸地帯とはいっても朝は肌寒い。

「ヤスオ！起きてる？ 時間ですよ」

かん高いアパレシーダの声がヤヤ艶を帯びて聞えてきた。確か、部屋の前に立ち止って、中の様子を窺っているに違いない。いや、ひよっとすると鍵穴から中の様子を覗いているかも知れん。

「ウー」

低いうなりに近い声で返事をした。

（俺はね、起こしてもらわなくても起きるんだよー）小柄だが、肉の締った、可愛い顔立ちの娘で、少し上向きの高い鼻と、薄い眼の色を思い浮べた。

彼は、パンツ一枚で起き上って、わざと扉の方へは行かずに、部屋の隅にある洗面所に行って水を流した。前の鏡に歯みがきの白い飛沫が点々としているのが気にかかり、指で落した。

「カフェーに、牛乳に、パンが暖かいよ」

アパレシーダの声が少し大きくなったようだ。

「わかった。」

鏡の中の自分の顔を良く見る。背が高いので、腰をかがめないと全部見えない。太い眉が真中でくつついていて、浅黒い顔を、よ

り精悍にしている。口をへの字に曲げて、睨んだ。

部屋を出ると、今顔を洗ったという匂いがした。口には歯みがきの味が残っている。

アパレシーダがすぐ近づいて来た。両手にカフェーと牛乳を持って。彼は机に置いてある厚めの茶碗を表に向けた。

「今日は土曜日ね、沢山のお客に、沢山のお嬢さん方が見えるわよ、ヤスオ。」

「むー」

まずカフェーだけ飲む。

「ヤスオは、きれいな娘さんには特に、丁寧に教えるんですってね。知っていますよ、ヤスオ。」

むっとして横眼であらぬ方を見た。

「黙っているわね、ヤスオー あら牛乳もつと あるわよ、ヤスオ。」

「そうヤスオ、ヤスオと気易く呼ぶな。」

「いいじゃないの、呼びたいんだから。」

「ふん。」

（何時からシーダは俺の係りになりやがったんだろう）他の手伝の娘達がクスクス笑っている。

ヤスオはパンにバターを厚く塗りたくって、それを今度は牛乳で流し込んで、返事もせずに立ち上った。

クラブの従業員食堂は炊事場の一角に作ってあるが、その食事

時間がまちまちのせいか、がらんとしていた。

そのクラブ、正確には、グワルジャール・ヨットクラブ。ブラジル語でいえば、イアテ・クルビ・デ・グワルジャール。そのクラブは、サントス市の向い側グワルジャール市の南、グワルジャール海岸の高層アパートを通ってムンドウバ岬の手前の入江にある。三階建の白色のクラブハウス、少し離れて、クラブ会長専用の建物、これは二階建で、クラブハウスよりや、小さい。この間にはさまって専用プールとヨットハーバー、艇庫、山手に従業員宿舎と、白一色に統一されている。

ヤスオは、此所に来て約半年になるが、過去にヨットの専門教育を受けたわけではない、ほんの偶然に、クラブ会長が、ウベラーバ海岸で釣を楽しんだ時、ヤスオの父親が、水先案内をつとめ、良い戦果があり、気特がいい所へ、

「あのヨットをいじくっているのは君の息子かね。」
と尋ねた。

「へえ、あれはヨット気違いでしてな。自分で作ってるんですか、金にもならねえんですがね。」

「いい若者だ、どうかね、わしのクラブに来て、クラブ員にヨットを教えてくれないかね。」

口は重いが、ヨットは器用に操った。今迄休日に遊びに来る都会の若者を相手にヨットを走らせ、そのチップだけが主な収入だった。ヤスオにとって、最低給料に毛の生えた程度の給料であるが、食事がついて、住居があつて、好きなヨットをいじって居

れば良い、今の生活は快適だ。殊に彼は、こわれかけたヨット、良く走らないヨットを直す事に情熱を燃やした。

「ヤスオ。プロフェッショナル！ 気をつけてね。」

アパレシーダが後ろから声をかけた。彼は一寸 立ち止るように見せて、そのまま歩いた。

（御好意有難う、目玉ちゃんーお前さん、少しスカート短かすぎないかね。それに腰の線がぴっちり出すぎていますね。むき出しの真白な 腕に少しばかり触って見度いですがね。眼の色が薄いと、眼玉が二重に見えるのは、どう云うわけだろう。美人で、俺は好きだが、今、恋愛できないんだよ。ー）

ここ二カ月位、全々雨が降らないので、常に使用す各ヨットの帆は、たたんだだけで、カバーをしなくて良いので助かる。今日は会員が多数来ると思われるので、クラブのヨットを大小四隻程用意して置かねばならない。外洋用も使うかも知れない。会員の子弟は、帆を張る練習からするわけだから、艇庫から引き出すだけでよい。そして、入江に突き出た突堤に舫う。艫から錨を投げ込んで固定する。それだけしてしまつてタバコを喫む。日が上つて汗ばんできた。昼ともなれば、サントスと違って静かな、上品なグワルジャール海岸には、ビキニスタイルの良く似合う娘達が、歩き廻るだろう。このクラブでもやはり、そうにちがいない。入江の中には、個人のヨットが十数隻舫つてある。持主達は遊び終わると突堤につただけで、さっさと上つてクラブハウスに行つてしまう。後始末をヤスオに頼むわけだ。それを一つ一つ、入江

の中に舫い直す。でないと突堤が一杯になってしまふ。だから、そのほとんどの艇の世話をやいていることになる、一人で。従つて、ヨットのくせや、帆の工合等、皆頭の中に空んじている。無論その手間賃代りのチップが入る、これが案外彼の給料より多いのだ。今喫んでいる外国タバコのマルボロも、ガスライターも、そうだし、或る織物工場の社長など、反物をごつそりとくれ、それを炊事場のコックや、手伝の娘にバタバタ分けてやつたりした。

十一時近くなると、週末をヨットクラブで過す会員が家族をつれて、若い者同志で、集まり始める。クラブの表門は、さまざま、自家用車で一杯になる。カーマニヤは、消音器を外してバリバリ音を立てて入つて来る。フィアット、メルセデス、ムスタング。これ等の車から降りて来る男女の服装も、丸首スポーツシャツに、デニムのリースボンで、うんとラフに着こなし、素足にスポーツ靴。そして、裾の広がった、それでいて腰のぴっちり引き締ったパンタロンの上にダブついたセーター等。会長がトルコ系という事で、会員にもやはりトルコ系、レバノン系、シリヤ系が半ば以上いるのではないか、サロンには、何時もミミズのくねつたような字のアラビア語の雑誌が数冊置いてある。其白い肌よりも、少し、ほんのわづか色のついた肌をした、眉のはつきりした十七、八才の娘達は美しい。

食堂には、もう水着の娘や若者がうろうろし始めている。土曜日の社交はまず昼食時から始まる。従業員の方は、手の空いた者から勝手にするのであるが、自然に順序が決つていようだ。ヤ

スオは、その食事時間の中程、十二時頃をねらって食べに来る事にしている。彼は仕事中は、主として白丸首シャツに海軍作業用白ズボン、裾がややラップになっているのを用いる。

食堂の中を通って炊事場へ行くと、

「あーらプロフェッソール、ヤスオ！」

「今日乗るわよ。」「私もよ。」

等と、声がかかる。ヤスオは口をへの字に曲げて眼だけ動かして答え、通り抜ける。

「プロフェッソールと一緒にではかまはないが一人では不可けないよ」と云っている父親もいる。

「――（さて、初心者 of 順番が困るな――まあ、めしを食ってからだ。）」

左手の指をパチンと鳴す。

「――（俺は、一緒に乗って、娘達を眺めるのが好きだ。野郎の方はどうもね。が、仕事だからな。娘達のむっちりした太腿のあたり――薄いナイロン製だろうビキニが水にぬれた時の事を思うとたまらんな――）」

アパレシードが、席につくのを待っていたようにして、皿に油御飯と、大きいエビフライをのせ、上に赤いケチャップをかけて持って来た。

「有難う、何時も。だが、モーリヨが少し多くないかね、美しいシデイニャ？」

「あらそうだったわね、ヤスオはそのままの方が良かったんだわ

ね、美味しいけど、取り換えようか？」

「いいよ」

「今サラダ持って来てあげる、ヤスオはパルミットが好きだったわね。」

「俺は、すじの入った、少し硬いめの方が性にあうんだぜ。フニャフニャのパルミットはどうも――まあいいや、どれでも」
エビにレモンをたっぷりかけて始めた。坐ったヤスオの所から食堂の一部が見通せる。

――（俺はただで食うんだから平気だが、皆は高い金払って食っている、市価より安いといってもやはり高いだろう。一体会員達は何をして、ものすごく金を稼いでいる連中なんだろう。ともかくこの昼食にどれだけ支払って、など全々考えない、いや考える必要のない連中なんだなあ――ふっふっふっ、俺はただで一番うまいものを食っている――）

アパレシーダが、サラダの大皿の前で向う向きになって、ヤスオの為のものを取っているのだろう。ミニスカートの厚手の布地でできているのが、反ってセクシーだ。

（サラダを後で持って采やがる――ま、いいや、どっちを先に食っても、うまいものはうまいんだから。）

その時、小さな窓口から、マネージャーのジョゼ・マリヤが顔を出した。きちんと、白い上衣に黒タイを締めている。

「ヤスオ、いるか」。

「ウー」口に食べ物が詰っている。

「ああいたか、食事が終わったら、一寸きてくれ 会長の席だ。紹介する外国の家族があるんだ。まあゆつくり食えよ」。

「いいですよ、マナージャー。めしはすぐすむ」。

ヤスオは、食事を急いで食うのが好きだ。子供の頃、良く噛めといわれて、味が分からなくなった事の反動かも知れない。普段の時も可成り早いが、仕事が待っているとか、人に呼ばれている時など、急いで食べる食事の快ろ良さはこたえられない。

アパレシーダが何気なく近づいて、食後の果物の赤マモンの皿と砂糖の壺を置いた。

「アルゼンチンの家族は大地主で、金持で、お嬢さんがきれいですつてよ。」

「んー」

上目づかいに彼女の口元を見ただけで口を利かなかった。

「プデインもいる？」

「いや、あとで」

マモンを大切にし、ザクザクと食った。炊事場の中は、食器の音と人の気配で、ザワついている。ヤスオは口を動かしたまま立ち上って「モメント、シーダ」と呼び止めた。両手によくれた皿を持ったアパレシーダが、何だろうとニコツとして振り向いた。彼はいとも無造作に、彼女が腕にかけている、大きなナプキンを取って、口の廻りを拭いて、ボンと彼女の肩の上に返し、そのまま炊事場を出て行った。

会員食堂は、床と壁に黒い大理石が嵌め込んである。一方は海

に向って開いて居り、同じ床が水際まで伸びて居り、テーブルも波際まで置いてあり、昼間は大型パラソルが、各テーブルにさしかけてある。

葉巻をくわえた会長が、主だった会員に紹介を終わった所で、アルゼンチンのお客一家がひさしの出た戸外のテーブルにっこうとしていた。ヤスオは三人の女姉妹だと思った。

「この男はヤスオといましてね、ヨットの事はこれが全部致します。御希望をいって下さい。」

「どうぞよろしく、ヤスオです。昼から御乗りになりますか？」三人と握手したが、その手のやわらかさにびっくりした。ことに一番上の娘のそれは、透き通るように白く、その小指に嵌められている大ぶりの角型の碧色をした宝石の指環が良く似合って美しかった。

ヤスオは右手を腰にあて、右足を少し折った姿勢を保ちながら次の言葉を待った。

（今の俺の姿勢は彼女等に好感を呼ぶかどうか、足の方のズボンの線が大切だぞー　こんな気取った姿勢が好きなんだなあー）

「食事が終わったらすぐ乗りたいわ。その為に来たんですもの、待っていてくれる？ヤスオ」

少し聞き取り難いが、意味は解った。リズム感があって、スペイン語は気持が良い。

「ポイズノン。向うの突堤でお待ちして居ります　お嬢さん方、

どうぞごゆっくり御食事を」

「マドレも一緒に行きましょうね。ここ、ブエノスより水がとてもきれいで、岩が沢山あつて楽しそうだわ」。（一ーマドレと云えば、これは母子かあーとすると、今話しているのが上の娘か。）

十八才そこそこと思われる。明るい、金髪に近い栗色の髪を長く伸ばしている。手入れがいらしく艶がある。真白のタートルネックのセーターに、リーアメリカノのデニムのズボンが適当に水をくぐつて白っぽくなって居り、なかなかおしゃれだ。下の娘もほぼ同様の服装。それより母親らしい婦人の方がぐっと男の眼を引く。髪の毛は同色で、それを無造作に捲き上げた襟足が、はっとする程美しい。

紺色半袖セーターに、白ピケの裾がやや広がったズボン、その足の組み方。口元が少し受け口なのがやさしさを強調しており、見詰められると、引込まれるように感じる、あざやかな碧の瞳と濃い眉とが顔全体のポイントになっている、細面。娘の方は、瞳がやや薄い色で、薄い唇が理知的だが、態度そのものは親しみ易い。

「プロフェッソール、僕達も昼から乗り度いのですがね。」

右隣のテーブルから、髪を伸ばした若者が声をかけた。ヤスオはつま先で体をくるりと回転させた。

「いいですよ皆さん。一緒しましょう。ヨットは四隻用意してあります、スナイブ級です。あなた達の腕前はどの位ですか、レース用のフィン級をされるのでしたら用意しますが」

「うわあー自分で動かすのは始めてですよ、そちらのお嬢さんは如何です？」

何れも金持のドラ息子だろうが、それにしても言葉つき、態度に好感が持てる。陸に上がれば、アルファロメオや、ポルシェのスポーツカーを乗り廻している連中だ。ヤスオは感心した。――（なかなかうまく話のきっかけを作るじゃないのさ、この若者達――）

今日は特に人数が多いように思えた。食堂が一杯になっている。従ってヨットの希望者も多い。初心者之二組以外は用意したスナイブ二隻の他に、やや大型の5M級とY15を出し、小型のフィン級、FD級、それにヤスオの持舟であるスパローも動員した。ヨットは、一度教えるともう教える必要はない。つまりお互いに研究しあうからで、あとはコーチになる。そして艇のクラスが変ると又教える。

ヨットの原理は、ごく簡単で、帆を張り、風を受けて水の上を走るだけである。技術といえ、ロープの結び方、風の受け方だが、ロープの方は、もう何百年も前から舟乗り達が作り出した結び方で、水に当たっても解けず、解く時は簡単にほどけるようになってゐる。舟の平衡とか風の見方は馴れた。やはり男の子の方がのみ込みが早く、ヤスオもその方に勢い力を入れるようになる。女の子のビキニの姿態が何とも眼にまぶしく、幾ら見馴れているとはいえやはり遠慮する。

「ヤスオ！プロフェッショナル！ちよつと、ちよつと、ここどうなる

の？」

「もういいから早く走らせてよー男の子は勝手に行くわよー」

「ええそうですがね、まあ一応はできないとあとで困りますから。お嬢さん方の方は私が乗りますか娘が、ロープをゆすぶりながら見ていた。母親の方は、さすがビキニではなく、ベルムードのパンツであるが、少し開き加減の真直ぐ伸びた足がすばらしい。上はタオル地の上張り。」

（若しスカートからパンツがのぞけるとすると、このベルムードが直かに見えるのと、どう違うか？その見た感じの違いは何だろう。そして婦人方は、その違いを明らかに意識しているらしい。それを、海岸に来て遊ぶ時、最大に効果を発揮しようとするわけだ。俺にとっては、その違いが、違いではないと自分で考えて眺めたい、その方が俺の神経をよりよく、轢ぐるからー）

ヨットの初心者にとって、自分が始めて操舵席に坐って、片手に舵桿を握り、片手に操帆ロープを引張って風を受け、走り出した時の感激は忘れられない。そして帆の張り工合でスピードが自在に変化出来る面白味。誰もがこの席に坐りたがるものだ。

まずグワルジャー海岸に出て見て安全を確かめた上で、上の娘に席を渡した。娘は案外上手に操って行く。下の娘が、それを見てジリジリして居るのが良く判る。早くその席に坐り度いのだ。

一般の人、海岸の砂の上に寝そべったり、水に入って遊んでいる人達に取って、沖を走るヨットはあこがれだ。乗っている連中にしても、やはり岸から眺められているのをその肌感じて居り、

それがないと張合がない。

ヤスオは、クラブ員が一隻でも出て居れば油断出来ない。グワルジャー湾のほぼ中央に、又その向うの海岸線の中程に、サントアマール岬の附近に、岸から見れば、その姿の美しい岩が、ヨットに取っ見れば危険この上もない、下手をすれば生命取りにもなりかねない岩なのである。出るヨットが多ければ多い程、ヤスオの吹く笛の回数は多くなる。注意をするのである。ボートと違って、ヨットには安定を良くする為に、センターと称する重りが艇の中央にぶら下っていて、横倒れを防いでいるが、これが岩に触れやすいのだ。ヤスオの神経は疲れる。

リオでもそうだが、サントス附近は、比較的高い山脈が海岸のごく近くまで迫っているので、日暮れが早い。太陽が、セーラ・ド・クバトンに姿を沈めるのは午前五時頃だ。急速に薄暗くなり、冷える。そして黒い山影がぐっと近づいてくる。

初心者之二隻はほぼ一緒に行動したので、すっかり親しくなり、歯切れの良いスペイン語は、謂わば、ポルトガル語とは親類みたいなものだから、双方キャキャいながら結構通じている様子だった。入り江に帰って来て、ヤスオが再び舵を取った。風が少く又突堤に静かに着けるのは初心者には無理だからだが、他の若者連中の艇はやはり、風を受けられず、入江に入ったとたん止つてしまい、補助のオールでやっとこ着いた。

「止っちゃったわね、下手くそさん。」

若者達は頭をかいた。

突堤に上がると娘が飛びついてきた。

「ムーチャス グラチャス ヤスオ！」

「マニヤーナ タンビエン。」

母親の方は、親しげに手を握ってきた。やわらかい、手入れの行き届いた、美しい手だ。指環は外してあった。

（娘が十八位とすると、四十才近いのではなかろうか、それにしてはみずみずしい。毎日、若さを保つ為に生活しているような人なのか、それに主人という人は？――）

二隻のヨットは勿論、全クラブのヨットの帆をたたみ、――或るヨットは感心に、たたみ方を教わる者も居るが――個人のヨットから助けを求められれば、指導もせねばならぬ。それが終わる頃は、あたりはすっかり暗くなり、突堤の照明が明るく点き、レストランからは美しい明りが波にくだける。一息ついて、マルポロに火を点けると、潮の香が美味い。混り気のない潮の香につつまれての洋服は、疲れを忘れさせる。・同じサントアマール島にあるサントス、ヨットクラブはサントス港の向い側にあり、歴史も古く、会員も多いが、場所が港の中にあるといっても良いので、水が美しく澄んでいない。潮の香はするが、油や、汚物の臭いがまざっていて、とても深呼吸して、空気が美味い等といえたものではない。

その点、グワルジャー・ヨットクラブの方は場所が良く、海水が緑色に澄み切っている。だからレストランを延長した水際のテーブルに坐つてのエビ料理も特に美味かろうというものだ。

夕食は、土曜の夜に限り、リゴールを指定しているのが、このクラブの特長である。無論全部というわけにいかず、スモーキー、黒タイが無ければ夕食が食べられないわけではないが、一つには、クラブの見栄と、ある種の貴族趣味と、又ある意味での緊張感を保つ為に役立っているようだ。八時に楽団が入る。

ヤスオは仕事が終わって、大急ぎでサンドイッチをつまみ、黒ズボン、黒タイを締め、白麻の上衣を着て、レストランの給仕に早代りする。娘達が「ヤスオ良く似合うわよ」

「オーリヤ、シッキ！」と声をかける。彼は返事をしないで、眼だけ見つめる。そして炊事場の隅に積んである長いナプキンを取って腕にかけ、食堂に出た。口はへの字。

――（服装が身体を引締める。俺はこんな事が好きなんだなあ）――

支配人が次々とボーイ達に指令をする。馴れていないと忘れてしまつて、注文を間違えたりするが、それは許されない。料理は魚料理が圧倒的に多く、車に載せて運ぶのが多い。そしてそれにはボーイが世話をし、各自の皿に取り分けなければならない。相当の技術が必要だ。

――（俺は、こう云う事が器用なんだなあ）――
フォークとスプーンできれいに分け、必要があればナイフを入れる。分け終われば、テーブルの誰かに微笑みかけ引き上げ、次のテーブルに移るが、暗時、前のテーブルを見廻り、残っている料理をサービスする。

ある人は途中で立ち上り踊る、若い者は、ゴーゴーをやり出す。アルゼンチンのお客のテーブルは、ヤスオの受持ちから離れているので、何を食っているのか分らない。なごやかな食事の時間が過ぎる。が給仕は緊張の連続だ。クラブ員は、ヤスオが忙しい時に給仕をするのには馴れているから不思議に思わぬし、尋ねもしない。その点彼は気が楽で思い切り良くサービスできる。近くのテーブルでタバコを出す人があれば、サツト自慢のガスライター一発で火を点ける。その手つきは丁寧であり、食事をして居る人をして王者の感を抱かせねばならぬ。

会長のテーブルから呼ばれた。彼は会長、アルゼンチン一家の視線を意識しながら、さっと受持のテーブルを見渡し、指を少し動かして、頷き、次に会長の方へ近づいていった。「ヤスオ、今日は御苦労さん」

アルゼンチンの婦人方の眼が好奇に満ちて集っているのが分る。「とんでもございません、御満足戴けたでしょう か。そして食事の方も。」

「ええ、とつても、キビキビとした教え方で気特が良かったわ、食事の方もお世話して戴けたら良かったのにー」ー私もそう思つて居りますーと云いかけて止めた。その代りニヤリと笑った。上の娘は昼間の若者と踊っている。

「お仕事が片づいたら、御一緒に坐りませんか、それとも、いけないかしら？」

夫人が会長に微笑みかけた。齒並みが真白く美しい。

「とんでもございません、マダム。このヤスオと云う男は、こういうサービスが上手で、忙しいから助かりますが、決して、この仕事をさせているわけではありません。」

「そうでしょうね、面白い方。」

夫人のスペイン語が耳をくすぐる。小指と首の緑の石が昼間と違うように思えた。少し広い位に開けた胸の白さとのコントラストが素敵だ。

ヤスオは、軽く頭を下げ、席を離れた。

九時を過ぎるとレストランの方は片づき、サロンの方へ人が移動する。レストランのテーブルにいる人もあるが、もう飲み物だけだ。そう、灰皿の吸い殻も捨てねばならぬ。

楽団の演奏の切れ目に潮の音がする。夜気が冷えてくると潮の香が強くなる。そして水際まで散策する人も多い。婦人方はストールを用いないと、むき出した肩が寒い位である。岬の端まで遊歩道がつけてある。そこからグワルジャール海岸の高層アパート群の燈火の流れが長くキラキラと宝石のように輝いて見える。リオのコパカバーナ、フラメンゴ海岸やサントスのゴンザガと見た所良く似ているが、グワルジャールは、まるで、うそのように静かだ。楽しい演奏すら邪魔になる程、静かだ。

ヤスオは、蝶タイを外し、白い上衣を取り、停泊しているヨット群を見廻る為に、突堤の方へ歩いていった。一寸した油断で、絶間なく打寄せる波の為に、ロープが外れ、ヨットが流れ出す事があるからだ。大きな月が、黄色く波にくだけていた。まず突堤に

舫つてあるものから見ていく。入江のブイに舫わなければならぬものが突堤にいる。

（明日、暇になったら、全部規定の位置に直さねばならん、今日は混んだから――）結び目の間違つたものもある。丁寧に直して歩く。

ブイ泊めのものは、小型のボートで見廻るのだが、それは、突堤の根元の階段の下に舫つてある。そこを下りようとして彼は、潮騒に交つて、ひめやかな足音を聞いた。振り返つて見上げた。

「ん？キエンエ？」（誰？）

「ソイ ジョ。」（わたしよ）

歯切れのいいスペイン語が、彼をハツとさせた。ひよつとして、アパレシーダかと思った。微かであるが、上品な香水が香っている。先程テーブルで気がついていたら、香いだ。

「何と云う香水ですか、マダム？」

いきなり不遠慮に尋ねた。

――（全く俺は行きあたりばつたりに物を尋ねるくせがある、それが全くキザなんだ。香水の名前？知るもんか）――

夫人は、つと立ち止った。

ヤスオは夫人の表情を読み取るように見つめた。

――（全く失礼な質問だ、なれなれし過ぎる）――

「あんまり若向きの香水でびっくりなさった？」肩のストールが微風にゆれる。

「あ――成程――」

「ゲランのミツコなどの方が似合うか知ら？」

「――？」

「だけど私、これが気に入っているの、コテイに作らせましたの――」

彼は眼をシバシバさせ、頭をかいた。

「若い人用と、年寄り用があるんですか？」

「私も、はつきりとは分りません、だけど自分が好きなら、年を取っても、若向きを使ってもいい わけだわ。」

「成程、奥様はなかなかいい事、いうなあ――」

「フフ――面白い方、ヤスオ。」

「さ！奥様、ハセネ マノ（お手をどうぞ）、御案内致します。」と二段下から手を差出した。

「あらヤスオ、カステリアノ覚えたのね――でも何所へ行くの？」

「ああそうか、――いや今から、このボートでヨットを見廻ります」

「面目そうね。」

夫人は、いともすなおに左手を差出した。細い会の腕輪が数本重りあって光った。

「足元に気をつけて、奥様。」

「私、セネ、ロホトになろうか知ら。」

「――？」

「セキタラ、ロホト」

夫人が靴を脱いだ。（ああ裸足の事か――）

「その方が良さそうですね。」

「誰も見ていない？」

「ええ？何故？」

「いえ靴下も外し度いの、――でもかまわないわね、はいたままでも。」

「――？」夫人は右手に靴を持って、階段を下りた。ヤスオはボートを引き寄せる。

「何だか、こわいようよ、着物着ていると、どうして、こわくなるの？」

「さあ、どうしてでしょうか、奥様。」

ボートは安定がいいように、横に広く作ってあるので、少しゆれただけだった。ヤスオはカヌーの要領でボートを進めた。入江は静かだ。漕ぐ音が、意外に大きく聞こえる。

――（何か話をしなければ）――

と思っていると夫人から口が開いた。

「私、グワルジャ―が好きよ。ブエノスのヨットクラブは大きいし、ひよつとすると、リオのポッタフォーゴのクラブより大きいわ。でもラプラタ河の水の色が真赤なのよ、だから嫌い。ここの水が一番きれいだから好き、それに……ヤスオが居るし、ね。」

夫人が少しからかうようにいった。その高貴なあごを左手にのせて、何か尋ねるような視線をヤスオに向けた。漕ぐ手が止ましかけた。

ヨットの一つ一つ結び目を確める。夫人は何もしないで、ただ

話をし、ヤスオの動作を見ているだけだが、楽しそうだ。時々オーケストラのトランペットの音が高く聞こえてくる。その音色が遠い。

最後にクラブ所有の最大のものである、ミネルバ級の横に来了。大した時間はかかっていない。

「これで終わりです。ミネルバ型です。私は上って、戸締りを見ますが――」

「私も上って見度いわ、ブエノスにもこれと良く似たのがあるわ、比べ度いの。」

全長十一メートル余り、巾三米、大型外洋航海用に作られ、甲板まで約一米三十センチ、見るからにガッチリできている。白塗りだが、金具の真鍮が、月に光る。

「じゃあ、一寸お待ち下さい、私が上から――」

ヤスオは、甲板に飛び上って、上から手を貸した。夫人のスカートが何とも工合が悪い。仕方がないので、夫人が両手で懸垂の要領で上半身を上げた。ヤスオは両手を夫人の脇の下に差し込んで引き上げようとする。

「ここまで来たら、上らなきやあね。」

「そうですとも、もう一息！」

「私って、こんな事って、好きなのよ！」
ヨットがゆれた。

ヤスオは、ふと、今何をしているのかと、自問してみた。

（元来、俺は、おっちょこちょい、にできているんだ。小学校四

年の時、女の子にいたづらして評判になり、おやじから――「ジャボネースの恥さらしをした」と叱られた時も、そうだし、ウバツ―バに移って、これで俺は、おっちょこちよいとはお別れだと、心を入れ換えたつもりが、何時の間にか、元に返ってしまい、夏休みに遊びに来て いた、都会の女の子と、夜、舟で入江の外にでて、波にひっくり返って、助かったもの、又もや失敗。次のサント・アマール島の船大工の二年間でほとぼりをさまして。そうだこの二年間には何も、なかったな。――ウバツ―バに、ひそかに帰った時に、決心したものだ。『もう人目につくような、おっちょこちよいは止めよう』親父はサメ漁と、週末の釣案内、俺はヨツト作り、と修理。所が、又やったんだなあ、それも市長の娘をさ、トウリニヤ岬の影で。夢中で、どちらが誘ったのかな。俺にとつて、始めて男になったわけだが、『こんな事、続けて、良いのかと』その度に自問しながら、舟の上で、岩影で。そんな事が、分らないわけではないのだ。たちまち引き離され、そばかすの 多い、弱々した娘だったが、今リオの親類にいらるとか。そしてここにきた時の、決心はどうした）

帆柱が高いので、ゆれ方が大きい。甲板に立ち上った夫人は、思わず、ヤスオの方へよろけた。「あら危いわいヤスオの左の手首を握った。

ヨツトの櫓へ廻って、扉を開き、中へ導く。スイッチを入れると、小さなサロンの四隅のピカピカの真鍮の燭台から高貴な光が放たれた。前の両側にキャビンが一つ。サロンの壁は、赤黒い木

製のニス塗りが、ドツシリ落着いている。

「私、船の内部の飾りって好き。家もこんな風に作り度いわ。ヤスオはどう？」

「私も、無論です。シンプレスで、それでいて、まとまっでいて。その上豪華な感じで。」

夫人は手で、壁をなで、扉をいつくしむように開閉した。ふと上を見上げる。

「ヤスオ、あかりを消して見て？」

「ああ、月の光で——」パチンと消す。一瞬暗やみとなる。が直ぐに天窓から月光が入って来る。ヤスオが上を見ていると、夫人の両手が、肩にかかって来た。

——（ここで俺が、夫人の脇の下をくすぐれば、どうなるだろう。まあ止めとく）「ヤ、ス、オ、」夫人の声が低く聞こえた。「ん——？」「カビーネ、使えるんでしょう？今。」

ヤスオは、うなずいた。夫人が、ヤスオの顔を引き寄せた。唇が近づいた。上品な香りが、やや暖かみを帯びて、鼻をくすぐった。

——（今なら、まだ元に戻れるぞ、このムードに 捲き込まれるなよ）——

夫人の低い声が続く。「私ね、あと五日間ブラジルに居るのよ。ここに居るのは月曜までよ。三日よ、ちがう、明日と明後日だけね。だから——今、あなたが欲しい。」

キャビンの丸窓から、クラブハウスのあかりが見える。遠い光

に思えた。舷に当る波の音に気がついた。

「ヤスオは、ハポネサ？」

「ええ、フイーリョ・デ・ジャポネース」

夫人は、暗がりで、髪の毛を直した。二の腕の白さが浮かび上る。

「そう、私、ヤスオの眼が好きなの、神秘的よい作りつけの寝台から下りて、向う向きに身づくろいしていたが、ふと手を止めて振り返り、ヤスオの顔を両手にはさみ、眼をのぞき込んだ。

「私達日系人から見れば、奥様の碧の眼の方が、よっぽど――」
「ううん、ヤスオ――オンプレの。」

「――」夫人は額を、ヤスオの胸につけた。
ボートに乗り移り、突堤に上る時、夫人は、ぐっと力を入れて手を握った。そして今度は何もいわずに、くるっと向きを換え、一人でクラブハウスへ歩いて行った。ヤスオは、階段の下で佇んで見送った。風が冷やっとほほをなでた。

ふと、何分経ったかと、腕時計を見た。日本製のSと云う夜光時計だ。三十分位経っていた。月の光で、そのぶ厚いガラスの真中に五本程、キズが付いているのが分った。

――（寝台の上枠に、知らんうちに、すりつけたな――分らなかった――）

爪で探ると、キズに引っかかった。夫人の姿が消えた。

（――うん、今、見廻りが終わりました、何、毎日の事です。――てな調子で気持をととのえて、クラブハウスに引き上げるとする

か―)

大サロンにはまだ、精力的に踊っている若い者が沢山居た。流
行の長髪。年配の人達は、もう大部分寝室に引き上げたのだろう。
アルゼンチンの娘は二人共、まだ楽団の近くで、若者達と陽気に
やっている。十時を大分廻っている。夫人の姿は見えない。ヤス
オは、何時ものように、への字の口で、よそ見をせずに炊事場
に入って行った。

「ヤスオ、ズボンが、よごれているわ、一張羅の　ズボンが。」
アパレシーダが近づいていった。

「あら、ヤスオ、誰かと踊ったの？いい香がして　いるわ。」

「ヨットの見廻りだ。そんな事より、めしをくれ。　でかいカマ
ロン五匹、カマロン、ガレゴ―待てよ、昼食もエビだったな―
まあいいや。―レモン大切り。めしは、あつあつの大盛り、サラ
ダ、たつぷり、パルミット大切りだ。早く、腹が減っているんだ。」

「ハイ、ハイ、分っておりますよ、ヤスオ。―オーメン。」

(―あれ同じような事、いってやがる。―)

「ブドー酒！リオ・グランデの上等！」

「あいよ、ヤス。」

炊事長が、愛想よく返事をした。アパレシーダが乱暴な位、勢
い良く、サラダの皿とパンを置いた。ヤスオはパンを、わしづか
みに取り上げ、真中を二つに切る。ステンレス製だが、ナイフの
重々しさが気持がいい。一方にバターを、一方にカラシを塗りそ
の間に、アルファツセ、パルミット、玉ねぎ、人参をぶてぶてと、

はさみ込み、かぶりついた。すべてが混った味の中に、カラシが利いている。薄いコバク色の白ブドー酒をコップ半分、一気に飲む。冷えている。

「ヤスオは本当においしそうに食べるね。」

「ふん」

えびが来た。揚げた油の小さな泡が、湯気をあげている。レモンをたっぷりかける。

「あちち！」

右手にフォークを持ち、あっあつの油めしを口に運ぶ。舌が焼けるようだ。口を開けて、さます。

アパレシーダが感心したように、片手をテーブルにかけて眺めていた。

「ズボン、あとで脱いでおいて。きれいにしたげるから。」

「ふん」

――（水で洗われてたまるか！）――「アルゼンチンのお嬢さん達と踊ったらいいのに」「ふん」顔を少し持ち上げて、レストラントを眺める。

「あら、ヤスオ、気にしているわ。」

――（まだいるな。きれいだから、男に良くもてているし、外国人だし、スペイン語だしーだがね。母親さんの方がすばらしい事は誰も知らんだろう。肌がいいんだなあ、つるつるで居て、しつとりと　して――）

「私ね、外国人となら、何とも思わないわよ、ヤスオ。」

「ふんー。」ー（ナモラード（恋人）のつもりなんだろうか、シーダは？）ー

ーエビの、しつぽまでポキポキ食べてしまう。

「あんたが、サントスへ一人で遊びに行く時は嫉けるわ。」

「ふんー」ー（だから、どうしてくれるというんだい？ー然し、シーダのやつ、俺がサントスで何をして遊んでいるか知ってやがるな。ー）　サントスの波止場裏の、あいまい宿や、安キヤパーレーに、たむろする街娼は、彼も時々行つて買うが、彼にとって性欲の処理だけではなく、それを買う時の選ぶ楽しさもある。ゴンザガと、サンビセンテの丁度中間にある、ペンソン（下宿屋）にも、女を置いてある家があるが、其所は高く、十五コントから二十コント支払わねばならぬが、選ぶ楽しさは格別である。特定の一人には通わない。彼はアパレシーダを無視して、炊事長に向い、

「シェツフェ（主任さん）俺、明日は、ビツフェにするぜ、いいのがあるかい？」「おおーあるぜ、ヤス。ファイルのいいのがある。お前はフレミニョンは好きじゃなかったな。」

「ああ、あれは少し臭うからな。明日は、ビツフェ、シンプレスと行くか。肉汁はたっぷりだ。」

「O・K、ヤス、まかしとけ！」

手伝の娘達も食事を始めたようだ。従業員が一般の食事時間より、ずっとおくられて摂る食事には、普通の人には分らない楽しいものがある。給仕達、夜警のおっさん。

「シーダ、サイヨッチ（ペチコート）外せ。口を拭くからさ」

「あらいやだ、ヤスオったら。」

それでも、あわてて、スカートを押えた。そして「ハイ」と、手にしたナプキンを渡した。有難うともいわずに、口を拭いて、放つて返し、立ち上った。

「食ったぞうー」

娘達が、ヤスオを見てくすくす笑った。それは健康で、皆若い。翌日、日曜日は、同じように天気が良かったが薄ら寒かった。朝の内、個人のヨットが二隻出ただけで、ヤスオは暇だった。日曜の朝は何時もそうだ。昨夜おそかった故だ。

昼近くなると、気の早い連中は、サンパウロに引上げる用意を始める。何故なら、土、日と週末をサントスで過した人達が、日曜日の午後になると一斉に帰り、アンシエッタ街道は車で一杯になるし、又誰も夜走るのは嫌いだ。グワルジャールでは、その上に、フェリーボートがある。これが混み合って、その待ち時間に参ってしまう。昼食は、荷物を全部車に積み込んだ後で摂り、終わったらすぐ出発、という人が割合多い。何か日曜の昼食時は、あわただしい気配がするのである。

（明日から又暇になるな、セマーナ（週目）に遊びに来るのは、どういう人種か知らんが、金持なんだろうな　ー）
ヤスオは、ヨットを片づけて、レストランへ引き上げてきて、こんな様子を、ぼんやり眺めていた。

その中で、昨日から気がついていたのだが、英国から夏休みを

ラブ員が面白そうに、近くに集まってきた。他の仲間も一緒に。その時。「プロフェッショナル、できるんでしょう柔道。ねえ、やって見せて、柔道って、すてきよ。」

無造作に束ねた、金髪を振って、若い、はち切有そうな、そのレバノン系の娘がけしかけた。

（この娘は、毎週来るが、確か、サンパウロの大きな織物会社の社長の娘とか、いう話だったな）

「いや、柔道は、日本人だからできるってものじゃないだろう。俺は人に見せるのは嫌いだし、ふれにあまりうまくないよ。」

「××××ジュードー××××ブラック××××ロンドン××××。」

「ー？ー」

「この人ね。ロンドレスで、日本人の先生に習ってて、黒帯を許されているってよ。」

その娘が通訳した。

「それじゃ、俺なんか、問題にならないよ、やめにしてくれないかね」

ふと振り返ると、炊事場の方からも、好奇に満ちた瞳を集めて、どうなるかと三、四人が顔を出している。

（まづい事になりやがったな。何とか逃れる事はできないものか）

と思わず尻込みした時、英国人は、いきなり、さっと近づき、ヤスオの胸と、左肩のシャツを両手で引張った。柔道の組みである。

丸首のメリヤスシャツが、引張れた。

（本気にやる気かな？）

と思った時には、ヤスオは、自然に、引張られた方向に、無理をせずに向きを換え、右手を、相手の左手に添わせるようにして、右に払った。そのわづかな、流れるようなヤスオの動作の内に、彼の体の重心が、しっかりと、右手と、体の中心に決って居り、力が右手の指先に集っていた。すると、その長身の英国人の学生は、見ている方が、びっくりする程、あっけなく大きく股を開いて、床にたたきつけられていた。投げたヤスオの方がドギマギした。

（まーた、しくじったな。どうして俺は、こうな んだろうー）

困った顔付をして、後ずさった。この場から逃げ度いと思った。彼の長いめの髪が、前に垂れているそれを、かき上げて、逃れようとしたが、食事をしている人々が、囲りのテーブルから立ち上った。離れた所に居た人々が近づいて来た。大きく見開いた視線が、ヤスオの体をつき差している。周囲の人の気配を痛い程、背中に感じた。

――（俺は、ここの従業員でしかない。会員とは 身分が全々違う筈だ。それなのに、満坐の中で、お客さんに恥をかかせた事になる。――）その時 さっきの娘が、

「ヤスオ、やったわね。すてきよ！とつてもすばらしかった。何て上手なんでしょう、もう一度見度いわ。」

と、いきなり首ったまに、抱きついて、キッスをした。彼はますます当惑したが、良く見れば、近づいて来ていた視線は、決し

て非難しては居なかった不思議な気がした。だが彼には、決して誇らしい勝利感等というものはなく、一つの仕事が終了した、というのでもない、或る犯罪を犯して、その事件の中心に居るような気特だった。

英国人が起き上って近づいて来て、右手を差出した。

「××××ジュードー××××ジャパニーズ××××ジャパニーズ
××××グッド××××。」

「ー?ー」

娘の眼を見た。娘は上気している、髪の毛の少い襟足が、弱々しく、それが反ってセクシーに感じられた。

「やっぱり柔道は日本人のもの、日本人の柔道は 本物だ。君は相当できるね。 といってるわ、本当?。」

「うーんー」

周囲から、感心している声が、ざわざわと聞えて来ている。一年前までの彼ならば、ここで調子に乗って、彼がウバツীবで偶然習った、Aという護身術を練習し始める所だが、今は全々そのような気特が起こらないのみか、一たん、こんな事をしてしまったからには最早一時間前の、下積みの人生の楽しみから、つき放たれた苦しみだけが、彼をして、ますます困らせるのであった。もう返事をせず、ずり足で炊事場へのがれて行こうとした時、アルゼンチンの三人が、サロンの出口へ揃って歩いているのに気がついた。三人は、何事が起こったのかと立ち止った。夫人の視線と合った。その瞳は、美しかったが、何所か、ヤスオを非難して居

り、その中に強い軽蔑が込められているように感じられた。

（一体、昨夜、何があったのだろう、何かが夫人と、あったというのはうそだ。そして、これからもあり得ない。夫人の名前も、知らないじゃないか。――）

これで終り―今週の末、三隻の外洋ヨットで、アングラ・ドス・レイスの海軍兵学校に寄り、次いでリオのボタフォーゴのクラブに行き、港の入口の商船学校のフェスタに参加する、練習航海に行けない事になったと、ぼんやり考えながら、静かに、炊事場を通り、そこに成行きを、みつめていた、アパレシーダの肩を、無言でたたいて、自分の部屋に、引き上げて行った。

（了）

「緑葉」・杉本千代歌集

本歌集は、グワイラ在住の杉本千代氏が、詠草一千首到達を記念し刊行したものである。刊行には、同氏の家族と師酒井繁一氏及び、グワイラ歌会々員の手厚い後援によるところが多い。

本書は四六判、箱入り上製、本文二二七頁で一頁五首組、九四五首が載録されている。巻頭に氏の師酒井繁一氏の序があり、巻末にグワイラ歌会の跋と著者の後記が載せてある。発行は一九六九年一月、発行者は日本の「まひる野合（主宰窪田章一郎）」である。

序の中に、杉本氏に就いて次のようなことが書いてある。杉本氏は大阪の裕福な商家に生まれ、明治末期の高女中、文学少女で「少女世界」の熱心な投稿者であったとのこと。渡伯後、晩年に至って、最初俳句の門に入り後短歌に転じた。グワイラ歌会誕生後、一層作歌に励み「まひるの」会員としても活躍、詠草数一千首に達したとのことである。酒井氏の言葉に、杉本氏の短歌は「氣取りもねらいもなく平明で、大河の穏かに流れるさまに似ている」とある。

杉本氏の後記によると、同氏は明治二十七年生れ、昭和八年、一家をあげて渡伯。六年目に夫を亡い、数年後には、自身脳軟化症に罹り、以来病弱の身ながら文学に専念。今より十八年前現在の地（グワイラ）に耕地を求めて落ち着き現在に至っていると記し

である。

次に巻末の作品（一九六七年）数首をあげておく。

- ◆大河を包むがごとく草茂り魚釣る舟が時々通る
- ◆孫たちは日焼けいとわず牧池に日毎泳ぎて齒のみが白し
- ◆疎まれはせねど耳の遠くなり部屋にこもりて関わりもたず
- ◆流行を追うこともなき老いにして古きモードの最持て暮らす

（赤）

コロニア・新刊紹介（2）

「笠戸丸より六十年」

在伯県人会連合会

本書は一九六八年二月、県人会連合会、日本海外家族連合会、日本政府などによって実現した、笠戸丸移民生存者の日本訪問を記念して刊行されたものである。

県人会連合会の企画事業として実現をみたこの壮図は全コロニアはもとより、日本朝野に迎えられ、大成功をおさめた。その企画から訪日団の組織、訪日団船中生活日本での行動から帰伯までの動静を綴ったのが本書である。

本書は、菊判、写真六頁、本文一四九頁と広告八〇頁で、発行者は在伯県人会連合会、印刷はパウリスタ美術印刷所となってい

る。巻頭に、佐藤栄作首相の序をかかげ、三木武夫外相、田中竜夫国務相その他、千葉大使、近藤総領事、広岡海外移住事業団理事長、沢田日伯中央協会会長、宮坂文協会会長などの祝辞が載せてあり、発刊のことばを中尾県連会長が書いている。

内容は、(1)「開拓」(2)「形成」(3)「発展」(4)「かさと丸日本へかえる」の四部に分け、(1)から(3)までに、多方面にわたって、笠戸丸移民サントス上陸以来のコロニア社会の展開ぶりが述べてある。そして(4)に、笠戸丸移民訪日団に関する記事がまとめてある。その中「輝ける栄光の日々」と題して、田村徹訪日団長(県連事務局長)が綴った訪日日誌は要領よく、しかもきめ細かに書かれていて興味深く読める。

後尾に添えられてある広告は多少目ざわりだが、渡航費捻出のための寄附集めの代りとして採用された措置とすれば、仕方ないもの、ここにもコロニアの精神的貧困が顔を出していて、さびしい感じである。

とまれ、記念出版として、コロニア人に一瞥をおすすめしたい。

(青)

翻訳（六二枚）

時と風

前編 コンチネンタルの内のカピトン・ロドリーゴ編

エリコ・ヴェリツシモ（作） 田畑三郎（訳）

まえがきと紹介

本編は大長編「時と風」の中では、アンナテーラ編に次ぐ第二編である。ごく最近までサン・パウロではテレビ劇に発表されていたので、よくご存じの方も多いと思う。

この「時と風」のはじまりをちよつと言えは一千七百年時代、サン・パウロ州のソロカバ市から、リオ・グランデ・ド・スール州に移住していったテーラ一家と、その娘アンナの生涯を主題としたのがアンナ・テーラ編であつたが、この「カピトン・ロドリーゴ」編では、アンナの倅ペードロ・テーラと、その娘ビビアナの時代になる。いずれも、リオ・グランデ・ド・スール州がカステリアーノとの戦の中心地となった時代で、あらあらしい争闘に明け暮れるひとびとの姿が、このカピトン・ロドリーゴなる人物の活動を中心として描かれている。

ものすごく長い小説のため、すじの運びがゆっくりしていて、五十枚ぐらい訳しても、物語りの、ちよつと、はじまりしか紹介できないのが残念である。しかし、後日ゆつくりと完成させたいと思っている。

ロドリゴ、カンパー大尉が、サンタ・フェの部落にはいつてきたときの恰好には、みながおどろいたものだった。ある日、どこからともなく、馬にのって、忽然と現れた。革ひものついた帽子を首におとし、昂然と頭をもたげ、しかも鷹のような眼つきをしていた。その眼つきはひとびとをいらだたせると同時に彼の魅力でもあった。年は三十才前後でもあろうか、栗毛の馬にまたがり、明るい色のガウショ・ズボンと、銀細工をほどこした長靴をはき、上半身は詰襟の青い軍服で、その襟は赤く金ボタンが光っていた。肩から脇下えかけてヴィオロンを吊り下げ、腰の剣とモールで飾られた鞍は、一八二八年の十日の午後の陽光にかがやき、首にまきつけた淡紅色のレンソが、ひらひらと大気にはたんでいた。ニコラウの店の前で、馬からおりて栗毛を木の幹につなぎ、拍車を引きづるようにして、鞭で右の太腿をたたきながら、まるで古い知り合いに言うように、どなりながら入っていった。

「ヤアー、俺だよ、小さな奴らには一発くらわせりやいいし、大きを奴は一刀両断とくらあ」

そこには、二、三人の男らが腰をおとして、じっと身構えながら、だまりこくったままかれを見まもっていた。しかし、室の隅の方で、浅黒い若いのが、ぐっと身を起すと、ファッ力を抜きながら言った。

「じゃ、やって見ろ……………」

ほかの連中は、さつと後ずさりして喧嘩の場所をあけた、が、パ
ルコンの後ろでは、エコラウが、

「ここじゃいけねえ……外だ！外だ！」

ロドリーゴは、しかし、ちよつと笑いながら股を開いてじつと
立ちはだかり、鞭を吊した手を腰に当て、喧嘩と仲直りをつきま
ぜたような顔をして、若者を頭から足までよく見ながら快活に訊
いた。

「氣に入らなかったかナ、兄弟？」

「あつしや喧嘩は好きじやね！しかし、バカにされると黙っちゃ
おれねエ……」

「いよよい男だ！」

ロドリーゴの眸には何となく、おかしさが見えていた。

ロドリーゴが腰のファツカを抜くようすもないのを見て、外に
いた誰かがどなった。

「その喧嘩やるのか、やらねえのか？」

ロドリーゴはゆつくりと頭を廻しながら、

「やらねえよ、喧嘩はもうたくさんだ！　せめて一カ月ぐれえは
ファツカは抜かねえよ」

若者の方を見ながら、まじめに、しかも、いたわるように言っ
た。

「兄弟え、ファツカを収めな……」

だが、若者は、じつとファツカを手にしたまま身をくずきな
かった。インジョのつらつきで、眉は太く、頬骨のでぼった若者

だった。

「まあ早くしまえ……………」

ロドリーゴはせきたてた。

「男はやたらに喧嘩するもんじゃねえ、俺は誰もバカにしたわけじゃねえんだが、ただそんな言い方になったただだよ」

しばらくして、若いのは、何かばつが悪るそうにして剣を収めると、ロドリーゴは手をさし出し、

「しっかり握ろう！」

カボクロふうの若者はちよつとたじろいたがあいかわらず、まじめを面構えで、ロドリーゴのさしだした手を握った。

「さあ、いっぱい飲もうじゃをいか」と誘うと、

「いや、あつしに払わせてもらいてえ」

赫黒くて乾いた、厚い唇をしていた。

「いや俺が誘ったんだよ」

「だけんど俺が払う」

「まあいいや、それで別に喧嘩することもないからうで……………」
そう言つてバルコンに近づき、ロドリーゴは、注文した。

「カニンニヤを二つ」

ニコラウは不精ひげがのび、丸顔で、齒の抜けた口をほころばせながら、

「良い方のやつだなア」とピンガびんの栓を抜き、二つのコップに注いだ。

二人がのんでいる間はしばらく沈黙がつづいた。若者は少しずつのんだが、ロドリーゴは一息に飲み乾し、大きな舌づゝみを打った。

「俺はロドリーゴ・カンバラってもんだで、おめえさんは？」

「ジユヴェナル・テーラ」

「この近くにいるんかい？」

「いるよ」

「牧場か」

「いや、リオ・パルドとの間の荷車稼業だよ」

「もういっぱいこう……」

「いや、俺はあまり飲めねえ方でナ」

ロドリーゴはまたコップに注ぎながらいった。

「俺はなア兄弟え、少し違うんだ、中途半端がきらいで、とことんまでやるか何もやらねえかだ」

「いろいろな人間がいるよ！」

とジユヴェナルはさえぎった。ロドリーゴは店の親父を見ながら、

「それでおめえさんの名は？」

「ニコラウ」

「こゝにや、何か喰物はねえか」

ニコラウは頭を掻きながら、

「リングイッサをいためたぐれえのもんだなア」

「それを出しな、俺の大好物だ」

カピトンは三杯目を乾した。ジユヴェナルはそれをじっと見つめながら縄たばこと、小さなファツカを出し、ゆっくりと巻たばこを作りにか、つた。

「実はこのとちがとても気にいっているんだ」

とロドリゴは言いはじめた。

「このサンタ・フエに着いた時思ったんだ大尉どのは、こゝに一晚泊りになるかまたは一生暮すようになるかもしれねえ……となア」

「その一生ってのは、三十年か、三カ月か、それとも二日か？」と、ジユヴェナルは掌に削りためたたばこをもみながら意味ありげに言った。そしてカピトンに向きながら頭を上げたとき、その鷹のような視線と合った。

「それとも三時間か？」

「だけど、どうして、おめえ、そんなことを言うんだい？」

「どうしてって、おめえさん、少し向う見ずのところがあるからさ」

ロドリゴは別に怒りもせず、確かな調子で答えた。

「まったくそのとおりだ！」

「こゝらにも、強い奴はうんというよ」

ちよつと沈黙がつづいた。ジユヴェナルはファツカを傍へ置くと、削りためたたばこを右手でもみほぐしながら言った。

リングイツサをいためる匂が漂ってきた。ロドリゴは笑いながら手でパルコンを叩き、

「どうだニコラウ、そのリングイツサ出るのか出ねえのか」
奥の方で主人は、

「まあ少し待ってくだせえ」

ロドリーゴはジユヴェナルの方へ向き直り、

「じゃ、俺がこゝに三時間以上おられねえって思ってるんかい？」

「いやそんな訳でもねえが……」

「でも、そうとれるぜ」

「どうして？」

「何でも、先のこたあ、わからねえ……そうなるかも知れねえし、ならねえかも知れねえ」

「じゃ、こゝにも勇ましいヤロウがたくさん居て、俺とことを構えるってわけだなあ？」

「まあそんなこった」

ジユヴェナルはファツカでミリーヨの皮を延しながら、相変らず、視線は外来者の上に注がれ、彼の品さだめをしていた。

彼の、袴のようなズボンと、兵隊の上衣とのつりあいがおかしかった。また赤いレンソも気に入らなかった。さらに、肩から脇え吊したヴィオロンもへんな感じだった。どんな流れ者にたいしても好い感じを持ったことなどはかってなかったが、結局は、この男も、「この世界には、やつぱり、いろんな者がいるんだ」と思っ
て見のがすより外はなかった。

意味のない話に移っていった。天候のこと収穫のこと、一週間

後に予定されている牛車の旅のこと……しかし、ジユヴェナルは、このロドリーゴ大尉なるものが、どんな人間であり何処から来たのかを知りたかった。

口の軽い奴、と言うなら、そうともとれるし、大きなほら吹きなら、まったくそのとおりだ！　が、この人物は横柄で、いやに挑発的だが、そうかと言って、その態度でおしとおすようでもなかった。なぜ、つまらない喧嘩はやらないのか？　腰抜けなのか？、いや、そうじゃねえ、ジユヴェナルは人間と馬については目が利いていた。このヤロウは決して卑怯者じゃねえ。

「もうできたよ入んな……」

ニコラウがどなった。

「何か喰おうじゃねえか」

ロドリーゴは、ジユヴェナルの腕を引っぱりながら誘った。

「もう飯はすんだよ」

「ぢや話だけでも」

ジユヴェナルは応じた。二人は、布もかけない粗削りのピンニヨ材の卓についた。そこにはこんがり焼かれたリングイッサが皿に盛られ湯気を立て、いた。その傍には、ファロファをこぼれる程入れた木造りのファリンニエイロ（マンジョカ粉を入れる容器）があつた。

ロドリーゴはうれしそうにリングイッサを切りはじめた。ジユヴェナルは火打石を打ち、たばこに火をつけゆつくりと喫いながら、この流れ者を見つめていた。「よく見ると、こいつの顔も、わ

るくはない」と思いはじめていた。たゞ眼つきがあまりよくなかった。その眼つきは実にあつかましく、また高慢ちきで、人を見くだす気配があつた。その上、ジユヴェナルは、いつも、眼の碧い人間を疑うくせがあつた……が、こんな人の気を引くような奴ははじめてだつた。

カピトンの髪は、やゝ黒味をおびた栗色で波をうっていて、鼻すじは細くとおっているが唇は不体裁に紅くしめっていて、また、顎はやゝ片意地な性格を現していた。ゆつくりと縄をくゆるらせながら、ジユヴェナルは唇や顎からファロファをこぼしながら、うまそうに食べるロドリーゴを観察しつづけた。

「もう少しで喧嘩するところだつたなア、ジユヴェナルきようでえ」

「まったくだ！」

頬ぼりながら、わら蒲団を敷いた椅子に身をそらし、ロドリーゴは相手の服をよく見ると、首に巻きつけたレンソの結び目をゆるめながら訊いた。

「こゝらへんの娘らはトランプが好きかなア」

「好きな娘もいるなア」

「おめえさんは？」

「俺はやらねえ」

「やったこたあねえのか？」

「ねえよ！」

「そりや、もつてえねえ話だ、人間ってのは何でもやって見なく

ちや」

「人間もいろいろだよ」

「見たところ、おめえさん、悪い遊びはやらねえようだなア」

「それ程でもねえさ」

「おかみさんはあるんだろ」

「あるよ」

「この土地の娘かい？」

「なんだ、おめえさんは坊主みてえに訊くんだなア」

「聞いたがわるいかなア」

「別にわるかねえが」

ロドリーゴがリングイッサをむさぼっている間はしばらく話にとぎれた。ニコラウの女房が戸の隙間から、珍しそうに、びっくりしたような眼つきで覗いていたが、ロドリーゴがそのにらみのきいた顔を上げると、びっくりした鶏のようなすばやさで隠れてしまった。

「こゝにや、きれいな娘がいるかい？」

「うん、たまにやなア」

「いや、俺あ、家庭の娘を言ってるんじゃないねえ」

ジユヴェナルは眼をすぼめて、じっと相手を見つめながら、何も聞かなかったようなふりをして、黙っていた。ロドリーゴはリングイッサから蜜柑の刺を抜きとり、それをぽいと宙にはうり上げながら、

「もう二カ月も女なしにいるんだよ……」

いぶかしそうに口を開けたジユヴェナルの唇に巻たばこがはりついて、ぶらさがっている、やゝあつて、

「おい兄弟え、おめえは、このサンタ・フエにや、席はあたゝまらねえよ！」

「誰がそんなことを言った？」

「俺がそう言うんだよ」

「どうして？」

ロドリーゴは残りのリングイッサにファロファを充分にまぶし、ロへはこんだ。

「こゝじゃ、女はみんな主があるよ、主のねえのはみんな家庭の娘だよ！」

とジユヴェナルが言うのを、音を立てゝ食べながらロドリーゴは聞いていた。

「俺や言つとくがなア、カピトン、こゝの人間はおとなしいが、自分のポンシヨ（ガウシヨの用いるカウボーイのマント）を誰からも踏まれたかねえってことだよ！」

「だけど、俺は、何も、誰のポンシヨを踏みつけると言ってるんじゃないねえよ兄弟」

「けど、たまにや、知らずに踏むこともあるよ」

ロドリーゴは肩をすくめ、皿を卓のまんなかへ押しやりながらどなった。

「ニコラウ……」

ニコラウが現れると、

「ソーブレ・メーザがねえか？」

「ケージョと、ペセガーダがあらあねえ」

「そんなのみな持ってこいよ、みんな大好きだよ！」

ニコラウは台所へ行き、ロドリーゴが刺の揚子を使っている間に、ジユヴェナルは腰をあげて出ようと思っていた。なんで、あんな他国者と話をつづけたのか自分でもわからなかった。妙に魅きつけられるものを感じていた。この男の過去を知りたかった。他人のことをとやかく訊くのは、かれの性に合わないのだが、あいつが、いろんなことを、もう訊いたのだから、あの奴が何処から来たのかぐらいは訊いたって悪くはないと思った。

「きいちゃ悪いかも知れねえが……」

消えたたばこに火をつけるのに火打石をたゝきながら、

「おめえさん、どこから来たんだい？」するとロドリーゴは大きな身振りをして、「戦場から来たんだよ」

「国境方面へ行ったのかい？」（訳註、現在のウルグアイ国方面から海岸一帯を、東方地帯（バンダ・オリエンタル）と称していた。それを単に国境方面と訳した）

「あ、いったよ、何べんも」

ニコラウは、ひゞの入った皿にソーブレ・メーザを載せ、柄のないガルフォを添えて持ってきた。ロドリーゴは、自分のファツカを抜いてペセガーダとケージョを切り、それを切っ先につき差し口に運んだ。

「十七の年に兵隊に入ってたア、一八一一年頃にや、国境方面で

侵略軍と戦ったよ」

「そりやどうだった？」

「たいしたこたあねえが、まあまあ、おもしろかったなア」

「俺の親父もその戦争に行っただよ」

「なんて名前だ？」

「ペードロ・テーラ」

「聞いたこたあねえ」

「けど行ってたってんだ……」

ジユヴェナルは把みかゝらんばかりにして言い返した。

「わかったよ！　嘘だとは言わねえ、たゞ名前を知らねえって
言っただけだよ」

しばらくしてカピトンはずけた。

「二八一七年にあ、レコール將軍の率いる兵隊に加わって、モン
テ・ヴィデウに入ったが、ーカステリアーノの女は綺麗だった
なアーーいちど三人で女の室へ行ったが、いや全くよかったよ、
年頃は、ちょうど二十才を出たばかりだった」

ジユヴェナルは何も言わなかった。しばらくして

「ひとの国へ入り込むってのは、あまりよかねえをア……」

「そんなこたあ、俺らの科じゃねえ！　国境守備軍がわれわれに援
兵を頼んだからさ」　「実際は、あいつらの国を守ってやったんだ
からなア」　「もう過ぎさったこった！」

「それでも、いゝ人間がうんと死んだぜ」

「世の中にやア、人間があり余っているんだ、それはそれで、今、

おめえさんに言いたかったのは二十一年のはじめにや中尉どのになつたといったなア、ちようどポルトガルの事件を聞いた時は、ポルトアレグレの守備隊にいたってことさ」

「何の事件だ、そりゃ？」

「ポルト市の革命さ……」

「何も聞いちゃいねえ……」

「こうなんだ！、ポルトガルの奴らはなア、誰にも相談せずに、政府が命令を出したり、ひっこめたりするでたらめは嫌だつてえんだ、どうしても憲法どうりにやつてもらいてえつてんだ」

「怒つちやいけねえぜ、俺や田舎者で、何も聞かなかつた」

「憲法つてえのはなア……」

ロドリーゴはぐつと詰つた。むづかしくなつてきた。手真似、身振りで足りない言葉を補わうとしながら。

「まあ、いろいろと、国の規則を書いた書類のことなんだよ、おめえ、法律つてえのを知ってるだろう、それみてえなものさ、解つたかい？」 ジュヴェナルは解つたような解らないような顔をして、生気のない限つきで、じつと見ていた。

「どつちにしても、ポルト・アレグレの政府などは、そんな憲法を守ることにや、あまり乗気でなかつた。こうしているうちに、ほかのカピタニアでも騒ぎがあつて、四方に反抗の気運が出てきたのさ」

「けど、その騒ぎつてのは、誰に向かつてるんだい？」

「政府にたいしてよ」

「どういう訳で？」

「そこだよ……………」

ロドリーゴは最後のペセガードとケージョを喰いおわりながら、
「俺りや、何時も言ってるんだ、もし、政府にたてつくってんだつたら、俺を仲間にしろってなア」

「けど政府が正しいこともあるぜ」

「正しいからって、そんなこたあどっちでもいゝんだ、政府はいつも政府だ、たてつくにあ面白えよ……………」

ジユヴェナルは、しずかに頭を横にふった。この男の考えが解らなかった。また、その話をどこまで信用していゝのかも解らなかった。腰を上げて帰らなければならなかった。ひとの店さきへ来て、くだらない話を聞いているほどのひまじんでもなかった。しかし、何かが彼の動きを縛っているようだった。

かれは、ロドリーゴの話が面白かった。言うことがときどき氣に障ることもあるが、その話し方が面白かった。その男の声までが、重い調子で、同時に何か金属的なひびきがあった。

「そこで国民はなア、政府の奴らが憲法を無視しようとしていることに氣がついた。とたんに、革命は、国民だけでなく軍隊までがそれに加わったのさ……………解ってるじゃねえか……………ロドリーゴ中尉どのが、もう、その騒ぎのなかにいたのさ……………」

「喧嘩になったかい？」

「もう少しでやるところだったなア……………政庁の前へ集ったのがちやうど夜明の二時すぎだったが、大砲を一門持つていったよ！、

おめえさんも知ってるだろうが、砲兵隊にや、みんなおそろしがるよ……けど、俺の本職は騎兵だ、そりやとても違うよ、どうしてって、大砲は、でけえ音がする上に臭えときあがる、ところが剣や槍は上品なものだ。広野を騎兵隊が疾駆するのは、まあア、このくらい美しいものは、世の中にあアねえなア、見たこたあねえか」

「まだないな」

ロドリゴは意外だった。

「いっぺんも戦争に行ったこたアねえのか？」

「ないよ」

「革命にも？」

「それもないよ」

「もうしかし、行く時期だなア……いくつになるんだ」

「二十五年を背中のにせてるよ」

「もう時期だ……しかし、俺がいま言おうとしているのはだ……その騒ぎにや鉄砲がついていたし、他の守備隊も出てきたなア……将校連中が、判事や、検事や、坊主やらその外のものを呼びつけた。

「みんな来たかい？」

「来る筈がないよ、だから、あのおもだった奴らをみな怒鳴りあげて、政府の連中をつれて来るようにしたんだ……」

「それで来たかい？」

ジユヴェナルは次の話を誘うように再び訊いた。

「来たよ、それで、その広場の真中で、憲法通りやるってことを誓ったなア……もう明かるくなつて陽が出ていたし、鶏が鳴いていた。その時、隊長は祝砲を命じ、そして宣誓式が済んだ」

ジュヴェナルは椅子の上で体をもずもずさせながら、素足を地面にすりつけていた。

「それで、幾分でもよくなったかい？」

「何だか解らんなア、たゞあの日は、どえらいお祭りになって、食物や飲物は溢れる程あつたよ、いや、もう一時はヴィンニヨとシユラスコで腹が裂けるかと思つたよ、それから、夕方になって眼をさました時には、どの室だか、誰の寝台だか知らんが真っ裸で、どこかの知らん女の傍に寝てたなア……」

大きく笑いながら平手で、ボンと卓を叩きながら、

「独立のときにや、おめえさん、どこにいたんだい？」とジュヴェナルが訊いた。

「ちよつと待てよ」

と考え込み、

「そうだ、その時は、兵隊から出て、牛の売買に首をつっこんでいたんだよ、まあ男つてものは、何でも少しはやってみなけりやいけねえってことよ、国境方面を占領してからは、乾肉や牛の値が出たんで、トロツパをやつて、いゝ金もうけをしたよ。けど、また新しい革命が起るって話を聞いた時にや、牛や馬の商売が嫌になつて、剣を拭き、鉄砲に油をさして……ちよつと、兵隊がずいぶん拘留されたりしているのを見て、すぐ破裂すると思つたよ」

たばこを巻き、火をつけ、一服吸いながら、

「けど、独立宣言と共に、リオグランデはそれを承認したんだ、残念なことだった。目当にしていた　ポルトゲースが沢山いたんだが……」

「もし革命になっていたとしたら、何をやる気だ　った？」

「別に何ということはない。たゞこいつらをおどかしてやりたかったのさ。特に偉いつて訳じゃないが、反抗する奴ばかりとやるんだ、おどかしてやりてえ奴がたくさんいたよ！」

ジユヴェナルはまた仕事のことを考えた。次の日には、その土地に一軒しかないニコラウの店へ、またアマラルの農場に、砂糖や、塩や反物や、その他の雑貨を運んでくるために、クルス・アルタへ向けて牛車を引きつれて出なければ要らなかった。そのためにいろいろの仕度もしなければならなかったが、ずるずると腰をすえてしまったのだった。

「それから、やっぱり牛の商いをつづけたのかい、兄弟？」

「何がつづくもんか……」

ロドリーゴは両足を卓の上になげ出し、

「或る日、トランクを荷作りして、いゝ馬に乗ってさ、金を懷にポルト・アレグレへ一参駆けさ、あそこで一文もなくなるまで遊んだよ」

「二世の中にや、明日のことを考えない人間もいるもんだなア」
「カステリアーノが言うじゃねえか、『明日とは他日のことだ』と」

「家庭のない者は、義務もないから、そう考えたって、まあいゝさ……」

ロドリゴは巻たばこをうまそうに吸っていた。

「まあ俺の言いたいところはなア兄弟エ、この部落の連中に、ひとつだけ確かなことが言える。つまりだなア、おそかれ、はやかれ、革命か戦争が起ったとするとだ、両腕を下げ屈托なさそうに蒔つけたり、育てたり、馬みてえに働いたからって、何にもならないってことさ、ほんと、われわれは軍服を身から離さないと同時に、剣も腰からはずさねえことが第一なんだ！、軍服で働き、軍服で寝て、軍服で喰うんだ、カステリアーノはそこへ来てるんだ、今日モンテ・ヴィデウ明日はブエノス・アイレス、そしてわれわれは、いつも、それに巻きこまれてるんだ」

「平和を愛する人がいるよ」

「そうは言っても、革命や戦争はいつもあるじゃないか」

「ほかでも、そうだって話だなア……」

「南米全国の人間を奮起させ、スペイン人を追い出したポリヴァールってのをきいたことあねえか、サン・マルチンスって名もきいたことあねえか？」

「俺は田舎者だよ……」ジユヴェナルはおずおずと、しかも怒りをこめて言った。

「それから、あいつらが独立する前に、われわれはお祭り騒ぎをやったことなど、きいたかい？」

「そう言えば、おめえ、二十五年の戦争に行っただんか」

「もちろん行ったよ！、あのリンコン・デ・ラスカリナス軍と、メンナ・パレットス軍の戦いにやー大きな溜息をつきーいやはや、牛どろばうみてえにやられたよ……………」

ジユヴェナルは微笑しかけた。がその笑みはやゝ冷笑にちかく、ちよつと齒をみせたゞけで顔全体の緊張はすこしも弛めず、陰のある落つきを守りつゞけた。

「全く神の祐けだったよ！ー」ロドリーゴはつづけたーわれわれの兵隊はちりじり、ばらばらになり、それからまた集めるのに、ひどい目にあつたよ、ちようど一八二七年だった。俺はバルバセーナ侯の部隊に属していたが、あんなひどい目にあつたことはなかった。兵隊に軍服もなく、その上跣足で、中には裸に近い奴もいて、ボンショを身にまとったりしていたもんさ、それに皆が汚く虱をわかしていやがつた。けど、よくしたもんでいざ戦争になると、寒さも、ひもじさもみんな忘れてなア、笑いながら奮戦したなアー。ペツと床に唾を吐きーそれからなア……………とつゞける……………パツソ・ド・ロザリオの惨めな戦争となるんだ。五千人余りのわが軍が一万以上の敵軍を迎えた時だ、わが方十門の大砲にたいして、敵は二十以上、約三十門近くあつたなア、乾ききつた草原での肉弾戦となった。わが軍は長い行軍の後で疲れていたにたいし、カステリアーノは元気でしかも食糧弾薬を充分に持っていた。こんなような状態で、しかも十一時間以上飲まず喰わずに戦った。そう言えば喉が渴いた、オイ、ニコラウ、水をいっぱい持ってこい」

店の主人は素焼の湯呑に水をいっぱい持って来た。ロドリゴはそれを一気に呑み乾し、軍服のつゝ袖で口を拭き、笑いながらつぶけた。

「わが軍の乱れ方ったらなかった。このことをダヴィ・フランシスコ・ペレイラだかフェレイラだか名前もはつきり覚えていない奴が唄にしてるんだ。そいつも同じ戦場において目の前に見ていたんだが、それはこうだ」

十人あまりの兵隊をひとりひとりが引きつれて沼のあたりをうろうろと負けたやつらがさまよった

この通りなんだ。――ロドリゴは繰り返えした――兵隊どもときたら、カボグロの娘と寝ることしか考えちゃいねえ、また、こんな唄も覚えているよ……

もしも戦争に勝ちたいならば芝居のすじをすぐ変えろ　バルバセーナが指揮するところへ強い兵士を送っちゃならぬ　本当のことなんだ。あんなくだらない將軍なんて見たことがねえ、作戦もなにも知らねえ様子だった。

ジュヴェナルは、その言葉がわからなかったが黙っていた。ロドリゴはつぶける、いくさに行きたいものだけがちりじりばらばら従って何も計らず、でたらめにこうして戦がはじまったロドリゴはからからと笑い

「こんな気違いみてえな戦争は見たことがねえ……」

誰のたすけもないまゝに　何もかにもが、めちやくちやだそこ　にや多くの死人や眉っこ跛傷した兵士を置いてきた

「それで、おめえ、怪我はなかったかい？」

ロドリーゴは頭を横に振りながら、

「たゞ足のビッシュが膿んだゞけだった（訳註、砂蚤のことを通称ビッシュと言う）うそみてえだろう、それからこんなのがある聞けよ、これがいちばんいゝんだ！」

みんなが目にもはつきりと全滅すると見えたとき 英雄ベント・ゴンサルヴエスに ついにわれらは救われた「そりやまたどうして？」ジユヴェナルは訊きかえした。

「待てよ、今すぐ話すから……もう国内へ入り込んで、バジエーを占領していた。バルバセーナ軍はちよつとも動かずその聯隊全部が意気消沈してさ、もう一步も進めぬ状態だった。われわれは或る沼の畔りに夜営していたが、俺は、その時、もう自分のことばかり考えていたよ、沼にいる蛙じゃねえんだ、もっと戦争がしてえと、ぶつぶつ言ったら、友達の少尉どのが言う にや、『カピトン・ロドリーゴーその時、俺やもう大尉に昇進していたんだー貴下は 聯隊長に反したことをふれ歩いておられるが、注意しないと軍法会議にかけられます』ってな ア、俺は何も言わずに逃げることに決めた。

「逃げるって？」

ジユヴェナルが感心した。

ペードロ・テーラは最初の瞬間から、その声の主に言いようのない不快を感じた。こんな男のつらは見たくもないし、見るこ

もないだろう。

(2)

お盆の日に、ペードロ・テーラは女房や子供を連れて家族の墓参に出かけた。太陽が白く輝いて、あたゝかい朝であった。サンタ・フェの墓地は、ある小高い丘にあつて、町から一軒半ほどの距離だった。石垣で囲まれていて墓の多くは、まだ盛土に十字架を立てたもの、または粗末な切石にたゞ名を刻んだものだけであつた。ひとつだけ、小さな礼拝堂の形で練瓦作りで漆喰の上に石灰を塗ったものがあつたが、それは、アマラル一家に属する墓標であつた。

そこには、カステリアーノと戦つて、ジャグワロンの岸边で死んだりカルド・アマラル大佐と、サンタ・フェの部落の創設者である子のフランシスコ・アマラルの遺骸が葬られてあつた。

その墓標だけは、みな同じような貧しい墓の並んでいる中に、傲然と際立っていて、あたかも、名にしおうアマラル一家の、大きな権力を持った男として、死んでからもなお、馬上から他人に号令をかけたり、命令を下したりしつゝけているかのようにであつた。

ひとつの十字架に名が記され、小さく、

「アンナ・テーラこゝに眠る」

とあつた。年月日はなかった。それは、この地の人人としては、い

つものことで、誰も年月日をよく知らなかった。たったひとつの暦といえば、アマラルか神父の家になかった。サンタ・フェで、その外の人々は、月のみちかけと、四季の様子で年の移りを算えるだけだった。そうして、ひとつの出来事を思い出そうとするためには、稀には、そうしたことが起った年や月を憶えていることもあったが、それは一般の人々に起った事件と関連したものであった。例えば、蝗の大群が来たとか、冬がとくに寒く湖の水が凍った年とか、小麦や、家畜や、人間がペストにやられた年とかの前後に、こんなことがあった、としか記憶されていないのであった。たまにはたくさんの戦争があつた年などを記憶していた。

古老たちは、一八〇〇年の戦争の年とか、一八一一年とか、一八一六年とか或は一八二五年とかなどと言った。しかし大半の人々の考え、特に女たちの心――でできるだけ戦争のことを忘れようとする――にはこれらの年が入り乱れてはつきりしなかった。そのためにアンナ・テーラの墓碑には年月日がなかったのだ。彼女が何年に生れたか誰も知らなかった。しかし、彼女が死んだ日は、ラヴァレージャの三三人がシスプラチーナに侵入したという情報がサンタ・フェに届いた。日だったことはみんなが憶えていた。

十一月のはじめの、その朝、ペードロ・テーラと妻アルミンダとその子ビビアーナたちが墓の前に佇んでいた。帽子を手にし、もう、よほど白くなった髪が風に吹かれていた。ペードロは十字架を見ながらも、ずいぶん昔のこと、ちょうど同じ場所に、その部落の人で、暴れ牛の角に腹を破られて死んだ人が埋められた

ことを憶い出していた。

それは灼けつくような炎天の日の午後だった。棺を運ぶ男たちのシャツは汗でびっしりと濡れていた。暑い午後であったが、アンナ・テーラはどうしてもお墓へ行くと言ってきかなかった。ペードロは母の強情さをよく知っていた。さからうことは無意味だった。ようやく息子に支えられながら、墓地の中央にあるセードロの樹蔭に立って、柩が墓穴に下ろされるのを見ながら呟いた。「あしのおとつあんと、あにさんは、丘の高い 処に埋められてるんだよ！」 萎れた手をあげて指さした。

「あしが、この手で埋めたんだよ、同じように、この土に埋められる、手でなア……」

と赫い地面を指さし、

「倅や、あしや、このセードロの下に埋めてもらいたいよ」

土塊が棺の上に落ちる空ろな音がした。

「誰も泣いてはいかんー婆はつゞけるー何も経帷子をこしらえて欲しくもない。どんな着物でもいい、けどなア……おまえら、あしの通夜の時、あしの顔を誰も見ないように約束しておくれよ、いゝか?…」

「母さん！ そんなこと言うもんじゃないよ」

ペードロは答えた。が、彼女は息子の手を握り、白髪のをふりながら、また歯がもう抜けてしまつて、唇を吸い込み、それが歯ぐきに巻きつくような笑いをしながらつゞけるのだった。

「いゝかい？ 約束するかい？」

ペードロは、「あゝい、とも」と返事するより答えようがなかった。

「そうかい、それじゃ、あしも約束しよう、あしが死んだらなア、あしの母さんみてえに、死んだ後も糸車を廻しにくるようなことはけっしてしないからなア」

ちよつと沈黙がつづいた。墓穴にじつと、絆をそそぎ、

「だけんどなア、癖というものはおそろしいもん でなア、いちばんい、のは、お前糸車とあしと一緒に埋めりやいゝんだ、そうすりや、ビビアナが紡竿でこせこせ働かなくても済むからをア……」

今、ペードロ・テーラは十字架の前で、そうしたことを思いだしていた。そしてまた、働きつづけた悲しい母の生涯を思い、ビビアナにまなざしを向け憐みと、慈しみを混じえた眼で娘を見た。この子は、どんな星の下に生れたのであろうか。彼は娘が幸せになることならどんなことでもした。家の中に何も不足するものがないようにと、奴隷のように働いた。商売はうまく行かなかった。でも、それは彼のせいではなかった。今五十才を超えても、まだ二十才代のように働いているが、娘を、そこらの女のように、することもなく、食べて寝て遊ぶ身分にしようと言うのではないが、せめて娘だけには生活のために日夜働きつづける暮しをさせたくなかった。

アルミンダは膝をついて、姑の墓の上に生えた雑草をむしりはじめた。ビビアナは十字架の下へ、持って来た一抱えの黄色い

マルガリーダを供え、そして、草の葉や芝生を運ぶ限りない蟻の行列をながめていた。

ビビアーナは丸顔をしていて、眼はやゝ吊り加減で、口もとは肉が厚く、下唇は上唇より厚かった。かの女の眸や声はやわらかなびろうどの衣を思わせるものがあつた。他国の人がサンタ・フエに来て、かの女の眸を見て、かの女が娘であることを知ると、「こゝの部落の若いもんは、いったい何をしているだ」とよく言うのであつた。と同時に、この部落の大地主であり、村の長でもあるリカルド・アマラル・ネット大佐の息子ベント・アマラルが彼女に恋をして、たびたび愛の告白をしたのだが、彼女はどうしてもそれを受け入れなかった。

「アマラルの後継ぎだがなア………」

他の土地の者は意外に思ったのだつた。

「そうなんですよ」

「けど、若いのは不具ですか」

「別にかたわでもなく、いゝ若いもんですよ……」

誰も解らなかつた。ほかの娘たちはビビアーナ・テーラを嫉み、もし自分達が愛の告白をされたなら、喜んで、すぐにハイとそれを受けるだろうと思われる美しい青年を、しかもサンタ・フエ第一の候補者と言われるものを断つたという、金持ちでもない彼女の心が何とも解せなかつた。しかし、誰よりも心配し、まごついてるのは父親のペードロ・テーラ自身で娘の態度は、どう言つて説明してよいやら解らなかつた。

しかし彼とて、アマラルに好感を持っているわけではなかった。むしろ、リカルド老に反感さえもっていた。

アマラルは土地を削り、また小麦が不作のときでも援助を拒んだ。そのほか、アマラルという人物は傲慢で強欲であると見ていたし、またリカルド老は息子とビビアーナの結婚について特別の関心も示さず、倅がむしろ、リオ・グランデか、もしくはポルト・アレグレの金持ちの娘と結婚することを望んでいることを知っていた。すべて、こうしたことから、ペードロ・テーラは、娘がベント・アマラルの求愛を受けるようには敢えてすゝめはしなかった。しかし、そうは言うものゝ、娘が財産のある男と結婚するのを見ずに死ぬような、かすかな不安があった。まあ、どっちにしてもアマラル一家はサンタ・フェ村の長である。そしてベントは、テーラ一家をしばしば訪れ、よくしてくれたのであった。ジュヴェナルやアルミンダにもおみやげを持って来、とくにビビアーナには、よい贈物をくれたが、それをもらう時にすら、ちっとも嬉しい顔をするでなく、一言低く礼を言うだけで、若者の顔を見ることがしなかった。ペードロ・テーラは娘の気質を思いながら氣を揉んだ。わがまゝで、強情で、しかも自尊心が強く、誰にも頭を下げたくないために、たゞそれだけのことで飢え死にさえしかねない気性であった。しかし外から見た者には、その柔かな素振りから、世界一しとやかで、はにかみやであるように見えるのだった。たまには、家で、夕食後、ペードロ・テーラは妻や娘たちが縫物をしたり、刺繍をしたりする間、卓にもたれてゆつく

りたばこをくゆらがす。そんな時、ペードロ・テーラほどビビアーナを見ながら、いろいろなことを考える……、母アンナ・テーラはよく祖父マネコ・テーラのことを言ったものだ。祖父は強情でだんまりで、物事に熱中するたちだった。ペードロは祖父のことをやつと覚えている程度だったが、しかし時には、祖父の倅を娘の眸の中に、とくに眉をしかめる表情の中に見出すのであった。その外に彼女の声は、祖母アンナ・テーラそのまゝだった。彼女は糸を紡ぎ刺繍をし、パンやお菓子を作り、人の品定めをすることろまでが似ていた。アンナ・テーラが死んでからもなお、孫がものを言うしぐさの中に生きているような感じがしていた。風の強く吹く夜などは「風の吹く夜は人の死ぬ夜だね」と呟いた。ビビアーナは祖母アンナ・テーラの前では男たちが遠慮し、用心し、おどおどした態度でいるのをよく見慣れていた。どうしてアンナ・テーラが、一般の男たちを嫌っているのか、ペードロ・テーラはどうしても解らなかった。アンナ・テーラは悪魔から逃げるようにして男たちを避け「男の匂い」について憎らしそうに言うことはたびたびだった。息子のペードロが傍でたばこを吸うのさえ許さなかった。親の前でたばこを吸うことは礼儀に外れているからだ、よく言ったが、息子は母がそう言うことのわけが、たばこの匂は男の匂に通ずることにあると思っていた。ペードロは少年の頃、サンタ・フェのいろいろな男たちが、自分の母に求婚したことを思い出していた。いつも神父がミサや洗礼をすました後には、中年の男や妻に死なれた者などが求婚してきたのだった。

彼女はそれを、ちょうど、卑猥な申し込みを受けたかのように、気色ばんで、つつけんどんに拒んだ。ペードロはよく解らなかった。そして、アンナがこんなにも男を厭うようにした自分の父は、どんな人間であつたのかとも考えたものだった。

ビビアーナが結婚にたいしてこんなに気むづかしいのは、祖母の血をひいているからに違いない。それはたしかにその通りで、だからこそ、ベント・アマラルの求婚を拒絶したのだった。

そして今、この墓地の、アンナ・テーラの墓標の前で、ペードロは娘のことについても思いしずみ、かの女が祖母の墓標を見つめる表情のなかに、大きな悲哀の影を見出したのだった。

ペードロ・テーラは妻の手をとり、まだあどけない頃に死んだ三人の子供達――一人は溺れ死に、次は膀胱炎で、その次はある喧嘩のときの流れ弾にあたつて――の墓に花を供えるために黙つて歩き出した。

ビビアーナはひとり残っていた。墓土の穴に入っていく蟻の行列を見ていた。そして蟻が地中に入っていくことや、地下の祖母の屍のことを思った。そんなことは考えたくもなかった。もう屍には一片の肉もなく、骸骨だけになっていることを知っていた眼は涙でうるんでいた。お婆アが死んでからは、ビビアーナは何か寄り所を失った感じだった。いつもお互いに気が合った。二人はマルメラードを作り、腸詰をこしらえながら一日中話し合った。お婆アは娘の頃、ポツカライの方で、遠い広野の中の農場に家族と住んでいたことを語った。今はもう、お婆アも亡くなった。も

う、自分の気に入らないことや疑いを語り合う者もないのだ！
母とは、あまり性が合わなかった。それは仕事のことで、とてもいい母ではあるが、しかし、何でも彼女に語ってくれる母ではなかった。父はまた無口で、少しこわい程近よりにくい感じだった。

ビビアーナはお婆アの墓をじつと見つめていた。大きなセードロの葉かげから洩れる日光に彼女の顔は黄色く彩られ、十字架が赤土の上に、濃いすみれ色の影をおとしていた。一羽のジュオン・デ・バーロー（小鳥の一種）が樹の股につくったその巢の中から、墓詣りをする人々を監視するように頭を出した。何かざわめきが耳にきこえ、急に父母がいなくなっていたことに気づいたのだった。

そのとき、墓場には、同じ村の人々――男、女、子供――がいた。娘はそれらのひとびと、十字架の間に自分の両親を目で探しもとめた。そのとき、あるひとりの人間の姿が、急に彼女の注意をひいた。それはおかしい恰好の服を着た男で、半分は軍服、半分は普通服で、ちかい所に立ちどまつたまゝ、じつとこちらを見つめていた。うす紅いレンズを首に巻いていた。ビビアーナが自分にかえったときは、その見知らぬ男をじつと見つめていたのだった。何か奇妙な感じだった。それが突然だったことにもよるが、また何となく威圧を感じさせた。彼女は耳や頬が熱くなるのを感じた。眸を伏せ膝について、十字架の下にあるマルガリーダをいじり、彼の凝視をそらそうとした。しかし、男は依然として

立止ったまゝ彼女を見つめているのが眼尻ごしに見えた。彼女の体は何かちがった感覚に襲われていった。それは男が彼女に話しかけてくる怖れにも似ていた。いちばんいゝのは、見知らぬ男が近づかないうちに父親のいる方へ駆け出すことだった。彼はいたい、誰なのかしら？、他国者かも知れない……それよりも、ビアーナをよけいにどぎまぎさせたのは、彼女が眼にいっぱい涙をためていることだった。ジュオン・デ・バーロの羽ばたきを頭上にきいた……男は、彼女の方へ一歩進んだ。ビアーナは身をひるがえすと、とり乱したまゝ両親の方へ走った。

ロドリーゴ・カンパラはうす青い服を着てレンソを被った娘を目で追っていった。彼女が美しいと思い、何か口実をもうけて、是非話しかけたいものだと考えた。お詣りをしていたのは誰の墓だったかを訊けばよかった。それもさりげなく「いゝお天気ですね！」と話しかければよかったと思った。娘の顔かたちが、とても気に入った。しかし、なぜか昂奮してしまったのはどういうことだろう？そうやすやすと、物事に心を奪われるような自分でもないのに、女が好きだった、それこそ好きだった……しかし、彼の覚えている中で、最初の出合いが、こんなに印象的なものは誰もいなかった。

お墓につまづくようにして、両親の方へ走っていく、うす青い服の娘を見ていた。にっこりとしてから、帽子を手に、そのひとびとの方へ近づこうと決めた。考えて見れば、別に怪け物であるわけでもない。たゞ一人が、他に話しかけるといいう、世の中では

至極あたりまえのことにすぎないのではないか頭を上げたまゝ、
ゆつくりとペードロ・アーラの方へ進んだ。そして陽に灼けた顔
が見わけられるようになった時、彼らが家族づれであることがぼ
んやりとわかったのだった。

うす青い服の娘は、彼が近づくのを見るとくるりつと、背を向
けてしまった。「すばしこい駿馬だ」とロドリゴは思った。娘に
たいする関心がますます大きくなっていった。

「ごめん下さい。ちよつとお伺い致しますが……ペードロ・
テーラの方へ進みながら言ったー実は私はこの土地の者でないの
で、この墓地にもまだ来たことがないのですが、えーと、あの、お
墓は誰のでしょうか？」

アマラル一家の墓碑を指して尋ねた。

ペードロ・テーラは黙ったまゝ、眉をしかめ、この見知らぬ男
を迎えた。そして、くだらないおしゃべりを断りたいといったそ
ぶりで、そつけなく答えた。

「扉に書いてあるよ」

ロドリゴも後へ引かず、

「どうも、ありがとうございます。貴方はこちらにお住いで？」

「うん……」

そこで他国者は、この口数の少い男が誰に似ているかを感じ
た。

「もしやジュヴェナル・テーラさんのご親戚では？」

「ジュヴェナルはわしの息子だ」

「いや、すぐ解りましたよ、よく似ているし声がそっくりですよ」

「おまえさん、どこでジユヴェナルを知っているんかね？」

「この村ですすよ、友達でしてねえ、彼は言わなかったですか？」

ペードロは、すぐに、この男が誰であるかが解った。それはニコラウの店で、ヴィオロンを弾いて歌っていた男だったのだ。頭から足のつま先まで見廻しながら答えた。

「わしにや何も言わなかったよ」

男たちが話し合っているうちに、女たちはそこから離れ、立ち止ったまゝ眼を伏せて、しずかにしていた。

「あつしやロドリーゴ大尉と言うもんですが、どうぞよろしく」と言って手を差しのべた。それに対してペードロは、ちよつと手を触れて応えたゞけだった。ロドリーゴは話し込もうと努めた。

「貴方も、一八一一年の戦争に行かれたそうで？」

「二八〇〇年の戦争にも行ったし、その外まだたくさんあるよ、どうして訊くんさい？」

「実はあつしも一八一一年のと、引きつゞくその後の戦争にも行きましたんで……」ペードロはちよつとばかり肯いた。カピトン はさらに、「どの部隊におられましたか？」

「リカルド・アマラルと言って、この村の創設者だが、その人と一緒だった」

と言ってから、少し言い過ぎたと思った。ロドリーゴは女たち

の方を見ながらにつこりとして、

「見受けますところ、皆あなたの御家族のよう」

「そう」

女たちは誰も顔をあげなかった。

「さあ、！ペードロは女たちに合図をしながらー帰ろう」

ロドリーゴの方を向くと、つぶやくように

「お達者で……………」

墓地の出口へ向っていった。女たちはそれに従っていった。ビアーナは他国者の前をうつむいて通り抜け、ロドリーゴはそれを目で追っていった。彼女の顔が熟した果実のように紅く、彼女のふくらんだ胸を見、熱くかたいものを想像した。その乳房にふれることは熟したゴヤバの実にふれるようだろう、何か体が熱くなるのを感じた。しかし、この娘の父親と、関係を持つとする機会を失なおうとしていることを考え、大股で歩き出し、もう墓地の門の外に出ているペードロ・テーラに追いついた。

「ごめんなさい、今こんなことを申し上げるのはどうかと思いますが……………あなたのご意見をちょっとお伺いしたいと思いで……………」と言い出した。一方ペードロは不快さをかくしきれない表情で、

「おまえさんは、わしを知りもしないのに」

「あなたはいろいろと経験しておられるとのことだ」

「それ程でもないよ」

「実はちよつと疑問がありました、誰かにききたいと思っていま

したんで……」　女たちは、そこまで引いて来た馬車に近づいていった。ビビアーナが車に乗るとき、サイアが少しまくれて、彼女の踵が、ちらりとロドリーゴの眼にうつった。

「どんな意見をききたいのかね？」

「実はサンタ・フェの村に落つこうと思っています。独り身で、別に親戚ありませんが、もうそろそろ考をかためたいと思っています。それで少しばかりの金を何かに使いたいと考えているんですが、どうしてよいやら、よく解らない、貴方は作付けをするのと、牛を飼うのとどちらがいゝと思われませんか？」

ペードロはしばらく顔をみつめていたが、

「おまえさんは、わしのはっきりした忠告を聞きたいというんだね！」

「そうです、そのためにお尋ねした……」

「よろしい！、わしの忠告はなア、おまえさんが馬に乗って一刻も早くこゝから出て行くということだよ！」

ロドリーゴは、かっと血が頭に上るのを感じた。この厚かましい奴の顔に平手打ちを喰わせたいのを、やっとこらえた。まっかになって唇を噛みしめながら耐えた。もう大分白髪が見えていて、しかも自分はど強くなさそうな老人をなぐることは出来なかった。と同時にうす青い服の娘の父親を叩くということは考えられなかった。

ペードロは人差指で帽子のつばをはじきながら退いた。

「貴方はあつしのことで何か考えちがいをしておられる」

とできるだけ快活を粧って、ロドリーゴは叫んだ。

ペードロは馬車に乗ると、ふり向きもせず鞭を宙でならした。馬は走り出し、サンタ・フェの村の方向に遠のいていった。しばらく、ロドリーゴはビビアーナの後姿を見つめていた。青い服と白いレンソが風にひらめいていた。「馬に乗って一刻も早く出て行け」親父の声が彼の頭の中にひびいていた。あの奴らは、俺の顔のどこが気に入らなかったのかなア？最初は息子で、次が親父とさあがる。このロドリーゴが、村に不幸でも持つて来るとでもみなが考えているのか……しかし、反対が強ければ強い程、意地でも、この村に腰をすえたくなくなっていった。

(つづく)

コロニア・新刊紹介（3）

「ラテン的日本人」

大野盛雄・編著

本書は、日本で発行されたもので、茲に取りあげるのは妥当でないかも知れないが、執筆者にコロニア関係者がいるので紹介しておく。

著者大野氏は、東京大学東洋文化研究所教授で、十四年前、日本とブラジルの学者共同主催で、日本移民の同化とコミュニティに関するパネル・ディスカッションの会が開かれ、それに出席したことから、コロニアとのかかわりを持つようになった。そして、コロニアの特に二世層の知識人たちと交流を深め、このラテン的日本人の生活と意見とを鏡としての日本文化論という考え方で、本書を出版した。本書は、四六判、二百二頁、巻頭と巻末に著者の「まえがき」「あとがき」がある。発行は一九六九年五月、発行は日本放送出版協会、印刷は、理想社となっている。執筆者は、大野盛雄、ジャンジーラ・フジムラ、ススム・ミヤオ、ジョゼ・ヤマシロ、前山隆となっている。つまり、二人の日本人と三人の日系ブラジル人の執筆にかかるもので、その他、大野氏の論文中には、準二世カツノリ・ワキサカ氏の意見が挿入してある。

著者大野氏は、二世三人と日本人前山氏の発言内容を次のように要約している。

二世二人の発言には多少ニュアンスの違いはあるが、将来新しく創造されるべきブラジルの文化と社会の中に日系人の血と肉が積極的に参加するだろう、そこに一世は子孫をブラジルに残す意義を見出すことができるという、いわば、実践を媒介とする楽観論である。前山氏の発言は、日系二世の進出に対して、ブラジル社会の拒絶反応があらわれ出していることを指摘しており、いわば悲観論である。大野氏は、それに対して、これは立場の相違から来た、見方であろうとしている。日系人の将来を考える上からいって、一読に価する書物である。

(黄)

コロニア・新刊紹介(4)

「エスツダンテ」

サンパウロ学生会

サンパウロ学生会は、以前から「エスツダンテ」と名づけて、新聞四つ折り程度のボレツチンを発行してきた。このたび、会館建設十五周年を記念して、「エスツダンテ」特集号を発行した。

本誌は、四六倍判、題字千葉皓大使、表紙絵高橋吉左エ門。写真四頁、本文四十二頁、発行一九六九年八月、印刷はパウリスタ印刷会社となっている。

まず、巻頭に、城島慶次郎会長の発刊のことばを載せ、巻末に二木秀人寮長の後記が載せである。内容は（１）一筋の道、（２）たゆみなき歩み、（３）明日の光を望んで、と三部に分けてある。（１）は十五周年記念式の会長挨拶、来賓（千葉大使、近藤総領事、宮坂文協会長）祝辞と、会館落成式での名士祝辞などになっている。（２）は学生会の概況で、会の小史、会員、役員、寮生に関する記録が中心になっている。（３）は、十五周年を祝福して会員が寄稿した文章となっている。

一読、サンパウロ学生会が、明日の光を望んで、只一筋の道を、たゆみなく歩んできた、その足跡をたどることができる。

（３）の中にある二木寮長執筆の、文章を読むと、地方から、サンパウロに遊学する日系学生に対し、如何にして、よい環境を与えて采たかが、よくわかる。秀れた指導者、栄養豊かな食事、勉学に適した環境、この三つが揃ってはじめて、秀れた人材が養成できることを証明している。

サンパウロ学生寮からは、創立以来一千人以上の学生が巣立っていったという。その中には、ブラジルの各分野にめきめきと頭角を現わしている者が少なくない。目立たない、地味な仕事であるが、そのたゆみなき歩みが明日のコロニア、明日のブラジルを建設する人材を育てていることに注目したい。

（自）

嵐

矢島 健介

かかりつけの医師は、黒いX写真を無造作に透写器にjあて、指先でボンヤリしたその一角を示しながら、

「癌の心配があります！」と言った。

医師の言葉はごくあたりまえで、決定的ではない無感動でさえあった。にもかかわらず、私の全身は鉄槌をくらわされたような衝撃を受けた。日頃漠然と頭をかすめていた予感が、動かせない恐ろしい事実として胸に迫り、唇がわなわなとふるえ、暫く口がきけなかった。

「切ってみなければわからない、只の潰瘍かも知れない、けど一日も早く手術をしなくてはならないことだけは言えます。放置すると悪化する一方だから」

私は、母はあまりにも衰弱している。手術に耐えられないような気がする。もう少し強壮剤でも射ってから、と言ったが、もう強壮剤のきく身体ではない、手術を嫌悪することは死を期待することだ。母を励まして一日も早く入院させること、母親はまだ若いのだし、輸血をするから生命をおびやかす心配はない、と言われた。

医師は次の患者を気にし、私の居座っていることに多少迷惑な、

戸惑った態度さえとったが、私は医師を離れてなすべき手段を知らなかった。

「お母さんは手術をしなかったら、あれ以上よくなる見込みはないのですからー、あんたからもそう言って励まして上げるんですー。」

医師はたどたどしい日本語を使い、私がポ語で答えると、肩の荷のおりたようにポ語に切り換え、処方箋に何種かの薬名を記入し、それから、かかりつけの病院があるかと聞いた。そして今一つの用箋に手紙をしたため、これを持って××病院に行くがいい、病院から自分に連絡がくるから、母の希望する日に手術を行なう、と言って出口の戸を開けてくれた。それ以上、私はそこに居座っているわけにはいかなかった。頬の涙を拭きとり、医師の手から白い二つの封筒を受け取って診療所を出た。

私はどうして家路についたのか覚えていない。町の騒音も耳に入らない。とめどなく涙が流れた。涙を透して窓外のネオンが二重写しの写真のように複雑に眼底をかすめた。

日が昏れて、私は電車に乗っていた。蛇のようにのろのろとレールの上を除行する、前世紀の遺物のような乗物は、私の嫌悪するものの一つで、幼時からタキシに乗るとよく駄々をこねたものだが、今日はどうして電車に乗り込んだものか判然としない。退け時の労働者を山盛りにし、ごとごと列を作って走らない電車に乗り込んだのはおかしいが、無意識の中で、母親に癌という病名を知らせるのが恐さに、わざわざ電車で始発所から終点へ、ど

うどうめぐりをし、家に帰りたくなかったのかも知れない。帰りが遅れることはそれだけ母を安心させることなのだ。チンチン電車よ、いつまでも列を作って止っておれ、新興都市の一部が潰瘍で麻痺したように――私の母の身体のように…… 祖国を愛した母は、遠隔の地で日本の敗戦を知った時、貧血を起こして何日も寝込んだという。

私はブラジル生れだが、祖母と幼時十年近く日本で暮したせい、マジナル的で愛国心などない。あっても母親の何分の一の稀薄なものだが、母を想う心は、母の愛国心と同じく強烈なものだ。私を産んで最愛をさへげ、育て慈しんでくれた母が、わずか二十年の契りで、癌という恐ろしい病気にとりつかれてしまった。運命だとあきらめるにもあまりに悲しい事実である。このことをどうして母に告げられよう。告げてはならないのだ。さりげなく母と対面し、安心して手術にもっていけるようすすめなくてはならない。併し私にそれだけの勇氣と落付きがあるだろうか、

私は電車を降り、家がすぐ前にあるにもかかわらず、公衆電話にとりすがって仕事中の父を呼び出した。電話した、というと聞こえはいいが、父が受話器に出ると私はもう泣いて声が出なかった。

父は私の悲嘆を知っていた。私の先廻りして医師から聞き出していたのである。無関心をよそおっているが、母を想う心は私以上こまかい父であることを私は知っている。

「パ、も医者に電話した、他に方法はないらしい、お前が侮やんだ

り、泣いたりしたら、マ、をよけい苦しめることだからしつかりするんだ。マ、だと思わないで他人のおばさんの手術ぐらいに考えるといい、お前が話すのが嫌だったら、パ、から話そうー」

私はうなずくだけだった。父は一切を知り、とるべき手段を決めているようだ。その上私をもなぐさめてくれ、私はかなり力づけられて家に入った。

母は蒼白い顔をし、ふらつく足に力を入れているんだ、といひながら夕餉の仕度をしていた。私はぐんと全身に力を入れ、

「マ、私がご飯つくろうー」

と、いつものように無造作にカバンと、母の骨を写したX写真を部屋に投げ出した。

「医者に寄ってきてくれたの？」

「いつもの通り胃下垂だって、だけど薬では利き目が少ないので、思い切って手術をしろ、つていったわー」

「癌だと言わなかった？」 母は何かを予感している。落ちくぼんだ目をじっと注いで、私の動作を見付めている。私は動揺してはいけないのだ。

「シャツパには何も出ていないってーあまりぶら下っているから消化不良となり、薬じゃ一時の気やすめだから、三分の二位とつた方が いいんだってー」

「手術ーこんなに痩せて、マ、はしないわ、手術なんかー」

「今迄だってそう言ってこらえて来たけど、もう薬や養生で良くなる限界をこしているらしいわ、これ以上よくなりっこないから

勇気を出すのよ。いまの医術で胃の手術なんか皮膚の腫物を切るのと同じだって医者と言ったわー」

「だけどー」

母は手術によって死亡した知人の誰彼の名を挙げ、自分もその中に加えられたような淋しさを言った。

「ママは死んだ人の名ばかりあげて、良くなった人は言わないの、いまのうちなら百パーセント大丈夫だと言うのに、手術を嫌がり、手のほどこしやうがない、と言われたら、それこそおしまいだわー」

母は傍の椅子に腰かけて考え込んだ。私はさりげなく御飯たきをつづけた。自分ながら驚くほどの勇気が出、この分なら母に感知される心配もない。安心したが、母の気持は静まらないらしかった。

母は財布から常用薬や電話番号を記したカルテを開き、医師の電話番号をくった。医師と私の話にくい違いの生じることを恐れたが、医師だって患者を落胆させることは言わないだろう。母はながながと、全く沈んだ声で対話をつづけた。日頃電話で要領を得ない母だが、その日は妙に神経の冴えた話しぶりだった。けれど対話は容易に終わらず私が御飯の仕度を終え、母のそばに寄ってしばらくして、「それではそのようお願いしますー」

と受話器を置いた。衰弱しているので、それだけの言葉に気の毒な疲れを見せ、自からの胸に手をあてて動悸を静めていた。私は抱きかかえるように母を部屋に連れて行き、寝かせた。母は幾

分上氣した顔で、目を閉じようともせず、じつと天井の一角を見付めていた。

母は四、五年前から消化不良や胃痛を訴えた。買物に出ると眩暈がする、といふ時には微熱を出すこともあった。その度に医師を訪い、血液検査やX写真を撮ったが、特別の異状は認められず、例の胃下垂だと言われ、いつも同じような服薬を与えられていた。病氣は一進一退で全快はしない。再び医者を訪う。医師は貧血だの風邪気だの、時には神経質だとみなされたりした。母は楽天的である半面たしかに神経質でもあった。身体の調子がいいと朝から暮れるまで庭掃除や洗濯をやり、食事の間に間食を造ってみたい、知人が来ると必要以上におあいそをふりまいたり、御馳走をおごったりした。隣にお目出度があると知ると、生れる前からプレゼントを気にし、お産の通知があると誰より先にかけつける。祝婚・葬礼ことごとにその調子で、其の他私が買物を頼んだりすると、明日といわず整えてくれた。病身であることを注意されても母の心づかいは止まなかった。止められない原因が病氣にあるのか、止められないから病氣になるのか、恐らく後の方が大きな原因なのだろう。

若い頃から母と病氣は切り離されなかったらしい。父のもとに嫁いだ時二十三才だった母は、その昔陸上選手だったとか、五十キロを越す体躯だったという面影は全くなく、すっかり痩せ型の娘だったそうだ。当時の青年もそういうカチカチの娘に魅力を感じなかったろうが、母は持ち前の心やりから必要以上に父の世話

をやいたらしい。初心だった父は、すっかりまいってしまったのだろう。自分の姉妹は多くデブで見栄えがしないという、その反動のような形で小柄の母に魅かれていったらしい。小柄の女は清楚で、智的で、僕の理想とまでゆかないまでも、大柄のデブより感じがいい、世にいう肉付きのよいビヨロン型のミス何々と呼ばれる女は均斉はとれているとしても、何か自分には圧迫を感じる。そういう女に持てないからのひがみでなく、先天的に近寄りがたい何かがある。室生犀星は小柄の女を好きだ、と書いていたが、自分にも同じことが言える。この主観は友人や肉身の言動で容易に左右されないだろう。とある随筆に書いていたが、父は若い頃から、瘦型で病的な娘を神秘的に気に入っていたらしい。

二世の私が、日本文の父の随筆を読めるのをいぶかる人があるかも知れないが、訪日中小学五年迄通学できたし、こちらに帰ってからポ語と共に日語学校に通い、どちらかと言えば日本語になじんでいたのも、まがりなりにも新聞や雑誌ぐらいは読めた。

聞くとところでは、父は最初、母の兄である××と同じ植民地で知り合ったという。文学好きの父は青年団の文芸部を受け持ち青年好みのピク・ニックやスポーツをやらず、裡にこもった理屈屋であった。その頃、第二次大戦に日本が勝利を得たから祝賀会をやらにやいかん。早目に飲食物を購入しないと品切れになる、という植民者を言葉を頭ごなしにやつつけ、植民地一の嫌われ者であつたらしい。母の兄の××はヤブ歯科医で、町からその植民地へ出張治療に行っていた。お客の中には戦勝を信じる者と、否の

者が相半していたので、彼は日本の勝敗にはふれなかった。ウカツなことを言うと言売にかかわるわけだが、父とはよくウマが合ったらしい。その年父の父親が病没し、父はもともと百姓のウダツの上らないのを気にしていたので、父親の死を契機に町に出、幼時から好きな写真見習を初めた。みみっちい商売だが、父の智慧や度胸は大きな事業に適しないことを誰よりも自身がよく知っていたのだらう。父は元来大きな夢を持っていなかった。町に出て二、三ヶ月過ぎたある日、母の住むA市に地方対抗の相撲大会が催された。父の住むB市からも選抜の何人かが出場した。父の知人もその中に加えられていたので、写真館のパトロンと一緒にひやかし半分の応援に出かけ、その日、その町で母を見付けたという。母はA市の女子団員の一人で、団の基金のリボンを買った、選手用のおにぎりを作ったりしていた。団員の中でも目立って細く、くびれた腰の線は白いエプロンの上からも美しい曲線を持ち、動作が物やわらかく（これは多く娘達の意識して行なう動作だが）父はそういう動作に特に引かされたらしい。顔は瓜種で額も長い。長い額に頭髪を垂らし、長い顔は眼鏡で少しカモフラジしていた。皮膚が病的で、頬のやつれを白粉と紅でかくしていた。全体から見て顔が少し大きく、八頭身などと言えた柄ではなかったが、田舎から出たばかりの父には、みめ美しい娘に見え、然も自分に好意を寄せていると錯覚していた。彼女が夜の催しのシネマの切符を売りに来た時、その夜は帰館せねばならないことを知りながら、娘の関心を買うために不要な切符を買ったり、相撲

の勝負には興味を持たず、競技場を取巻く観客の中の一角にたむろする女子青年の中の母の顔ばかりに焦点をしばっていたのだそうだ。競技が終え、引上げる時、買った切符を母に手渡し、自分は帰るから兄さんにでも上げて下さい。と言い捨て、B市の選手等とトラックに便乗した。選手達は誰にともなく別離の手をふつて叫んだりしたが、父はじつと母の姿の消え去るまで見つめていた。

父はB市で写真見習を終え出聖し、サンジョン街にささやかな店を持った。出聖したことを母の兄に手紙したら、兄に代って、という母の手紙がとどいた。片想いを続けていた父に彼女の手紙は、巨万の宝くじを引いた嬉しさだったにちがいない。それから永い間の文通がつづいた。父はある程度ザック・バランで自分の性格や、生活環境をありのまゝに知らせ、若い者にありがちな天馬空を行く美しい夢を最少限度にくい止めていたが、時に極端すぎて母を悲しませたりした。母は女性特有の見栄を手紙の上でも飾り、以前ある男に求愛されたことや、病弱には少しもふれなかった。母はその二三年前に肋膜炎をわずらい、河の濁水を飲んで腸カタルをやり、十七、八才頃まで陸上選手として将来を嘱望された娘が、雪崩のように病弱の身に転落していた。父にその事は知らせなかった。文通で父の知ったのは、彼女の溺れ安さと嫉妬ぐらいのもので、他に何も知ることをせず、嫉妬は愛情の深さだと別に気に止めることなく、他にあった縁談を打消して母と結婚した。

その時の事情はタンスの奥にしまっており、ある両親の手紙を盗み見

て知ったし、母から時たまおどけて聞かされたので、私の想像はやゝ的確である筈だ。

母は私を妊娠した時、それはひどい悪阻で医者をしてこずらせ、かろうじて妊娠中絶をまぬかれたのだそうだ。その時母は始めて肋膜炎を患ったことを父に告げ、父をひどく落胆させた。事前に知っていたら妊娠調節の方法もあったろうに、どうして黙っていたのだ、と母をなじり、母はそういう告白は結婚のさまたげになるだけだったから、――と二人は一晩暗い気持ですごした。母が父に病名を打明けられなかったように、父も家族に知らせなかった。その頃肋膜炎は肺結核の一步手前として伝染を恐れられ、そういう病人は別家して暮すほど危険視されていたらしい。

病弱な母が、私を何とか産んでくれたのは医学のたまものである。出産に母の体力が持ちきれず、陣痛半ばで引きつけ、そのまま帝王切開によつて私が生れた。医術の発達してない昔だったら、二十四才の母と共に私もこの世に居なかっただろう。或は切開によつて母を犠牲にし、私だけが育てられたかも知れない。そういう昔だったら母は二十何才で、或はそれ以前に肋膜炎で世を去る身だったかも知れないものを、四十才まで生きながらえたことを神に感謝しなければならぬわけだが、四十才になったからってどうしてこれでいいと言えるだろう。母はまだまだ私にとって大きな指針なのだ。

医師のすゝめで手術に同意した母ではあったが、翌日になっても入院するとは言わなかった。私が朝のカフェを作り、学校に出

る時になっても、頭から布団をかぶっていた。時々布団が動くから寝入っていないことがわかる。起きたらコーヒを飲めるようにして学校に出た。

私は学校への往還、友人と遊んでいる時、バレーの試合やパーティの時などにも衰弱した母の面影が浮かんでくる。日毎憂え、断末魔の苦悶を心に描くと、もう競技に夢中になるどころか、ジーンと胸が熱くなり、目を閉じて心に十字を切った。周囲の友人にさとられたくない。けれど私の動作はうかないらしく、誰彼が失恋したのか、とかメンスがあるのか、と聞いたりした。メンスで思い出したが、両親を早く亡くした母は、初潮の到来などてんで知らず、知っていても予備知識が全然なくて、何か大病に犯された如く戸惑い、兄に告げるのも気おくれがし、苦痛を何日も我慢していた。何日か後、不愉快な気持が去り、ある女友達にその事を話し、その期間の手あて法をおそわったのだそうだ。母は何かで寝込むと、マ、は弱虫だけど、お前が一人前になるまで生きていたいと言い、親に早別れしたために苦しんだ経験を私に繰返えさせない心づかいをしてくれた。

父はたえず「柳に雪折れなし、お前のような身体は誰より弾力があるんだ、この前もお前の姉が、お前は勝気だから容易に死にやしない、と言っていたよ」など、笑わせていた。友人が現れ、母の顔色の冴えないことを聞くと、「いつもこの顔なんだ、俺と結婚する前からこんな涼しい顔をしていたんだジエンテ・ルイン・ノンモーレ」などとからかう癖があったが、その友人が何かのはず

みに、女房なんて早くくたばればいいんだがと切り出すと、父は実に神妙な顔で沈黙してしまふ。病弱の妻を持つて一年が一日でも永生きをさせたい、と念じている父にしてみれば、友人の言葉は実に惨酷なわけだ。

早く手術を終え、母が全快してくれないと、私の心は落着かない。この調子では今年の進級試験パスもあやしいが学科などどうでもいいが、私が進級できなかったら、母は一そう落胆するだろうことを思うと、やはりおろそかにできない。

私が学校から退けてくると、いつものように夕餉を整えていた母は、

「薬を飲んで、今日はずっと寝ていたけど、ちつとも良くならい、少しの食物でも胃につかえ、吐いてしまった。えらくて起きておれない。やはり手術するね。仕方がないもの――」

と言った。決心はついたものゝ、如何にも残念そうな口ぶりだった。

「明日の朝出かけるように寝巻や着物を整えて置いた。――」

部屋はすっかり片付いていて、片角に幼時私のおしめ入れに使用した革袋一ぱいに何かを詰め込んであった。

その夜、父は母の決心のできたことを近くの母の姉に知らせた。遠くの親戚には迷惑だから後日知らせようという父の考慮などよそに、通知を受けた者は次々と遠くの縁故に電話したので、翌日早くから遠近の親戚がかけつけ、家の中は叔父や伯母、小さいとこたちで一ぱいになった。

朝起きると母は私に一枚の白紙を用意させ、それに署名をし、もしものが起きたら、この紙をパゝに渡し、ママの名儀の土地はお前にやるから、と言った。そういう時でも母は涙一つこぼさなかった。私などの持たない勇気を母は持っていた。姪や甥の遊ぶ姿をじっと見つめながら、これが見おさめだとも思ったのだろう――大きく溜息をついたが、泣きくずれることもなく、又病院に来てくれね、と言った。子供らは無邪気で何も知らないけれど、居並ぶ義兄義妹達は居たたまれない苦痛だったのだろう、顔をそ向けていた。入院には私がつきそった。血液検査、輸血、休む間もなく看護婦や医師の出入りがあり、夜に入って再び半リツトルの輸血が続けられた。母の顔色はもう手術の要はないほど冴えた。次の日十時頃看護婦が来て、手慣れた惨酷な動作で母の鼻腔から胃に通じる管を入れ、続いて沈静剤を射った。母は管のために話せない口を動かして意識の朦朧としたことを告げたが、間もなく寝台車に乗せられ、部屋を出るとエレベータで手術室に運ばれて行った。義兄は母に向って、しっかりするんだぞ、と産婦を励ますように声をかけた。母は少しうなずいて私の顔を見たが、私や父はもう母を励ます言葉を無くしていた。何分か過ぎ、吾にかえった父は、手術の様子を知りたい。立ち合わせてくれ、と頼んだが、その要はない。許されてもいない。たとえ立ち合っても何も出来ないし、かえって手足まといになるだけだと言われた。

手術は順調に終え、午後一時頃母は部屋に運ばれて来た。併し母の顔は生身のそれではない。顔面蒼白で頬骨がたち、髪の毛ま

でつやを無くしていた。寝台車から寝床に移しても石ころのように意識がない。口にくわえた通風管からかすかな息がききとれるだけだ。何時間過ぎても快方に向わない。午後四時頃、かかりつけの医者が疲れた白衣姿で現れ「まだ転移してなかったのよかったですよ、こういう種類の癌か研究所で調べさせることにしようー」　と言った。観念していた私はもう泣いてはいなかった。

「先生なかなか意識がもどらないのですがー」

「大手術だったから、まだまだ休んでいる方がいい」

「……」

母は出産の手術の時、四、五時間の後には意識が回復したとか、義兄が心臓の手術の時さえ、夕刻には意識がもどった、と聞いていたので、この度の母の回復は随分おそい。ひよつとしたら、このまゝ駄目になるんじゃないかという不安を言いたかったのだが、医師は例の事務的であいまいな言葉を残して部屋を出た。

私は医師の後を追ひ、癌だったら後一、二年の寿命なのだろうか、と聞くと、

「心配はしない方がいい、私の患者で手術後五年、十年何の異状もない人もいるから……」

そう言つて階段を降りて行つた。

記しているときりがないが、幸い母は翌日意識をとりもどした。酸素吸入は続いていたが、息苦しい、とか、衰弱を感じる、とかと切れと切れに言い、ブドウ糖注射を輸血に代えてもらつたりし

た。衰弱が激しいと手術を反対した親戚の誰彼も一様に喜んでくれ、手術をすすめて悪人あつかいにされていた父も涙をこぼした。私はただ嬉しくて、昨日から徐々に温みを増して来た母の手足をしきりにさすり、輸血が順調に進行しているかたえず気を配り、二日三日休まなかったが、少しも眠いとは思わなかった。

「先生有難う、先生と神様のお蔭でたすかったわ……」

母はそんなことも言った。

私は神を持っていない。父もそうだ。信仰の点では母が一番篤い。どこどころの祈祷師がいいと聞けば出かけ、「PL」「家の道」其他、私の知らない沢山の宗教に籍を置いていた。神様が人間ほど短気なら、移り気の多い母の信仰を一方の神様が罰するだろうが、神様は偉いと見えて母を罰することがない、などと、父は母の迷い心をたしなめることもなかった。新しい宗教に入る度に何日か気分がいいなどとも言っていたから、母には医者と同じく、神も大切な存在だったにちがいない。

手術の前、母は再三、大丈夫だろうか、と医師に念をおし、医師は神様でないから何とも言えないが、わしの見る所では大丈夫です、と言った。母は百パーセント大丈夫と言って貰いたかったのだろう。少し淋しい表情になったが、すぐに「きつと神様がマ、を見守って下さるわー」と気持を落着けていた。

口が利けるようになって、毎日一回廻診に来る医師を、まるで恋人を待つ小娘の心理で待ちこがれ、何彼と些細なことを聞き、時には世間話までした。そして医師が去ると、一、二時間ぐっす

り熟睡した。

医師が退院してい、と言った日も、不安だからもう一日居る、とだだっ児のようなこと言って私をほおえませた。

退院後の世話も私が引きうけた。一日に何回もおかゆやプレーをつくり、リンゴをミキサにかけ、医師の指示通りの量を与える。母は時間前からそれを待ち焦れていて、少し遅れると気嫌をそこねたり、味付けが悪いと小言を言ったりしたが、日々快方に向う母の姿を見るのは、骨身をくだいて働いて甲斐あることで嬉しい。服用と注射の強壮剤は一週間交代につづけ、半年後の母は生れ変った色つやのいい、顔になり、体重も六キロあまり増した。

父は毎年、私の学校の休暇を利用して、近郊の景勝地や市を見て廻るのを一年に一度の楽しみにしていた。昨年はリオ見物をしたが、今年は母の病気で旅行はお流れになった。七月の休暇には出られなかったが、母が回復次第、夏の休暇にでもイグワスの滝に遊ぼう、途中パラナの義兄の家に寄り、若し母やおばあちゃんの疲れが目立つようなら、そこから引きかえしてもいい、というプログラムを組んであった。

出発の日まで何の支障もなかった。母は以前にも増して元気だし、おばあちゃんの健脚ときたら私らの比ではない。義兄の家の庭に散在する様々の植物を愛鑑し、酔っぱいが色つやのいい、リンゴやマンゴを両手一ぱいにもいだり、燃え上るようなコーヒー樹の蔭に腰をおろし、往年の百姓生活を回顧していた。そういう時の母の声はまるで少女のように甘ったるく、私がヤケるほど父に

寄り添った。私はそういう時は二人に近づかない。方向オンチで時々笑われるので、自分の現在佇っている場所と、来し方の聖市の方角とを頭の中に定着し、意地の悪い父の質問にすぐ答えられる用意をしておいた。お蔭で自分等の旅をした範囲の地理は充分のみ込めた。父はゆくゆくブラジリアやアマゾンにも足をのばし、実現できるかどうか知らないが、ヨーロッパや日本にも旅行する希望をよく言ったが、母の発病以来あまり口にしなくなった。

義兄の家に一泊した私等は、翌日早曉マリングを出発、カンポ・モロン、カスカベル経由でイグアスに向った。丁度雨期で、途中二度も大雨にあい、自動車はすべて方向を失ったり、エンコしたが、義兄のルラル・ウイリスは、マルシャ、レズジードとかで滑りながらも難関を突破した。義兄は面白半分に、途中野宿になるかも知れん、この辺で引きかえそう、などと私を恐がらせた。父や母は田舎の悪道路を経験していたので平気なものだ。雨後の森林から立ち登る靄を眺め、久しぶりで田園の風物に接することができた、地球はまだ冷却していない、などと言い、自動車と共に渡して河を横切る自分等を、昔の小説になぞらえたりして楽しんでいた。

目的のイグアス迄は四五百キロの道程だそうだが、天候不順と悪道路のためにイグアスの町に入った時は夜の九時になっていた。兵隊の多い、そして電灯の暗い国境の町は、すっかり異国的で、私を喜ばせたが、義兄は手頃の宿をとるのに右横左横した。

ずんぐり太ったポルトガル系の宿の主人は、旅人の誰にもする

であろう愛想笑いを重ね、旅は心の慰藉ですよ、自分等もアパレシード教会を訪うことを生涯の希望にしているがなかなか果せない、と言ってみたり、クビチェック大統領の統治時代はいまよりずっと住みよかった、などとも言った。

翌朝八時、イグアスの町を登って、滝までの山路を走ること二十キロ、滝の雄大さはいまさらながら当着早々のぞいた滝つぼの恐怖に近い無気味さで、巨大な魔物に吸い込まれそうな驚愕だった。

地理にくわしい伯人が無数に白糸を引く滝の名を教えながら案内してくれ、しぶきをあびながら約半日そこで遊んだ。午後は滝の上の流れに手足を濡らし、夕刻から帰途についたが、母もおばあちゃんもちつとも疲れを見せなかった。父がカメラにおさめた母は、数年来初めて見るふくよかさに写り、滝を背にした半身像を視めながら、美人だな、そして女弁護士みたいに写っている、と父はからかった。親戚の一部では、母の病後を気づかって、遠出に反対の声もあったらしい。父は心の中で母の生命は悪く運べば後一、二年と計算していたのではあるまいかだから出来得ればいまのうちに念願の滝を見せて置いてやろうと 思い立ったのだと思うが、親戚の多くは母の病名を知っていなかったのである。それを言うとも母の手術は履行されなかったかも知れないのだ。癌だったら手術をしても死を早めるだけだ。と遠縁にあたる人は手術をせずに死んでいった。

他の一人の義兄は心臓をわずらい、これも医師に手術を奨めら

れたが、親戚の賛否両論が沸き立って、一騒動をやったことがある。そういう騒動に巻き込まれ、母の手術を手おくれにしたくなかった父は、ほとんど医師と二人で手術に持っていた、と言っても過言ではなかった。

手術後一年半ばかり過ぎた。或日買物に出た母は急に目まいを訴え、居合わせた義姉に抱きかかえられて帰宅した。二、三日後快方に向ったが、盲腸のあたりに痛みを感じると言い出した。以前にも盲腸の気配があると言われていたので、その延長だと私は言い、父も同じことを言っていたが、痛みを感じる毎に、背から全身に電流が走るようだと何回も繰り返す。癌の再発とも考えられたが、母に心配顔を見せられない。医者診断を乞うたら、と喉まで出かかった言葉も大げさにとられそうで黙っていた。そのうちに胃がおかしい。肝臓に異状がある。などと言い出す。母はこらえ性のない性格で、快方に向うと無性に喜び、以前の食養生なども忘れて固形物を欲した。私らはそのことにあまりやかましいことを言わないことにしていたので、消化不良の兆候か、神経質を母の取越し苦労だ、となぐさめたが、或日とうとう医者を訪ねた。医師は一昨年のカルテを取り出し、症状を聞き、それは盲腸ですね。併し切るほどのことないですよ。と事もなげにもらしたが、私には医師が苦しまぎれに吐く嘘言としかとれなかった。「あの奥さん、ちよつと外に出てくれませんか、娘さんに話があるから……」

医師は診療室から母を外に出し、一枚の用箋に薬品名をつらね

ながら、これは制癌剤だから処方箋が入っていたら捨て、盲腸の薬だということにする。処方方は静脈注射で、強壮剤と一週間替代に投与する、などと教えてくれた。

「やはり再発ですか？ 先生――」

「まだよくわからないが、そうかも知れません仕方がないですね。手術後二、三ヶ月で再発する人もいるし――」

医師の言葉は氷のように冷たい。去年手術の直後、五年や十年何ともない人もいる、と言ったが、あれはたんなる慰めだったのか、私には又涙があふれて来た。

「この薬で様子を見てみましょう、何かあったら電話して下さい、お母さんが疑ったら衰弱がはげしいから不摂生が多いんじゃないか、と聞いた、と言いなさい――」

母は胸がどきつく、と戸外で胸をおさえていた。医者に戸外に出されたことをひどく気に病んでいるらしい。私は医者から教えられたことを話した。

「……それだけ聞いただけ？」

「う、ん、それから無茶食いをしてはいけない、とも言ったわ、果実はなるべく新鮮なのをミキサにかる、といって、手術後だからたえず注意して上げなさいって――」

母は腑に落ちない様子だったが、兎に角貰った処方をつづけることを唯一の頼みとして日を重ねた。けれど快方に向かわなかった。投薬が強過ぎるのか、食欲がないし、時々黄色い汚物を吐き、足がふらついて仕方がない、こんなに注射して良くならないのは

不思議だ。医者の方方に手ちがいがあるんじゃないか、と心配する。その度に私は医者に電話したり、じかに相談にも行き、その足で著名だと言われる癌医も訪ねた。母のつづけているENDXANは制癌剤で癌種を一時押さえるが治癒しきれるものでない、母が弱っているなら無理に続ける必要もないこと、日本のマイトマイシンも完全ということはできない兎に角一度診てみましょう、とその癌医は言ってくれた。便と血の検査をやり、大腸菌がいる、とその為の薬をもらい、白血球が不足しているから輸血の要ありと言われた。察するところ医者は癌によって現われる部分的な治療をほどこしているだけで、病原はそのままになっているから、まるで大国を背こそのヒモで小ぜり合いをつづけている小国のみじめさだ。それでも大腸菌を殺したことによって少々気分がよくなり、もう大丈夫だと自らを励ましていたが、母のその言葉は私にはたまらなかった。

父は自分の本箱を人が整理するのを非常に嫌い、めったに手をかけないことにしているが、或日あまり埃まみれなので、父に内緒で埃をたゝいたが、奥まで落ちない。止むを得ず全部を引き出し、埃をはたいてもとの場所に置き並べていたら、本箱の奥からエロ写真や、若い頃買ったらしいダンスに関する書物にまじって「癌」とか「癌の治療法」「癌に関する十二章」などが出て来た。頁をくると、写真入りで癌の徴候が様々に説明されている。癌病人が衰弱すると大腸菌がふえること、制癌剤を授与すると白血球が不足することなども書いてある。この書によって、医者の治療に

間違いはないが、何とも頼りないことを百も知らされた。父は母や私に黙っているが、人知れずこんな書物を集めて母の病状を研究していたのだ。以前はよくサルトルだのカミュだのを読んでいた。あまり解ってもいないらしいが、少しでも新知識を吸収しようとする意欲は買えた。近頃の父はさっぱりそういう書を読まないし、以前には嘗てなかった物忘れをした。私の買物を忘れるぐらいならいゝが、仕事の肖像画の仕上げを忘れたり、写真の二重写しをやったり、さっぱり仕事に力が入ってないようだ。本を読んでも以前のように熱が入っていない。ただ文字を目で追っているだけのように見受けられた。

母の様態は勿論だが、父の様子も気にしないではいられない。まるで夢に遊ぶように頼りない昨今なのである。

「パ、疲れてるようだわ、仕事は小僧にまかせてゆっくり休んだ方がいいわー」

「心配しなくてもいいさ、いま一働きしなけりゃゆっくり落着くこともできない。ママの病気も一進一退だし、いまのうちにママの欲しがっている家を建てようかと考えているんだー」

「本当なの？」 父の意外な発言に驚いたが、母はかねがね住宅を欲していたのは事実だ。併し家が建つまで母の病勢はどう変化するか計り知れない。

「マ、はあんなだし、それにお金の方大丈夫なの？」

私は父の仕事から得る収入がどの程度のものか知らないが、たいしたものでないように思えるし、母の治療費も日々かさむばか

りだのに、父は思い切ったことを言い出したものだ、内心心配だが、一度言い出すともとへもどさない父の性格を知っていたし、――そういう企画でも立て、母の病苦をやわらげ、希望を持たせ、そして父自身も母の病を一分でも忘れるために、何物かに熱中したかったのかも知れない。

父は絵画彫刻や、又建築などに非常に興味を持ち、その方面に関する書物も文芸物や哲学書と同じ比率で書棚を飾っていた。その方面にかけて今古の著名人の名をかなり正確に記憶しており、高校生の私などの此ではない。父が建築にとりかゝった土地はただ売買登録がすんでいず、従って正式な建築許可がとれなく、建築技師も引き受けてくれないらしい。

父はそれをいいことに、自分勝手な設計をめぐらした。土地巾が狭い。その上表に店を構えているので、どう苦心しても見かけ、見晴らしのいい家にならない。金の予算も少い。と言いながら、それでも毎日自分なりの構想を練って、ドイツとかどこかにあるという、二階を客間にし、四面ガラスぼりの見晴ししのいいものにし、階下を部屋や炊事場にする計画をたて、母に見せると、そんな家は見たことがない気狂いの建築みたいな家は嫌だ、客が来て二階まで茶を持ち運ぶのも大変だという。お客は一日に何回もありやしない、我々が毎日生活する、炊事場と食堂、部屋が階下で一緒にある方が、毎日の梯子段の昇降をはぶけるのだ。それに表が店で塞がっているから、客間を二階にすると感じが明るくなる、と父は説明したが、母は世間一般のしきたりはずしたくない

かったのだろう。どうしても肯定しないので、父は初期の企画をくつがえし、母の希望に添う設計をし、化粧煉瓦や便器の類に至るまで母の希望を容れた。このように自分の感情を殺し、母の歓心を得るための努力をしたことは父には嘗てないことだった。

或日、母は普請場を見たいといふだし、ふらつく身体を父に支えられながら現場に行った。二階への梯子段が切りぬき式になっていたのを見、子供が落ちそうで嫌だ、と言えばそれも毀させ、普通の階段にした。

母は命がけのお産で私を産み、その後永い年月を子供無しで過して来たが、近頃もう一人子供が欲しい、と言った。母性とはそういうものなのか、父はお前は病弱だから元気になったら、とんだめていたが、終には自分の弟の子供、私からいうと甥を養育する予定を組んでいた。階段から子供が落ちるとはそのことを指していた。私は甥やメイをつれて来なくても自分は淋しくない。一人っ子の方が気楽でいゝ、と言うと、母は自分の考えていることをこの娘は気に入らないらしいゝと大粒の涙をこぼしたりした。

積木にも似たる逡巡宵の灯はなべてに映えて吾のみの惨

今年の全伯短歌大会に、父は右の短歌を投じた。何故「吾のみの惨」かそこに具体性がないので点かせぎにはならなかったが、父がそう歌わずにはいられなかった心の逡巡が私にはよく分るような気がする。

父は多く語らない性格で、ことに母の病氣勝ちな日々を他人にはおろか、親戚の者にも多く話さなかった。母を病身だと呼ぶの

は母に対してばかりでなく父自身もみじめになりがちだったから言葉に出さなかった。併しその沈黙も限度に來た。親戚の者にだけでも知らせよう、と父は一番近くの母の姉に知らせた。伯母は泣きながら、とんでもないことだ、思いもよらない災厄だ、明日と言わず次々と弟達に伝達し、遠方の兄に電話した。翌日からひっきりなしに見舞客がふえた。父が極力そつとして置いてやりたい、と希ったのも水泡に歸した。

父が母の氣持や親戚をわずらわしたくないためにおもんばかった行為が、ことごとく反対の意味にとられ、父は母を見殺しにするつもりだ。どうして早く病名を知らせなかった。初期だったら治療の方法もあったろうに、と言う憎まれ口をさんざん聞いた。母の兄弟達は物事を客観することをせず、主観で物を処理しようとするので事毎に正面からぶつかった。

父は自分はせい一ぱいのことをして來たつもりだ。病名を知らせなかったのは自分の落度だが、初期だったら治療の方法もあったというのはあてはまらない。最初の手術の時は医師も初期だと診なし手術後五年、十年生きる人はざらに居る、と言われた。五年、十年先の寿命をとやかく言つて皆様に心配をかけたくなかつたので自分一人の胸にたたんでいた。貴美子は若い頃から、どれほど病弱であつたか、皆様に知らせはしなかったが、自分が若し暴君であつたら、貴美子は三十代を出なかつたであろう、その頃からいちいち皆様に心配をかけていたら、皆様は僕の弱さに辟易しみむきもしなくなっていただろう。皆様に急激なショックを与

えてすまなかったが、自分はこの所、何年来かみしめて来た悲しみなのだ。他の医師は貴美子のX写真を診て、どうして胃を全部とらなかつた、大きくえぐつたら永持ちしたろうにと言われたとか、医師にも商売仇というものがあるのかも知れない。無いにしても責任のないことだ。結果論としては何とでも言えることだが、貴美子の胃は普通人の三倍に拡張していたから、大きく取りのぞいても、まだ残す余裕があつたのではないかと思う。V医師は外科医として有名な人でそれほどのへまをやつたとは思えない、という弁解の言葉や手紙を出さねばならなかつた。自分の姉妹なら投げ出したくなる些細なことを、母の親戚のために尽している父の行動ははた目にもいたいたしかつた。

「お父ちゃんは何もしてないみたいだけど、随分めんどろをみてくれてるわ、すまないぐらい――今度良くなつたらうんと働くわ――」

母は時々そんなことを言つた。

親戚の人々は表面上非常に可愛がつてくれたが、心底からの愛情を注いでくれる人は少なかつた。母は時々輸血が必要で、それも新鮮なのがいゝと言われ、あちらこちらの親戚にあたつてみたが、その時になると誰もが口実を作つて、みずから提供するものはいなかつた。結局痩け形の父自身が血を採り、不足の分は日雇伯人の血を買つた。

マイトマイシンが癌の特効薬だとすゝめられると、父は早速それも日本に注文した。マイトマイシンは制癌剤として発売されて

おり、特効薬でないことを父は知っていた。日本に特効薬があるのに世界の学会が黙って癌患者を殺している筈がない。世界の医学会は一丸となって癌治療の研究をしているが、いまだ光明を見出さないのだ。と言いながらも皆の奨めは実行した。家を建築中の父はなけなしの金で高価なマイシンを取り寄せ、まるで妾に金を注いだように内緒で支払い、然もその薬品のレツテルをはがして母に病名を感じかねないよう苦心していた。そういう裡の苦しみを誰より先に知って貰いたいのは母にではないかと思うが、それができない、ということは何と悲しい行動だろう。

それでも母の病気はよくなならない。来訪者は親切から、お灸がいゝ、と言い、或人はおへその上に味噌を薄くのせ、その上にお灸をすえたらいゝ、或人は臍の緒を煎じて飲むといゝ、イッペ・ロツシヨがいゝ、アロエがいゝ、其の他沢山の薬草が母のもとにとどけられ、それぞれ特効薬だから、兎に角実行しろというが、医薬をもふくめて、母の身体はその全部をこなせるほど健康ではない。其の他どここの祈商師がいゝ、観音様がいゝ、と沢山の奇跡を聞かされる。父はそういうものを信じない性格だが、その都度母を連れて行った。結果はどうあろうとも、そうしなければ父のありかたが疑がわれるのだ。

宗教功勢ものすごい。先にも書いたように母は沢山の宗教に関係していた。それは宗教の趣旨を信じ、神のおめしで安らかに天国に行く、というのでなく、入信すれば病気が治ると信じての入信で、治らないと当然遠のくことになる。若し神や仏が万物の

創造主だとしたら、天災や病魔のたえないこういう世界をお創りになった、そもその根本が間違っている。そういう創造主に掌を合わせてみた所で御利益があるとも考えられないし、又林が我々に御慈愛を与えてくれるものなら、全人類に与えるべきだ。合掌しなければ、一途にならなければ御利益を得られないというのは、丁度金を払わないと品物をくれない商人に似ている。と父はよく言った。併し病人を前にして宗教の有難さや奇跡をとかれと、父自身は別として「お前がよかったらー」と言うことになる。母は最後に××宗に籍を置いた。奨めたのは以前母たちが仲人をやった××さんで、彼等も他の宗教と同じく入信すると病魔は治るとい、每晚お祈りに来てくれた。それはそれで有難いが、終には十日十晩水を飲んでお題目を唱えろとか、親切で来てくれる他宗のお祈りをことわれとせまり、病人は力一ばいお祈りが不可能だから、家族が代って、一丸となってお祈りしなければ御利益がない。父は母の快癒を祈っていない、とそしられもした。父は宗教によって病氣は治るものではない、当然のことながら、自分は他の誰よりも妻に力を尽しているつもりだ。これは夫として言いたくないが、皆さんが私に妻を想う心がないというのなら弁解もしよう、と彼等と口論したこともあった。黙っていて通じない父の態度を明かすと宗教をこき落すことになり、同じく神を信じている母を傷つけることでもあった。板ばさみである。母の病氣を中心に家の内外は全く嵐を呼んでいた。

私の友人、父や母の知人、親戚、宗教関係、写真見習生の縁故等々、こんなに知己がいたのかと驚くほど、毎日見舞客がつづいた。

父はてんでこ舞いである。暇人なら兎も角、一家を支え、日々嵩む病人の費用を祿がねばならず、それを傍に、見舞客を迎送し、母の気嫌をとり、医師の注告に従い、注射を与え、時々めまいさえ訴えていた。

それでも母は良くなればいいばかりか、終に便秘となり、X写真は大きく盲腸癌を示した。胃癌から直腸への転移は珍しいコースだと言われ、再発でなく別個のものかも知れない。それだったら手術によって、持ちこたえるかも知れぬ、と嫌がる母をなだめて手術に持って行ったが、結果は胃から腸え癌種は無数に散在しており、三カ月から六カ月の寿命と診断された。手術に立ち合った医師の一人などは人工肛門をつけるのも無駄だ、というほど悪化していたのだ。併し人工肛門は多大の効果があつた。食事手術前よりとれたし、便秘の苦痛が去り、家の所々をふらついたり、フエイラにも一、二度行った。映画やショーにも何回か行き、間もなく全快することを心に念じ、病気を疑っていなかった。父は腸捻転による手術で、肛門に少し腫物があるだけだから四、五ヶ月で自然に快復する、と言ひ聞かせ、見舞客にもそう言ひふくめてあつた。

だが、手術後三ヶ月頃から腹痛は益し、朝夕鎮痛剤を服用した。すぐく涙もろくなり、痛まない日があると、もう大丈夫だと泣き、

肛門から雫ほどの便が出ると「パ、便がでた、我慢した甲斐があったわ、よくなるんだわねー」とわんわん泣いて、私や父を戸惑わせ、一緒に涙にくれた。

私がそばにしていると勉強のことや、炊事のことなどに注文をつけたり、雑誌のマンガに目を通したりするが少し場をはずし、もどつてくると布団にうつ伏して泣いていた。

「どうして良くならないんだろう、胃の手術の時は一カ月も経ると大分元気になったのに、今度はどうしたのか知らん。便秘だけなら我慢も出来るが、お尻のむずむずするのはやり切れない。カズ、パ、たちみんなでマ、をだましてるんじゃない。マ、はもう駄目なんじゃないー きっとそうだわ……」母は痩せた手で布園を叩いて惜しがった。私は疾者を寄ぶ。医者はい、かげんな処方を置いて行く。

それでも母は二、三日は医者 of 偽言を信じている。

風呂に入ると腹痛が多少緩和される、と言われ、それも毎日実行した。まるつきり骨と皮との身体を鏡面に映し、悲愴な面持ちになり、むせんでいる母をどうなぐさめていのか、全くの所私もまいっていた。いくら強壮剤をやっても、大事に看とつても何の甲斐もなく日々衰えてゆく母をどうしてもできない、人智のはかなさー母が楽しんで飼っている雛鳥が成長するまで、可愛がっている仔犬が大きくなるまで、裏庭に植えたサトイモが実を結ぶまで、母の生命が保つかどうか、そう思うと、家の道具や、草木の一本にも涙をさそわないものはない。

服用の鎮痛剤は効用を無くし、モルヒネに近いソセゴン注射に変った。鎮痛剤ばかりで痩せるのを嫌い、注射を敬遠するので、母の希望を容れて注射を見合わせる必要があると母は忽ち断末魔の叫びを上げて痛みを訴える。階下で叫びだすと父は母を抱えて階段をかけ上り、部屋に寝かせると、「注射はすぐだよ」と階段をかけ降り、沸かしてあった注射器の湯を切り、毎回少しつつ分量を増したソセゴンを授与する。五分も経ると、「大分よくなった、目の前がきれいな花園だわ、パパ何も言わないで寝かせて置いて

――」鎮痛剤で眠っている母の顔は実にいたましい、死人そのもの、顔だった。親戚の誰彼が、もう駄目だ、貴美子すっかりするんだぞ、と叫んだりすると、意識不明の筈の母は細い指を左右に動かし、眠っていないことを表示し、鎮痛剤が覚めると、「マ、は休んでいるのに、何故すっかりしろと起こすんだろう、うるさい、パ、はうるさくないから、ずっとそばにいてね――」と言ったり、涙をうるませながら痩せ細った手をかざし、「パ、私、自分の手がぼんやりしか見えないわ――と何回も繰返したが、日を追って意識は乱れ勝ちになり、まるで夢の世界に遊ぶような頼りない母になっていった。寝ていながら、おのづと手が動いて、頭や頬をしきりとかきむしり、又パンパンにはれ上っているお腹を搔いたりする。辛いのか痛むのか、死に近づいた下等動物のみせる動作だ。かと思うと視点の定まらない瞳孔で壁の一点を見付めて、何かにおののいたり、朦朧とした声で、

「パパはいる？」と聞く。

「パパはこゝにいるよ、心配しないでー」

私がさとし、顔をパ、に向けてやると、少し父の顔を見、安堵の目を閉じると、「マ、はちつとも腹が減っていないのー」と言う。はつきり意識しているとも思えないのだが目から涙が頬を伝っていた。

父は、

「何でもない、ゆっくり休むんだ、疲れているから、今度目が覚めるとすつきりするからなー」 といつも言葉の繰返すが、その言葉は全く空虚な響きをもち、やり場のない悲嘆がにじんできた。

その日も寝ぎわに鎮痛剤を射ち、父は母の傍に横になると、暮れるまで目の通せなかった新聞を開くが、文字を追っているようでもなく、すぐ頬に新聞をかぶせて沈黙してしまう。寝入ったようでもないが、私がそつと電灯をスタンドに切り換えると、父はむっくり起き上り、新聞を傍に置くと又横になった。父の顔はぬれていた。真赤な目で天井の一角を見つめ、何かを考えているようだ。いや何も考えていないのだろう。

私はそしらぬふりをした。窓外を往き来する電車や自動車の音がいやに鼓膜を打つ、ことに私の家の前は電車の交叉路になっていて、電車の踏み切りの音ったら、たまらない。自動車のヘッドライトは破璃戸ごしに部屋の壁にうごき、左右に現れては消える。この部屋に住んで何年になるのだろう。私の一才何か月の時からだというから、かれこれ二十年だ。

「癌の徴候」によれば、自動車の廃気ガスや道路のクールタール、スモックに汚れた都会の空気は、人体に大きな害を及ぼす、と書いてある。それが事実なら、私等は最も悪条件の中に生きついで来たわけだ。父が家の新築を思いついたのも、一つはそういう思惑からかも知れない。早く新宅ができ、そちらに移りたい。それが母の最後の喜びとなるかも知れないし、移転し、新鮮な空気にふれることによって、母の病が少しでも、気分的にでも緩和されたらと思う。

（おわり）

『わが住むまち』

風物断章

坂 光男

水野 浩志

勝山 呉泉

まや・あきら

サントス市

サンパウロ州の表玄関

吾々の父母が移民として 第一歩を印した地

坂 光男

はじめに

一五四二年、ブラス・クバスが船員のために建てた病院、それはリスボンのそれと同名のトドス・オス・サントス、それを省略したサントス病院という名で称ばれていたが、いつとはなしに、その病院の在る島の名を、サントスと呼ぶようになり、今日に至っている。

マルチン・アフォンソのカピタニア時代には、ごく小さな砂糖の積み出し港であったが、やがて、一七三二年、サンタ・マリア号によるリスボン向けのブラジル最初のコーヒー輸出がはじまっ

た。その数量は、わずかに二俵、なんとピアダのような話である。ところが、一昨年度の統計が示すサントス一か年間のコーヒー輸出量は、実に六七六万三〇四七俵、世界最高のコーヒー輸出港なのである。

ひと頃、港湾ストや政変による数々の動揺はあったが、なんといつても聖州の表玄関、南米の要港という地盤にゆるぎはない。現在人口三十万と称するこのサントス市も、その周辺の地、サンビセンテ、グアルジアなどを含めて、その歴史が古いので、たぐれば数々の物語りが秘められている。また近くは、吾々の父母が、移民として第一歩を印した思い出の地でもある。

堤防を持たない全長八キロメートルの自然の良港、一方湾曲を描く砂浜の浴場は、テンポラダと呼ばれている七月から翌年のカルナバルの終り頃までは、おびただしいバニスタ群が押し寄せる。色とりどりの花びらのようなパラソル、原色あざやかな水着の男女、「プライアでは、富者も貧者もなく、老若のへだたりもない。海は愉しむ者にとって、あくまでもおおらかである」と、詩人パウロ・ゴンサルベスは詠嘆している。まことに海程童夢の境地に帰し、あらゆる階級をとわず楽しませ、神経を休ませ、活力を与えてくれるところはない。

それで、一日に何万というパウリスターノがアンシエッタ街道をくだって海を求めてやってくるのである。沿岸に林立する白亜のビルは太陽をはねかえし、囲いのない海岸電車は鈴なりの客を乗せて走る。波うちぎわ低く、赤い観光ヘリコプターは飛び、水

上スキーは白波を残してすべってゆく。海と山と街が、よく調和された港、そして世界的蹴球選手ペレーの住む街、それが吾が住むサントスの梗概である。

(1) 人物

さて、サントスから出た人物といえば実に多く、ルイ・バルポザ・フレイ・ガスバルと数えあげれば限りなく現われてくる。その中で、最も住民の間に知られており印象の強い人を二、三あげてみよう。

“サントス産みの親、ブラス・クバス” 一五三二年一月二一日の明るい朝、南風に吹かれながら来た帆船は、サンビセンテ島近くに碇泊した。乗組員は小舟で、みなイリア・ド・ソール（今のグアルジアのある島）へ渡り、バラックを建てはじめた。これが、サンビセンテから来たマルチン・アフォンソの指揮するサントス開発隊である。その中に、三十才前後の熱血漢で、貴族の子ブラス・クバスがいた。

彼は、やがて一五三六年、ジュジュバ河近く（今のバルナベ島）の土地を貰い受け、砂糖、ミリオ、米などを作り、住民にも農作を奨励した。そして一五四〇年まで、その島に住んでいた（その後、サンビセンテ島（今のサントス）のパスコアル・ジエノベルの土地を買い、そこに家を建てた。その頃、突然おそった津波は、サンビセンチ町の住宅をほとんど全滅させてしまった。住民は、

次々とブラス・クバスの住むエンガガス（その頃は、まだサントスと呼ばれていなかった）へ移って来たブラス・クバスは、そこに教会を建てた。次いで、一五四三年、今の税関のある近くの土地に、サンタ・カーザを建てた。これが、ブラジル最初の慈善病院となった。一五四五年六月八日、彼はマルチン・アフォンソの指令で衛生司令官に任命され、一五九三年、九十才以上の高齢に達して大往生を遂げた。

“市民に愛されている海の詩人たち”

夕日は落ちて波片かげりして

寂しく祈りの声音に以た海鳴りの音

ビセンテ・デ・カルバリオ

イリヤ・ド・ノール（日の出の島）のサビアは、
海鳴りと共に唄いつづける。

永遠なる孤愁を秘めて

ビセンテ・デ・カルバリオ

私はこの浜に生きてきた

いずれ、私をこの浜砂の中へ葬って ほしい

私の念願 こんもりと 乳線の如く 盛りあがった砂塚

紺青の海原のまえに

マルチンス・フォンテ

この詩のあとがきに、これほどまでに海を愛し、遺言のように詠った浜浜の中へ彼を葬ることは、人間の法が許さなかったが……とあるのが面白い。彼らはサントスで生れ、サントスに生き、そして死んだ詩人である。彼らが遺した海の詩の数々は、今もなお映画館やレストランの壁画の中に書かれて、市民に愛誦されている。

“マルチンス・フオンテ”

一八八四年六月二三日、今のジョゼ・ボニファシオ広場近くのシャカラで生まれた。少年時代には、ゼジニオと称ばれ、誰からも可愛がられる性質であつた。一九〇一年リオの医大に入学卒業後医を業とする傍、文筆好きな彼はガセツタ・ノチシアやノ・パスの新聞記者として敏腕をふるつた。彼の詩は魅力に富み、庶民の胸を打つものがあつた。ベロン・カンソンプライア、インダヤなどの詩は広く子供たちにまで愛誦されている。彼が、ベネフィシエンシア、ポルトゲース病院で終焉を遂げるまで、いわば一生涯サントスを愛しつづけた詩人である。

“バイセンテ・デ・カルバリオリ”

彼の代表作にサビア・ド・イリヤ・ド・ソール、というのがある。サビアとは、彼自身をさしている、イリア・ド・ソールとは、今のグアルジアのある島のことである。彼もきつすいのサントスっ子で、海の詩人として広く知られている。後年期には、外国にも出ているが、弁護士、新聞記者、文学者、詩人という非凡な才能の持ち主である。しばしばコーヒー輸出に関するいざこざを

解決して敏腕弁護士の名を馳せた。晩年かなりひどい神経衰弱にかかり、隣接避暑地ベルチオガの浜で悠々自適、さかんに詩を発表した。海の詩人と呼ばれたのは、その時代である。彼の銅像は、ボケイロンの汐風が吹きつける所に建っている。豊かな口髭をたくわえ、小腋に書物をかかえて俯向きかげんに立っている。なお七、八年前、久しくイタペマという名で呼ばれていたサントス港対岸の町に、彼の名を永遠に遺す意味で、ビセンテ・デ・カルバリオと名づけた。この改名は、サントスの人文地理学者及びグアルジア郡長の斡旋によるものである。

“アンドラダ（ブラジルの大長老）”

サントスにとって、忘れてならぬ大恩人に、ジョゼ・ボニファシオ・アンドラダがいる。れっきとしたサントス生まれである彼は、詩人、建国者、政治家、文学者と、まことに識見高い大長老といわねばならぬ。共和主義提唱者であり、土人解放に尽した彼の功績は大きい。余りに有名で、サントスの歴史よりもブラジル歴史の方であつかわれることが多い。後に機会を得て、「アンドラダの生涯」について書いてみたいと考えている。彼を記念する銅像は、ゴンザガの目抜き広場に建てられており、人々の往来をじっと見おろしている。

“ゴンザガ”

ゴンザガといえど、現在美しい海岸の地名として知られているが、この名の由来をたぐってみると、ひょうきんで、お人好しで、ピアダの好きなボテキンのおやじ、アントニオ・ルイス・ゴンザ

ガが出て来る。その頃のゴンザガは、至極へんぴな田舎町で、ブーロのひっぼるボンデが通っていた。丁度停留所近くに、ゴンザガのボテキンがあり、そのボントを、ボント・デ・ゴンザガといっていたが、いつとなしに地名になってしまったのである。今は観光ホテルが建ち並ぶサントスの名所の一つで、昔日の馬車ならぬ瀟洒なトロリブスが縦横に走っている。

(2) サントス港

この港ほど、日本移民にとって、緑の深いところはない。否、日本移民にかぎらず、各国人が上陸してきた関門なのである。「港は別れてゆくところ」という流行歌があるが、サントスは、別れてゆくところ」より「訪れて来るところ」である。南北にかけてベロンゴ以北のサボオと呼ばれる石油荷おろし岸壁より三十一番倉庫まで、さらに対岸のバルナベ岸壁を加えると、全長実に八一四七メートル。昨年一か年間積みおろした荷のトン数七四億五万九九七七トン、出入船一日平均一九隻、既に現在港が持つ能力では、到底間にあわなくなり、目下岸壁三十二番を急ピッチで構築中である。又倉庫十五番の如きは、たえず移民や観光客の出入りで忙しく、毎日が祭日のような賑わいぶりである。

(3) 近郊の農業

サントス、クバトン、サンビセンテなど、すなわちセーラ・ド・マールを下った平坦地をバイシャダ・サンチスタと呼んでいる。このあたりは、カピタニア時代は砂糖黍の主産地であった。昔著名なエンジェニオ・サン・ジョンが、現在のルイ・バルポザ広場にあつたことでも、そのさかんな様子がうかがわれる。

ところが、やがて北伯ベルナンブコの生産量に圧され段々と衰微していった。その大きな理由は、山が多く、残りの平坦地はマングレと砂地で、作物に不適であること。この悪条件が現在も農業の発展をさまたげている。現在は若干のバナナと、日系人の作るシュシュの外に、サントス農業に見るべきものはない。町と農村との人口比率が、農家十四分の一で、極度の低率を示している。

(4) 漁業

サントスの漁場といっても、近海は勿論、遠くリオ・グランデ又はサンタ・カタリナ方面にも進出していて、その面積は広大である。漁船は約四百隻、総合的な荷おろし場として、エンテレポスト・デ・ペスカがある。これは一九五八年一月二日に落成した。ここから奥地やサンパウロ市に向けて、カミニオンで運ばれている。南聖最高の漁獲は、サンパウロ市が最大のお得意さきで、大部分がセアザへ送られる。大洋漁業だけでも十隻の船がリオ・グランデ方面の荒波にいどんで活躍している。現在冷凍えびが北米や日本に輸出されているが、その将来性に注目されている。

(5) 輸出バナナと運搬倉庫

昔は、日本移民なども收容されたことのあるサントス移民收容所は、永い間廃虚のようになっていたが、三年程前セントラル・バナナ組合、及びコチア産組の請願により、州政府から借り受け許可がおりた。現在共同のバナナ運搬車の倉庫（ガレージ、目下、八十台の収容力あり、更に拡張中）として利用されている。このため、南聖地帯無数のバナナ生産者が思恵を蒙っている。王冠のような屋根は往年の移民收容所そのままであるが、内部はすっかり改装され、運転手のためにテレビなどをしつらえてあり、至れり尽くせりの設備がととのっている。これも、要するに、バナナ輸出に対する政府の関心の高まりを示しているといえよう。

(6) サントスの恥部

たいていの港町に横行する密輸、淫売、麻薬など、世界じゅうの通り相場のようなのであるが、サントスも例外ではない。それでも、カステロ大統領就任以来かなりきびしく取り締られてきている。ところが船内に侵入するコソ泥など、ほとんど毎日のことである。まだ銀行ギャングが現われていないのは、地理的な条件によると思う。岸壁十二番、ドッカス事務所前あたりが日本で昔言われた赤線地区で、夜は怪しげにネオンが輝き、雑沓をきわめる。サン

トス発祥の地といわれているチーロオンゼ街などはその歴史に似ず敷石がはがれて水がたまり、悪臭を放っているが、そこに下級娼婦たちが酔いつぶれている。夜の女に対する取り締りが、わりと緩慢なものも、そこはやはり港町のせいであろうか。

(7) サントスの邦人と文化

サントス市在住日系の正しい数字が解らないと、誰でも言う。それは、サンパウロ市についても同じことがいえそうである。というのは、厳重な調査がなされていないからである。推定数三百家族とされているが、それを上回るように思われる。第二次大戦の時、外国人は速刻立ちのくべしの命令をうけ、二十四時間内に家財道具や事業を整理し、または打ち捨てて奥地に行き、そのまま落ちついた者もある。そうした混乱がサントス日系の発展をかなり阻害していると言える。

ところが、まだ笠戸丸第一回移民で、サントスに三名が健在している。栄蔵松、仲文五郎、世野口嘉佐一の諸氏がそれである。昨年日本政府並びに日本文化協会から、その功勞に対し、賞状と勲章が受与された。栄蔵氏の如きは、ドッカスの人夫頭として働いていた時代もあった。昨年サントス郡より表彰されたおり、ア・トリブナ紙は氏の経歴を書き賞賛記事を写真入りで掲載した。ごろつきの多い人夫の中で、只一人の日本人でありながら人夫頭に推された彼は、秀れた才能にちがいない。十数年後の今日でも「エ

イゾの指図は絶対間違いなかった。」と言い継がれている。

その他、永い間日本船や移民の世話をやいてきた三笠ホテルのパパイ、おやじさんで通っている小渕友一氏がいる。彼は一昨年日本船舶組合より表彰された。さて、サントス邦人を職業別にみると、何といつても、多いのはフエランテで、次ぎが漁業関係者、メルカード関係、事務員の順になる。港湾に関する仕事をする人はごく少ない。県人では、沖縄県人が断然多く、根強い勢力を張っている。二世のクラブ及び団体は、最近会館を新築したアトランタ・クラブをはじめ、エストレーラ・デ・オーロ、二世サンチスタ、サンビセンテには、ビセンチーノなどがある。それぞれ蹴球、バイレ、卓球、ピクニックなどを主としている。又一世間には、サントス日本人会があり、年一回の慰安運動会やのど自慢大会などを催してきている。更に、サントス碁、将棋会があり、サントス短歌会などがある。

(8) モンテ・セラッテ

サントスの名所の一つにモンテ・セラッテ山頂にある教会、バドロエラ・デ・サントスは一六〇三年に、ドン・フランシスコ・ソウザ大統領の許可のもとに造られた。そこにはノツサセニョラ・ド・モンテセラッテが祀られており、昔から靈驗あらたかな神として有名である。九月八日の祭日は、この地方最大の祭礼といわれている。遠く他州や外国からも参加する者が少なくない。

九月の祭日間近になると、山全体に装飾電灯がともり、当日ともなれば、花火が華麗に空を彩る。

一六一四年、オランダの戦艦がサンビセンテのカピタニアへ侵入した時、突然大暴風雨となり、山の一部が海に崩れおち、海岸に屯していた幾百のオランダ兵が生き埋めとなり遂に降伏したという事実がある。まさしく、ブラジル版の「神風」物語りである。それ以来、事ある度にミラグレが起こり、サントスの護り神として住民に深く尊信されてきた。

急傾斜にかかる巻きあげ電車は、三十分ごとに客を満載して往復している山頂には展望台が設けてあり、サントス全景を一目で見おろすことができる。まことに壮観そのものである。

(9) 交通

サンパウロ市へ通じる鉄道は、昔英国系会社の経営していたサントス・ジュンジャイ線の有名な巻き上げ汽車と、一方やはり、十九か所のトンネルをくぐって山岳地帯をゆくマイリンキ線の二つがある。これは古くから利用されてきた。しかし今日では、日曜祭日の交通混雑の折の安全弁的役を果している程度で、平日の客足は少ない。現在では主として貨物運搬のための交通機関となっている。

なんといっても、アンシエッタ街道を利用する者が多く、最近では、この街道も間にあわぬ程の交通難を来している。テンポラ

ダの日曜日の夜など、おびただしい車の列は、あたかもプロシ
ン行列の如く続いている。最近の、急ピッチの道路拡張も、幾分
緩和に役立ったが、解決したとはいえない。第二アンシエッタ街
道が完成すれば、解決できると思うかも知れないが、それにより、
グアルジア、カラガタツバを経てリオまでの直通道路ができるの
で、交通量は倍加するであろう。只グアルジアへのバルサの混雑
は避けられるであろう。プライア・グランデ及びオシアンなどの
膨脹によりサンビセンテの吊橋に混雑があつたが、最近クバトン
ペドロタキス街道の完成により、その混雑は解決された。目下、ペ
ルイベとペドロバロス間のアスファルト道路が建設されつつある。
これが完成すればレジストロや、更にクリチバとの交通が容易に
なり、緊密さを加えるであろう。

グワラサイ市

心ありや教会の鐘

人来たり、人は去る

人産まれ、人は死ぬ

水野 浩志

創造主が作った土に、神様の作った人間が蒔いた種が稔ると、

年貢としてとり上げる人間も矢張り神様が作ったのだらうか。

こんな素朴な疑問が夢にも湧かない善男善女が群がる。グワラサイの朝の教会風景である。町が小さいと言ってしまうえばそれまでであるが盗難騒ぎが起これば、まず他所者を疑い、事実ほとんどが他所者のしわざであるのだから、教会の鏡の音を慕うグワラサイの人々は、根っからのキリスト教信者であろう。

農村労働法に追われて、どの町の周辺にもあるようなスラム街らしきものが作られたが、やはり神に祈って空腹に耐えているのか盗難の話など耳に入って来ない。

カトリコの教会の訓えの故と思えば思えないこともないが、痴話喧嘩の噂は絶えないのだからそれはそれで別の教えを奉じているのかも知れない。

十才を頭に十人の子供を連れた難民に近い家族を見て其の子沢山を非難した人に、現市長のマノエル・マルケス氏が「彼の人たちはテレビも持たぬし映画にも行けないのだから」と言ったことがあるが、文明社会の底辺で暮している人達には痴話喧嘩ぐらいはウニコ・ジベルチメントであり、それをよそごとのように噂として流すのもそれであるかも知れない。この人達には革命も不景気も、空行く雲ぐらいにしか受けとられず、物価高だってもう馴れ切ってしまったて隣のお内儀さんの情事はニュースでも、これはもうニュースではないようだ。

学校がいくつあって、市民病院があり、お寺の尖塔が何米あつてと、文章で絵葉書を書きつらねても、それに、「グワラサイの」

という冠詞をつけなければ三、四十年の浅い歴史しか持っていないのだから、奥ノロエステのアンドラジーナも、ミランドポリスも、グワララベスも、変わりようがなく、奥ノロエステの農村都市の風景点描にしか過ぎなくなる。それは淳朴なカトリコの群を描いても、その点においては変わらず、下手な文章を書き並べて表題に「グワラサイという名の町」とあるからグワラサイであるということになってしまう。最近の児童雑誌が表題をとりかえても疑問が起きないように、表題をアンドラジーナとしても、ミランドポリスとしても不思議のないような文章を書いてしまいそうである。

第一グワラサイが何時頃開拓された。いつごろ鉄道が敷設された。何年に何がと年表を並べた所でいくたりの人が関心を持って呉れるだろうか。こうした文献ならば辞書をひいても判るし、ノロエステ連合文化協会でもその会報に詳しく述べてある。貴重な紙面を年表で埋めることもない。

グワラサイを構成しているものは、最初に書き始めたお寺に列をつくる人間以外になく、この人間をえがいて、「そいつに会って見たいな」という感じを読者にあたえられれば、この小文は成功であろうが、残念ながらその力もない。コロニア社会ぐらいならと思っても、そのコロニアが百家族ぐらいでは如何にも小さくて筆禍事件を起こしそうである。「なんとか地方発展史」のように賞めておけばよいのだが、それでは読者も筆者も面白くないことは書く前から判っていてこれも始末が悪い。

前置きが随分永くなつたが、これは前置きでなく本文であると思う。つけたりを書けば次の様になる。

グワラサイ市は、サンパウロから自動車道路で六百十五軒、マツトグロツソ州の境を流れるパラナ河に築かれたウルブプンガのジュピア・ダムまで五十軒の地点にある。これは辞書をひもとけばすぐわかる。処がこのグワラサイ市を知らない人がいかに多いことよ。商用で聖市に行く。商品の仕入れをする。売上げ伝票を作成する段になつてグワラサイはパラナ州にあるのではないかという。悪名高いICM時代になつて卸商は、州内と州外に依つて出荷伝票が別々なのでそういう言葉が店員の口から出る。生憎とパラナ州にはグワラシーという町があるとかで、そこと間違えるのである。グアラサイは聖州ノロエステ線にあつてと百科辞典の説明をするのも面倒なので、アラサツバの奥であるといえば大体判つて呉れる。アンドラデーナの近くかと言つてくれるのは良い方で、世紀の大事業であるウルブプンガの発電所も知らない奴ばかりだ。大体サンパウロの人間はテレビで、八百長のレスリングを見たり、他人がクイズで賞品を当てるのを羨しがつて見ているのを文化だと思ひ込み、聖市を支えている人間が奥地で汗を流しているのを忘れている。もつともあのガソリンの臭いの中で生きていれば頭を冒されてそうなるのは当り前だが、自分達は文化人で田舎にいる奴は野蛮人だと思ひ込んでゐるらしい。

「コロニア文学」誌が一千部発行されていると仮定し、コロニア人口七十万とし、一家族を七人とすれば、十万家族で一千冊という

こととなり、百家族に一冊という計算になるがまだ一千冊は出ていないようである。グワラサイは農村も含めて百家族、それに「コロニア文学」が七冊も入っているのだからコロニアだけで言えば七倍の文化生活をしていることになる。と言えるのではないだろうか。レスリングにうつつを抜かす閑があるのなら「コロニア文学」でも読みなさいと、サンパウロの自称文化人に申し上げたい。

本年の四月二十日、グワラサイ市で「全ノロエステ川柳大会」が開かれた集った柳人が四十六人、昨年「全伯川柳大会」の四十一人を上廻ったのだから、いかに土に根ざした川柳詩が繁っているかということがわかる。サンパウロの自称文化人は谷脇素文が「キング」に戴せた漫画川柳しか知らないのも、川柳を嗤っているが真剣に川柳に取り組んでいる姿は、お金の勘定をしている姿より尊いものだと思ひ知らせでやりたい。どうもこれではグワラサイを語るのではなく聖市の自称文化人をやっつける文章になってしまいそうだ。そのサンパウロ市から川柳大会に参加した柳人たちが口を揃えて、グワラサイの町は樹が多いと言ってくれた。言われて見て成程と奥ソロの他の町にくらべてみると確かに、樹が多い。町の住人が農村から出て来た人が多いので、マンガとか、ゴヤバとか、ミカンのように果樹が多いようであるが緑の濃い町である。その柳人たちが空気がうまいとも言ってくれたが、樹の多いのもそう感じさせるようである。星が美しいと言うてくれた女流柳人もいる。奥ノロ地方の養鶏の元祖である弓場農場はグワラサイの弓場農場であったが、今を去る十二年前、住み古るした農

場を去って第一アリアンサに移って行った。農場はその昔十万の鶏を誇った時代にくらべて、その俤もないようであるが、その弓場劇団は全伯的に有名になりつつある。あらゆる文化の源泉が土から生まれたことはゆるがせにできない事実であろう。アリアンサという奥ノロの土から、こうした劇団が産まれたことは当然である。と言え言えるのだが、全伯にどれだけのコロニアの集団地があるか知らないが、文化の香り高い劇団を産んだのはこの弓場農場だけであろう、土と人がひとつになってこの劇団を産み出した事実は注目されるべきである。

その劇団の上演する「夕鶴」に感激し三回も見に行き、三回とも感激した甘いと言われればそれまでだが、文化的に荒廃しつつある土にこれだけ心を打つ芸術がかつて生れたことがあっただろうか。しかしかに感激したと言っても、故里である日本への郷愁が媒介していたことは否み難く、ブラジルの土から生れた脚本で、コロニアだけでなく、日本人にもブラジル人にも感動を与える劇が上演されねばならないし、それは主宰者である弓場さんの理想でもあるにちがいない。

僅かに郷愁を埋めてくれる映画が、着色され、ワイドとなり目を充分に楽しませてくれるものの、内容はエロとグロ、これが日本かと呆れる物ばかり、の中に弓場劇団の「夕鶴」は一服の清涼剤であった。三度見て、三度そう思った。心の隅に焼きつけられた劇である。

現在弓場農場のあるミランドポリスを語っているのではないが、

ついペンが走ってしまった。言いたかったのはグワラサイの弓場農場が一九五七年、二つに割れて弓場さんのひきいる半分がミランドポリス管内の第一アリアンサに移り、残りの半分がグワラサイ管内の三二〇耕地という所に移転し、数年の後グワラサイ市から四軒離れた地点に土地を求め養鶏を軸とした集約農業にはげんでいることである。中心人物として森沢氏、清水一郎氏があり、堅実な営農が花咲いて実を結びつつある。指導者の見解に差があると言ふべきか、別れるべくして分裂した原因がそこにあるのか、弓場農場とグワラサイの新生農場には似ていていくつかの差が見られるようだ。例えば新生農場では子弟を、中等学校から高等学校、能力に依っては大学まで進学させているが弓場農場にはそれがないようだ。立地条件が農村であるためにブラジル化することは退化現象であるとし、新来青年を招き入れその刺激に伝って子弟により日本的なものを遺す、劇団の結成も出張上演もその考えの上に立ち広くコロナアまでそれをおしすゝめているようである。しかしある反面このことに依って農場は閉鎖的な性格を強くしてゆくのではないだろうか。

グアラサイの新生農場では高等教育に依り子弟を育てあげ高度な文化技術によってより開放的な農場を築くという理想はこれまた立派であるが、その事、自体によって農場が崩壊して行く原因になりはしないだろうか。高等教育をうけた若者が農村に戻りたがらないのは一般の常識であり、必ず村に戻るといふ保証は何もない。高度の技術を身につけた若者たちがより給料のよい都会に

止まっているのが現実であり、現代の若者たちの気質を察しても同化された彼等は戻って来るように見えない。このことは一つの農場の問題でなく農場を家庭という言葉に替えてもすぐ思い当るのが現在のコロニアで、この二つの行き方と、この二つが混り合った行き方のために悩んでいるのが現状のようだ。移民の持つ一つの宿命というべきものがある。

新生という集団農場について質問をうける。しかしこちらでも直接尋ねたわけでないが、新生農場を形成している細胞はやはり一般社会と同じ家庭である。いくつかの農家で一つの農場を経営しているに過ぎないと説明するのだが、食堂や湯殿や洗濯などが共同であるために、質問する人はやたらに共産主義ではないかなどと言う。たとえその源が共産主義であろうと、「新しい家」の思想であろうと、資本主義のまん中にあってそういうものが生き伸びるかどうか考えたことがあるかと反問したくなる。軍国主義時代に植えつけられた共産主義という言葉が咀嚼されることもなしに、質問する人々の胸に生き続けているのであるうか。このことは弓場農場にも新生農場にも当てはまることであろう。

とまれ一つの幹から分かれた二つの農場の将来は注目値する。それはコロニアの将来を見つめると同じことであるからである。

グワラサイの弓場農場を源とする養鶏は奥ノロエステに多くの養鶏家を育て、此の地方の農家の支えとなっている。若し此の養鶏家が育たなかったら此の地方の日系人の減少はもっとひどかったにちがいない。どこに糸を蒔いてもアルケール当り百俵穫れた

時代が去ると棉に移り、棉が農薬品其の他の経費、地力の消耗で立ち行かなくなると、養鶏家の需要に応えてミーリオを作り、棉畑のあとに落花生を植え、向日葵を植えてみる。そして結局牛飼いとなって行くようである。牧場経営には広大な土地が必要であり、はみ出たものは他州の奥地に移るか、町に出て小さな資本で出来る商人になって行く、農村の不景気で食えなくなると、大都会に流れて行くという経過をたどって行く。これはグワラサイを中心とした奥ノロエステだけでなく、世界的な現象であろうが永年住み馴れた土地を離れることは、移民の持つ宿命の一つであるとはいえ、淋しいきわみである。前述した養鶏家のみが永住の灯を点しているようであるが、この仕事も莫大な資本を必要とするらしく後続部隊がつかないようである。

奥地の小さい町へ行く程悪いと指摘されたことがあるが、二世三世の間から日本語が消えてゆくようだ。移民の宿命と傍観するのが一世の唯一の手段であろうか。このことが良いとか悪いとか割り切れるものでないことを承知の上でとり上げると、遅かれ早かれこうなるのは事実とすればこれは進歩的なことであり、グワラサイは進歩的なコロニアを形成していることになる。しかしこれは余りにも反語的であり移民の心情からは遠く離れて行くことでもある。片言の日本語と葡語で作られている家庭が、家庭的下宿と化し、隠居部屋は「櫛山」と化して行く。

弓場さんの提唱する日本的なものを残そうとする演劇運動の、入り込む余地もないような家庭が出来ていて、それが一般的傾向

であることを弓場さんは知っているだろうか。

グワラサイには日本語学校がない。これは確かに吾が町を語る場合、特筆すべきことの一つであろう。日本語学校を経営しています。と書けばああそうですか、と受けとめられるが、無いと言えどこれは奥ノロ地方では奇異に思われる現象であるからであろう。

その原因はいろいろあろうが、その必要性を認めないのが最大の原因で外の要因はついたりとしか思えない。不思議に思うのは終戦当時、勝組みで固められた此の町、外人娘との結婚をみとめられず自殺した青年がいた町、それがどうして日本語を易々と放棄したかである。戦勝組がより日本的でなかったというまったくおかしい結論が出そうである。なあんだ「コロニア文学が全体の平均から言えば七倍も入っているというホラはどうなる」と言われれば、一言もないが、「日本語は銭にならない」と言うのが結論となりそうである。銭になるどころか経費がかかり過ぎるという言葉まで出て来る。

こんな話がある。婚約が出来た相手の青年の家が日本語ばかりで、困惑した娘に同情して、娘の仲間はいつまでも日本語で話している家庭の方が悪いと、結論したというのである。進歩的な町であるにつくづく感心したのである。生活に追われて人の前で話せる葡語の習得を怠った一世や準二世の心情はいかばかりか、同情に値する事実である。「奥地の小さい町に行けば行く程悪事」というのが事実なら、都合では美しい日本語が二世三世のあいだに

伝えられているのだろうが、しかしこれも歴史の流れに浮いている笹舟の運命と変りない物でなかろうか。

コロニアの中心であるサンパウロでは文化協会の性格について、何度もむしかえし論議されているようだが、地方の日本人会が看板を文化協会と塗り替えてみても内容は十年一日、いや六十年一日のようである。大きな会館が出来て看板を替えても日本人会の歴史は、子弟の教育機関であって、仮りに直接に学校を経営していなくても、少年野球をしたり、ノド自慢大会を開いたり、講習会を開催して、一種の教育機関であるにはちがいがなかった。

その昔は葡語の出来ない移民のより集りという意味も、あつて、棉の種を共同で買い求め葡語を必要とする配給所へ直接行くことはなかった思い出もある。開拓時代の移民にとっては日本人会は一つの村役場でもあつた訳で、ここに寄りかからねば生活も出来ない時代でもあつた。だが言葉の習得と子弟の成長と、家庭における日本語放棄が日本人会の存在意義を失なわせようとしている。地方には会があつても入会しない日系人が増えて来ているようで、殊に雑婚した日系人は敬遠しているようである。会に入らなくては生活して行けなかった時代から、入ることに依って経済的な負担を感じる時代へと移って来ている。日本語も放棄した家族にとっては無意味な団体であることは事実にちがいない。立派な建物を建て、二、三世の遺産などと美名を残しても彼等は、異人種も人間だというヒューマンな考えから、日本人だけで団体を作ることには抵抗を感じて来ているようだ。葡語しか話せない子弟を

作って日本人会活動が活発に行なわれる筈はなく、グワラサイの日本人会も文協と名をかえてみたものの仕事らしい仕事はなく、サンパウロやノロエステ文化協会の取次ぎ機関となっているようである。

グワラサイにも例に依って日本人会に入っていない家族があつて、今の幹部のひとりが、「死人が出たら葬式がさみしいではないか」と会へ加入を奨めたと云う話がある。日本人会の効用として葬式用としての意義があつたのは一つの再発見でもある。月一回の日本映画上演以外は宗教の会場としてしか使われていないようだが、一九三〇年代の末頃これを建てた人々の胸には、日本人としての誇りと、日系人としての理想と夢があつたのであろうが、夢は矢張り夢でしかなく、葬式用としての日本人会の建物と化してしまつたようである。久し振りに町を出て農村地帯に行つて見る。もう二た昔となつた終戦後、初めて日本よりの演芸団が来て地方公演をしたことがあつた。小唄勝太郎や東海林太郎を見るため、当時植民地に住んでいたので、当日にそなえて雨期の道を直し直しグワラサイの町まで来たことがあつたが、その夜無惨にも雨が降り折角の道をこわして流してしまつた。そんな昔の倅のないう道がたんたんと続いて、十年前までは六十家族の日本人の植民地であつて今は広い牧場となっている地点に出る。

ひと昔の才月がいかに残酷なものであるか、人の住んだ跡にはただ草むらがあつて、牛の声を聞くのみ。昔、此所に住んでいて散って行つたひとりひとりの面影をしのぶとまるで自分があの世

から生き返って来たような気までしてくる。

町に出るまでは、此の植民地の一隅に住み小さなボテコの主人であつた。きりもなく昔の人が想い出されてくる。

永らくたちつくして冬の陽の落ちて行くのを見ていて、耳底に家族運動会の歓声がよみがえって来るのを聞いた。

帰途、フォルドのガラクシに出会つた。

生活の一部を容れた袋を担いだ仕事搜しのカマラーダに出会つた。

昔のままである。

創造主は矢張り金持ちと貧乏人を区別して産んだのであろうか、年貢になる米を蒔く人と、年貢をとり上げて自動車を飛ばす人を産み別けたのだろうか。創造主の産んだグワラサイの土に、人が来、人が去り、人が産れ、人が死ぬ。冬の野を教会の鐘が流れて去る。あの鐘に心があるのかないのか……。

（おわり）

マリंगा市

美女の多いわがまち

緋と燃える鳳凰並木の

盛んな色彩は大陸的だ

勝山 呉泉

今回、わが住む町を語ることになって、マリंगाの語源を高校に通っている末娘に聞いてみた。娘の拙ない説明によると、其の昔、昔と云っても近々三十五年位前のことであるが、その時分に北伯地方に“マリアデインガ”というカボクロの絶世の美人が住んでいた。そして、その美人を讃えて“ジュベルト デ カルバリョ”と云う詩人が（マリंगा）と云う歌を作った。これが非常に受けて北伯一帯に流行した。当時、開拓の始った北パラナ山の伐人夫達の間でもこれが盛んに愛唱され、遂にマリंगाと名付ける因になったのだと云うことであつた。

そう云えばマリंगाの町ほど美人の多い町は少い。たまたま町を歩いていると、サンパウロでもお目にかゝれぬ様な美人に出くわして吃驚することがある。現に私のところのお手伝さんなども、両親は“ウクライナ”出身だそうだが大した美人である。彼女一日の仕事が終りお化粧してハンドバックを小脇に抱えて楓爽と帰ってゆく。街に一步出たらもうどこのレディーだかわからぬほ

どだー。

町の名所と云えば第一に“オルト デ フロレスタ”であろう。原始林そのまゝの公園にはペローバ、フィゲイラ、パウダリョ、の巨木が天に聳え、その中に沃土を象徴するパルミットが林立している。私達は時折他州からの客人を御案内することがあるが、一番喜ばれるのがこの自然公園である。二十域の面積も決してせまいものではない。マリंगाにはこの他にまだ二ヶ所こうした公園予定地が保存されている。中央カトリック教会（建築中）も名物の一つ。この教会は出来上がれば南米一と云われているが果たしてどうであろうか。とに角、王冠に似た変った建築で人目を引いている。高さは地上百十四米もある由、今一漸く外観が七八分出来かかったところである。

次に道路と街路樹がある。碁盤型の区画、複線のアベニード、そのルアに添った街路樹、イツペー、鳳凰樹、宝冠樹、火焰樹、大王椰子と、中でもアベニード七キロの大通りのイツペー並木の花は国花の象徴でパラナの沃土に美しく、緋と燃える鳳凰並木の盛んな色彩はブラジル大陸を思わせるに充分だー。樹木の町と云っても過言ではない。

次にマリंगा墓地も一寸紹介したい。や、東方に傾いた二十域の平らな墓地、墓地内に自動車が百台でも二百台でもらくに通れる循環道路があり、縦横にルアがあって舗装されている。これだけの墓地は一寸そこらにはない。

町の面積と、道路と、墓地と、どの角度から見ても、マリंगा

が今後――五十万都市に発展してもまず心配はなさそうだ――。第一期、ロンドリーナの都市計画に失敗した土地会社は五十五万アルケールの中心、マリंगाに万全を期した。そして、マリंगाの都市計画は理想的な現代都市として成功したのである。

現在人口は十三万、日系は千三百家族、農業はもとより、商工業方面に於ても日系の発展は目覚ましい。コロニアの中心機関に文化協会、文化体育青年会、婦人会等があつて各々活躍している。特に文化協会は子弟の教育に力を注ぎ、日語校、グルッポ、ヂナーヂオ、を経営して年間の予算は八万コントにも及ぶ。

青年会は北芭運動連盟の有力な支部で、特に野球、陸上に於いて名をなしている。事業も文化も、スポーツも、宗教も、演芸も、それぞれ大変な勢いで成長している中で一つ文学方面が閑古鳥であることは洵に淋しい限りである。唯、僅かに念腹門下の俳人グループ二十人余りがブラジルの木蔭、日本のホトトギス、芹、等の俳誌を中心に毎週句会を持って気焰をあげているに過ぎない。吾々は今後、この方面の開拓をこゝろざし、物質文明に遅れないように精神文化を開拓してゆきたいものと念願する。

一九六九年七月五日

ヴィラ・ヴェーリア公園

壮大な天然の芸術品

三億年の星霜を経 風雨の侵蝕に堪えた氷河時代の遺物

まや・あきら

州都クリチーバに住むようになって思いがけない奥地の知人などの訪問をうけるようになった。が、それらの多くの人々は、病気の治療とか、役所の手続きなどの用をもってくるので、憂鬱な応接にとどまる。しかし、たまには、年一回の休暇を州都に遊ぶ友人や昔の教え子などが訪ねてくることがある。友、遠方より来たる、また楽しからずや、と旧交を温め合い、先ずは、名所案内ということになる。そんな折我家の丹精の庭でもあるかのように、自慢して同行するのが、車で一時間行程のヴィラ・ヴェーリア公園である。

初秋の一日、日本独立美術の米原二郎画伯を案内する真木研一の車に便乗、歌人西灘撰津夫を加えて同行四名で出かけた。

にわか近代都市らしくなったこの街を横断して、黄葉したプラタナスのあかるいシャカラ地帯をでると、もうカンポ・ラルゴの変電所の幾何学的な建築物が見える。この附近は良質の陶土が豊富で、陶磁器の産地として有名である。この町をすぎると、坦々たる街道は急坂になって、クリチーバから三十六キロメートルにして、標高一千百余Mの高地に達する。そこの展望台からは、渺

茫たる平原がうねうねと続き、西方はるか百余キロメートルのグアラブアヴァ高原が、なだらかな地平線となつて見渡せる。わずかばかりの緒く耕やされた土地から、細々と白煙がたちのぼつていたり数軒の人家に囲まれた白い尖塔のある礼拝堂から、からんころんと、かすかに鐘の音がひびいてくると、その物悲しいまでに小さく見える、そこに住む素朴な人々のつましい生活がおもわれて、人間の営みの美しさ、哀しさが涙ぐましくさえある。

そこを峠にして、道はやゝ下りになり、大波状の草原がはてしもなく続く道べりに、整然と松苗が植込まれていて、植林会社の立看板が所々にみうけられる。

土地つ子自慢の、アルズア現農相の出身地であるパルメイラへの岐路をすぎると、道傍に、槓髯のロシア系の男が、四輪馬車に少しばかりの西瓜などを積んで、道往く客を待つのだかな点景のみられることがある。この近辺は、五十年前から、欧州移民が入植しているところである。オランダ種の乳牛や羊群が三々五々、草を食んでい、ユーカリ樹にかこまれた農家が点々と続き、緑餌用の牧草がめざめるほどの緑である。今農年、この州の収穫量二十万トンと予想されている小麦の蒔付けも、そここゝに初められている。

眼のとどく限り一直線につづく有刺鉄線の張られた柵のある放牧場には、広さの割に、牛の数がきわめて少ない。その露出岩磐を、清例な水が滝をなして流れていて、その畔には、数本のユーカリ樹に囲まれた、折紙細工のような小さい家が建っている。

――清流のほとりにペンキ塗りの小屋を建て、水車を廻わし、林檎を植え庭さきに、四季の花々を咲かせ鶯鳥が遊び、小牛が厩舎で親牛を呼ぶ――そんな田園生活を夢みながら、移民三十数年、ついに都会生活を抜けきれずにいる、私の夢の場所がそこにある。

新装をつたコーヒー街道は、アスンソンに続く国際道路だけあってへ玉筍黍、木材、豚などを満載した自動車が続え間なく風を切って往く。深い溪谷をなしているチバデー河の原流を越えるの間もなく、クリチーバから西北方八十数キロメートル、標高九百余メートルのカンボス・ジ サーレスの緑一色の唯中に、代赭色の岩山が群立している。欧州に遊んだことがある画伯は、北欧の古城の趣だという。そこが天然記念物として州政府の保護下にあるパラナ州立公園ヴィラ・ヴェリアである。

アスファルト道路から約五百Mほど右手、北方に入ると、その巾約六百M長さ二千Mに及ぶ岩山の麓につく。そこには掛小屋の店があつて、清涼飲料水や素朴な木細工の土産物などが並べてあり、又、この途中の、岩山を一望できる場所には、未完成ながらホテルもあつて、レストランでは食事の用意もできる。絵葉書などで馴染みの岩山であるが、その下に佇つと、高さ三十Mの岩壁が垂直にそそり立ち、いわば丸の内界隅のビル街をみるような重量感に庄倒される。その附近に散在する岩もあつて、それらの間を、殊さらに道路をつけず、高山植物のような珍しい形姿と色彩の花をつけた雑草の間を踏みしだいた砂の多い小径を散策できる。その間には、岩清水を鉄管でひいた水飲場も、二三カ所しつらえ

られてある。

首をもたげた大亀そのまゝの姿の岩がある。歩をすゝめる程に、それが何の変哲もないただの岩石になる。一定の方角から見てのみ亀に見えるのである。果して『亀』という標札がついている。『城堡』は古代の城砦そのまゝである。『瓶の鑄型』成程、断崖に四五本の巨大な瓶を取り外した跡のような形が並んでいる。「横臥する駱駝』巨大な駱駝が悠々と横たわって瞑想にふけている。『汽船の船首』というのが小径の真中に立っている。全く、入船を迎えるようである。その前に並んで、米人観光客にシャッターをきってもらったりする。『土人の横顔』―チリ国沿岸三千Mの彼方、紺青の太平洋上に忘れられた孤島パスコア島の原野に立並ぶという石の巨人群像の一体を、ここに移し置いたようである。この一指も加えない天然の岩石が、かのプリミティブな彫刻よりも、むしろ、写実的でさえあるのには一驚する。

『花嫁』『ゴリラの頭』『獅子』『中世の城郭』『長靴』『秃鷹』などの奇岩も散在しているが、その的確な命名には、感嘆これ久しくする程のものがある。無名の岩もたくさんあって、真木はこの一つを『あざらし』と呼んだ。背後から見ると、背後から見るあざらしそっくりである。摂津夫が『原子雲』というと、画伯は『男根』だという。それは注連縄でも張っていい程見事にして、完璧なものである。荒寥、目の世界を想わせるエジプトの砂漠に、赤い夕陽を浴びて臥すというスフィンクスを偲ばせる『スフィンクス』が、ぽつんと孤立している。巨きな土饅頭のような岩の一群は、『土人の棲

家』である。これらの岩山群の尖端に、ヴィラ・ヴェリアの象徴『丕』がある。細い脚の上に、均衡の整った大岩を支える姿は、天然のものとも思われない安定感をもっている。

東南側は原生林に蔽われていて、岩山は、何の奇もない、そそり立つ岩壁をなしているが、一部、ビル街の狭い路地を往くような、切り立った岩の間を、うねりたどると、大岩磐が屋根となつて雨露をしのげる。十米四方もあるかと思われる『洞窟』がある。かつては、裸族チングイの棲家であつたことであろう。その原住民達の間に、血なまぐさい闘争が繰返えされて、この究竟の岩窟は、勝者の占有するところとなつたことであろう。岩山の隙を洩る灰白い陽矢が、斜めによぎる、ひんやりとした洞窟に立つと、古代人の息吹きが、ひしひしと肌にせまる感じがする。『草なびく丘の奇岩の立つ中を歩めば靈氣肌につめたし』（撰津夫）これら岩山群の上によじ登ると、そこは、プラナルトと呼ばれる、二三の椰子樹などが生えた平坦な草原である。真木の『風蝕の岩間の小径のぼりきて挫折の記憶を風と分けあう』の旧作はここでものしたものである。『岩古りて裂け目に生ふる苔白しギンビロウドギリひとつ見つけぬ』（研一）『岩に生う岩霧草のなつかしきピーラ・ベーリヤは秋のたそがれ』（撰津夫）その禁制の岩露草の芋を、汐津夫がやおら掘り採って、『これは日本では珍しい物ですよ。宮坂老が禿につけて毛が生えなかったという代物ですよ』画伯はこの唆味模糊とした話のまゝ、『これ東京へ持って帰るんですか』と芋を掘らされている。二人とも頭が風にそよぐ芒の風情をなしているの

である。

プラナルトの縁の方、十米ほどの巾は、草一本ない、噴火山の熔岩をみるように灼けただれた、凹凸のはげしい石畳である。石の窪に生えた苔の色に画伯は眼をみはる。新築の邸宅に、日本庭園を造成中の真木には、ここではどの岩も羨望の庭石に見えるらしい。今、見てまわった諸々の岩が、目くらめく遙か下界に、島々のように見え、暗色の岩間に咲くアナナスの赤があざやかである。これから西北方二十余kmにある『原野の王女』と呼ばれるボンタ・グロッサの町が、白銀色にきらめいている。気も遠くなるほどの広大な原野を横切って、白雲が飛ぶあたりを、一筋の街道が草原の涯に消えてゆく。太陽が草原から出て、草原に入る。この無辺の広さには、眼をうばわれる。同行者が自然に対する感受性の豊かな画家や歌人真木であり、地質学などにも博識な摂津夫と、最高の道連れであるから観光の効果満点、感興はその極に達する『風なびく草原の丘に立つ奇岩あかねに映ゆるピーラ・ベリーヤは』（摂津夫）　この州立公園の隣接地に、かつての拓人水野竜の土佐村があったのだが、興亡三十数年にして、その痕跡すらとどめていない。

うねる大海原のような大草原のただ中に、このおびただしい量の岩石が群立しているのは、かのマシュ・ピッシュのインカ帝国の廃墟に佇つ想いがする。これは氷河時代の遺物といわれ、古生代石炭期の氷河が運んできた漂石が、この地帯に集積され、三億年の星霜を経、風雨の浸蝕に堪えて、これら壮大な天然の芸術品

ができ上ったのであろう。このコンダムネスの美は、人工の巧みの比ではないのである。茫々たる星霜をしのんで、この岩山に佇つ時、悠久に亘るであろう、この神秘的な美の中に現れている。理知と生命の前に、時というものの、偉大さ、不思議さいのちというものの頼りなさに、謙虚たらざるを得ないものを感じしめられる。

これから更に五kmほど北西方の同公園内に州立植林試験場がある。ここの、凡ゆる種類の針葉樹が植林された林の中に、『地獄の釜』と呼ばれる巨大を『井戸』が二つある、共に直径二三十M、百余Mの深さで、その半ばは大吉の植物をみるような広葉のサマンバイアなどが垂れ茂る岩壁を、したゝり落ちる幽蒼たる水で満たされている。この百Mに及ぶ岩磐を穿って、どうしてこの大穴ができたものか、見る人は誰しも不思議に思う。これはほぼ六千万年以前、新生代第三紀頃の噴火の痕跡であるといわれている。

これより西方二kmほどのところに、ドウラーダと呼ばれる湖があるか、このフルナスの水は、地下を潜って、この湖に抜けるといふ。霧藻の垂れる林間に、静まりかえった鏡のような湖面は、折からの夕映えをうけて、その名のように黄金色に輝き、この世のものとも思われない静謐と荘嚴ともいふべき眺めに自然のあふるゝばかりの豊かさを満喫することができるのである。

車の快適な速力に軀を任ねて、帰路は沈黙がちである。高度の芸術に接した時の高揚された昂奮にも似た思量の疲れのまゝに、おのがじし、その余韻を楽しむものゝようであった。

詩 可児 三平

老 眼 鏡

老眼鏡は 老人の特権
心の底まで見えてくる
だからいつでもかけていたい

老眼鏡は 老人の義務
目玉が大きく光って気味が悪い
といって外してしまつてはいけない

私は黒い覆いを思いついた
眼をどぎつくさせないように
それに小さい孔をあけよう
どっと覗いて 覺られぬように

切り抜き孔は
卍にしようか

\$にきめようか
思い切つて（ハート）にしてみるか

秋 風

秋風はつむじ風の集まり

公園のアンジッコの大本は

彼等多勢でねじりまげ

垣根のハイビスカスは

手別けした彼等が踊らせる

顔半分笑い、半分暗い通行人

枯れるダリヤに別れを惜しむトルコ人

つむじ風一つの仕業

秋の陽に諫われて散歩の婦り

スーベルメルカードによつて

家人のために卵を半ダース買い

何年振りかに葡萄酒一本求める

黄色い小さいつむじ風が

耳から忍び込んだに違いない

眠り

記憶のなかにあるのは

烈しい太陽の光り

アマゾニアはすべて

草色だった

透きとおる魂は

緑の地獄のなかで

昏睡してしまう

精霊のおとずれに

バナナの花弁はひらく

巨人の手のような

蜜のなかに埋って

溺れようとする蜂は

甘い生と死の間をさまよう”

永劫の湿原にただよう

緑色の氾濫のなかに

はてしなく続くこの眠りは

水のつきるところまで

限りなくただよう

た そ が れ

すべてを捨てて

砂浜をさまよう時

遠い犬を呼ぶ

女の声が聞える

やわらかい魂が

ざらざらのジャツカに

傷つけられた夕暮の

果てしない色のなかに

われわれの神話は終わった

厚い皮を食いやぶり

強烈な青春のなかに落ちこんで

永遠を懂れたうじ虫が死んでいる

メスカリンの女神の

残忍な秋の実の

かくれどころを秘かに匂わせる

人間の永劫への

祈りの暗黒のなかで

詩

ある移民の記録

江尻 潤

わたしにとっての一つの記録

それは心の中で誕生し

夢の中で成長し

現実の下で破潰した

わたしの初恋

わたしにとっての一つの歴史それは海辺の町で芽生え

船の中で成功し

カフェザールで敗残した

わたしの移民史

わたしにとっての一つの神学それは人間の外で始まり

人間の外で完成し

人間の中で絶望した

わたしの救霊

花と詩

芳賀 裸人

神仏に手を合わせる

その隙間を縫て

妄念が割り込む

花を眺める

無我の境に誘う

その美の世界

詩を創る

その時間の流れには

自もなく 他もない

神仏への世界

花と詩への無為

私は神仏誕生以前の

花と詩の世界にあこがれる

詩

地球脱出

蓼科 冴智雄

誰も知らないうちに

旅に出たい

満月の夜そつと

ただ一人で

旅立ちたい

太陽系を越え

銀河系を横切り

誰も知らない

遠い彼方へ

行ってみたい

誰も気付かねうちに

旅に出たい

この地球に自己の

記録の一片をも

残すことなく

永遠の薇に出たい

渚 藤田 勇

日くるめく海の情念

渇き臥す波の絨氈

輝きしぶき

あてなき思惟の帆風に垂れ

往き、還り

はてなき涯の

のたうつ心の里程標

詩

飾 緒

もりの いさむ

摂氏40℃の 太陽が 独立したコンクリートの 小舎を 垂直
に照射した。

羅汐のケピー

金筋人の肩車

黒のグラバタ

胸にさげた カードには ゴジツクで

守衛…そして タイプで打った彼の姓名。

彼は威儀を正して 火炉のように灼けた

番小舎に詰めていなければならぬ。

8時間。 人生の三分の一を。

彼は巨大な企薯の飾緒。

あこがれ

小野 政子

粗くくろい炭が

燃える

あかく

あおく

身をやく炎を上げて

硬いダイヤの

輝きにあこがれ

束の間に尽きる

いのちと知りながら……

私は生きている

真 木 衿 子

ああいまでも私は生きている

大きな呼吸をしてみる

生きていることを確かめている

生きると言うことは素晴らしい

朝がくる

むき出しの瓦は不揃いだから

てんとんと市松模様に陽が射し込む

うすよごれた壁ではあるが

風に動く朝陽が

やさしく照り映えてくる。

すき間だらけの瓦から

射しこむ朝陽を十年も二十年も

私は視つめている

虚しさの中から、そこだけが

明るくささやいている

私はいまでも 生きている

詩

めがね

破片となつて

砕けた愛が

傷にちかちかと痛む

確かめる手で砕いた

透視度百分の愛のような

眼鏡の硝子

丘
鹿毛 至

この丘は

その昔コーヒー園であつたというそのおもかげをのこしてあちこちにラングやイペーの老樹が雨上りの夕陽をあびている

その頃は

わが同胞もエ・ンシャードをかついで

この道の朝もやをついてのぼつては

コーヒー園に黒い汗を流し

ナンブー鳥がなくなつたやみの中を

三々五々もどつてきたであらう

この丘の

赫土の大地をふみしめて

熱い汗のしづくを落としながら

何ものかをもとめるように

私もまたのぼってきた

露草をふんで見渡せば

視野のかぎり

棉やミリーオ畑が

縞なす等高線に青くうねり

その果ての森の影には

古びたコロニアの家がならんで

後者にはサブカイ川の白い水が魚心に流れている

水野 浩史

戻らない愛の破片が
掌のひらに無数の陽となつて
心を刺す

つるだけの眼鏡に
なにもかも茶色に見える
秋が拡がる

唯あわあわと 春野 菜花

あわあわと 唯あわあわと
日を暮す その喜びよ。

あわあわと 唯あわあわと
生きていることの その楽しさよ。
特別に 望むこと無く
只管に 思うこと無く
のびやかに 憂うること無く

あわあわと 唯あわあわと
生きて行く その快さ

詩

「いま」は孕んでいる

横田 恭平

鈍いろに光って

「いま」は在る

「いま」は孕んでいる

すべてのものの

位置が不安定であぶない

そうした因子を孕んでいる

単や木や

こおろぎや蟻

石くれのたぐい

いやこのけもののように押しだまっている

おのれでさえ孕んでいる

おのれ得知らぬが

なにかしら孕んでいる

それは意識せぬ希求のようなもの

おのれは意識の外で

落塊した地球からの脱出を考えているのでは

ないか

すべてのものが

常套を脱ごうとしている

均衡をやぶって

新しい均衡をつくろうとしている

新しい領土を狙っている

不穏である

「いま」は孕んでいる

みたまえ

「いま」の桎梏の中で

脱出を企てているものみな目を

お互いに大それたねがいを映し合って

味気なく倦怠を噛んでいる

その目付を

旧作再録・その八

(創作・二九枚)

樽

水野 浩史



この作品は、第一回「よみもの賞」第一席に入賞し、一九四九年一月発行の「よみもの」誌に掲載された。現在は川柳作者として活躍しているこの作者の処女作品である。このカットは「よみもの」掲載時に用いられたもの(編)

丘の家に灯がつくと、気持ちがおちつかず、山焼くけむりのさまよう道を、上るのだった。小さな想いだった。自分にさえ、そのほのかに燃えるのを感じかぬ。あこがれに似た心で、圭子の家に通った。道ばたのおさく婆さんのねぎの花が、厚い煙にもえた月をうけて、ほの赤く、空の星のどれもこれも、あたたかい春と浅い宵だった。

圭子の頬のようだ……。赤い月に星に、そんな想いが湧いて、けむりのこめた大気のせいばかりでなく、心もあたたかい。

圭子は二つの姉だった。

「すみおさんは、何になさるの」

じいっとみつめる娘の黒い瞳のそこに、何かさされるような気がするものがあって、ついどぎまぎしてしまふ。その心の弱さに反抗でもするように、

「なにでなに？、何のこと」

「あのね、大きくなったら、どんな仕事するの。やっぱりお百姓？」
「ううん、何になるか判らん。自分じゃ判らんよ」

「もっと勉強して、シダーデに出て、こんなきつい 仕事を毎日しない、暮らしがしてみたくないの？」

「きつくなんかないさ。これ、この通り」

半袖の腕をまくって、力こぶを見せたが、見向きもしない。

「そんなもの、誰だってもってるわよ。じまんになんか、なるものですか」

「なら、圭ちゃんは、もっと大きくなったら、何になるの」

瞳のそらしかたが、いくらかあわて気味だったが、相手が若い少年である。そうした意識が、いつも大人なるものに気をつかって、どもりがちな言葉をつかう圭子でなかった。強くおさえつけんばかりに、

「このままよ。いつまでも、このままよ」

常々は、小さくなっていなければならぬ。乏しい言葉のうちより、最上の敬語をつかって、幼いころよりの労働に骨ばった体を、しなやかに扱わねばならぬ。それが、村のよい娘であり、縁の多い娘である。町のパーマネント師に、あなたたちは結髪はしても、電髪はしないね。それにつづいて、パパイ・ノン・デイシャネと、言

われる哀しい娘たちだった。

「うそ言ってらあ。お嫁にゆくんだろう。そして」

「そして？」

「赤ちゃんを、どっさりうむんだろ」

声をひそめて言うのと、娘もそうと赤くなっていた。

石油燈が、ぽかっぽかっつと、暗くなり、明るくなりだした。

「ちがうよ。いつまでも、このままよ」

「このままでいるものか。おさく婆さんのように、しわだらけで、腰がまがって、人の悪口をいって」

「いやよ、いやよ。あんなにならぬのよ。このまま、このまま」と、後はただ笑いの中にいる。

「町へお嫁に行って、セーダの着物で、じゃらじゃら暮らすのだね。知ってらい。畑のどろくさい仕事だいきらい。そうだろ圭ちゃん。」

この言葉の裏に、そうでないと、言い切ってもらいたい心が期待にはずんでいるのに、娘は、だまりこくつてしまう。そうになると、自分には、話をつづけさせる術がない。

安物の置時計が、くりやのすみずみまで行き渡って、果ては、かべにしむかとばかり、あたりも静かだった。家人たちも、寝しずまって、ひとり石油燈のみが、息づいていた。熟れた女の胸の起伏が、あたたかく香ばしく感じられる。十八という年の豊かな胸から、視線を外すと、もう、充分に発達した腰がある。と、胸をつく感じがあった。友達と諍った移民船の一日がよみがえり、恥

かしい苦笑となって口もとにゆがんで現われる。

「何？、なにがおかしいの。」

しじまを破って、娘は言った。

○

大きな世界地図に、赤い航路がのたくっている。その線に、毎日豆粒ほどの大阪商船旗が、二糎づつも進んでいった。その地図のある部屋が、十三、四の自分たちの遊び場で、毎日八月の印度洋の陽が、甲板に返っていて、入りまじった男の子も女の子も白い服装が目立っていた。

男女共学は、小学一年生のころのみで、それから、別々なクラスで訓え育てられてきた自分には、なにかと面映ゆいことが多かった。潮風に男子も女子も、一緒に合唱を送る、唱歌の時間はたのしかったが、生来歌が不得手で、一人うたわずに、女の子の群からもありあがる歌声に、耳をかたむけていて、若い先生によく叱られたものだ。

家庭でも、学校でも、よその女の子に接することがなかったので、話しかけてくれる女生徒に、とっさには返事のできぬことも多く、なんとなく子供らしくない姿で、高いふなばたにもたれて、波を聞く。日が多く、女の子に、快活につきあえる友だちが、にくらいほど羨ましかった。

ふるさとのきびしい自然と、はげしい貧しさに、半生を経てきた手のひらの厚い人々は、このゆれる、わだつみの天国を、こよなきものとしてはいたが、天国にも、なお夢があつて、やがてい

くばくかの航路の果てに、更に美しき天国が待っていると、思いこんでいた。だが……、少年たちは、たとえどのように、きびしい自然にあり、社会にあらうとも、自分たちが息づいている場所が、天国なのだ。地獄に在っても、自分たちのおさない生活に、天国を見いだす。

古りできた一枚の世界地図、その前が自分たちの天国だった。麦のごはんにも文句はなく、みんな肥えてきていた。みやこ育ちの自分の細さは、仲間の者から圧しつけられるように、体格も、言葉からも感じられてさみしかった。学科が誰よりもよくできて、はめられるのが、ただ一つのうれしき、ほこらしきだったが、遊びの世界では通用しない。

「赤ンぼは、どこから生まれるか、知ってるか。」

子供らしくない話だったし、こんを会話は、始めてなので、つい意味もわからぬままに、赤くなっていると、

「――からだよ、ね、すみおさん？」

と、優等生だった自分に、問いかけたのは、同学年で一番きりょう良しの少女だった。学科のできぬ子だったので、ことごとに軽蔑するように心掛けていたが、一日中何をして、心にかかるのは、この子のことで、性欲のない恋というものがあるとしたら、十三才のそのころの淡い恋心だった。

「――からだって、そこは、小便するだけのものでないか、ちがうよ、此所だよ。」全身で首をふって、自分が指さしたのは、へその直ぐ下だった。これは、幼い頃銭湯で見受けた女の五月帯の場所

で、そこを刃物で切りさいて、嬰兒を取り出すものと、印象づけられていたのだった。すると、皆は、わあつとはやしたてる。女の子の美しい瞳が、瞳をかすめる。このことを言い出した男の子が、肩を叩いて、又何か言った。みだらな言葉だったらしく、なおさわいで大人たちが何ごとぞと、あちこちから眺めるので、ますますどぎまぎしてしまい、その言葉は全然判らなかった。

「何？、なにがおかしいの」

しじまを破って、娘は言った。

そうした淡い想い出にうす赤くなって、ふと見る圭子の腰の線が、見てならぬものに想えてきた。

○

植えつけが近よってくる。これは蟻殺しをしなければならぬと、いうことだった。ことほど、この村には大蟻が多く、まき場の周辺の雑作地は、夜毎にタツ―印の殺蟻剤をもってまわらなければならなかった。今年はタツ―を一箱つかったとか、いや一箱どころか、二箱も用いたとか、まるで自慢のように、拡まってくるのだった。

その時期になると、殺蟻剤のガスで鼻を赤くはれあがらせるのが、村人の常で、殺しても殺しても、蟻は絶えることなく、今さらのように、サウーバがブラジルを倒すか、ブラジルが大蟻をたおすか、という言葉を口にしたのぼらすのだった。

ガス発生体のアルセニコを個人で買うよりも、共同で求めようではないか、という声があがり、毎年共同購入をするのも、自然のなりゆきで、去年は百キロ入りの樽を三本買ったたり本年も三百キロ注文したら、それだけが一つの樽にはいつてきた。町の新型のカミニオンでとどけられたのだ。

うちと圭子のうちと、野菜作りのすきなおさく婆さん、その他二軒のもので、分けることになっていた。各自が容器をもって、約束の日曜の朝、圭子の家に集まる。よく晴れわたった朝で、その二三日前の小雨に、永いあいだ地上をさまようていた煙の大群が、追いはらわれていたので、澄みに澄み切っていた。風が強いので、家のかげに樽をころがしていった。風の烈しさに、薬品がとび散るのをおしむ、細かい注意からだ。おさく婆さんは、以前から野菜をかつぐのに閉口して、早く分配してほしかったが、樽に表記されている量だけ、ない場合があるかも知れぬと、皆の顔がそろう日を待って、のびのびになっていたのだった。で、婆さんは、分配するあいだも、忙しそうに先頭になって、二のうでまで真白にして、年らしくもない、かいがいしきでたち働いた。

圭子は、ちよつと窓から顔を出して、あごで自分に朝のあいさつを送っただけで、くりやで母と話していた。

「さて、この空き樽はどうしますかな。取り手がありませんかな」一通り分配し終えて、三百キロの余分にあつた五キロばかりを片付けて、圭子の父がいった。

「さあ、この樽はなあ、去年の分を水桶にしたが、木がもろくて、

半年も使わぬうちに、くさってしもうて、役にたちませんだが」「でも、これは去年の分の三倍もあるから、何か物入れにでもなりましようが、米びつなどに、どんなものですか。」

「いやあ、うちにはそれがもう、セードロで作った大きいのが、ありますしな。」

などと、話しが出たが、結局圭子の父が、

「これやなんですな、この樽を時価に見積って、誰かに取ってもらって、運賃にでも回すことにし、とり手がなかったら、くじ引きにして、当たった人に、払ってもらうんですな。」

その提言に、父が早速同意し、他の二人は顔見合わせて、何か言いたげだったが、結局そのとおりに定まった。残るのは、おさく婆さんだ。いつの間にやら圭子や、その母と話しこんでいるのへ、圭子の父が、樽はくじにすることにしたら、と言うと、婆さんも、一も二もなく賛成し、くじを引くと婆さんに当たり、婆さんは、わしは若い時からくじ運が強くてと喜び、車でむかえに来た息子に、それを積ませて帰っていった。婆さんの頭にかぶった白いレンソが、小さくなるまで見送って、圭子の家にはいる。いつに変わらぬ圭子の笑顔が、父の手前気はずかしかった。

それから一月ばかりしてから、自家と圭子の家とは、足しげく交際することになった。それ以前は、何事につけても、圭子の家を悪く言っていた父と母が、今までの反対になった。あばたが、えくぼになった。そのもとは、共同で買ったアルセニコ・ブランコの樽代を請求に、父と圭子の父とで、おさく婆さんのところに

行ったことにある。

婆さんとしては、空き樽は、くじに当たった人にあたえられるべきで、代金は払えない。代金を支払うくらいなら要らないから、持って行ってくれというのだ。

「そうじゃない。あの時の話は、くじに当たった人が、相場だけの金を払って、樽を持って行くことに、なっていたのだ。」

「そんな馬鹿なことがあるものか。あの樽をみんなが欲しがっていたのを、くじにしたのなら、当たったのだから金を出すが、みんなの要らぬものを、くじで押しつけられて、誰が金を払うものか」婆さんの言うことが正しかったので、他の若い二人の家長が、それとなく婆さんに肩を持ち、圭子の父と父は、面目まるつぶれとなったが、なお意地を捨てず、容易に折れず、二人だけになって、どちらもいける酒で、きえんを挙げた。それからというものは、今までの疎遠に打って変わって、春の深みと共に、深くつきあうようになっっていた。親密になる。それは物の贈答だった。豚を殺せば肉、もらい物があればお裾分け、野菜がよくできたと一部を届ける。

ろくに読みもしない雑誌の取り替えっこ。その使いの役にされるのが嬉しかった。むこうから、いつも圭子、来ると必ず部屋をのぞく、

「あら、本を読んでいるの、なあに、あ、キングなの、生意気にもうこんなの読むの、パパイに叱られやしないの？」

「ううん、叱られるものか。」

「あら、すみおさん、おなかが空いてるの、くうくう鳴ってるじゃないの、裏へ行ってお餅をたべて 来なさい」

「うちにや、餅なんかないよ。ママイ、どつかへ行っておしやべりしてるだろうから、今日はお昼抜きなんだろ。」

「ま、ひどいこと、わたしお餅持って来たのよ。食べて来なさい。つきたてだから、おいしいうちに食べなさい。」

「圭ちゃんこのは、あんこがちよっぴりだからな。」

ふざけながら言うと、まあと、にらんで、肩のあたりをつねる。少し大げさに、いたいと言うと、くりやの母に気をかねて、憎らしいと、小声で言うて離れる。

なんでもないことをはしやいで、声をあげたり、こうして一つの部屋に、二人だけで居られることが、大きな満足だ。が、それもそれだけのもので、話がとぎれて相対すると、さけがたい苦しみが湧いてくるようだった。他愛のない話が、二人のすべてだった。

「これ、いいわねエ」

電髪をした雑誌の女性の写真に指を置く。

「こんな風に、雀の巣を頭にのせたいの」

尋ねると、年かきの女らしいところは消え失せて、やさしく、こつくりとうなづく。

「へエー、こんなのがいいかなあ、あたらしい黒髪をなあ」

と大きく息をして見詰めると、

「でも、とても美しいじゃないの。町に行くと、こんなにしている

と、気がひけてならないのよ」

と、おさげの毛をふくよかな手で、受けて見せる。

「でも、ちりちりにしたら、パパイにすっぽりと、やられてしまうよ」

真顔になって、首を人指しゆびで、二、三度かるく切るまねをすると、肩をすぼめ、指につばをつけて、次のページをだまってくる。どれもこれも、写真のあるページだ。自分はビール箱の書棚から、小説をとり出して読む。いすは圭子にゆずったので板の寝台が腰かけとなる。目は本にあるのだが体全体で、圭子の動きを感じていて、目に入る活字も頭にはいらない。「なに、それ？」と圭子が立ちあがって、小説をとり、さし絵のないのを見ると、

「何さ、こんなもの」

と、それを小さい手作りの机の上にはうり出して、すみおさんに日本語習おうかな、と言う。娘は、日本字もブラジル字も読めない農家の娘だった。自分が本読むという事がさみしいらしい。

「ないたことがあるの？」

「赤ん坊のころには、アンアン泣いたさ。今はなかない。男だもの」

「そうかしら、涙のない人なんてつまらないわ、ほんとに泣いたことないの」

「いやな目つきだなあ。涙を出さない筈はないと、にらみつけてるじゃないか」

「にらんでるんじゃないわ。でも、泣けることがあるんでしょ。」

ね？」

素直に深くうなづく、圭子のひとみが輝きを増してくる。

「星を見ていたら、涙がにじんできたんだよ。淋しいのでもなければ、嬉しいのでもない。あの椰子ね。あの椰子のそばの星やら、あれから少しはなれた孤りばっちの星が、きらきらするのを見とどけていたら、ひとりでに熱い涙がころがり出たんだよ。その時、誰も見ていないのに、後ろめたい恥かしさで、自分の寝台にひっくり返ってしまったけど、夜もふけてから被った毛布のなかで、うれしかったよ。圭ちゃんじゃないけど、星や花を見て泣けるなんて、それだけ心が清いんだろうと思って、こんな気持ち判る？」

話し始めて返事のないまま、ひとりごとめいて、とぎれとぎれに話しつづけると、吾が事ながらしんみりとして、わびしさが胸をしめ、重くなってきた心で「判る？」と答えをうながせば、

「判るわ。判るわよ。あたしだって、そんな気持ちになるの。なにがなんだか判らなくて、涙がにじんでくるの。ママイが、短歌だの、詩だのてやかましくいうけど、こんな心がうたになるのだと思うの。字は読めなくて、歌ができなくっても、歌の心は判るわ。女の子ばかりが、こんな気分になるのかと思ったら、男だってやはりそうなの？、涙が多いのは、それだけ心が余っているのだから美しいことなのね」

十二月にはいれば、此の土地あたりは、棉が腰を切って生育の身構えをする。一目、いくつかの丘の起伏は、棉のうねにいくすじもの斜線が青くひかれ、人に知られる奥ノ口の暑さが、本格的

になってくる。暑さにうだつていても、こうした話をマンガの実のぶらさがる蔭で過せば、心たのしくすがしく、実の姉をもつてみたい。いや実の姉だって、こうはゆくまいなどと、話のとぎれとぎれに思ってみたりもするのだった。

「泣くつていえば、満江さんたら、お嫁に行くとき、家を出しなに声をあげて泣いたのだった。知ってる？、あすこの外人が笑って話してたの。満江さんは、お見合のとき、おむこさんの横顔をちらっと見ただけで、気がすすまずに断わったんだって、そしたら、その仲人さんが、満江さんの兄さんのお嫁さん、そら、知ってるでしょ。背の高いひよろひよろした人、あの人を世話した人だから、兄さんも、小母さんもいやいとせめられ、満江さんは又、兄さんたちに口説かれて、いやいや嫁くことにしたのだった、だからいよいよその日になって、まともにおむこさんを見たら、心の底から嫌になって、哀しく泣いたんだって、そうしたら妹の春ちゃんやら、小母さんまで、それとは知らずに、ひきこまれておいおい泣いたので、仲人のおばさんは困って、『あゝ嬉しいだろ、嬉し泣き、嬉しなき、さあさ自動車に乗った、乗った』と押しこんでしまったの。あんなにしてお嫁に行くの、可表そうね。」

濃いマンガの葉蔭で、上気して語る圭子に、あいづちを打てば、喜んで果てもないほど続ける。こうして人の結婚のうわさをするのは、相手が誰であろうと、外のなによりも楽しいらしかった。

「嫌よ。あたし、あんな風にお嫁に行くのはいやよそれより、知ってる人なら、少しはきれいな人でもいいわ。黒坊でもいいわー」

いやよ、いやよ、まだお嫁になんかゆくものですか。すみおさんだって、いつかは、お嫁さんをもらうんでしょ。その時まで、どこにも行かないのよ。」

充分に伸びた棉が、ころころとたくさん実をつけて百姓の仕事も、ほっと一息ついたころだった。丘への道は、始の枝が伸びて、ふさいでしまったところもある。足を濡らして月の路を駆けあがる。

〇

「そんな、そんな馬鹿なことってあるものか」

「本当よ。本当よ。」

圭子は、ほつれた髪を右手でかきあげながら、こつくり、こつくりとうなづく。

「私ね、昭和植民地の山田さんとかへ、すみおさんのパイのお世話でお嫁にいくの。でも、満江さんのように、泣きはしないの。だからといって、笑っていくんじゃないのよ。山田さんは、うちにずいぶん沢山お金くれたんだって。そして、そのお金で、すみおさんとかへ、借金を返すのよ。ここから離れていくの、いやなのだけれど、しかたないことね。」

だんだんと言葉が優しくなってくると、むやみに悲しくなってきた。胸に湧く憤りは、自分の胸でかみつぶすよりしかたがない。さみしかった。いっにない固いそぶりの圭子と、やっと二人になれたと思ったら、「本当よ、本当よ」とくり返しのことば、まさかと

思っただけに痛い言葉だった。

遠く家に帰って、くらい部屋にころがって、蚊に足を吸わせながら、ふと一月ほど前の圭子の言葉を思いうかべていた。

「じゃ、わたし若くて結婚するのね」

圭子と、その弟の登を残して、うちじゅうの者が、圭子の姉の嫁ぎ先に行って、さみしいからとて留守へ、毎晩泊りにいつてやったその頃だった。湯あがりのほのかな化粧のにおいをさせた圭子が、暗いカンテラに手をかざして、「わたしの生命線は長いでしょう山と言ったのに始まる。暗い灯に、いつもより深みのあるその顔の蔭に、彫刻的な美しさをみいだして、目をかがやかせていた自分も、手をさし出して比べて見ると、その半分よりやや長い程度の短さだった。

「早死にするなんかいやだなあ。此の世の中の人　死に絶えてから、一番おしまいに死のうと思って　いるのに……」

となげくと、

「年上ってしわくちやになって死ぬのより、若いきれいなうちに、おしまれて死ぬ方がうんといいわ。」

などと慰めてくれる。圭子も結婚線の名称を知っていた。小指のつけ根と、その線のへだたりが遠ければ遠いほど、結婚が早いという、生意気なこと知ってるのねと、いくたびもいくたびも手に灯を近よせて見ている。いつまでもそうしていそうなので、うれしいのと、言う、そつと灯より離れて横を向く。しのび笑いをしてるようでもあった。

「今夜は、お茶のご馳走になれないか知ら」

「あら、ごめんなさい。」

振向いた顔が美しい。いつもより美しい夜だった。

その夜の「じゃ、わたし、早く結婚するのねえ」と、悲痛さといった感じをかすかに帯びた圭子の声が、よみがえってきて、さきほどの「本当よ、本当よ」と、うなづいた顔と二重になってくる。あの時、圭子はあの話を知っていただろうか。知らぬのは自分だけだったのか。別に好きだとも、きらいだとも話し合ってた仲でも憂いが、裏切られたようなわびしさに、憤りになるべきでない憤りが、熱い涙となって冷たいまくらを濡らし始めていた。

○

圭子が嫁ぐ朝は、雨が今にも降りそうに暗い朝だった。頼まれて使い走りをしてしながら、いつもと変わらぬだらしない着つけの普段着の圭子に、つねの優しさはないように思えたが、今日の夜、人の妻になる人とは、どうしても感じられなかった。再び娘として、ここに現われなくなるとは思えなかった。

「いよいよお別れね」

と圭子のいた部屋に、言いつけられて紅白の紙をさがしにいった自分に言う。なにも今日は言えなかった。首にまいたレンソをいじっていると、

「お金持ちになりなさいよ」と、ぽつり後先のないことを言う。言

葉の意味を考えもせずになづく。どうしてこの人はタマンコを脱いで靴に替えないのだろうか、うなづきながら、そんなことを思っていた。出ていこうとすると、さようならと、細い声でいう。その細さにふりかえってみると、背を見せて、圭子は手箱をさぐっている。音のしないように、そつと扉をしめて部屋を出た。お嫁に行くのは嬉しいのだろうか、悲しいのだろうか。いつもと表情の変わらぬ娘を浮かべて外に出ると、雲間に太陽がのぞいていた。

あやちゃんは、圭子に似ている。あやちゃんは十三である。同じ年かさの少女たちと、いかにもたのしそうに、手伝の人たちのごたつく間を、あちらこちらとのぞいて歩いていて、犬のようだといって追われるのだが、どう言われても嬉しいとみえて、五月の蠅のように去ろうとしないのである。「すみおさん」と、あまえた声が、圭子とちがったつややかさがあって、いとおしいものに見える。

一人がこれちようだと、かたわらにあつた饅頭の山を指さすと、あとの二人も声をそろえる。だめだいけないよ。もつと後でと優しくいっても、ぐずぐずしていて、その場を去らない。ねえあやちゃん、こんどまちに行ったら、よいものを買って来てあげるから、今はだめと白い目を見せても、なかなか行かない。よい物とは何だと尋ね返す。しばらくだまっっていて、ママデラというのと、あや子がとびついて来て、あちこちをつねり始める。と、みんなして笑いとつねりの総攻撃、降参々と逃げだすと、窓で圭子の

顔が笑っていた。

その笑顔に自分はほっとした。ほんのさっきの圭子は常とは表情が変わってはいないが、余りにもさみしい人と見えた故。

○

夜になって、雨がほそぼそと降り始めた。美しく粧った圭子が、自動車に乗りこむ。その晴着を濡らすまじと、母が傘をさしかける。美しい、昼間の圭子とちがった美しい圭子が、またたく間に自動車の座席に納まってしまった。その座席へみんながかざす灯の群れに浮ぶ圭子を、今はもう悲しみもなく、じいつと見詰めておれる自分が、あわれとも頼もしくも思えてくる。

雨がぽつりと頬を打つ。ひしとあやちゃんが、自分によりそって、自動車のうちを眺めていたが、ふと振りあおいで、にっこり笑う。

「美しいね」

「ええ、とつてもきれい」

うなずきもせず、目を見返して言う。

やがて、ヘッドライトがともる。動き出した自動車の燈に写し出されたのは、隣家のおさく婆さんの樽だった。が、それも、自動車がハンドルを切り替えると、一瞬にして消え失せる。道はおさく婆さんの家の手前で折れて本通りに出るのだ。

問題だったあの樽。

その樽が五月帯をした女の腹とひとときの光の中に見えた。船上の少年の日や、かずかずの圭子の想い出が、灯をいれた走馬燈のように、頭にどつとあふれる。樽は、何かに汚れて、一部が白く見えたのか、他の大部分がうすぐろくなり、一部が帯のようにもとの白きが残っていたのか、一瞬の印象が後を引いて連想が次々に続いて去らぬ。

叔母の産室のとなりの部屋で過した一夜。

産後が悪くて死んだ人の葬式。

遠い昔、弟の生まれた日の記憶。

世の女とおなじに圭子も五月帯をする女となるのだ。いくたびも、いくたびも。果てはおさく婆さんのようになり果てる。そうして自分は……………。

仰ぐと空の一部に星が見えていて、一滴、目のあたりに雨がおちる。

風が裏の竹やぶをおそって近よって来る。

家のなかで騒ぐ声のなかから、自分を呼ぶあやちゃんの声が高い。

(終)

「RIKKO」

森晋平追悼特集号

ブラジル力行会は、サンパウロ市に事務所を持ち、相談部、巡回講演部、呼寄事務部、機関誌「RIKKO」編集部などをそなえ、全伯に散在する会員の親和協同、日本の本部との連絡など、活発に事業を進めている。

現在の会長は、山内安房氏であるが、昨年逝去した前会長森晋平氏追悼の意味で、本誌を発行した。大体機関誌「RIKKO」は、小型新聞形式で、年間何回か会員連絡の為発行されてきたものである。この特集号発行は異例に属するもので、誌全体に、会員の故森氏に対する追慕の情があふれている。

本誌は、四六倍判、本文五十六頁、発行はブラジル力行会（責任者山内安房）、印刷はサンパウロ新聞社印刷部、一九六九年七月発行のものである。

表紙は、富岡耕村、二色刷り、「森晋平追悼記念特集号」とある。巻頭に、森氏の肖像を掲げ、次いで、同氏略歴、同氏遺稿（日記）が載せてある。内容は殆ど在伯力行会員の追悼文であるが、永田力行会長をはじめ日本からの寄稿、生前の森氏を語る座談会記事などもある。

追悼文を寄せている力行会関係者は七十人にも及び、本誌を読めば、森晋平氏の全貌を知ることができる。それによると、森晋

平氏は、寡黙しかも誠実、ひょう逸味のある人間味豊かな人柄であつたと思われる。「ブラジル力行会四十史」「輪湖俊午郎氏追憶集」などの刊行も森氏の尽力によるところが多いとのこと。力行会の運営についても、サンパウロ学生会の発展にも、森氏は大きな影響力を以ていた如くであつて、寄稿者はみな一様にその早逝を惜しんでいる。

晩年は破魔商会に勤務したが、より社会的な活動に本領を発揮した人であろう。福岡県出身、一九一一年生、一九六八年逝去。

（紫）

橋の外人

猪名 四郎

その橋までが村だった。

この村にも、その上の往来にも似合わぬ巾広な、頑丈で武骨なコンクリート造りのその橋の向こうはもうサンパウロのあるブラジルとは無縁の地が、目を遮る山並み迄、山並み自体も、更にそれを越えて続いて居る。それに向かって唯一本の赤茶けた道が見え隠れに続いて居る。

とはいえこの村にしてから、外れを走る国道だけが生きて居て、時の流れに歩調を合わせて居るにすぎない。

仔細に見れば、違いはあろうけれども、何処の村へ移し置いても、別に不都合も起きないだろうと思う、ありふれた塔を突き立てた教会を芯に、縦横三筋か四筋の家並み――何処に誰が住み何を生計（タツキ）に――知らずして誰もが知って居る。

路上を動くのは、餌を漁る野良犬、いや飼い主が居るのだろうから、そうもいえないが、それと変りのない犬が、少ない獲物に多寡をくくった足取りで、ジグザグに軒を縫う以外に、午さがりともなれば、動くものとして見当たらない。

壁が動いた――と思うと、この世を勤め了えた老人が、身に似合いの古びた椅子に凭れ居て、何を見るのか、何を思うのか、物

を見る眼に非らず、物を思う貌でもなく、唯時の刻みに身を任せた態で、時折り家の裏手で子を叱る母親のカン高い声、そして間を繕う雄鶏の叫び――それが動の総べてだ。

五郎がこの村に采て以来、何処が如何変わったとも解らない。

橋に続く堤下の寝ぐら然とした小屋を出た五郎は、欄干から濁った川水を見下ろして居た。

治兵衛さん（大槻治兵衛）――村の人々は、口調良くジンベさんと訛って呼ぶのだが――の野菜の歩合作に応じて三年になる五郎が（来月一杯で……）と、解約を申し出て、もうその日が来て仕舞った。

◎

僅か三アルケールに少し余る畠の、しかも河原続きで、長雨には湛水する地形とて、働き手の多い秀れた借地人が居つく地でもなしとその都度、トラトールの販売人や村に出入りの商人達の口伝てに頼って、ある時は独立したての夫婦者、ある時は五郎の様な独身者に――伯人にも任せて見たが、百姓仕事はやはり日本人に限る――耕作任せて唯の少しでも収入があれば、土地は消え失せるでもなく、草に任せるよりは利も入ろうと、五郎迄に何人かが入っては出たが、溢水（エンシエンテ）さえ無ければ、資金の遣り繰りの相談等に乗らねばならぬ煩わしさはあっても、損をする筈のない思惑。他に二十、五十アルケールと纏まった地もある

事とて、もとよりそれが収入の幹ではないが、それはそれなりの得をもたらせて来た。しかし、ジンベさんにとって不満な事は、人が次々入れ替わる毎に、その質が落ちて行く事である。”我が若き時代”や、その頃の僚友達の奮闘振りには、誰も及ぶべくもないと思つて居るから、それを引き合いに出す心算はない。(それにしても……)と思うのだ。吾が子の肇や国次に対する点も辛ければ、五郎に至つては(此奴が今迄のうちで最低だ)との評価である。

他の人のように(此の頃の新移民は……)等と云う物判りの悪い自分ではない。が、(時代が違うのだから……)と云いはしても、心中丸々そうだと思つて居る訳では無い。

(この前の滝沢はこれ程でも無かった。その前の真田夫婦は、イチャツイては居てもやるだけの仕事はやりおった。)

(それに比べて五郎は……)と思うのである。

(あれでは《ブラジルへ着いて此処へ来る迄の八年、芽が出かけた時も無かった》というのは当然だ)

と思う。では何処がどうなのかとなると、不満な思いのジンベさんも、確かと指さし示して此処がこうだと云い切れなない。五郎のする事為す事が、少しつつ不満であり気に喰わない。虫が好かない――それも無いとは思わないが、他人を色眼鏡で見たり、理由にもならない事で差別したりする、自分では無いとの自信がある。いい現わされない不満まで(五郎さえその気でやれば、何も……)と、五郎の所為にする。

しかし、真実五郎が駄目な男かといえば、わき目もふらずとはいえないが、時間から時間迄四人のブラジル人使って、目につく怠けがあるでもなし、それでは纏めてズル休みするかと思えば、貰い風呂に来て咳き込むのを聞きとがめ、

「彼奴のことじゃ、風邪を種に二三日休むのじゃあないか」

と家内（バアサン）との内緒話が聞こえた訳でもあるまいに、予想に反して翌朝、重い足取り乍ら、前の畠道を独りボソボソ登って行く。

足取り重いのは風邪の所為でなく、常の癖——と思うから、

「休むなら休む、働くなら働くで、もっとシャン シャンすれば良いものを」

と、それを眺めて、ジンベさんは又氣に障わる。（ブラジルに来た以上、何が何でも……）という氣魄なるものが無いのが、ジンベさんの癪の種らしい。

「新移民は何も出来ずとも、口先だけでも我々より達者なものが」

口の軽い人間も氣に喰わぬが、相応の挨拶一つしないのも癪である。

従って、良き代人があれば、此方からでもと思わないでもなかった矢先の、五郎の解約申し出に、出鼻を挫かれた思いがせぬでもないが（それも却って好都合）と、その時は思った。だから「二昨年は溢水（エンシェンテ）去年はトマテの安値、持って居たにしても使い果したろうに、五郎さん、これからサンバウロへ出

て何する心算じゃろうナ」

と云う家内（バアサン）の心配に、

「馬鹿モンが！、あんな奴の事を心配したてどうなる。何やつたて、成功する奴であるか」

と、当初は齒牙にもかけぬジンベさんだった。

それが一週間、二週間、日が経つに従つて雲行きがおかしくなり始めた。（俺の、人を見る目に狂いがあるか）の信念は変わらない。

しかし、今迄の順序からすれば、五郎の後釜は、彼より更に質が落ちる勘定となる事が、氣懸かりになり始めた。

（探せば、もう一寸は良いのが居るだろう）

（底でも五郎くらいか？！、イヤ、そのような事は あるまい）

（もし悪いのばかりだったら、如何うするか？）

で、到々昨夜に至り、それでも、

「明日の晩は自実（ウチ）で飯を食わせろ！鶏二三羽つぶして、彼奴も一世だで、醤油炊きにでもしてやれ。麦酒（セルページャ）は一箱もありや足ろうが」

「醤油炊きて？ すき焼ですかい？」

「すき焼とも云えめえーが、似たようなもんじや」

に、なって仕舞った。五郎を惜しむのではない。不満は不満として心の底に燻って居る。唯、あるじたる者の義務（ツトメ）であるとの、分別がさせるのである。

五郎は、水の面から目を離さない。それが面白いでもなく、心惹くものでもない。いつもと同じ泥水、そして同じ処で澱み同じ処で流れて居る。それ以外に眼を移す場所がない。”のどかな”
といえ、この上もないのどかさ、向う岸の草叢で草を食む馬の尻尾が蠅を払うくらいで、位置を換えてはいるのだろう、馬の動きさえ河原の広さに埋まって見捨てられる。下流に突き出た丘のカツケーラの花の色も、もう何カ月も続いた薄桃色であり、交えた白色の割合も目には変わらない。

（このようなブラジルを日本に居たとき想像した 事があるだろうか？）

想像した事があるようでもあり、無いような気もする。勿論鬱蒼たる密林や涯しなく続く丘陵だけを、当時といえども、想って居た訳ではないのだが。

日本を食い詰めるにも、二十二や三で職業（シゴト）らしい職業をやった訳でもなく、自分の能力一杯出せる処で、可能性の限界を試して見たいなどと、殊勝な気持があつてのことではなかった。（そのような気持の薄片（カケラ）さえなかったと云えば嘘にもなるが）

――見知らぬ土地にあこがれて？

そのような気持もあつた。しかし、それが全部とも云えない。

ジンベさんは勿論の事、多くの人から機会ある毎に、

「ブラジル迄来た以上、頑張らなければ（駄目がぞ！）」といわれたが、五郎には、いわれる程に大層な事とは思えないのである。

来るに就いて大きな目的、抱負を確と定めての重でもなく、その為に大仰に心の整理までして掛らねばならぬと、思ったものでもない。出国迫った間際には（これは大変な事かも知れない）と思いついたが、それも殊更に騒ぎ立てる周囲の仕業と理由づけた。

五郎の育った田舎で聞く話の内にさえ、アメリカ、欧州、又アフリカと、研究、留学、仕事に出掛けた人の一人や二人ならず居る中に、学問するでもなければ、大層な仕事や責任背負って赴任するでもなし杖よ柱よ、と頼られる家族引き連れての事でもなければ、その身一つの暮しが立てば良しの話、大きな成功期待せぬ訳でもないけれども、それはそれ、やって見なければ判るまい。行つて帰れぬ先かも知れぬとあつても、近く京、大阪へ出た者の中にさえ、それな絶えて戻らぬ者もあれば、帰つて来ないとなれば行く先が、京、大阪になろうが、はた又外国であつても同じ事。ぐらいの心情であつた。

だから――十年が経つた――という感慨は、ブラジルに着いてからと云う区切りはあつたが、殊更にブラジルに来て……との感慨よりも、それは日本に居たとしても過ぎねばならない十年であつた。このような自分がジンベさんの氣に入らなかつた事は、五郎にも判つて居る。

口付き煙草をジンベさんの前で出す時は、一寸悪いような氣持になる癖が（そのような自分に舌打ち呉れたい思いだが）あるこ

とを知って居る。

ジンベさんいう処の理窟なるものは《苦は樂の種であるから力の限り働け》であり《如何なる場合にも日本人であることを忘れるな》と云う事らしい。

自分に、ジンベさんの正面ふりかざす理窟、道理は無いけれども、世の中には《苦は苦の種》で終わる人だって、《樂は樂の種》で通す人だって居るではないか——と思う。

しかも、自分は生まれた時から日本人なのだ。何十年も戦争でゴった返して居る国に、生まれなかったのは幸せかも知れない。いや、幸せに違いない。だけれども、日本にだって物乞いもいれば泥棒もいる。アメリカの大金持の家に生まれるより、日本の乞食の子に生やれた方が良いとは思えない。乞食でも、

「私や日本人でさあ、外国の旦那から施しを頂くわけにや参りませんわい」

というだろうか。

理窟はどうあれ、ジンベさんの気嫌を損ねて得になる処はない。自分では出来るだけは意に添うようにやって居る心算である。

それ以上は、出来るとしてもする気は無い。

ジンベさんは、ジンベさん、自分は自分である。仮りにジンベさんのいう通りに、汗水流して居たとしても、溢水（エンシエンテ）や市場の安値は避けられたものでもない。

ジンベさんの厭がる紫煙は五郎の口からゆつくりと、川面の上の空間に繰り出されて行く。

此の地の住人としてくつろぎの煙である　― 今日限りの。

次の地で、どのような生活が待って居ようと、其処で落着ける自信も才能もあり得る筈が無い。それで楽しいとは思わないが、差し迫った気持でもない。身一つなのだ。

◎

滞された尽のコップが在らぬ方に、半ば飲み残しのコップが卵の割れ殻と共に省みられず、麦酒（セルベージャ）の瓶に交りガラナの空瓶もそれなりに、林立って居る。

ジンベさんと五郎の前だけが、僅かに容（かたち）を保って居る。それにしても、家内うちのこととて、喧騒は無いがやはり、いつもの食卓よりは声高に、話は幾つにも分かれて、息子の肇と国次は明日の仕事の話を、三男四女以下は彼等の世界だけの話題を、末席にたむろする雇人達は彼等なりの興味を中心に湧いて居る。酒臭を好むと云う巷説（はなし）が真実乍らば、常より更に多い筈の蚊も氣にならないのは酔の所為か。

明日はもう、サンパウロへ向けて出て行くという五郎に対して、ジンベさんはしなければならぬ話が沢山ある訳はない。

（ブラジルへ来た以上頑張れ！）（何をやるにも、もつと性根を据えて身を粉にして働け）

（お前も三十を越して、いつまでも独り身でポヤ　ポヤして居てはならない）

と、常の言葉の他にいう言葉も無い。

幾ら酔っていても、そのような説教を重ねることは、物判りが

良いと自負するジンベさんは、すべきではないと思つて居るから、ついしたくなる気持と裏腹に、自分では抑えた心算でも、それでも長い時間のうちに、無意識に何度も繰返している。

「それでサンパウロへ出てからの目当てはあるのか？」
もう、この質問も兩三度ならずして居る。

（無い）といったとしても、どうしてやろうの気持ちがあつての事ではない。五郎も、だから、

「ウン、まあ知つてゐる奴の処へ行つて、落着いて様子を見た上で……」

と曖昧に答える。

「フン、そうか」

話が判つた訳でもないのに、ジンベさんは又生返事するだけである。そして、もうほかの事を考えて居た。

（これ迄の例からすれば、後釜は、奴よりもっと　ひどいことになる勘定だが……）

余り悪くなるようならば、子供にやらせようかと考えたが、長男肇、次男国次は本畑の仕事で手一杯自家の出荷を兼ねて自動車（カミニオン）を持たせて居る三男の精三を、打診したが生返事で、埒が明かない。暮に中学を了える四男の伸男に話を廻して見たが（自分に百姓をさせる気などあったのか！？）といわないばかりの返事だし、長女、次女の京子や静子は、幾ら百姓仕事を手伝いはしても女の身、先に立つてという訳にもいかない。それ以下は、まだ大人の仕事が出来る年令ではない。心が満されないと

いう程の大仰さは無くでも、氣に懸りながら今日迄来て仕舞った。此処に至って、このような五郎でも、それなりに役に立って居た事を不満乍ら知らされる面持だが、今となつては詮方ない事でもあるし、無理にもそうは思いたくない氣持もある。

三女四女の君子と友子が、炊事場（コジンニヤ）から大皿に鶏二羽の炙肉（アッサード）を持って出て来た。

「何だ？ お前達は……」

後に続いて顔を出した家内（バアサン）が、

「この子達にや、やっぱり醤油の味より、こつちの方が向くんでしょうって」

と引き取って答えた。

「仕様の無い奴等じゃ、こつちへも廻さにや！」

顔は言葉程になかった。

（そういえば、我が家も裾になるに従って自分の思惑から外れて育っていく）

一寸そう思いかけて、又、

（いやいや、何処にだって沢山居れば一人や二人 多少の斑（ムラ）が出来るもんじゃ）と思い直した。

五郎の前に炙肉（アッサード）を皿分けした友子が、素早く五郎の耳に何事か囁いた。瞬間、ジンベさんの顔が一寸硬張ったが、その後何事も起こる宅配が無かった。

「小父さん、今夜は御馳走になりました！ ソロソロ失礼させて貰いますら」

「未だ早いだろ？ 明日発つのは昼前だろ！？、なら、急ぐ事はあ
るめえ」

「いやまだ挨拶する先もあるんで」

「そうか、ならこんな時じゃ無理も悪かろう、家内（バアサン）！、
帰ると、五郎が！」

静子、君子、友子が、クスツと肩で笑うのを長女の京子が目顔で
叱った。ジンベさんが咎めて、

「なんじゃ、お前達や？、おかしな奴じゃの」

皆それぞれにわかれの挨拶が交された。家内（バアサン）のそ
れは、女の、それもひと年した者の特有の諄さで、ジンベさんが
（未だ明日があるというのに）とたしなめたくなる程だった。

五郎を帰した食卓は、俄かに乱雑と空しさが際立った。

頭を寄せあつて、話に弾む娘達に今迄居間に引っ込んで居た末子
の連中も加わって居た。

「なんじゃお前達は！？、先刻は何を笑つとつたのじゃ？」

ジンベさんに尋ねられて、お互いに顔見あわせ、肩をすくめて
娘達は又笑った。

「お父さん（パパイ）も気が効かないね！、いい人が待つとると
よ！」

次女の静子が、暗黙の了解を破って素っ破抜いみので、他の娘
達はジンベさんの上に起こる変化を、一斉にふり返り待ち眺めた。
「そうか、好え人て誰じゃい？」

ジンベさんは、娘達の好奇心をそらせた心算だったが、ぎこちなかった。

「パ・パイの知らん外人よ」

口を切った手前、静子が受けた。

「なんじゃ外人か！、彼奴、おかしな奴を相手にしてんじゃねえのか？」

外人と聞いて、意外な感じもするし（そうだろう、彼奴ならそんな処だ）と、いう気もする。席を立て動いた為に、体中の静まって居た酒気が、一度に駆け廻り始めてきた態のジンベさんは、椅子の背当てに反り返って、首を右に左にゆるく廻した。労働と風雨に培われた筋肉が、ゴリゴリと不気味な、それでも心地良い音を立てた。わが娘達が、あのような五郎に関りあわなかった事を満足に思う。と、直ぐその気持を追いかけるように、人の同胞の血をムザムザと、知らぬ他国人に横取りされるのを癪とする気持が湧き上ってくる。

「馬鹿な奴じゃのおー、外人なんか相手にして」
としかいえなかった。

五郎がその気になれば、上の三人の娘は対象となり得る年令だ。（関心が無かった）と思いたくない。

始めから相手にされないとあきらめて居たのだと、無理にも思っていた。

でも、できれば、五郎にねだられたかった。京子、静子、君子、それは誰であつても構わぬ。どうせ断るのだから……。

冬が迫ったとはいえ、日中の暑さは土地柄である。なればこそ、暮れて後の冷え込みは殊更に気持が冴冴とする。月夜の深更は猶更である。瀬音が聞こえる静けさ。太陽を取り去って迄静寂を強いる要もないこの村も、押し並べて夜の中にあり、却って半弦の月だけが生々として居る。

（際立った取り柄の何一つ無い五郎）（日本の話をする時でも、誇るでもなく貶すでもなく話上手とはいえない口調で求めなければ話さない五郎）晴れた夜はその都会（マチ）の在る方角の空は明るいという。その都会サンパウロへ出ていくという彼に（出来ることならば、この地に居て欲しい）と思う。

「落着（フィカ）したら住所（エンデレッソ）を 寄越（エントレーガ）してね」

ブラジル語ではないが、日本語でも無かった。入り交った言葉でそういう京子にとっても、この地が故郷ではない。

マツトグロツソで生まれ、パラナに移り、二転三転ならずした後のこの地である。その間暮し向きも幾度となく変転した。

京子にとって、何処が故郷といえるはつきりした地が無い。ブラジル人として出生証明書を持って居ても、それはブラジルで生まれた事を証明する以外に多くを出ない。

（でも、もしも、もしも五郎が留まって呉れるならば、この地が故郷になるだろう ――故郷にしたい）

と思う。

その年頃に夢見た像とは、程遠い五郎ではある。しかし、この先、三十に間もない自分が、より身近かに感じる相手にめぐり合える機会があるとは思えない。否、今となつては、他と比べて居る余裕などあり得ない。

村にも独身の日系男子は居るが、自分の弟妹達がそうであるが如く、出入りの絶えてない村、其処での生活に育った人達は、もう京子と同じ世界の人とはいえなかった。それは、京子が意識で考えることではなく、肌から感じるものなのだ。同じ祖先から同じ血液を受け継いで居る――それだけの事である。

心に日本以外の祖国のあり得ない父母、この村が故郷の弟妹達とも異なる自分や兄達。同じく異するという事だけで、五郎を身近かに感じるのかも知れない。あるいは五郎との間にも、そのような断層があるのかも知れない。しかし身勝手といわれようと、今の自分にはその断層には気付かないし、あるとも思えない。

静子が庇って出任せに言った――お父さんの知らない外人よ――の言葉が消えずに耳に残って居る。

そのような相手の五郎ではあつても、はつきりその心を確めた訳ではない。自分の心を、告げもして居ない。

「うん。だけれどもなあ……」

いわれずとも判る。京子も父母に従つて歩んだ道である。この橋の先が延々とあるが如く、五郎の道も遙かである。

（蹤いて……）といいたいが、道の方角も、難易も判らない現在、

その気持を喜んで呉れても、苦しみとなるか助けとなるか。

橋から先この道の涯てる処に、サント・ローレンスという大きな農園が、唯一つあるという。五郎の歩む道にも、そのような処に行きつける日がきつとあるに違いない。

でも、京子の知らないその農園は、大きくはあっても淋しいだろう。不自由だろう。テクテク歩いて行くとしたら、何日も何日も掛かるかも知れない。五郎のそれは、もつと賑やかで、豊かで、そして、もつと近くであつて呉れと願う。

「甲斐性のない俺が頑張（ヤ）っても知れてるけれど、だからといって、やらん訳にいかんしな」

五郎らしい言葉だ。父だったら、たしなめる処だ。

「でも、小父さんに、一昨年トラトールを修繕した時の借金がまだ残ってるで、払いに来るか、送るかせにやならんからこれ切りつにはなんねえよ」

「まあ、そんなの、あつたの？、ちゃんと覚えてるのね！？」「当たり前だよ、借りたものくらい」

五郎だつて、矢つ張り日本人だ、と思う。日本人でなくても、当たり前のことだと五郎はいうだろう。いや、それでも矢つ張り日本人だ。父の知らない日本人。

「五郎さんも矢張り日本人よ（エ。ジャポネース・タンベン）」

「何を今更！？、日本人だよ、仕方ないけどな」

「もつと、全学連かと思つた！」

「馬鹿な！、奴等だつて日本人よ」

そのような意味じゃあないわといいたかったが、探しても言葉が無かった。

言葉が無いと同様に、五郎の軀との五十糎を縮める術が京子には無い。

あちらで、こちらで、あの時、この時見かけたブラジル人の動作のように、滑らかに自分の体が動かない。

《性根を入れてよ！》と思わず父の口調で叱りたくなる。

（手をさへ握らずに行こうというのか）（幾ら何でも……）

足元から、もう一度五郎を見直す思いで目を落した。耳元で何かが囁かれた。

「エッ？」

聞き返した瞬間、京子の視野は五郎の顔で一杯になった。

兄達に感じるあの体臭が、唇を通じて京子の体内の隅々へ走った。

「さかりがついたら外人達や寒むうないんかの、この寒いのに橋の上で御苦労さんのこっちゃ」

厠から帰って来たジンベさんは、家内（バアサン）にそういうと、ソソクサと又寢床にもぐり込んだ。

（了）

創作・二三枚

砂の城

伊那 宏

伊作の住みはじめた宿は、下宿街とでもいえる石畳の坂の街にあった。半世記近い古い煉瓦建ての家並が続き、所々に小さなボールが点在しているのみで、概ね殺風景な街という印象は拭われない。

「ペンソンK」伊作は知っていたわけではない。下宿街でありながら、殆ど看板を表示していない家並の中で、そこだけが板切れに小さく「ペンソンK」日本語で掲げてあったからであった。だから、初めこの街の中に下宿屋は「K」だけしかないのだと伊作は思っていた。

主は、肥満した背の低い、笑うと子供のように無邪気なく表情が崩れる女であった。初対面に、おずおずと伊作が来意を告げると「そうですねえ、個室というものはありませんが」

眼だけは伊作の全身を眺めながら、

「うちは、学生さんが多いので、それでもよろしければ」

学生以外は暗に断りたい口ぶりであったが、伊作はそれでもいいと思った。

女主人は、伊作の風貌やら年齢から、伊作を下宿人として迎え入れるのに、かなり抵抗を持ったらしく、

「お仕事は何か……」

これから見つけようと思っっているのですという答えしか伊作にはなかった。

「ご家族はいらっしゃらないんですか」

「息子の家族が居るのですが……」

「別にお住みなのですね」

「……」

「息子さんが居なさったら、やはり、ご一緒に住むのが一番いゝことなんですがねえ。殊に、こんな外国なんですから」

出来れば断りたいという胸の内は、さつきから女主人の口調に漂っているものであった

「他人様に内輪を覗いてもらいたくはないし、それに、一私の一存で決めたことなのですから。決してご迷惑はかけないつもりです」

人に話さなくても通ることなら、伊作はそうしたいと思っていた。が、人は他人の殊に伊作のような境遇の人間のことになる、必要以上に詮索したがるものなのだ。それは伊作も理解出来ぬことではなかった

「まあ、ね、私もお客さんの選り好みはしたくないのですよ。あなたがそうおっしゃるんでしたら、しばらくお気の済むようになさいまし。でもねえ、私もお客さんを預かる商売ですから、少々は立ち入ったことも聞いておかねばならないことは解って下さるでしょう」

伊作は神妙に頷いた。

一カ月分を前金で支払うと、女主人は急に親しみをを見せて、

「あまりよい待遇は出来ないかも知れませんが、不充分なことがあつたら、遠慮なくおっしゃって下さいよ」

やはり、根は良い人なのだと伊作は思った。

昨夜、強い雷鳴と共にどしゃ降りした雨は、そのまゝ、雨足を上げず朝までぐずついた。時節はずれの雨は、妙に冷たく煙って、F街の石畳を未練がましく濡らし続ける。

「雨期とお別れの雨だなあ」

下宿の門をくぐって出て、伊作は呟きながら空を仰いだ。雲が棒で攪拌されたように忙しく動き乱れ、晴れ上がるような明るい気配が上層部に漂ってはいたが、雨は相変わらず止まることを知らずに、その細い糸を仰ぎ向けた伊作の表情にも落して来た。

門を出ると直ぐ、伊作は古ぼけた傘を開いた。五六年前に息子が買ってくれたものだというのを、今朝に限って思い出され、所々虫に喰いあけられた穴のあるその傘を、伊作は淋しく眺めてみた。

「アウトマチカなんだよ、パ、イ。このボタン押せば、ほらっ、ね」
バサツと広がったあの時の傘が、今ではギイギイと故障寸前の音をたてゝ、手の助けを与えてやらねばならないほど骨が錆びてあけにくい。黄昏れて行く己れの人生に似て、この傘も廃物になつて行くのだと思うと、伊作はやるせない気持をどう隠すすべ

もない。宿で作った弁当を小脇にかかえ、古ぼけた雨傘をさしてとぼとぼ雨の中を歩く自分の姿は、文字通り人生の終末を無抵抗に流れているに過ぎないと伊作は思った。

二年前に伊作は妻に死なれた。格別強い愛情を感じていたというほどではなかったが、やはり、手折られるように妻の姿が突然消えてしまったということは、伊作にとって、この上もない大きな打撃であった。

老いた身に心情を分かちあえる伴侶がいることはかけがえのないことだと今にして伊作は思う。もし妻がいたら……それは近頃伊作が癖のように心の中で呟やく言葉であった。

己れの心にぽっかり開いた空洞を、伊作は覆うすべもない。

F街から本通りへ出て、伊作はバス停留所に向った。

今日から働きはじめるA工場は、セントロからバスで四十分はかゝる遠方にある。

老人が職を求めることは、殆ど絶望的なことと思つてはいたが、昨日、職業案内所で紹介され、藁を掴む思いで足を運んだところ、即座に雇用された。そこは日本品製作所で三十人以上の従業員を擁していた。別段、重要なポストを埋めるための雇用ではなく、殆ど雑用的な仕事を伊作は与えられたに過ぎないが、そのことで伊作は不満を持つはずはなかった。毎日を糊口出来るならば何でもい、と伊作は思っていたのだ。むしろ不案内な土地へ来て、直ぐに仕事にありつけた自分を伊作は喜びとした。もう、何の希望も持たぬ人生の終りを歩き続ける老人には、生きて行けるだけで充

分であり、それだけが、最早や自分にできる背一杯なことだと伊作はつくづく思うのだ。

小雨まじりとはいえ、朝の雑踏は伊作に不慣れなものであった。無数のバスの連続は、彼の弱った視力を意地悪く酷使する。昨日覚えておいたバスの標識だけを、伊作は喰い入るようにして見つけた。時々、忙しくて飛び乗ろうとする客が伊作を押し除けその都度よろけた。一台のバスを掴むことがこれほど苦業なことだと、伊作は想像もしてみなかった。おまけに車内の混乱は、たっぷり一日分の疲労を感じさせるほどで、目的の地点にバスが止まった時、伊作はよろよろと不安定な足どりで路上に立った。ふうっと溜息が伊作の口から洩れた。

工場は、バス停留所から、さほど離れてはいなかった。

門を入ると、間口十米程の住宅があり、その脇の狭い通用門を過ぎると、かなり広い仕事場があった。整然とした敷地内には、すでに何人もの従業員がたむろしていて、伊作が現われると、彼等は一様に無愛想な視線を投げた。多くは男ばかりであったが、その中に三、四人ほど女がいて、やはり、彼女等も同じような目で伊作を見つめ、それから、顔を見合わせて小声で何か話しはじめた。自分のことを噂しているのだと直ぐに伊作は感じたが、格別不快な印象を受けたわけではない。長い人生の中で、伊作は度々こんな状況に遭遇したことがあって、その場合、かすかな異和感が己れの内部に発することは、やむをえないことだと伊作は思う。いずれにしろ、ここ数日で、自分は彼等になじみ、彼等も、自分

を仲間の一人として迎え入れてくれることは、過去の例からして断定出来ることであつた。人は、互いに利害關係を持たぬ時は、皆好意的になるものなのだ――それは、伊作の常に変らない信条であつた。

まず、伊作に与えられた仕事は、小さなこけし人形を入れるためのガラスのケースを造作することであつた。それぞれ形どられたガラス片を、良質の糊で組み立てて行く。

「子供にも出来る仕事なんですが、ちやうど手不足をかこっているものですから、しばらく貴方にはこの仕事をしていただきます。」

工場主任の言葉に、伊作は何の抵抗も覚えはしなかつた。子供にも出来る仕事。それは伊作をかなり見くびつた言葉には違いないが、やはり、他目には老いた伊作に一人前の仕事を与えるには、心もとないと映つたのに違いない。もうそんな年なのかという哀れが伊作の胸を先きに打つた。

言葉どおり、それはたいした仕事ではなかつた。伊作よりも十ほど若い女性が一通り要領を説明してくれただけで直ぐに覚えられ、伊作のかなり能率のよい仕事ぶりを彼女は褒めた。

その女性は、朝伊作の姿を見て、同僚と顔を見合わせていた中の一人であつたが、伊作に対する彼女の態度は、思ひのほか親切で、伊作の受けた印象を変えた。

彼女の名は、室田と言つた。彼女自身が名乗つた訳ではなく、又、伊作が尋ねたのでもない。周囲がそう呼んでいるのを、伊作は覚えてしまったのだ。少々小太りはしていたが、いかつい感じ

は少しもなく、手仕事を小まめに運ぶ動作がいかにも自然で、言ってみれば、室田は、小器用を要求されるそんな仕事をするにふさわしい女性であった。

伊作の受けた彼女の印象は、伊作をほのぼのとさせた。

その日、雨は正午少し前に止んで、帰りは雨傘の必要がなかった。晴れ間が覗きはじめると、空気が冷たく澄んで、少しある風の中を、伊作は一人黙念と歩いた。

老いの佗しさが、今日一日でかなり緩和され、内部から、何か新しい得体の知れぬものが湧き上がって来て、それが、伊作の空虚な心の中にやわらかく浸透しはじめて来たのを伊作は感じていた。それを分析しようなどと伊作は考えない。そのやわらかさの中に浸っていることの方が安らかで、うれしいことだった。

セントロへ向かう帰りのバスは、洗うように混んでいたが、間もなく下車した客の直ぐ後へ、伊作は座を取ることが出来た。

疲れが一時に出て、白髪が目立ちはじめた頭を後ろにもたせかけて、伊作は目を瞑ぶった。絶え間ない車の騒音が、こびりつくように耳柔を圧迫し落ち着かない。通路を過ぎる客の足が、男といわず女といわず絶えず伊作の膝を押しつけて来て、息もつけぬほどであった。

伊作は目を開いた。隣りの席に若い日本人が居てそのことに気付かなかった自分を、伊作は不思議に思った。

伊作は、若い男の横顔を見た。この国生れであることを直ぐに感じさせる表情をしていた。伊作の視線を感じると、若い男はち

らっと伊作の方を見て、それから急いで窓外へ眼を走らせた。

息子の年代であるその男に、伊作はかすかな親しみと懐しさを感じた。

セントロに近づくにつれ、乗客の数が減って、立っている者は殆ど居なくなっていた。辺りはすでに暮色が立ちこめ、初秋の冷やかさが半開きの窓から勢いよく飛び込んで来る。伊作は窓を閉めた。

久しぶりの労働で、伊作はかなり熟睡出来た。眼を覚ました時はまだ暗く、隣りの学生の安らかな寝息きが、さわるように耳に入ってくる。通りを車の走る音が滑べるような余韻を残して、それがひどく佗しく聞えた。同居の不自由さから、電燈を点けることも出来ずに、暗闇の中で伊作は物思いに耽った。死んだ妻の顔や、息子の顔や、息子の嫁の顔や、それから、なぜか室田の顔まで、何の脈絡もなく浮んでは消える。妻の死から今日まで、生涯にない生活の変化が、精神的に伊作を極度に疲労させていた。

もう愚痴を零してもはじまらないのだと伊作は考える。手数をかけて育てた子供といえど、結局は親の意のまゝにならぬものなのだ。たった一人の息子に、我が身の寄り所を求めている自分が愚かしいと言えばそれまれのだが、所詮肉親愛など、他人の浸入によつて思いもよらないほどの脆さで崩されてしまうものなのだ。

伊作は息子と息子の嫁を、今さら恨んでみても仕様のないことだと思う。この広大な土地へ、両親を置いて一人で渡って来た自分の過去を考え合わせて見れば、今、息子が、伊作を離れて自分達

の思うように進んで行くことは、当然許してやらねばならないことなのである。日本人のあの犠牲的人情を、ブラジル生れの子供に要求してみても、彼等は戸惑うだけなのだ。身寄りの少ない移民の感傷性だけで、息子達を非難していた今までの自分を、伊作は悔いはじめる気になっていた。

どこかの部屋から時計のベルが鳴って、伊作はふとわれに返った。

夜が知らぬ間に明けていた。

風の少しある晴れわたった朝であつた。そして、しばらくそんな朝が続いた。

朝、何かを待ち構えるという気分が、久しく伊作の生活から消えていたのに、近頃それが忽然と意識されるようになったのは、多分室田のせいであるらしかった。室田のやわらかさを心の空洞に押し込んで見ることは、伊作にとって、すでに何の背徳感もない。孤独の中で溺れていた伊作は、無抵抗にそれを許容出来た。

こゝ数日で、伊作はかなり室田に近づいたような気がした。決して意識的なものではなく、老いの身の寂寥の中に、室田はやわらかく入って来ていたと言う方が正しい。室田が伊作を好いてゐるとはさらさら思わないし、又、そうあつてほしいとも思っていない。とにかく、新しい生活の中に新しい感情が芽生えたといふことだけで、伊作は充足感を持った。恋の愛のと言つてみても、その言葉自身、ひどく伊作の充足した感情からはほど遠いものの

ような気がするし、それほど自分を若返らせようとも思わないのだ。近くにいて、その暖かさに触れじっとしていたい老いの心境が伊作に生れていても、別に不思議なことではなかった。

総じて、室田は口数の少ない女であった。だが、泉の底から湧き上がるような微笑が常にあつて、それが伊作に向けられる時、伊作は我にもなく戸惑いを覚える。その微笑が、誰れ彼れにも同じように向けられ、決して伊作だけにという種類のものではなかったにしても。

他の多くの人と違って、室田は伊作の身の上を自ら聞こうとする態度を見せない。過去のことなど煩わしくて伊作は多くを語りたくはなかったが、なぜか、室田にだけは聞いてもらいたいという願望が、かすかに心の底でくすぶっていた。

或る晩、伊作はこんな夢を見ていた。少年は、草の花を持った手で少女をその場に横たわせた。そして、黒いやわらかい少女の髪と白い、無邪気ない顔を、その花でやさしく小刻みに愛撫していった。

少年の澄んだ瞳はひどく緊張していた。

甘酔っぱい匂いが少年と少女を包んだ。それは二人の無垢な心の中まで濠み込んで、幼い体をほてらせた。

少年は怯えるような眼差しで少女を見守うた。林の葉影がヒラヒラと少女の肌で踊るのを見て、それが幻の世界の可憐な妖精の舞う様に見え、今にも少女が立ち上がって、天女のように空中に舞い遊ぶのではないかという幻覚にとらわれた。

少年は自分の手がかすかに躊躇うのを焦躁しく思った。少女の薄く開いたやわらかい瞳の中で、無邪気に鼓舞する淡い光りが、何の屈託もなく少年を捕えて放さないのだ。

得体の知れぬ渦が少年の体内をよぎりはじめた。それは少年の意識の外で次々に荒々しく、体を縦横に駆けめぐって溢れ出ようとする。

少年は最早や自分がせねばならないことが何であるか解り始めていた。

少年は躊躇いがちに、いつの間にか自分の意識の中に入って来ていたそれを、白い無垢な少女の肉体との接触を通して試みようとした。

少年の荒い息使いに触れながら、少女は、夢の中を彷徨うように両手を広げ、少年の強い力に自分の全てを任せた。

その直後、伊作は夢精した。そして、伊作はこの年になって夢精したことを恥じた。そんな現象を思いもしなかったのだ。だが、長い間覚えのない生々しいその感触はある意味で伊作に喜びと勇気を与えるに充分なものであった。

冷やかな汚れをそのまま放置し、闇の中で伊作はもう一度夢を追った。だが、目覚めた直後、すでにその夢は朦朧となって、伊作の脳裏にはつきり再現することが出来なかった。ただ、夢の中の少女の顔が、少女でなくどうしたものか室田の顔になって、闇の中に踊った。

甘美な夢の匂いがにわかに曇って、それは伊作の意識の中で不

透明に沈澱しはじめた。

夢の中で室田を犯したということを、伊作はひどく気にした。夢が潜在意識の表われであるなどと思いたくはない。今まで、室田は精神的にのみつながっていたはずだし、これからもその域を離脱しようとは思わない。それが、例え、夢という形で現われたものとしても、自分が室田と肉体を交えたことに伊作は強い嫌悪を感じた。

憂鬱な朝であった。

下宿を出てからもその嫌悪感は離れず、垂れ下がる雲のように伊作の心を重くさせた。そして、その日、室田が仕事を休んだことに伊作は妙な蟠りを持った。

室田の身を案ずる以前に、夢のことがまず念頭に浮んで、その不埒な夢が室田に通じて、それが何かの形となって原因となり室田は休んだのではないかなどと、突拍子もないことを伊作は真剣に考えてみたりした。実際そんなことは馬鹿気た、有り得べからざることに達しないが、偶然といえるほどに附合があつて、それを一笑に付すことが伊作には出来ないでいた。

室田のいない仕事場は、何か寂漠とした空気が漂う。同室内に常に四人の従業員が居るのだが、室田を除いた二人は日本語を話さない少女で、伊作とはあまり馴じまなかった。室田は、かなり流暢にブラジル語を話して彼女達と親しんでいた。だから、伊作は室田を通してのみ、時々彼女達と口を交わす程で、直接双方が話しかけて行くことは、今まで一度もなかった。室田が欠けた場合、

伊作と彼女達の間に深い溝が作り出されるのを、伊作は初めて意識した。老いと若さの違いから来る溝なのだろうかと思った。それから、或いは「一世」「二世」から来る永遠につながりのような溝であるのかも知れない

とも思った。息子が親元を離れて他州へ出て行ったのも、もしかしたら、この「一世」と「二世」との思想的につながりにくい断層ゆえのものではなかったろうか、と伊作はその時ぼんやり考えていた。

室田が結婚するという噂さが伊作の耳に入ったのは、その日のうちのことであった。

屈託のない工場主任と、同室の二人の女の子との会話の中で伊作はそのことを知った。工場主任は怪しげなブラジル語を交えて多くを日本語で話すのだが、彼女達は聞くことだけは解るらしかった。

「ムロタサン、バイ・カザール??」

一人がいかににも意外だというふうに言った。

「バイ・カザール!!!」

もう一人の女の子も同じ言葉を言って、それから二人で顔を見合わせ、小さく笑い合った。

「金持のじいさんらしいぞ、どうだ君達も」

「エウ、ノウ」

「ハハハ」

「クワンド？」

「さあなあ、だけど、室田さんはもう仕事には来ないぞ」

「ご結婚なさるんですか」

それまで黙っていた伊作が、喘ぐような口調で主任に問い直した。

「そうらしいですな。昨日、そんなこと言っておりましたから」

「そうですか。ご結婚なさるんで……」

「この年令で皆さんにそんなこと言えたものではありませんから黙って止めさせて頂きますが、家庭の事情でということにして、主任さんの方からどうぞ皆さんによろしく言ってお下さい。ということでしたよ。まっ、せいぜい皆で心から祝福して上げましょう」

「まだ、お若いのだし、多分、それがあの方の幸わせの道なのでしょうね」

ふいに侘しさが弧形を描いて伊作を包みはじめた。ひそかに築き上げて来た小さな城が、今、伊作の胸の内でコトコト崩れはじめて行く。それは、川辺に築かれた砂の城のように、はかなく崩れ、流されて、心の底に重たく堆積されて行った。

「二人居る娘さんが近々結婚するらしいんです。まだ、若い身空では、そうになったら再婚するのが一番いいことでしょうねえ。昨日の新聞の広告欄にも、配偶者を求めるなんてありましたよ。六十才の老人ですが、奥地で大きな耕主をしているらしいんです。子供達が皆結婚して親元を離れ、一人残された行く先きの淋しさを考えたら、やはり心を分かち合える相手が欲しくなるものでしょうねえ、わかりますよ、その気持。そんな人に室田さんのよ

うな存在はありがたいというものですな、実際」

主任の言葉は、あくまでも、他人事で無感動であり、多少、無責任な揶揄が含まれていた。室田と同年配のその主任に、伊作や、女の室田の心境がどれほど理解出来るものだろうか。いや、よしんば理解してみたところで、主任の口から出るその類の言葉は、単なる興味を呼ぶ程度の噂という形でしかないのだと伊作は思った。

かすかな義憤が胸の内に湧き上がった。それが、主任に向けられたものなのか、室田に向けられたものなのか、或いは、自分自身に向けられたものをのか、その時の伊作には区別がなかった。ただ、伊作は、萎縮した胸の内でもやみと混乱しはじめた重圧に、己れの思考が麻痺されていることだけを感じていた。

終

第八回全伯川柳大会

目伯毎日新聞主催、ぶらじる川柳社後援の第八回全伯川柳大会は九月七日、日毎社サロンで開かれた。

ぶらじる川柳社は、早くから、日本、北米その他中南米各国にある川柳社と連絡をとりさかんに交流している。その為、毎年の大会は、国際的な趣きを呈している。また近年に至り、コロニア川柳は復興期を迎え、各地方吟社も際立って活発な動きを見せている。それに、新旧川柳論に関する論争などもあつていよいよ活気を帯びてきた。

本大会も年々盛大して、各地方からの出席者もふえ、川柳推進の為の意見発表、新規提案などもあつて、その熱意の程をうかがうことができた。

- ・ 大会出席数、五十一名
- ・ 大会投句者、百六十名
- ・ 大会投句数、四百九十句、
- ・ 席題（種）投句数、百二句・大会特定選者、安村玉泉、岡村鈴蘭、小野蛭人、水野浩史、北米、国次史朗、三上茶里、岡田柳華、西岡南月坊、日本、曲線立歩、時実新子、大嶋濤明、大森風来子、高木夢二郎、山林寛、渡辺尺蠖、・国内全投句者互選成績一位30点、伯国、重かった停年までの手弁当、佐野きよ平、二位26点、米国、二言で済む真実へ嘘重ね、佐藤美代子、二位26点、日

本、葦いつか流れに生きる智恵を知り、佐々木虻夢、

・席題、種（たね・しゅ）主催側出題一位16点、青い眼の孫に
人種を越えた愛、勝原文枝、

二位13点、戦争の火種を埋めた地の平和、藤田蚊奇智、二位1
3点、共稼ぎ明るい希望の種を蒔く、富吾剣磨

・特定選者による総合得点1一位23点、日本、佐々木虻夢、二
位21点、伯国、安村五泉、三位20点、伯国、宿屋丙坊、

（緑）

座談会

コロニア作品の質と作家の創作姿勢

座談会（1）

「コロニア的善意ある批評は作者にとってプラスかマイナスか」

出席者（発言順）

尾関興之助（「パウリスタ」文学賞選考委員）

清谷益次（「農業と協同」文学賞選考委員

木村義臣（「パウリスタ」文学賞選考委員）

宮尾進（「農業と協同」文学賞選考委員）

武本由夫（「コロニア文学」編集部）

戦前のコロニア

文学運動について

武本「今晚は、ごくろうきまです。まだ鈴木悌一氏がみえていませんが……いつものことながらコクジに奔走しておられ、あるいは欠席かも知らないので……」

尾関「忙しいんだからな、そのうち来るだろう、始めたらどうかね」

武本「それじゃ、ぼつぼつ始めて頂きます」

清谷「と言って、食べる方かね、しゃべる方かね。」（午後七時半）
武本「食べながら、しゃべりながら……最初に、コロニアの文学運動について、移住初期の頃から取りあげてください。」

木村「初期時代といえば、短詩型だな、（飲み物を注文する）

宮尾「木村さん、セルベージャでいきましょう。強いのでいくと、木村さんは“バカヤロウ”で話が終わっちゃうからな。」（笑）

清谷「短詩型といえば、戦前の“ブラジル時報”が果たした役割りは小さくないと思うんです。僕、去年椰子樹百号記念号に“新聞歌壇のたどった跡”というのを書いたんですが、その時、戦前

の新聞を調べてみて、そのことをつくづく感じたのですが……。」
届関「『時報文芸欄』ね。短詩型ばかりでなく、時報は文芸に大きく紙面を提供したな。そして、時報といえば、それを根城に文学運動をおこした古野さんの活躍を思い出す」

清谷「古野さんの前から、時報では、鈴木南樹、野崎舟人、今井白鷗などが、さかんに詩や文章を発表しています」

木村「おれは、時報の競争紙『日伯新聞』やっていた。短歌の菊治、俳句の圭石、これは、おれのおやじだが、質的には、あの当時として高かったな」

清谷「『日伯』の文芸欄はスマートだったですね。」

尾関「僕は、『聖州新報』で、いわゆるコロニア文壇に乗り出した。『聖州』のバウル時代だ、送る原稿はみな載った。それから、翻訳ものを目伯に持ち込んだ。これも文句なく載せてくれて、大いに自信を持ったよ」(笑)

木村「あの頃、モノを書くということは、文学運動などというしがつめらしいものじゃなくて、実にたわいの無いものでね。新聞そのものも、文芸には、余りウエイトをかけていなかった。その時代に、時報が、文芸欄に力を入れたことば特筆に価する。これは、古野や念腹の功績だな」

武本「そうですね。戦前で『文学運動』と名のつく運動をおこしたのは古野さんですね。」

尾関「何しろ、原稿料というものをくれたからなあ。時報から、五十ミルとネクタイを貰った。」

木村「あの社長、アメリカからの転身組でハイカラだったんだな」
武本「ぼくも、古野さん時代に懸賞小説二等入賞で八十ミルだが、生まれてはじめて、稿料なるものを貰いましたよ。それがそもそもの病みつき」(笑)

尾関「その頃、佐藤常蔵さんは『農業のブラジル』に寄って、書いてたな」

宮尾「それはそうと、短詩型ばかりでなく、『日伯』にも、初期時代、コロニアで大評判になった小説があつたでしょう。何とあったかな……」武本「『女をかぐ』というのじゃ……」

宮尾「それぞれ、思い出した、福田なにがしの書いたもので、すごかったという……」木村「ああ、あれか、あれは、おれが日伯にはいる前だから、昭和のはじめ頃だな。古い連中の記憶には残ってる筈だよ」

宮尾「コロニア文学運動で、古野さんが、一つのエポックを作ったわけですが、その以前は、どうなんですか」

木村「古野以前にも、明確ではないが主として短詩型運動の方であつたな。」

清谷「鈴木南樹さん、香山公孫樹さんそれから野崎舟人とか坂井田南州とかいう人が、短歌や俳句を發表しています。」

武本「しかし、彼らは、文学運動は起こさなかつたですね。他の人々に呼びかけなかつたでしょう。」

木村「彼らは、みな一匹狼だからな」

武本「コロニア最初の文学運動といえば、これも主として短歌俳

句ですが、アリアンサ移住地で、一九三一年に、圭石、菊治を中心とする”おかぼ”という文芸誌が発行されました。コロニアの活字印刷の文芸誌として、おそらく、これが最初のものだろうと思います。僕も、それに所属して、出発したのでした。」

”地平線”と”よみもの”

北島文子のことなど

宮尾「そうすると、アリアンサは、コロニア文学の水源地みたいな所だな。」

尾関「アリアンサというのは、日本直来移住者の作った村で、インテリ移民が多かったわけだ。コロニア文学の源流ということも、大いにうなづけるところがあるよ。」

宮尾「銀ブラ移民なんて言われたからな」

木村「君のおやじもアリアンサだ。アリアンサ建設の親王永田稠は、村作りに当って、”コーヒー作るより、人を作れ”と言った。そこから、短歌の菊治、俳句の念腹、圭石、それに続いて行方、武本なんてのが出てきたんだ。チエテ、バストスなども、同じ頃できた移住地だが、文学は生まれなかったんだ。」

武本「だが、金もうけは駄目でしたね」

尾関「士族の商法をやつだよ」(笑)

宮尾「アリアンサから出た文学、あるいは文筆関係といえ、まだいますよ、鈴木悌一、内山勝男、目黒はるえ」

木村「内山は腰かけ程度じゃないかな。そういえば、河野銀生もアリアンサ出だな。数えたら、まだまだいるだろう。鈴木悌一みたいな変わり種もいるな」

尾関「あんただって、そうだよな、昔は、ダンディで、すっきりしていたよ。あの頃、酒なんか飲まんかったんじゃないかな、墮落したもんだ」(笑)

木村「バカヤロウ」

宮尾「そろそろ始まったぞ。」(笑)

武本「地方の植民地にも、青年会々報の文芸欄、短歌俳句の同人誌といったものが謄写版でいくらか出ていましたが、全伯的な文学運動とまではいかなかったようです。やはり全伯的に呼びかけたのは“地平線”ですね。」

木村「新聞文芸欄を庶民の文壇とすれば、地平線は貴族文壇といった格好だな。当時としては高踏的だったよ。”地平線”の創刊については、知さん(半田知雄氏)がよく知ってるよ。少なくとも、青野、半田は、コロニア文学運動の展開について、意識的なものを持っていたと思うな。」

尾関「そう、あの頃古野さんも、よく我々に相談を持ちかけてくれたからね今頃はサツパリだがね。」

清谷「アンドウ・ゼンパチ氏も、やはり地平線でしょう」

木村「いや、彼は専ら政治の方だったな。文学に関しては、一緒にやってた鈴木悌一が、あんな文学音痴はいないといってサジ投げたんだからな。(笑) 古野が“地平線”をはじめたのも、コロニ

ア文学が、単なる移民の心慰め、郷愁をいやす為のものになってるのを不満としたからだろう。」

武本「“地平線”がつぶれて、その後、古野さんは、コロニアの文学運動というものに見切りをつけたんじゃないか、という気がするんですが……」

宮尾「コロニア文学第一号に、前山が“地平線の時代”の中に、『古野氏は挫折した』というようなことを書いた。僕は、やはり、古野さんは挫折したのだと思う。挫折というのが悪ければ、コロニアの泥にまみれることを避けたと言える。“地平線”がつぶれたところから先、古野が当面した問題は、彼個人の問題ではなく、コロニア作家のすべてが当面してきた問題だ。例えば、作品を発表するに当って、どこに目をむけるか、どこを目標として文学するか、という姿勢の取り方がある。日本に目を向けるか、コロニアの読者を対象とするか、どちらかを度外視するということになるんじゃないか。」

尾関「そうかなあ、書くことの外に、そんな姿勢も必要なのかな。」
宮尾「それは有りますよ。」

武本「目ばかり日本にむけていても、足元をおろそかにしては、いけないんじゃないか。コロニアを追求し、文学するということの上に立っておれば、どこへ目をむけてもいいのじゃないか」

宮尾「少々達者になるか、さっぱり認められないということになると、すぐ日本へ目を向ける。泥にまみれることを避けようとするんだな。木村さんなんかも、そうじゃないですか。コロニア文

学なんて、その泥臭さが鼻について仕方がない、といったぐあいなんでしょう。」

木村「おれは、アリアンサに入植してマツトを見たら、こりやかなわんと思ったな。それで、すぐサンパウロに出てきた。」

宮尾「だから、コロニアから言えば、あんたは、所詮エトランゼなんだ」

木村「そうだ。だが、それで悪くはないだろう。」

宮尾「良いとか悪いとかいうことじゃないんです。それは、ある意味で、木村さんの純粋性を表わしているとも言えるんです。裸足で泥の中を歩きたくないというのは、大正の良き時代に育ったインテリだからですよ」

木村「そりゃ公式論だを。おれには、その全部は通用しないよ」

尾関「つまり泥臭い地点で文学をひっかきまわしていいってことだな、宮尾君の言うのは」

宮尾「コロニア初期の文学は単なる郷愁の文字であって、コロニアに没入して、何かを生み出そうとしたものではなかった。その点、戦後の人たちの方が、むしろ、コロニアから何かを掘み出そうとしている。しかし、彼らにも、その先には、日本の文壇がある。それはいいとしても、日本への関わり方に問題が出てくると思う。」

尾関「まず、コロニアをアツと言わせるか」

宮尾「コロニアには”アツ”ということはないんだよ」

尾関「そんなことないだろう。『三匹の蟹』で、僕は”アツ”と

いったじゃないか」

宮尾「あれは、日本で“アツ”といったからこつちも“アツ”と
いったんだ。」

尾関、木村「ノウ、ノウ、そら違うな」

宮尾「じゃ“井戸”はどうなんだ。追体験の物語として、アツと
感心した。」

木村「そんなことはない。」

武本「井戸は、追体験の物語であつたとしても、それだけで、“
井戸”を買つたのではないはずです。」

清谷「僕は近頃思うんだが、コロニアの小説が、段々都会化した
ものになっているんじゃないかと。作品の主人公の性格設定など、
ブラジルでなければならぬという必然性が薄れている。また舞台
がロスアンゼルスでもトウキョウでも、内容は変わらないといっ
た感じになってきている。こんなに思うんだが、どうだろう。コ
ロニア人が都会化してきたので、そういう作品の多くなったこと
もうなづけるのだが、不満に思うのは、まだまだ移住者としての
問題が書き残されているのではないか、コロニアには、掘り出さ
ねばならぬ問題が、沢山あると思う。うまい作品でなくても、もっ
と、そういう問題を掘り下げて書いて貰いたい。」

尾関「だが、拙劣じゃこまるな。」

清谷「それは、秀作にこしたことはないが、移住者または、その
子孫という影のうすい主人公の登場がふえることは気になるね。」
武本「話題を変えますが、“地平線の時代”が過ぎて、戦後、短

歌俳句は、戦前にも増して盛んになってきました。ところが、散文の方は、それ程ではないといわれています。だが、戦後にまず起ったのは“よみもの”の時代です。戦後、日系読書界の空白を埋めるため“よみもの社”が娯楽雑誌“よみもの”を発行した。そして、文学作品の懸賞募集に乗り出したわけです。そこから、“つつじ”とか“野生”とか“樽”というような作品が生まれしました。この“よみもの時代”について……」

清谷「尾関さんは、“よみもの”に関係があつたんじゃないですか。」

尾関「僕は“よみもの文学賞”に二回目から審査に参加した。斉藤広志さん、北島文子さんなんかとね。」

武本「この辺で、作家としての北島文子を評価してください。」

尾関「“新青年”に彼女の作品が載った。アマゾン産の毒草をつかった殺人事件を書いたもので、一種の推理小説だったな。大して感心しただけ栄えでもなかったが、“新青年”に載ったというだけでも、当時のわれわれとしては、目を見張ったな。」

清谷「雨の降る夜に行く女を描いた短篇が、僕の印象に残っています。いい作品でしたよ。」

宮尾「彼女の作品集は？」

清谷「宮城松成氏が出版しました。」

武本「木村さん、どうですか、北島文子は」

木村「ぜんぜん認めないな」

武本「これは困ったな。」

木村「認めないというのは、彼女の作品だよ。てんで甘くて、まだまだ文学としては幼稚なものだ。しかし、人間としての北畠文子は買うね。なつかしい人だよ。」

賞の設定でコロニア文学は向上したか

武本「戦前のコロニア文学で時間を取られましたので、少し次を急ぎます。”よみもの”の時代から”パウリスタ文学賞”に移り、続いて”農協文学昔が設定され、今日まで、二つの賞が並んで、コロニア文学を盛りあげてきました。文学賞の功罪というか、果たしてきた役割りについて……」

清谷「”よみもの”が中断したのち、パウリスタ編集部が創作を募集したら、二十五、六篇集まった。それがパウリスタ文学賞設定の母体になったわけで、この時、原奈保子さんなどが登場した。」

木村「パウリスタ文学賞、まあ賑やかしだなあ」

尾関「いいの、そんなこといって……パウリスタ文学賞の設定は、ずいぶんコロニア作家の創作意欲を刺戟したと思うな、僕の印象に、一番強く残ってるのは、春日健次郎の”渴情”だ。その前に藪崎の”路上”に、”注目した。あれ読んだ時、いよいよ本格的なコロニア小説が出てきたと思ったよ」

武本「木村さんは」

木村「何もねえな、やっぱり”路上”かな」

尾関「“よみもの賞”の『牛糞』、コロニア文学に再録されたのを読み返してみたが、やっぱり良かった。その他、島木史生の『流れは遠く』、それから、こんなこというと本人が増長しては困るけど、田端月詩の『赤道を流れる河』は面白かった。」

清谷「原奈保子は、どうですか」

木村「彼女はなかなかうまいんだが、まだ決定打がないな」

尾関「決定打がないといえば、星野良江も、そうなんだが、今度の九号に載ってる星野のはいいよ。うまくなったなあ」

清谷「“よみもの”に載ったので、『青い山脈』とかいうのがあったが、僕印象に残っています」

宮尾「どうも、むかしの作品に印象深いのが多いようだな。その頃の作者は一発屋だったかも知れないが、長い間テーマを温めていて、書くようになったら一生懸命だ。だから、その熱意と発酵密度の濃厚さが読者の胸を打つわけだ。」

尾関「“よみもの”では『牛糞』『野生』などが良かったね」

清谷「“野生”の方が“牛糞”よりいいんじゃないかな」

尾関「いや、僕は“牛糞”の方がいいと思うな、がっしりしていいね」

武本「その二作は、文学というものを強く踏まえていますよ。本当にコロニアの内部から生まれたという感じを持っています。ところが、戦後に来て創作を志す人たちの中には、コロニアを客観的に見て、内部をえぐり出そうという姿勢を持っています。創作態度としてはこれが本格的だと思うのですが……、まだ、水準が

高くないという憾みがあります。」

宮尾「むかしのは、生地のままを作品にしている。だから一発屋で、幾篇もは書けない。自分の体験範囲を出て、創作するとボロが出てくる。ところがさつき武本んが指摘したように、戦後に来た青年たちのは、そうした生地のままを作品化するのとは違った姿勢をコロニア文学の中に持ち込んで来ています。こうした雑多な要素を持つ作品に対して、コロニア的善意で暖かく包み、励ますという批評の仕方について、僕は近頃疑問を感じているのだが……。それが、どこまで作者の志向する文学を助長するか。作者にとってプラスになるのか、むしろ、作者を甘やかし、あいまいな立場におい込むのではないか、そういうテ恐れも感じるわけです。大体“コロニア文学”を十号まで、仲よく発行してきた善意なるものの実体は何か、この辺で……。、（宮尾氏、次第に演説口調になり、熱を帯びてくる。出席者一同、まあまあと制止）

木村「まあ、結局は、コロニアの文学も、コロニアから出て、ユニヴァーサルな指向を持たねばならぬ、ということだな」

清谷「それですね。文学の深みにおりて考えれば、いわゆるコロニア文学なんていう特殊な名称で呼ばなければならないものは無いということですよ。」

宮尾「僕は、そういう考え方と、現実の作品とのへだたりをコロニアの批評家は、善意で埋めたいと言いたい。そうした善意を、僕はナンセンスだと思うのだが……」

尾関「だが“コロニア文学”を十号まで通読すると、少しずつで

はあるが、作品に進歩の跡が見えることも事実だよ」

宮尾「十号まで、続いた。そんなことは、どうでもいい。三号でつぶれたとしてもいいんだ。」

武本「十号まで来たということは、純粋な意味での“文学”に関わりはないのかも知れませんが、文学基盤として、それだけの要素をコロニアが持っているとういことの証拠です。だから今あわてて結論を出すこともいらないでしょう」

宮尾「僕の言いたいのは、十号まで来られたことを支える要素、即ち暖かい善意なるものが、どれだけ作者のプラスになっているか、ということなのだ」

尾関「僕は、そんなに暖かくはないつもりだが……。それは君の言うように、いつつぶれてもいい、しかし、作者は伸びている」

宮尾「いや、伸びていない」

尾関「のびている」

宮尾「いない、厳しさが足りない」(少々エキサイトして来て、他の出席者は沈黙の状態)

日常生活が短詩型に結び

つきやすいということ

武本「この辺で話題をかえて、コロニアの文化意識と文学運動という方向にいきたいのですが、まず、短詩型との関係について」
木村「どうも、意味がよくわからないが、索漠とした移住生活の

精神的な面での支えとして、文学が発生した。それは、まず短詩型だったということ、それを論じるか。」

宮尾「それと、コロニアの文化といえば、絵画、体育などがある。それとの関連も持ち出すことになる。」

清谷「短詩型文学は、コロニアでは、散文の果すべき役割を幾分にはない込んで果たしていると思われるふしがあります。」

宮尾「コロニアの日常生活の構造が、俳句とか短歌に結びつき易い。小説も俳句短歌と同じ制作態度で、創作されている。だから、至極安易なわけだ。コロニアの欲求不満が短詩型にむすびついてる。小説につながるとそこに大きなギャップが生じるんだ。」

清谷「事実、短歌作者の中には、小説を書くような態度で、短歌を書いている人もある。それに、短歌には、抒情の面で、私小説に通じるものがあって一応文学するという気持ちを充足させるものがあるんです。そこに、短歌から散文に転向しにくい要因があると思われます。」

宮尾「日本でも短詩型はさかんだが、人口の割合いからいうと、コロニアの短詩型作者の数は、日本の八倍だといわれている。そこに問題があるんだね（コロニアの文化というものか、文学につながる場合、短詩型つまり、日本伝統の短歌や俳句にしかつながらない。つまり抒情の範囲から出ていないというのは、非常に初原的だということになる。」

武本「ドラマを理解するところについていないというわけですか。しかし、最近そうしたことへの反省が短歌界や俳句界におこって

いるんじゃないでしょうか。韻文学にドラマの復活を希む声はあります。」

尾関「最近のコロニア短歌は、うま過ぎるといった感じだな。しかし、日本的抒情の域から出ない。思想の裡づけがなく”詩”に對して無神経だな」

宮尾「最終的には、それも好みの問題になるだろうが……。コロニア文化といえば、体育も盛んだが、それは別として芸術活動に絵画がある。これは立派だ」

武本「小説への関連は余りはつきりしませんが、絵画論は、短詩型に、相当影響しているようです。」

木村「コロニア一般の文化水準からいえば、芸術への理解は、まだまだ薄い。文学運動の困難さは、そこにある。」

“文学賞をにぎやかし” といったのは、そのことだよ」

武本「“文学賞設定”を、文学運動というのは、テレくさいという……、木村さんのテレから来る逆説」

尾関「そういうところだろうな」

コロニア小説への不満は

どこにあるか

武本「最後に、批評家から見たコロニア作家というのを、この間、作家側から見た批評家というのをやったのですが、かなり手きびしかったですよ。ひとつ、大いに……」

尾関「創作態度が、ともすれば独善的でありまた観念的だな。だから、思想に柔軟性がなく、論理的でない。というのが、一般的な傾向だよ」

宮尾「ものの見方が末梢的だな。全体を観て書くという、視野の広さが無い。例えば、作者側と作品論をやってみても、作家側の言葉は、大体枝葉末節にこだわった論が多い。」

清谷「ある条件の中におかれた小説の主人公の行動が、実に不自然な点が目につく。過去の無い人間というのはいない筈なのに、いきなりスーパーマンが出て来たりすると面くらうね。それに、何といっても会話の拙劣さはコロナ小説の致命傷だな」

木村「描写が下手なんだな、何と説明の多いことか。もっと読者に考えるところを提出しなきゃ、小説としての深みが出てこないよ」

尾関「たとえば“チボー家の人々”のような親子の思想的断層をえぐり出す、といったような作品が出てくるといいんだが……」
宮尾「まず、自分自身をつきつめ、自己との対決ということができなければだめだね。とにかくコロナの小説は甘いよ。安易だよ。それに、小説の中にブラジル人を登場させているが、さっぱり人物が書けていない。みな日本人の尺度で書いている。二世を登場させるが、これも、表面的にしか掴まないで、内面的なところは避けて書くといった具合だ」

清谷「移住者の問題を取りあげれば、必然的に二世を登場させなければならぬ。もっと深く二世の立場や、二世の心情というも

のを研究しなければ、生々とは書けない」

木村「そうだな。それが、コロニア文学の最も大きな欠点だな」

宮尾「コロニアの恥部をえぐり出すという勇気がないから、一応書いていても、みなきれいごとに終わっている」

清谷「気がついていないんじゃないかな」

尾関「気がついていても、つかめないんだろう」

木村「リオにいる小野ね。あの人はブラジル人が書けるんじゃないか。もつとこくのあるものを書かせたいな」

尾関「つかんでる者は書こうとしない。とにかく、コロニア作家は、もつと勉強してくれなくちゃいけないよ。資料をあさるとか足で調べるとか、体験を積むとか、そういう努力をしなけりや、前進しないよ」

武本「大分おそくなりましたから、では、この辺で……」

座談会（2）

地域的制約から脱出し得た文学を

目標は高く、だが足元から積み上げていかねばなるまい。

出席者

（発言順）

島木史生

妹尾三郎

藪崎正寿

醍醐麻沙夫

星野良江

細江仙子

武 本 由 夫

（写真入る）



《細江仙子氏》

《藪崎正寿氏》

《醍醐麻沙夫氏》



《妹尾三郎氏》

《星野良江氏》

《島木史生氏》

小説を書きはじめた

動機について

武本「皆さん、こんばんは、わざわざお集まり頂いて、ありがとうございます。この座談会は、現在創作と取り組んで、悪戦苦闘というところ、少々オーバーですが、作品を発表しておられる、いわば現役の方々から、いろいろお聞きしたい、というので企てたも

のです。

島木「創作から来るストレス解消というわけで、大いにしゃべりますか」

武本「そう願いたいわけで……。思い出とか創作の苦しみとか、批評家へのウツプン、大いにぶちまけて頂きます。そうしたあなた方のことばも、現在創作に志している人々の参考になると思います。まず、どんな動機から創作をはじめたか、処女作の思い出、というようなところから、妹尾さん」

妹尾「僕は少年時代から、映画監督にあこがれていて、青年時代には、それを目標としていました。」

薮崎「それじゃ、ブラジルなどに来るんじゃないかったですな」

妹尾「つい、ふらふらとね。僕が、そういう志望を持ったというのも、芝居とか文楽が好きで、そこからきたんだと思います。それが十六、七才の時、ふと俳句に手を出した。」

醍醐「どうも、ふと、とか、ふらふらとか、妹尾さん、かなり弥次馬的ですね」(笑)

妹尾「実は、小説かいたというのも、それなんです。(笑)、その頃山口誓子に師事して俳句には、かなり打ち込んだものです。十八才の時、友人と三人で“三芥集”という俳句、詩、都々逸の作品集を出版しました。勿論自費ですがね」

島木「わかってますよ。出版社が出す筈ないよ(笑)、しかし、いい度胸だな……」

妹尾「情熱ですよ。幼ない功名心ですね」

武本「創作は何時頃からですか」

妹尾「ブラジルに来てはじめて、何作目かの“油なぎ”が第八回パウリスタ文学賞に入賞しました」

醍醐「創作をはじめたのも“ふと”ですか。」（笑）

妹尾「まあ、そうです。映画監督もあきらめ、俳句熱もさめて、ブラジルに来ました。来る時は、文学とは別に、人生的な希望を持って来たんですが、理想と現実とは、必ずしも一致しません。着伯後五カ年間の欲求不満が、僕を創作にかりたてた、ということでしょうね」

武本「島木さんは……、やはり、こちらへ来てから……」

島木「いや、僕は高校時代から、大学の受験勉強していて、勉強に飽きて、小説を書いてみた。それまで、小説なんかに興味は全くなかったんだが、友達の影響ですね」

妹尾「学生時代には、学友の影響というのは大きいですね。友達に文学好きがいると、ひっぱられ易い。」

島木「僕の友達に井上友一郎の甥というのがいてね、これが文学青年なんだ。いつも小説読んでいる。面白いか、というと、すごく面白いと言うんだな、それから僕も読み出したわけ、それが嵩じて、書きはじめた。おやじは法科を受けろという。それまで僕もそのつもりでいたが、文学に凝りはじめて、文学部へはいりたくなった。おやじに言ったら叱られたね。文学で何だというわけ、おやじは文学なんて知っちゃいないわな。その頃、同じ下宿にいた藤井薫というのが詩を書いていて、ある日原稿を見せた、十五

枚くらいだったかを、それ読んだら、ドキツときた。涙が流れたな、この感動が、僕を決定的に文学へかりたてたといえる。それから丁度熱病にかかったように、文学へ倒れこんでいった。藤井たちと“市井文学”という同人雑誌をやり、それが二号でつぶれ、次に“世紀児”というのをやったが、これも六号でつぶれた。大学で文学をやったので、おやじからは勘当同然、卒業後も、文筆で飯食った。」

薮崎「一応、日本の文学青年のたどる道でしょうね。それからブラジルへ来た。パウリスタ文学賞を獲ったというわけですね」

島木「文学をやるつもりではなかった。叔父の池森に呼ばれ、人生の方向転換を考えて来たのだった。しかし、余りにも身边が索漠としているので、暇をみて、小説を書いてみた。着伯二年目だったが「流れは遠く」がパウリスタ文学賞にはいったというわけ」
武本「今後も、どしどし書きますか」

島木「現在、仕事が忙しくて、なかなかペンを執る暇がないですよ。しかし、できれば、コロニアを題材として、多少骨のあるものを書いてみたいという希望は持っています。」

薮崎「島木さんには期待していますよ醍醐さん、あなたの、そもそものナレソメは」(笑)

醍醐「僕は美術史家になることが志望だったんです。というと、現在のガクタイヤという僕の職業から考えると、とっぴなようですが、実は、大学時代から、画と彫刻をやっていて、音楽は余技の程度に考えていたからなんです」

星野「醍醐さん、絵を描かれるんですか」

醍醐「彫刻の方が本筋なんですが、絵もかきます。一度コロニア展にも応募していますよ」

星野「ちつとも知りませんでした。それが、どうして文学の方へ……」

醍醐「美術史をやるからには、インドへ行ってみたいと思って、渡航方法など調べていた時、ブラジルに居る友人が、どうせ海外に出るなら、こっちに来いよ、と言ってきた。そこで、急にブラジルという国が僕の頭の中でふくれあがった。聞いたり、調べたりしてみると、なかなか面白そうなんです。ま、とにかく日本を出よう。あとのことは、それから考えてもいいだろう、というわけ、こっちへ来ちゃった」

武本「日本では、全々文学に関わりを持ってなかったんですか」
醍醐「全々、文学どころか“オール読物”も読んだことなかったですよ。こちらへ来て、やはり島木さんの言われたような、人生の味けなさ、索漠たる気持ちになっている時、“コロニア文学”が創刊された。何気なく読んでみたところ、そこに“生きる”ということについての刺激剤のようなものがあるんですね。ここに自己追求の手段があったと思ったわけです。それから文学に興味を持ったんです」

薮崎「それじゃ“紺青の城”が処女作ですか」

醍醐「そうなんです。何かの形で、ブラジルへ来てからの精神的な経験を刻んでおきたいと、考えていました。そうした一応の総

決算を済ませて、それを土台に新しく出発したい、こうした気持ちで”紺青の城”を書いたのです。最初三十枚書いて薮崎さんに見てもらったら、ほめられたり、注意をうけたりしました。それに勇気づけられて、書き直して出したのです」

武本「やはり、何回か書き直したんですね」

醍醐「書きはじめてから、書き終わるまでに四カ月、四回書き直しました」

星野「すごい情熱ですね。”紺青の城”以後の醍醐さんの躍進ぶりを見ても、打ち込みかたが違いますよ」

文学することによる人間

形成論と劇作者的創作態度

武本「島木さんは、法科から文科に志望を替えたのも、友人の影響と言われました。しかし、そればかりではなく、内部から求めるものもあつたでしょう」

島木「僕の恩師に前田という方がいます。この先生から”文学による人間形成論”というのを聴いた時、文学をやろうと心にきめたことを思い出します。メンタリテイのない文学というものはありません。只に文学作品を読むのは、いわゆる文学好きというに過ぎない。自分で構成した物語りの中に、自分の創造した人物を投入する。すると、その人物と作者自身との間に葛藤がある。その葛藤の中に人間形成がある、というのです。だから、文学す

るとは、作品を書くということです。何でもいいから、精神の底によどんでいるものを掘み出す。こうした作業の中に、生き甲斐とか、人生の意義とかを見出すのです。」

薮崎「コロニアの時流というか、物質万能の行き方に対するアンチテーゼとして文学を考える。そうになると、余り軽々しく“文学”を取りあげられないですね。“小説”を書くのはむずかしい、と考えている人でも、書けば誰でも書けるものだという気持ちを持つてますね。だから、このへんで、創作とは、そんな安易なものでない、ということを強調してくれる人があつていいですよ。」

醍醐「“コロニア文学”の発足について、武本さんの話では、園尾さんという青年、その他若い人が訪ねて来て、“同人誌”を出そうといい出した。それがきっかけだと聞いています。園尾さんにしても、その他、武本さんや尾関さんを訪問した人々は、その時、小説を書いていたに違いないと思うんです。それで発表機関の必要を痛感して、“同人誌”をという考えが出たんでしょう。だから、必ずしも、コロニアの文学運動をもりあげよう、という者え方ではなかったと思います。勿論文学というものは、そうした自己中心の考え方から行なわれる作業ですが、それが、そのまま、コロニアの文学運動につながっているということに、何らかの意義を見出そう、と思うと、重苦しくなるんですね。僕なんか、個人的な、又は社会的な、一種の憤満といったようなものにかりたてられて、小説のペンを執る、といった具合なんです…。

まだまだ、小説を書く、それがそのまま文学するというふうに考

えると内心少々恍恨たるものを感じるですね」

武本「星野さん、えらく謹聴のようですが、文学に対する、そもその馴れそめは」(笑)

星野「第一回パウリスタ文学賞が募集された時、わたくし、始めて「いわし」というのを書いて応募したのです。小さい時、ブラジルに来て、正規の教育は受けていないので、文学と取り組むなんて、少々おこがましいんですが、少女時代から、モノを書くということに憧れを持っていました。最初は、詩とか短歌とか、短いものをやっていましたが、段々文章を書く方へかわっていったのでした。ちょうど、その頃、パウリスタで募集したので出してみました。今考えると、目茶くちななもので、小説の体をなしてるかどうか、怪しいものでした。でも、選外佳作に人選して、少しはほめられたんですね。それに力づけられて年一回づつ書いて来たわけです」

武本「星野さんは根気よく続けて来られましたか、好きでなければ、できないことですね」

星野「生来、書くことが好きなんです。入賞しようが、しまいが、とにかく書く、書いていけばゴキゲンなんですから、自分ながらあきれたものと思っています」

薮崎「いや、星野さんは、その間に、少しずつでしょうが、文学的に成長していますよ、文体とか、小説の構成とかを着実に、自分のものにして来ていると、僕は見ています」

星野「とにかく、万年入賞候補で…(笑) 恥しいんですが、不断

に小説や評論を読んで勉強はしている積りです。それにしても、自分ながら歯がゆい程進歩しないので、残念なんです」

薮崎「星野さんの小説は、素材を身边に求めて、作中の主人公と作者をダブらせている。いわゆる“私小説”の範疇にぞくする小説で、長所も欠点も、そこにあると思うんです」

星野「わたくし、小説を書きはじめるとき、自分の身のまわりから書いていく、そしてだんだん範囲を広げたいと考えたのです。だから“私小説”であることは、やむを得ないので、そのうち、いつかは、皆さんの取り組んでおられるような、社会性のあるものを書きたいと思っています。私の小説を書く心構といえば、現在は、自分自身を見詰めていくということです。きわめて視野は狭いけれど、そうした規本だけは、いつもはずさない、ということとです」

妹尾「さつきから、“人間形成の為の文学”という論が出ましたが、僕など、それ程、むずかしくは考えていませんね。僕の父は絵が好きで、いろんな絵を買いこみます。しかし絵の芸術性を深く求めるというのではなく、感覚的に、絵の持つ美的要素というものを自分のものとして味わうという行き方なんです。だから、この絵は、どの部屋に調和するとか、あの絵は、このサロンに置くとかいうぐあいなんです。つねに周囲との調和を考える。つまり、絵というものを、生活のアクセサリー、という多少語弊があるが、社会的にも人間の営為の効用面に参加するものと見るわけですね。僕は、文学に対しても、そのような考え方があつて

もいいと思うんですが…、つまり、芸術に対する、もっと余裕のある考え方ですね」

薮崎「妹尾さんの考え方は、島木さんとは対蹠的ですね。妹尾さんのように、人間追求というより、生活との関連性において文学を考えるとというのも一つの見識ですね」

妹尾「だから、僕の場合、世話ばなしの中に人間本来の姿を求める。突きつめるのではなくて、写し取る中に、人間本来の姿を見るという考え方ですね」

島木「いえば戯作者の創作態度だな。作家自身楽しんで書くとして、まず読者を楽しませるという考え方ね。前山君がいつか、人間をサイエンスとして調べ、分析し、計算する方法を持つのが社会人類学だというのが、文学の表現方法を借りてやることもできる、といったことがある。それとは態度は違うにしても似た考え方ですね」

薮崎「小説を書くこうとする態度は、各各違うとしても、根本まで追いつめれば、結局みな同じということになるんじゃないですか」妹尾「創作にはいる動機は、余り高くないとしても、その後の心構えいかんで、いい小説が書ける、書けないがきまってくる。勿論才能があるとしてのことですけど……」

日本を絵舞台とするも

まず足場から

武本「ところで”コロニア文学”への投稿者たちは、どうなんでしょう。投稿の態度について、どう思いますか」

妹尾「いいと思いますね。常連の作品を読んでみても、勉強する、習作を重ねていくという態度です。一発でかいところで、というハツタリ気味なのは無いようです」

薮崎「大体に、書くという作業をとおして、文学する、という態度ですね」

島木「習作を次々と書くとして、出しても、出しても、全部駄目だといわれた場合、そこには、作者として割り切れないものが出てくる。すると批評に対する抵抗も生まれてくる、ということになる。この抵抗感を克服して書き読めるか、そこで挫折するか」

薮崎「挫折するのは、作者側の精神の弱さでしょうね」

妹尾「そこに、戯作者根性があれば、挫折しない。余裕がないから、抵抗し、挫折するんじゃないですか」

島木「それなら、いけるだろうが、ゲバ棒、それでいけなければ鉄砲、まだなら機関銃となるともういけない」

醍醐「そうした創作態度というものは、すべて一回性のもので、作者自身が傷つくばかりじゃないでしょうか。例えば、薮崎さんの、”板小屋の来歴”あれを突き抜けて行けば、薮崎さんの、コロニア観というものが、ほぼ完成した形で出てくると思うんです。薮崎さんの態度は、ゲバ棒的じゃないから、次には”板小屋”の上にもっと積み重ねたもののある小説が出てくるでしょう」

薮崎「あれで、実は言いたいことを言っていないません。だから、本

当の作者の本音じゃないんですね。コロニアでは、言いたいことを言うというのは難しいんですね。すぐ、さしさわりが出てくる」(笑) 武本「小説の読み方に対する訓練ができていないせいでしょうか。それとも、コロニアが狭いせいか」

島木「両方だね」

武本「細江さん、最近はおつぱら創作の方をやっておられるように聞いているのですが、いかがですか」

細江「なかなかペンが進まなくて…、わたくし、もともと創作が志望なのでした。ところが、ふとした機会に短歌に踏みこみ、今から考えると、あまりに長く短歌畑におり過ぎた感じなのです。

”コロニア文学” 第二号を見て、創作への関心が強くなり、書いたのが、第二号に載っている”bauerにて”です。」

武本「あれが処女作ですか。それにしても、大分手なれていましたね」

細江「大体、書くことが好きで、小説の形ではないが、短いものは書いていました。短歌を作ってみて、自分の環境に則した見聞とか体験とかは、あの形で表現できることがわかりました。しかし、一つのテーマを持ち、情況設定をした上で、自分の考え方を表現しよとする場合、短歌では不可能なところがあるんですね。それを表現するには小説しかないと思って、ぼつぼつ始めています」

武本「細江さんのような、ドラマチックな短歌を書く方には、小説がむいていると、思っていました。勿論、短歌にドラマは持ち

込めないとは思っていませんが……」

細江「実は、こちらで作りためた短歌を、日本に持ち帰って、「二世」という本にまとめたのです。その時、作品ばかりではさびしいので、間に短い文章を入れました。ところが短歌の方でなく、かえって文章の方をほめてくださる方が意外に多いので……、（笑）わたくし、もつと本気で創作にはいつてみたいと考えたわけです。でも、なかなか難しいですね」

藪崎「やはり、日本で発表される方が、良くも、悪くも反響は大きい。でしょうね。こちらで作った作品を、日本で発表すれば、誤読する読者も多いだろうが、正当に読んでくれる読者も多いわけですね。こちらに、良い読者は百人くらいしかいなくても、日本には一万人くらいいるという具合で……。だから、日本で発表した方が効果的ということになるんじゃないですか」

醍醐「こちらと日本との良い読者だけを目標にして、こちら向け、日本向けと、ふた通り書きますか。（笑）だが、それには、よほど力量がないとだめですね。これは冗談として、僕は、そのようには思わないんです。やはり、こちらで良いと言われる作品は、日本へ持っていくても通ると思います。その場合ただ程度が問題だろうと思うんです。僕など、カミュの“異邦人”を読んで、舞台にアルゼリアが出ますね。僕アルゼリアは知らないけど、“異邦人”が秀れた作品であるということは理解できます」

島木「それは、その通りだよ。”戦争と平和”で、トルストイはナポレオンを書いている。あれを読んで世界の読書人は、トルス

トイの書いたナポレオンとして承認しているものね。あれは違う
本当のナポレオンはこうだ。などと誰も言やしない。本当の文学
というものは、そうしたものを超えたところで、味あわれなく
ちゃならないんだ」

醍醐「そうですよ。コロニアの文学作品も、そうした地域的を制
約を持って読まれる、ということから脱け出たところで読まれる
作品にならなければ」

島木「しかし、コロニアの文学作品も、現在の段階では、日本に
向かなければ、伸びる可能性はないんじゃないかな」

醍醐「勿論、日本が桎舞台として、まず、コロニアという足場か
ら固めていくという考え方が地道ですね。僕に言わせれば、コロ
ニアの作家は、姿勢があいまいだと思う。コロニアにしばらく、
何も不自由な姿勢で創作する必要はないが、何かコロニアに気兼
ねしながら、日本の方へ向いて創作しているという感じですね。
それは、コロニアにいる仲間の鑑識眼というものが信じられない。
日本には自分の作品を解ってくれる人が居る筈だ、という考え方
からですね。でも、僕は仲間に、まず見て貰いたい。彼らの意見
をきき、それを土台として、次を考える、という具合に行きたい
と思います。」

文学的な理解でなくて

共感するということ

武本「つまり、あの人に作品を見て貰おう、その人が良いと言え

ば満足だ、というような人をコロニアに見出さない、そこに、創作姿勢のあいまいさが発するというわけですね」

島木「醍醐君の考え方は、一つの創作過程として解るよ。例えば、古野さんに見てもらいたいと思う。ところが、見て貰うと、ほめてくれない。すると、古野さんは駄目だという。そして、日本の誰それに、と、こうなる、そんな形でいつているのが、コロニアの文学なんだな」

薮崎「コロニアには文学の解る人が少ないという気持ちがある。解るのは、作者と読者との共通の経験しかないというように思う。本当に解るのは日本の読者だ、という考え方です。これが沸拭されるのは、なかなか困難でしょう」

細江「何といっても、コロニアの文学も、日本で勝負するのが本当だと思います」

武本「『コロニア文学』は、それまでの練習場をも兼ねています。勿論、上手とか下手とかは別として、一方に、コロニアの文学作品を記録しておくという使命も持っています……。読者の中には、口を開けば、コロニアの小説は下手だ、下手だという人があります。しかし、下手でも、それが、コロニアの文学水準なのだから、何とも仕方がないので、いたずらに罵倒してさえおれば、上手になる、というものではないんです。罵倒する人もコロニア人なら、その罵倒は、その人自身の上にかえって来る筈です。天に向かつて唾するを止めて、どうすれば、コロニア文学の水準をあげ得るか、ということを考えなければならぬ、と思うんです

が……」

妹尾「作者自身、自分の勉強不足、技量不足を棚にあげて、コロニアの読者には、おれの小説は解らない、などと考えるのも、進歩への足場じゃないね。作者自身、小説のきびしさを知らなければ……」

細江「コロニアだけを舞台と考えたコロニア小説は、文学ということから考えると、マイナス条件にしばられていて損ですね。文学は地域社会を超えたところで評価されるべきものですから」

薮崎「作者の方で規定しなくても、読者の方で規定して、”これはコロニア的でない”などと言う場合もあり得る（つまり、小説の素材とか、筋とかがジャーナリスチックに取りあげられる場合、純粹な意味での文学とは、別の場で評価されることがある。こうしたことも、狭いコロニアで文学することはマイナスと言えるでしょうね」

島木「しかし、コロニアの特異性が色濃く出ておれば”ユニークだ”という評価も出る場合があるだろう」

細江「コロニアというのは、移民社会の発達したもので、当然開拓苦斗物語が、文学の面に出てくる。それはうなずけます。しかし、本当は、その物語を超えたところを出発点とした文学が生まれて来なければいけないのじゃないか。また、ブラジル人との接触も、はげしいのですから、もっと、ブラジル人というものを文学の中で、追究していい筈です。コロニアの小説を読んできると、ブラジル人というのは書いていませんね。そうしたことへの配慮

が、もつと必要だと思います。」

藪崎「コロニアの読者というのは、女房に自作を読ませて、解つて貰う、といった、女房の解り方に似た解り方をして貰えるところがあります。これは文学的な解り方ではなく、共通の生活を持つ者の間にかような共通感情であつて、解るのではなくて、温かく共感するのですね。こういう解り方は、コロニア文学を育てる上からいって、あまりよくないのではないか、と思うね。では、文学的に解つて貰う、といつても、そういう点で信頼できる人も少ないんじゃないか……」

醍醐「とも言えるが、そんなに、文学的に高く評価して貰える作品も少ないんじゃないかとも言えますね」(笑)

細江「どうも”詩を作るよりカフェーを作れ”、というような話になってきそうですね」(笑)

作品よりもよい批評が

出てもよい

武本「そうになったら、この座談会もパーなので……」(笑) 話の筋をたてなおしましょう。一体、あなた方書く方の立場から、批評家を、どう見ているのですか」

藪崎「僕は、批評のレベルは、作品のレベルと同じだと思っています。大した作品もないから、大した批評もないここで、ある作品が出る。すると、作品よりも良い批評が出れば、その批評より、もつとよい作品が出る、という風になれば、進歩するんじゃない

か、と思いますね」

妹尾「よい批評が出るには、まず良い作品の出ることが先決問題だな、どうも、意欲的な作品が出ない。そこに問題があるよ」

細江「作家と批評家との馴れあいがよくないんじゃないですか」
藪崎「いや、むしろ断絶の方が強いでしょうね」

妹尾「僕は、批評というのは余り問題にしないですね。読者が、作品のよいところをよく見て読んで貰えれば、それでいいというふうに考えています」

島木「僕は、そうじゃないな。やはり問題にしますね。そして”わかつちやいないな”と思う」(笑)

星野「わたしは、批評はよく読む方です。認めて貰えない。文学として価値がない、といわれると、それは、あんなに一生懸命かいたのに、とは思います。でも、欠点は欠点として、批評は素直に認めます」

妹尾「こんなのでも通用するのか、と思うような作品がある。それで、結構批評家は通しているんですね。作家は、批評を余り気にしないで、本腰を入れて書くことですね」

藪崎「コロニアでは、まだ、本格的な批評に耐える作品は少ない、と言うのが批評家の見方じゃないかな」

妹尾「作品の長所を引っぱり出す批評が望ましいわけですか」

藪崎「面白くない、と言われると書けなくなる作者も多い、そこに批評のむずかしさがある」

星野「はめてもいけない、けなしてもいけないとなると、批評家

もつらいですね」

妹尾「だから、余りあたりさわりのない文章批評になり勝ちとなる。作家は、文学批評をききたいのでしようがね…」

島木「批評家は、作品が低級だから、いい批評が書けない、というかも知れないが、日本の仲間どうしでやる批評でも、コロニアの批評よりは、もっとましなのがあるよ」

妹尾「そう言ってしまったては…」（笑）

武本「だいぶ、しんらつになって来て、これからが面白いところだと思ふんですが、ずいぶん時間も経過したので、この辺で、ほこをおさめて頂きますか、（笑）。ごくろうさまでした。」

短歌・三〇首

分 蘖（ぶんけつ）

新 納 潤 魚

水源の川瀬を噛みておどる泡枯れゆく山の貴を写さず

おびたゞしき根差し脅ゆる山の樹々やがては冬の簡淨は来む

草の葉も梢もわれも息止めるたまゆらありて鳥も啼くなき

秋空の下ゆく雲の一つとり胸に浮かべて足ろううつせみ

日に一度約果たすごと眸をあげて見る北東に霞む山容

とびあがるチジュの翼白点を見出でし今年の秋の吉凶

針のごとき夏陽に耐えし日々ありき本草と同じ表情をして

吉凶はこもこも来るもさりながら今日はなすびの種子をおろさむ

たゆむなく鍬もて土を斬り裂けで己心の無明いまだひらけず

秋山の枝を拡げし樹々の間に入りゆく無垢の時を欲して

太陽は傾きにつつ内海の白帆をひとつぼやかしひかる

目や耳に把みがたかり海はわがうちの寂寥よりも深くて

丘はみな港に傾斜し泡波はわれの未来によせくるに似る

短歌

蘭の花

南条由喜夫

落葉焼くけむりと我のうつる池水に対して想うこころぞ

ピッサーラの段の瀬洗う水白く荒き流れは落葉呑みゆく

白菊はひと恋ふごとく明るくてこまかく震う秋の日射しに

地下水はいま陽に人に触れておりこの清浄をいく日保たん

さわやかにおのが濁りをぬけ出でて緋鯉真鯉の澄み鎮まりて

掌につつむ程の喜び秋口の暑さ前よりまたうしろより

月光にマンガの秋芽沈みいぬ昼みしよりも”ロマン”の態に

乱れ居る心のいたみ癒えがたくベッドの上に全裸を晒す

柔かき夕光にゆるる蘭の花いのちは愛しかすかのひびき

白炎のごときこの花みつめ居て著しく目の疲るる蘭舎

分 蘖 (ぶんけつ) 新 納 潤 魚

微かなる砂を握りて見はるかす水平線も疲れいるらし

ひとびとにかゝわりもたぬ街路樹の落葉は風にまつわりあそぶ

昼の餉に鯖をつゝきて独りおり秋もふけゆく海をおもいて

いかほどか退化の兆あるものとひそかにつまむ耳柔の冷さ

肯定し否定し慈いつゝ夜ふけ書きつゞりしは線のかたまり

崖の上を歩めるつもりなるなれで歩むは崖の下かも知れず

石と石こすりて悶えの声をきくいつしか秋の闌けし日射しに

隙間なき花にうまりて宿業の悶えを断てる面のやすけさ

永劫にゆきて帰らぬひどのため涙は平仄のまのことにして

堀られたる穴浅けれどおろされし棺は着けり至極の世界

昨日今日秋の日和に苗床を冒せる菌は眼には見えなく

ひと握りの畑の上を掌にしつゝいつか己も握られており

葱などが無限に分蘖とげゆくを信じて明日の日をば待たむか

虚妄感しるき日にして逆毛立て蹴合う無言の鶏を凝視める

おのづから樹格を成して長じたる老樹にむかい心気澄まさむ

鳴る間もアルハッセ畑一面に露のひかるをやすらぎとしつ

日に渴き茜に染まり露にぬれ念はながし砂畑の礫

月夜の幻影

開沼貴代

月光に耀う薄より抽けいでて跳躍るニンフのなびく羅と髪

月の夜のニンフの乱舞に誘われて深さ浄底ゆ脱ける死者ら

頭をたれて潮よりい出くる水死者の薄草まつわる裸身が皓し

抜けきたり呪咀する死霊漁民らが眠り沈まる満月の浜に

月の浜に死霊らの呪咀充ちゆけば怖れてひそむ草木とけもの

死霊らの怨念そそり月光に鴉は邪悪の眼光らす

死者と蟹月光截りて乱舞する丑満時に浪もひそまる

水死者ら呪い狂えば白砂は砂金となりて光り飛び散る

暁近き鶏鳴たてば死霊みな海に消えゆく頭をうなだれて

死霊海に消え失せし汝は何ごともし如く月澄み鎮む

短歌・30首

一 夢

瀬崎 涛声

今にして思えば一夢のごとなり吾が流域の七十五年

うら揚りにおう藻ぐさの生ぐさき海の千潟を歩み来りぬ

先刻まで貝掘りし千潟汐満てりかつて何事もなかりしさまに

泳ぐなく見ていることもまた怡しくつがえりくつがえる無心なる

涛

いまいまし強さが勝ちという言葉現実となりチエコが上にあり

賽の河原の石積みに似てあわれなりみのるやベトナム和平会談

身をもつて無抵抗主義おしえたる神の裔たち砲撃ち交わす

たどり来し七十五年学浅くくやしかりにしこといくたびぞ

町行きて買い来しもらい此の朝の汁に入りいて吾をよろこぼす

黙然と妖気たたえて樹々立てるこの果樹畑のタやみの中

書が窓の視野に一本のびわありて雨ふれば南の風情を見する

雨曝しの干し物きようは朝かぜにはためけるわやよろこぶがごと

伯国を訪いくる国寶多くなり今日は迎うウルグワイ・アレコ大統領

夜 汽 車

陣 内 し の ぶ

すぎる顔無さことせめて救いとし夜汽車は緩くわれを置き去る

影だけを残して去れり疾風のごとも夜汽車のわれを攫いて

すれ違う夜汽車面を剥ぎたれば見せしことなき己れの笑い

髪薄くなりたるわれと気附くとき巡りぼうぼうと猛けりくる夏

七色に輝く棉菓子ねぶりいる貴の眼につづく童話無限に

自らに潜ませていし鬱屈と髪切りてより涼し日々

迫いつむる一途なるもの軀に充たし朝の渚に掘るカニの穴

うつつなに呼ぼるる方に燃えて立つ遮るはなし潮の茜は

年月を経たる哀しみにじませて住み古りし家のそれぞれの汚染

病むわれの心の如く乏しくて闇に蚊遣りの火のうす赤し

閑りの無き日が君に絢われいて唐突に来る或日の孤独

瀬崎 涛 声

町行きの帰るさ手ぐさにして来つる穂に出しエノコロ草の一茎

起きいでて今朝も来りて庭隈に咲ける茗荷の花をいとしむ

この原に競技ありしは昨日にて散れる一片のかみ屑もなき

稀に見る早というに此のミーリヨは羞し紅毛をたれて瑞々し

なにとなく心明るく山の背の夕映ゆるころ町よりかえる

いよよ杳き地上の平和か更にまた中ソ国境に戦雲ただよう

白々とゴヤバ花咲くあしたなりあわれ書が孫初潮見しとう

代表らぬくぬくと会談する間にも無惨なり兵は戦いて死す

草木らも儚きものと門のべの小米ぎくらの立ち枯れを見る

仰臥してかく安静にいるときもおし肥大心臓ひびく

アスパラガス今年も畔に自生して此処を耕せし年処しのばす

知り人の不正の行為顕われぬいさざよしともあわれとも憶う

博愛を失くしてうら捨てられしものいつしか充ちて紙屑籠に

老いごころ何にさかろう風鈴は吹くあらしにもやさしく鳴るに

何故か此のやきばたの枯黍はいまだ収めず草木にうもる

草やぶを出で来て小さき蛾が一つ翔べりと見れば草がくれゆく

夏くさの中にもすがるる草ありて骨なきものか草の世界も

妻と共に

森元三山

秋日射す川の辺りのわが畑に戦後移住の妻と鋤とる

故郷に似ている峡の川に来て身籠る妻と秋日に和む

百鳥の轉る山を深く来てせせらぎの辺に妻と憩えり

山嶺の良く晴れし朝連れだらし足弱き妻の手をとりてやる

紫陽花

貞野雅子

胸ぬちにきざす疼きよ紫陽花の花は厳しくわが前にあり

胸に炎移してゆきしひどのこと告げむとするに静もる紫陽花

門を入れば直ぐに服につく我部屋の窓を蔽ひて紫陽花の花

(俳句・50句)

羽毛の酔

殿岡萩花

智恵の柁車先頭をゆく十二月

歩きながら減る純潔が水菓舐め

音域が花を荒しにわき目もふらず

羽毛の酔未知の泉を溺愛す

ジングルベルジングルベル・死を知るまでは

女泣いてのつぴきならぬひさがえる

巨巖に置く・四十不惑のたなごころ

ななめに飛んで来る黒瞳なり青蜥蜴

夜が軽くてガラス抜け出す熱帯魚

枢車の休憩時間足りない避妊薬

未婚かな尾燈をあやす深海魚

父母霞みたり・喜劇のベルを押す

不落へ一步夕焼の石ころを蹴る

テアトロは消ゆる足並揃う日傘

風を枕・裁判のビルみどりにぬる

嬰が泣いて方向狂う夜の蟻

吾児生れし夏蝶となり煙草買いに

氷菓へらす中年赤き夜の舌

鏡明るし蛇を殺して来た黄昏

夕日を拾う清掃夫・愛を説くよりも

ふか酔いの嬰が立って来る夜の霧

眠る嬰に崖の円想霞みたり

（俳句・五〇句）

月へ一歩

鈴木光威

月へ一步の歴史向うに靴底打つ

たたまれた恋少女野に来て火を放つ

独立祭わが名と欲らずすつくと立つ

どっと野火女内股ひるがえす

扁平足霜を踏みゆく慎重音

咳の向うに神を立たして咳きつづく

枯野牛瞳という由だけ濡らして来

死なげ落葉ときにカサカサ踏まれるため

遠巻きにウルブ旗振る焚火祭

老いてゆく日向ころがる硬貨銭

嬰の拳の鍵で五月の空開く

墓地恋う日レモン垂直に胃に垂らす

チチロの道わが執念を研ぎに研ぐ

午前の意志ざくろが一度に午後はじく

月の階踏む一步一步を振り返り

クワレズマ嘘なき人と崖わたる

宿題を蹴って新涼の野を馳ける

鳳仙花寡婦にはじけて不安な午後

ひらめく悪事冷えの鏡の面をふく

蟹の泡ブツブツ死期へ抵抗す

霧と霧結ぼる接点恋ささやく

ほつほつと木の芽癒着の傷かゆし

桃に両頭弱くて夢流す

春宵の奈落の一語 Nao Querofilho

受胎拒否タンポポの絮吹いている

過去刎ねたき灯や背後よりレモン匂う

菓がふえる野へ垂直に卵割る

蟻つぶす蟻がだんだん柩になる

鳩の晩年とろとろとふるさとを煮て

寺院を吊るす・髪いっぽんの炎天

青パイナだんまり受胎知っている

妻の眉夜明けこんこんと泉鳴る

冬の沖・沖へ木の匙不惑近し

九月かな寝て青空に浮く狂女

夏は来るひそひそ火薬臭い少女

虹が濃くなるポキポキと折るチョコレート

嬰と会話冬青空の雲に乗る

どこかでサンバ・寒夜嬰の乳作らねば

哺乳瓶恍惚と労働祭遠し

雲の軽さで出勤・父となる初夏

父に抱かれて赤児帆となる労働祭

妻に嬰に朝の接吻つばめ来る

妻の爪赤き日の蜘蛛裁かるる

妻には解けぬクイズ滅法柿甘し

タンポポと話したい・嬰を朝から抱く

猩々花燃えて避妊を通さねば

葡萄熟れて崖甘くなる祝婚日
冬木仰ぎ仰ぐするする登る胎児

母の声に覚めて木蓮闇を脱ぐ

書いて消す胎児の名・蝶より明るく

枯普踊れば目をもつもののみな哀し

土管哭く空四方より枯れの音

寒夜に酌む今に来る死期へコップ捧げ

孤独なれば瞼毛の霧へ絶叫す

霧の層刻々多弁たしなめて

大根抜きし穴耳澄ます復活歌

指に告ぐ青葉の祝辞タイプ打つ

麻痺の掌のポンが動くよ咳くときだけ

雲と掌をつなぐ日落葉カラカラ鳴る
夜濯ぎの一人が減れば衷しき音

歳末の胃痛の裏をピエロゆく

独立祭みんなの時計まちまちに

主峯崩れあまたの子雲謀叛めく

白菜揉まれ自惚の水青く出る

青マモン白血垂らす独立祭

酔えば蛇中年バラの芯なめる

机の眼鏡木の芽うつして故国はるか

パイネーラ鶏と婆やがしゃべりゆく

クワレズマ児の指語入れてシャッター切る

ニグラの乳張り鰯雲低くなる

うむはらの言葉を柿の種と吐く
竿先に智慧かがやかし柿探る

「どうにもならん」首姓炎天になきバック

陽炎や亡父の一喝遠くなる

坂駆け来し一葉そのまま焚火に入る

冬空のメロデー皿のもやし伸ぶ

盲の枚木の芽の深さ測りゆく

倖とは何落葉が不意に走り出す

俳句

近 詠

増 田 恒 河

イペー咲く霜に焦げたる樹海中

流箭の如く遠くへ散るイペー

折節に篠つく南と散るイペー

鐘霞む波打の屋根の重なれる

鐘の鳴る塔遠卷きに飛燕かな

わらび野に画架立て絵鼻函開き

夕霞む日輪の朱にふくれつつ

観光に来て海苔を掻く日本人

鳥雲の彼奇へ舵をとるらしき

二世には二世の世界独立祭

逃 水

木 村 要一郎

倅せは妻に我には月涼し

わが引きし山立鍬の大いなる

アロハシャツ着て初恋の彼老いぬ

逃水の中に税関あらわるる

逃水や青年都市の現わるる

噂さもして牧の火虫の大きさよ

秋来りまた秋来り十五年

土地売って夏雲わいて空しかり

ここにまたにわとり部落柿若葉

鳳凰花ブラジルに來し夢捨てず

色 眼鏡

坪 井 柳 念 坊

色眼鏡かけて花卉の色を説き

欲の矢で狙えば心の的が揺れ

因習の扉に日輪照りつける

山分けの誤差に不平の眼が尖り

政治まだスラムに遠い朝を出す

六法の厚みが語る婆婆の悪

合理化の波に押されて世に拗ねる

当惑の視線で迫ってるミニのひざ

人生にぽっかり予約のない訃報

赤色を見抜いてずるさ組立てる

日 章 旗

水 野 渚 史

愛哀し数字の乱舞の中で炎え

人形のしあわせ飢えない口で泣き

弁当の底に都会が冷えている

廃兵の眼鏡に黒い日章旗

テルテル坊主濡れてあかるい明日を待つ

妻よ子よ老いて塵のない雄螳螂

万灯の中で孤独の灯を点す

ふるさとを飾る錦の襷の翳

石なれば石になったで風化する

生き延びた傷に軍歌の沁みる夜

川柳・五〇句

花言葉

勝原文枝

母逝きてめつきり老けし父の顔

争いの今朝は寂しい夫の顔

紫の意味なつかしや花言葉

寂しさに我が運命を月に問い

大森林一斧毎に蒼い空

父母だけの持つてる故郷を子に語り

落日の下十字架の地平線

雑草の中で根強さ移民の子

七色の虹が私を迷わする

丸木橋渡ってしまえば手を放し

どこへ捨てようかこぶしの中のうつぶん

故里がほのかに匂う便りよむ

羽ばたきを覚えて嬉し雀の子

海が恋しい真珠の不倖せ

母となる証し倖せ張る乳房

ラーメンの湯気揺るがせて明日の夢

十字架を負うて右往左往する

サングラス女の裸身捉えてる

人世観くるくる変える酒の酔

健脚を見て下さいとミニサイア

十代の笑いハンカチこぼれ落ち

黒い太陽地平線は傾むく

虫の唄

小野蛙入

撥ね返える壁へこおろぎいよよ冴え

この時とばかりに蝉は啼いて死に

伸び過ぎてもう縮まられない尺取り虫

その花は賞でず蜜だけ嘗める蜂

かまきりの鎌で昼寝の夢刈られ

蠅一匹に追ひ廻されている部屋

糞玉が大きくなり過ぎた黄金虫の悲哀

砂漠化の大都に増える蟻地獄

蜘蛛の糸で地獄を吊り上げようか

夜の几帳落ちて誇蛾の灯がきらら

千の花束千の希望を白無垢に

ネオンの灯浴びて孤独の街の角

女の意地もろくくすねた夜の底

星座澄み相寄るときのひそかなる

後になり先になり邪魔な影法師

ポケットの中でふるえているこぶし

人間を見飽き人形にある魅力

石の趣味妻には花で恙なし

年輪に私も鏡も青くなり

花よりも百万長者の夢は金

裸婦の像芸術と云う名で生きている

愛し合って憎しみ会って共白髪

くされ縁などと云いつつ仲が良し

地の涯は平和恍惚と虹に佇つ

大空を或る日私のものにする

嫁ぐ娘へもう一針のしつけ糸

屑籠に西日傾むき今日の糧

二十世紀の人類月を裸体にし

子の智恵もアポロのオモチヤ月に飛び

追憶は遠く移民の斧の音

母の日の倖せ赤いカーネション

青い眼の孫に人種を越えた愛

回想の視野に夕日落ちんとす

○

汐引いて貝殻独り寂しかろ

汐の香に咽ぶ郷愁やるせなし

サングラス私も海賓の群の中

白浜で啄木偲び詩を辿り

変わる世に太古のままの海の碧

自由の灯

黒田不知火

血も汗も絞り砂漠へそそぐ川

夢ひとつひとつ崩るる自由の灯

真実が見えね世間の眼が怖い

孤独が身に沁む夜は心の歌唄う

自由を断ち切り石は不敵な眼で笑い

自由がまだ残っていた明るい月の庭

袋小路へ迫いつめられた生活の触角

欲望の無限へ死の山横たわる

青空に平和を謳う雲一ツ

物の芽に憑かれノイローゼ春を殺ぎ

|| 特集・短篇自抒伝 ||

兄の手紙と我が半生

(二五枚)

私一身上のこのために長兄潤一郎と次兄精二が一時義絶したことさえあった。

林 伊 勢

久しく著作から遠ざかっていた次兄精二から、過日、「明治の日本橋、潤一郎の手紙」という近著が送られて来ました。

これは、その題名が示す通り、兄達の幼年期から青年期にかけて過ごした、その頃の日本橋界隈の様子や、下町の暮し、言語、風俗、そして、その頃起きた主な出来事、例えば、日清・日露戦争などの思い出、といったようなものを書いたのが前半でして、後半は、次兄精二が、亡兄潤一郎から貰ったいくつかの手紙の中から、一般にも興味があると思われるのを選び、公開することにしたという、二十二通の手紙からなっているものでした。

今でこそ、私はもう余り心を乱されずに、これを読むことが出来ますが、これが送られて来ました当時は、これを見る度に心を乱され、いく度暗涙にむせたか知れませんでした。

それもその筈でございまして、まことに、これは何所を開いて

みましても思い出につながらない所はなく、甦つて来る記憶の一つ一つは私の心をかき筆り、懐旧というには余りに切ない思いが、私の胸をしめつけるのでございました。

それにしても、随分長く生きたものです。そして、人間とは、なんと古い事をいつまでも覚えているものでしょう。

私はいま、四十年、五十年、六十年もの前の事を思出して居ります。その間には、勿論、嬉しかったこと、楽しかったこともあった筈でございますが今の私には、それ等のことは思い出すことが出来ず、甦つて来る記憶は、みんないやな思いばかりでございます。まして、私はいま、記憶というものの中から、いやなこと、悲しいことは、記してでも置かない限り、どんどん忘れて行つて、楽しいこと、嬉しいことばかりが残るものだったら、どんなにいいだろうなぞと、埒もないことを考えて居ります。

後半の手紙の方は、全部私の始めて見るものばかりでして、読んで行くうちに、ああ、そうだったのか、とうなずいたり、また、思いもかけない事に驚いたり致しました。

始めの二、三通は、亡兄の一高時代のものでして、文学に志す兄が、同じ志望の次兄に寄せる、懇切を戒めやら助言やらであり、いかにも、弟を思う若い兄の真情が溢れているものでした。中に、「予は去年の夏より、非常なる煩悶と、苦痛と、不満の渦中にあり」とか、「小生今夜恋人の許に行く途中、神奈川の宿にあり」なぞという文句や、「私はきつとえらくなつてみせる。えらい芸術を作つてみせる」なぞとあるのを見ますと、兄にもこんな時代があつた

のかと、微笑ましく思えるのでした。

亡兄と私とは、年が十以上も違って居ります上に、子供の時、私は叔父の家へ養女にやられて居りましたので、若い頃の兄に就いては、余り知る所がないのでした。

私の目に映じていた兄といえば、もう一人前の作家となっていた兄であり、親代りの兄であり、いつもむっつりとしていて、めつたに口もきかない兄であり、親しみなぞというよりは、むしろ、私は、なるだけ顔を合すまいとしていた兄であつたのでした。

と申しますのは、申上げなければ分りませんが、私達兄弟には、妙なはにかみがございまして、他人が一人でも入りますと、そうではなくなるのですが、兄弟膝をつき合せてしまいますと、お互いに妙なはにかみが出て、何となくぎこちなく、ものが云えなくなってしまうのでした。たまに何か云いますと、飛んでもないことや、思っていることの正反対なことを云ってしまったりして、いよいよその場をぎこちない、やりきれないものになってしまうのでした。そして、それは、亡兄が最もひどいのでした。

先年、私が兄の病氣を見舞いに日本へ参りました時も、兄は老齡故、横浜までは出向かないから、着いたらすぐに電話をするように、とのことでしたので、私は、東京の次兄の家へ着くとすぐに、熱海の兄へ電話を致しました。

始めに家人が出て、暫くすると兄が出て采ました。そして、

「お前、おいせかい、変な声だなあ」 三十余年ぶりで聞く肉身の声を、今か今かと、ふるえる手で受話器を持って待っている私

の耳に、聞えて来た第一声はこれでした。私は、暫くは二ノ句がつけませんでした。弟が「兄貴らしいよ」と言つて、後で、みんなで大笑いしたのでした。

その上、私にはもう一つ、変な劣等感がありまして、その頃、唯美派だとか、耽美派だとか言われて居りました兄の前に、自分の醜い容姿を晒すのが苦痛だったのでした。それに、兄を取り巻く、嫂や、その姉妹達の美しさも、一層私のコンプレックスを大きくし、私を兄から遠ざけるのでした。

併し、そんなことのなかった私の小学校時代は、とても可愛がつて貰いました。住んでいまして、貧乏の一番ひどい時でした。たしか、兄の二十五、六の頃かと思います。

二階の六畳を兄が占領し、降りの三畳を次兄が使っていました。私は一年に一二度、学校の休みを利用して、叔父の家から、実家へ遊びに行く習わしになっていました。そして、十六で死んだ一人の姉は、その頃、腸結核を患つて、長い病床にいたのでした。

兄は広い部屋を一人で占領しているにもか、わらず、部屋の中といえ、いつも散らかっていて、畳の上といわず、机の上といわず、本や、書き散らした原稿用紙で一杯になっていて、足の踏み場もないのでした。その中に平気で寝ていて、朝はいつまでたつても起きて来ない兄の、鼻をつまんだり、足を引張ったりして、起しに行くのが私の役目でした。また、原稿を書いている兄の背中にぶら下ったり、揺ったり、後年の兄でしたら、とても、そんな事をさせる筈もなく、また、するような者もなかったでしょう。

うが、その頃の兄はちつとも怒らず、今考えてみますと、側に、正宗の瓶がございましたから、原稿を書きながら、チビリへと茶碗酒を呑んでいたのですが、お酒と言っては悪いと思ったのか「ホラ、そんなことをすると、水がこぼれるこぼれる」と申しました。

隣室の次兄の部屋の方は、せまいながらも、いつも奇麗に片附いていて、性格の相異がはっきりと分るのでした。

机の上も、本箱の上も、塵一つなく、本は其直ぐに並び、脱いだ袴はいつもキチンとた、まれて、座布団の下に敷かれてありました。一寸何かに手を触れても、すぐ分ってしまいそうで、私はめつたにこの部屋へは足を踏み入れませんでした。次兄にも近づきませんでした。次兄もまた、私を見てはくれませんでした。考えてみればその頃の次兄は、苦しい勉強の最中でして、私なぞにかまってはいられなかったのです。

そんなで、私はいつも長兄にばかりまつわりついて居りました。その頃は、活動写真と言っていて、まだ珍らしかった映画を見に行った記憶も、有楽座にあったお伽芝居と言っていた児童劇を見に行った記憶も、みんな長兄でした。一度は、仕事のために借りた下宿先きへまでも従って行って、一夏を兄と一つ蚊帳に寝て過したのです。兄にしてみませば、利巧な病妹に、時々痛いことを云われるのですが、病妹だけに、胸をさすっていなければならず、その腹いせに、愚鈍で田舎者の妹をこれ見よがしに可愛がったのかも知れません。

二十二通の手紙の中には、当時、世間をごうごうと騒がせ、当地の或邦字新聞にも、今だに覚えて居りますが、「エロの谷潤・後釜を連れて上京」なぞという、誠にえげつない見出しで、心ない記事を書かれた、兄と千代夫人、千代夫人と佐藤春夫氏の事件に関する、親戚や知友に送った挨拶の手紙も入って居ります。

これは、私がブラジルへ来て二三年目の時だったと思います。当時、私は、これには大して驚かされませんでした。と言うのは、私が兄の所に寄寓して居りました三年余りという時期は、兄夫婦の間の、最も動揺していた時でございまして、私は、二人の苦しみを、つぶさに見て知っていたからで御座います。とり分け、千代夫人とは格別に親しうございましたので、色々と聞いて居りましたし、佐藤さんの事もよく存じ上げて居りましたので、そうなることが、無理なく、受け取れたのでした。

だが、二十二通の手紙の中で、私を仰天させたのは、その中の六七通にはある「おいせ、おいせ」という、私の名前でした。私は今までちつともそれを知らず、今これを読んで始めて知ったのですが、長兄と次兄とは、異国に放浪している妹、私のために喧嘩をし、終に、義絶までするに至っているのです。

私はどんなに驚いたか知れません併し、私がどんなに驚きあわてたとてございましょう。せめては、当時をかえり見、こゝに記し兄への、申し訳けに致したいと思います。

思えば兄には随分迷惑をかけて采ました。よくしてくれたと思います。

先日、或人から、「あ、いう方は、家の中の事など、何もしてくれないんでしょうね、――あなたの結婚の時はどうでしたか？」と聞かれました。

「よくしてくれましたよ」と、私が云うと、その人は、大変意外なような顔をしました。

私の結婚したのは、兄がまだ四十にはならない新進作家の時です。兄は私の結婚費用のために少なからぬ借金をして、長い間、そのために苦しめられていたようでした。そればかりではなく、その後、失職した妹一家のために、兄は、金銭的にも、精神的にも、どれだけ尽してくれたか知れません。ひと頃は、月末になると、兄の所から黙って生活費が届いていました。そして、私は、ただの一度も、そうした事に就いて、兄から、叱言や、いやな顔をされた覚えはありませんでした。出来る時は、いつでも黙ってしてくれる兄でした。併し、結局、私の結婚は失敗に終わり、後仕末にまた苦勞をかけ、兄二人に義絶までさせてしまったのでした。

私達は男四人、女三人の七人兄弟です。私は下から三番目でした。そして、四つの時、子のない叔父の家へ養女にやられました。叔父は性来の子供好きでございましたので、私は可愛がって貰いましたが、叔母は、子のない人にありがちな、奇麗好きで、少しヒステリーな人でしたので、私は苦勞致しました。それでも、十五六まではどうにか過ぎましたが、私の十六の時だったと思います。叔父は土地の料亭の女と深くなり、それに男の子が出来まし

た。老年になって始めて得た我が子に、叔父が目をなくしている姿を、私はものかげから淋しく眺めていたことを覚えて居ります。

そのうちに、実家では母が亡くなり父と八つになる弟と二人きりになり、父があまり淋しそうだというので、それに叔父の家にも後取りが出来たり、致しましたので、私は実家へ帰ることになりました。すると間もなく、父も母の後を追って逝き、私はその頃、本郷曙町に住んで居りました兄の所へ引取られて行きました。

結婚の話が出ましたのは、私の二十一の春でして、相手は、その年、嫂が胸を患い、暫く、上州の伊香保へ転地致して居りました時、同じ宿に、これもひどい神経衰弱で療養に来ていた会社員でして、彼は一仮にAと呼ぶことに致しますが一初婚ではなく、子供が二人いて、先妻とのトラブルから神経衰弱になったものらしく、娘に紹介されて知り合い、私達が伊香保から塩原に移ると、彼も後を追って来て、東京へ帰ってから半年余りつき合っていました。

Aは自称フェミニストであり、クリスチャンであり、文学愛好家であり、或有名な物産会社の社員で、海外勤務もした事がありますので、話の中も広く、一寸の人当りはようございました。ただ、嫂などにも人気があり、大分買われていたようでした。ただ、子供があるという事が大きな難点でして、周囲の人々はみんな反対しましたが、私は子供のことに就いては余り心配しないのでした。むしろ、自分の身に引き比べて、そうした子供達にこそ、いゝ母親になってやりたい、と自ら気負っていたのでした。それに、ク

リスチャンということは、私の子供の頃からの憧れでございましたし、文学愛好家ということも、見逃がせない好餌でしたーだが、嫁ってみましたら、文学愛好家の家には、一冊の文芸書もないのでしたが一、それに、最後に決定づけられたのは、兄の「子供と結婚するのではないから、当人同志がよければ、それでいい」と僕は思う」という二言でした。無論、それまでには兄も興信所を使つて調べたり、何度かAにも会つて話し合つてみた上での事ではございましたが、だが、後年、兄は自分のこの考えの足りなかつた事を悔い、妹の時は、なかなか慎重でしたが、今度は慎重になり過ぎて、結果がよくなり、妹を悲しませたようでした。

兄の好意に依つて、婚礼は立派に致しましたが、結局、これは不幸になる素でした。新婚旅行から帰つて参りますと、すでに、意外な事柄が待ちうけていて、私は第一の裏切られたことを知らねばなりませんでした。その時、私が実家へ帰つてしまつて居りましたならば、ブラジルへ来ることもなく、私の生涯は、それが幸か不幸かは存じませんが、また別な方面に展けていた事と存じますが、周囲の反対を押して参りました手前、五日や十日で逃げ帰ることが、私には出来なかつたのでございました。

不幸はいくつも重なつて参りました。併し、その不幸な思い出を、長々とこゝに書き連ねるのが私の本意ではございませんので、遠慮致したいと存じます。

そのうちに、私が一女をもうけました。兄は、子供の一人位の

うちに、早く帰って来るように、と度々弟を通じて申し送って来るのでした。私もまた、様々な裏切られた思いに、すっかり意欲を失い、帰って行きたいとは思うのでしたが、すでに二人となつた子供のためにどうすることも出来ないのです。

兄は私の行末を案じ、一度は弁護士を頼み、正式に離婚の話を持ち出したのですが、Aは頑として応じず、最後には、子供は渡さない。それでもよければ、と云うのでした、併し、愚かな私には、子供と別れての生活は考えることが出来ないのです。どんなに苦しい生活でも、子供に別れる苦しさを老えれば増しに思えるのです。

昭和元年、私はこうしてブラジルへ従いて参りました。渡伯の動機は、その前年、私の親戚の者が、商売に失敗し、落ぶれた姿を旧知の前に晒したくないと、一家を掌げて移住しましたのに刺激されたのかと存じます。私はまた、日本にいる限り、兄に迷惑をかけなければなりませんので、いっそ、兄の目の届かない遠くへ行ってしまうと思ったのです。併し、百姓ではないので、移民としては来られず、自由渡伯者として参りましたが、着いた時は既に無一文になっていて、すぐに飢餓に迫られていたのです。けれども、奥地へ入ることをAは好まず、と云って、Aに出来るように仕事はなくあつても長続きせず、窮余、彼は、私に、二人の子供を連れて働きに行くよう命じたのです。覚悟は致してお居た積りではございましたが、さすがに、情なく、逡巡致しております私に、彼は、「開拓者の妻が、その位の覚悟がなくてなんと

する」と重ねて申すのでございました。

併し、馴れない土地で、言葉も分らず、子供を連れて居ります私に、何が出来ますでしょう。幸いに、その時、丁度、当時の日伯新聞社で、社員の賄人を求めて居ります事を知り、私は、渡りに舟と、早速そこへ参ったのでございました。

社長は、あの有名な三浦鑿氏でありまして、私が知人に連れられて参りますと、開口一番「なんだなア、君のお母さんは有名な別嬪だと聞いたが、君はあんまりそうでもないなア」と云われたのにはびっくりしました。併し、その通りでして、母は、その頃の娘番附の大関に座らせられたり、江戸最後の浮世絵師、芳年がその似顔を描いたとかいう噂も伝わっている程の美人でしたそうですが、残念ながら、その娘達には、一つもその資質が伝わっていないのでした。

その頃の日伯新聞社は、今の文協のある辺りにありまして、新聞は、たしか、週刊であつたと思います。手廻しの輪転機が一台地下室に置いてあつて、みんなが代り合つてそれを廻して刷っていました。社員には、戦時下、コロニアの暗黒時代、その犠牲となられた、故野村忠三郎さんを始め、この間、日本へお帰りになられた安藤潔さん、その頃は十分赤くつて、ご自分の名前をもじつて、安藤キヨスキーなどと云っていらつしやいました。それから、二葉亭四迷のご子息という、高野富継さん、それに、ヴァイオリニストの菊地弥四郎さん、この方は、上野の音学々校を出て、ブラジル民謡を研究にいらしたのだそうですが、途中で、あ

り金全部を盗まれてしまい、途方に暮れていたのを、三浦さんに助けられたというお話でした。日曜日など、よくみんなでヴァイオリンを聞いたものです。

その他、当時七八人はいた社員達の、多くは名士の子弟でして、三浦さんもまた、それをご自慢の一つにしていらつしやいました。大抵は遊び半分、ブラジル視察に来て、お金を使い果し、送金を待っているという人達でしたので、人柄もよく、教養もあり、お陰で、私は何の心配もなく毎日を送る事が出来たのでした。そんなで、私に取って、生れて始めての他人のご飯は、少しも冷たくなく、刺も入ってはいないのでした。

三浦さんには色々と世評がございますが、家の子郎党にはとてもよい方でございまして、私も御夫妻には大変ご厄介になり、夫人とは今でも親しく御交宜を願って居ります。

そこで、私は、日本で実現出来なかった事を、こゝでしようと思心を決めたのでした。それにはこゝは大変都合がいゝのでした。私が何をしようと、誰も知っている人はいないので。誰にも遠慮する事はないのです。これが若し、日本でしたら、すでに兄の名が出て、到底、子供を連れて女中奉公なぞとは、思いもよらぬ事でしたでしょう。子供のことに就いてもそうでした。若し、彼が取り返しに来たら、大声を上げて騒ごう、そうしたら、婦人に有利なこの国のことだから、きっと、悪いようにはならないだろう。と思いつくと、私はもう決して帰るまい、と心を決めたのでした。

けれども、三年余りのそうした年月のうちには、色々の出来事もございました。そのうちの大事は、一女を失い私もまた急性肺炎で危篤におちいった事でした。

兄達が私の事で喧嘩をしたのは、その頃の事でして、その前年に一度、兄は帰国の旅費を送ってくれたのですが、折悪く、ブラジルには政変があり、ごたごた致して居りました上に、郵便事情もよくなかった時代でございましたので、私の手には入らず、数ヶ月して、日本へ送り返されてしまったのでした。そのうちに、どうしたのか、兄は、子供を連れて来るなら引取らない。旅費は一人分だけ送る、と云って来たのでした。そんな分らないことをいう兄ではないのでございましたが、その時はどうした風の吹き過しでそうなったのか存じませんが、併し、何度も日本に問い合せるには、一回の手紙の往復が悪くすると半年もかゝるような時代でしたので、精しい手紙のやりとりも出来ず、私は遂に、帰国を断念せねばならなかったのです。ただ、私のそうした心の推移を知らず、次兄が、私に同情の余り、私に代って、兄を責め立てたらしいのでございます。

その七通の手紙は、その間の消息を語るものでして、次兄は、兄が私を引取らないならば、自分の生活をつめでも引取る、と強硬な態度に出、果では口論となり、次兄の劇しい言葉に兄は立腹し、終に、義絶となってしまうたのでした。

義絶は何年か続き、このま、永久に兄弟の縁は切れたかと思われていた時次兄の妻が急死したのでした。それえ知った兄は、す

ぐに、関西から馳けつけて采ました。

思いもよらない長兄の出現に、さすがに、次兄は嬉しかったのでしよう。後日、この事を、当時の早稲田の文学部長、吉江喬松氏に語りました。すると、吉江氏は、「他人でも兄弟でも、喧嘩をしたら、まず、目上の者から折れて出るものです。君も覚えておきなさい」と云われたということです。

この言葉に感じた私は、先日この話を息子に話して聞かせました。――一其の後、私は、私より二年先に来て居りました従兄の仲介で、従兄の構成家族となって来て居りました主人と、一女を連れて再婚し、一男、二女を得て只今は、平和な晩年を送って居ります――息子は「いゝこと云うじゃないか、豪い人はやっぱり違うね、僕も覚えておこう」といいました。

二世の息子に、この言葉の持つ意味が分るかどうかと、案じながら話した私は、すぐに返って来たこの返答に、大きな満足を覚えたのでした。

随筆

都市計画とイペー

増田 恒河

ブラジルでは、日本のように四季がはっきりしない。けれども、寒暖干湿の変化によって、一年を通してみると矢張り季節がある。とくに、南回帰線以南では、以北に比べて一段と季節感が強い。

南回帰線が通過するサンパウロ市は一日の中に四季があると言われるほど気温の変化が激しいのであるが、一年の間には、不規則ながらも春夏秋冬を区別することが出来る。イペーやジャカランダーの咲く季節、到るところ青葉の茂る季節、パイネイラが散り、木の葉が降る季節、真紅のスイナンが咲き燃える季節、こう観察してゆくと、そこには、時間的に正しく区分されないまでも、異った四つの季節が順を追うてめぐって来ることがわかる。花だけではなく、果物についても、菰菜についても、或いは天文、人事についても季節の変化する傾向をとらえることは、決してむづかしいことではない。

サンパウロで最も強く季節感を印象付ける花はイペーであろう。イペーは一九五四年、時の政府によって国花と定められたのであるが、それは黄色の花か、紅紫色の花かつまびらかではない。恐らくは、最も広く分布している鮮明な輝かしい黄色のイペーであ

ろうと思われる。

だが、今年のように寒暖が不規則で雨量の極端に少ない年には、イペーの開花が木によって違っている。同じ街路の並木の中に、ずっと早く咲いた木ぼつぼつ咲き初めた木、まだ蕾の固い木があつて、天候異変を物語っているようだ。

昔、と言つても四十年ほど前の思出であるが、パウリスタ大通のイペーの並木は素晴しかった。そのころのアペニード・パウリスタには高層建築がなく、北欧、南欧、中近東とそれぞれのお国風を表わした珈琲園主の邸宅が、広々とした庭園の中に建ち並んでいて建築コンクールをみるような感じであつた。それが二十年この方、ビルディングが次から次へと建てられて日当りが悪くなったばかりか、排気ガスによる空気の汚染が著しく、美しいイペー並木はすっかり衰弱してしまった。今では、到底並木とは言えないほど貧弱になっている。

かつて、このアベニードを設計した技師は、減法広いアベニードを造つてどうするのだと非難されたと言伝えられているが、今日では自動車が犇めき合つて身動きも出来なくなるほど狭苦しくなつてしまった。並木のある部分は近く削りとられて、車道の路面が拡張されるという話である。櫛の歯がこぼれるように一本減り二本欠けという哀れな状態となりながらも、年々パウリスタ大通の春を告げてきたイペーの花も来年にはもう見られないであろう。

いま、イペーについて思出すのは、一昨年だったか、間部画伯

の日本庭園で園遊会が催されたとき、ブリガデイロ・ファリア・リマ（サンパウロ市長）を囲んで歓談したことがある。当時日本訪問を強く勧められ、その気になっていた市長は、日本のことについてあれこれと質問した。櫻が話題となったのはもちろんであるが、巡り巡ってイペーの話に花が咲いた。或る人はドン・ペードロ二世公園をイペーの花で埋めてしまったら、さぞ壮観であろうと言い、また、或る人はサンパウロの中心街をイペー並木にしてしまつてはどうだろう。独立記念祭の頃には、国花をもつてサンパウロを飾ることが出来るなどと、頗る積極的な提案を試みた。ところが、リマ市長はイペーは排気ガスに弱いから駄目だろうと悲観的意見を洩らしていた。にもかかわらず、昨年末、拡張されたあちこちの新路上にはイペーの苗木が植えられた。街路樹が歯抜けになつている歩道にもイペーが補植され、市役所の係員が施肥をし、水をかけて廻っていた。私の家の前にも、細い弱々しい苗木が植えられている。今は数十年来の旱で水不足のために水かけもして貰えない苗木ではあるが、梢からは生々とした葉が伸び初めている。小さい葉をみただけでは黄色の花か、紅紫色の花かその種類を鑑別し難いが、花の咲く日を心待ちに、葉が増え枝が伸びるのを楽しみにしているのである。

市長の職を退いたブリガデイロは、間もなく日本を訪問して、大の日本ファンになつていたのであるが、独立祭の直前、突如として不帰の客となつてしまった。故人は自ら陣頭指揮に当つたダイナミックな都市計画の完成図もまた、特別に力を入れていた植

樹計画の成果もみることが出来なかった。

私は、排気ガスの立ちこめるアベニードを通る度に、イペーが一番よく開花する季節に昇天したブリガデイロを憶い、かつてのイペー談義を懐しく思うのである。

随筆

瀬戸 春汀

文学と年齢

コロナ文学創刊と同時に会員になった私は其の一寸前六十六年度のパウリスタ文学に創作みたようなもの（全くのはなし）を出して居た。それは初めの選にパッサしたとかで選者武本先生の寸評（年齢のわりに、若々しい文章）他の方のは（随筆の域を出ていない）と年鑑の片隅に出ていた。次の品はコロナ文学の第七号に間に合うように出した。

此の号の作品選評会の話らしく思われる（頭脳の移植）と題して新聞の文芸欄に山添良一さんがかかれたのに、「相当の年齢で

あるのに若い文章を書く」と感心？　していたら「それは十代で頭の進歩が停滞したのとちやうやろか」と相手に言われて成程そうかと思つた。と斯んな風に書いてあつた。嫁いだ娘の家に時々遊びに行つて、日本字新聞を見る位の私で偶然見つけて読んだのであつた。全く真をうがつた評言で、私は独りで思い当つて笑が止らず、お腹が捻れる思いをした。六人の子持ちの娘がびっくりして、母さんはロツカになつたと思つたと言ひ、後で又大笑いした。爾来、同志の艶子さん、礼子さんに少女小説をかいています、と言つて居る。ご両人は大人の小説をかき度々人選して誌上に発表されている。年は若いが先輩である。今年の始め、マリリアの句誌スバルに、私の俳歴と題した随筆風の追憶を載せて頂いた。内容の二、三の旧知の方のお名前が聖市の富岡耕村画伯のお目に止り、ご自身の手紙と共に、前に聖州新報の社長でいらした香山六郎さんの自筆のお便りを久しぶりに頂いた。甚だ失礼ながら誠に読み辛い、去年数十年来の親友河野さんのお宅で亡きご主人に宛てた二通を拝見して居なかつたら到底解き得ないご書体であつた。今度始めてお目にかかつた耕村画伯から「代筆を申し出たら、心が籠らないから自分で書きたい」と申された由を聞いた。併し頂いた私宛てのもスバル主幹清水先生あてのも長い時間かかつて八分ほど解説したら年来の望みであつた香山さんのお見舞を実現したくなって私は出聖して来た。

三十余年前、聖州新報が日本病院建設に応援の意味で記念文芸に珍らしい病院、と題名の附いた創作を募集した当時パウリスタ

線の奥の東京植民地や教職についていた私が其所に材を採れ応募して人選したのが香山さんにお会いした最初であつた。病院が出来上りつつあり長女が看護婦見習を志願し二十三名の合格者が発表された時に故野村忠三郎さんと香山さんが日附に時間まで書き添えて報せと祝辞を同時に送って下さった有難い記憶がある。私の俳歴にかいたのはそれよりもっと古く十年をさかのぼり渡伯三年目に小説のつもりで書き溜めた原稿を、渡伯してからの唯一の知己の野村さんをつうじて、目を通して下さった香山社長と編集部西本さん須貝さん、全然未知の三人の忌憚のない批評を頂いたことである。失明されてから十年、ご不自由なお軀でツピー語音の研究を続けられ富岡さんが原稿を苦心の裡に整理されて今年中に完成刊行の予定と承った香山さんと今度二十年振りにお目に、いや、提手をした。お手紙は前に何遍か項いたがにお会いするのは三回目だった。お若い時から髪は白くても血色のよい童顔の偉大なご体格でいらしたが、お見受けするところ頭髮こそ残り少なくなつたが、堂々肥満の血色の美しい、元気に満ちたご様子である。お訪ねした時、「春江さんもう三世の時代だよ。我々一世の文学は駄目だよ」と言つて笑われた。私がご返信の一部に（四回原稿を送つて皆落ちました、以前は出しさえすれば皆二席位には入ったのにコロニア文学は母国の文学界と比較する位のレベルにのびた訳ですから、題材も感覚も表現も古臭い作品は選者の篩から真先に落されるのですね）と書いたからである。併し余りに年齢のことを云々されると、後に新聞で見た藪崎さんの随想（表題は忘れ

たが）には肯定して、鈍くなっても抜けきれない自己主張を表現しようとして、もがいて居る頭の中に土足で入られた感じがあり、そんな心持は斯ういう所にあると噛んでふくめるようにたしなめられる気がした。でも奇妙な抵抗で四回目の時はわざわざ三十才の時の作品だと附記した。出した後で自分ながらおかしくてさぞ選者方に笑われたろうと思ったくせに、それになお輪をかけるように（まだこりないと見えて）この次は名前を更えて年齢二十五才と記してみようかな、などと茶目っ子みたいに呟いてみる。幼稚で単純でこの辺に精神年齢、作者年齢十代と評される根底があるのだらうと思う私である。

（一九六九年六月十五日記）

随筆

おくてのオルガ

鹿毛 至

夕立ち後の明るい陽ざしに、街路樹の枝がさわやかにゆれて大きなしづくをこぼしている。書斎の窓に立ってつかれを休めっていると電話のベルがなった。それは、意外にも久しぶりにきくフィリヤーダ、オルガの声であった。

「アラ、パドリンニョでしたの、ただ今かえってきました。お元氣、あのね、わたし、自動車の運転がとても上手になってきましたのよ、すぐおむかえに行きますからドライブしましょうよ。」彼女のはりきった涼しい声にまじって家族の人々のうれしそうな声もつたわってくる。私も何となく明るいうきたつ気分になるのをおさえて、「そうかね、それじゃあー早速お手並拝見といこう、待っているよ。」

と答えて受話器をおいた。

彼女は、去年市内のM師範学校を卒業して、奥パウリスタ線F市第一小学校へ赴任していたのだったが、遠い見しらぬF市ゆえ、ずい分みんなに待たれていたこの度の帰省であった。

親友カバネマ氏の長女で早、二十才となった。私がバチーザしたときは、同じくフィリヤーダ、アンナの父親、パウロ氏夫妻も非常によろこんでくれたが、はからずもこのバチザーダが私たち三家族の仲をかたく結んだものと信じられている。そうして、今日まで早二十年、いつもかわらぬ親しい間がらである。又このよろこびはおたがいに通じる心持ちであろう。

彼女は、小さいときから大のはにかみ屋で、内気な性格をもつて育ってきた。小柄ではあるが、健康な肉体がピチビチおどるような活動家である。洋さい師である母をたすけて、よく家事を手つだい弟妹たちのめんどろをよくみてきたところ大いに感心させられている。ふさふさした金髪の顔だちも十人並で、涼しいひとみからやわらかい感じを受けてみ力的であるが、どうも一向に恋

人ができないところがかわっていると思う。わりに早熟な当国の娘としてはめずらしい。これも性格によるものであろうか。

彼女の趣味は映画で、とくに宗教に関するものや、文芸作品を好むようである。又熱心な読書家で、伯国の歴史

については非常に知識が広い。ダンスは不得手で、バイレは好きではない。

私の映画観賞には、彼女が、もうながい間一ばんの相手である。妻も彼女のかざり気なく、あっさりした性格が気に入りで、たまにまじよう談をとばして笑わせ、少なからぬお小使いなどにもぎらせているらしい。これが又彼女にもよろこぼれて「マドリンニヤからこんなにいただいたのよ」と云って早速私にみせにくるのである。

ある夜、例の如く、大作「十戒」を観賞したあと、ボールでつめたいコカコーラなどのみながら話していた。この頃すっかり落ちつきをみせている娘らしい態度に接していると、ひそかな喜びがわいてくる。私は美しい成長にひかれながら、まだ、ボーイフレンドも持たない彼女をふぴんに思ったりした。

「オルガ、パドリンニョと一しょもけっこうだが、いいかげんなところで恋人を持ったらどうかね」と云ったら、あわててのみかけたコップを卓上に置き、笑いこけてしまった

「まあーわたしの好きな恋人ってできるかしら、でも、パドリンニョがお気に召した日系の青年を紹介して下さったら交際したいわ」

と、上きげんで答えた。そうして、今度はちよつと真剣な顔になって、私の方へ強い視線を向けた。その黒い瞳の奥には、ぎらぎらともえるような何ものかがあるように感じた。その恋愛観は甚だ消極的であつたが、今夜は意外に強烈な熱情がもえているように気づいて、心うたれるものがあつた。

久しぶりに映画へ行きたいと思つた。しかし、それよりも、この頃ようやく一同のお目がねになつた、ロベルト青年を彼女に紹介せねばならぬことを思い出した。三家族全員の要望にこたえて私の責任重大というわけである。

ロベルト青年は、私の友人サントス氏の次男で、二十四才の体格たくましいボヤデーロである。これについては先頃手紙と写真を送つて、それとなくほめかしてあるので、すでに心得ているはずであろう。とにかく、正式に紹介の上、ぜひ愛情の芽をのばしてやりたいと考えている。

やがて、用意をすましたところへ、もうむかえの自動車がきて表に止つたらしい。石たたみをふむ軽快なくつ音もきこえてくる。

戸をあけたら、純白のミニサイアの服装に健康を微笑をたたえ、力一ばい私の胸にとびこんできたのは、やっぱりオルガであつた。同乗してきたアンナがうしろでにこにこ笑つていた。

随筆

トントントン蛙

務台 一郎

このシャーカラに住みついてから、家内八人のうち幾分でも田舎の生活に経験のあったのは私一人であつたから、最初のうちはなかなか珍談があつた。

もうマツチを無駄にせずかまどが焚きつけられる様になつた家内が、ある朝台所でゴソゴソやって居る。

そのうちに火もついたらしくやかんをさげて外の水樋に水を汲みに出た様子だったが、とたんに何とも言えない奇声を発して長男を呼び立てる。

さつきから床の中でウズウズして居た私は早速とびおき、タマシコをつつかけて外に出た。子供らも怖い物見たさに後からぞろぞろついてくる。妻の慄えながら指さす方を見ると、成程居た。まだ薄暗いのはつきりとは見こないが約二十米ほど離れたパストの垣の鬼針金の所に何か灰色のものが盛んに踊って居る。こちらへ進んでくる様子も無いのでみな度胸をきめて見て居ると、一番目のいい長男が猫らしいと言い出した。石を投げつけて見ると始めてニアーンとないたが、逃げる様子も無くますます踊る。

裏山から鶏でもとりに来た山猫だろうとは思うが、朝もあけ切らないうちからよその家の台所口で踊ると言うのは奇怪至極である。

一家八人踊る猫を眺めて評定のうちに段々夜も明けはなれ、あたりもすっかり明るくなってきた。突然長男が大声で笑い出した。「お父さんあの猫は釣られたんですよ」

なるほどそこには昨日子供らが上の池にトウライーラを釣りに持って行った頑丈な釣竿が餌の肉片をつけたままたてかけてあったのだ。

又こんな事もあった。まだ、ここへ移って来てから間も無く、どうやら引つ越し荷物も片付け、ようやく水草のはびこる溜池の掃除にとりかかった頃であった。

夜はなれないランプの燈なので、小さい子供らをねかしつけるのが一仕事である。ようやく皆床に入り静かになったと思ったら、ふいにターンターンと何か鉈の様なもので木を切って居るらしい音がきこえてくる。シャーカラの入口のユーカリ林のあたりのようだ。始めは誰か通りがかりの者が杖でも切り出して居るのだらうと思ったが、その昔は次第に激しくなるばかりでなかなか止む様子が無い。

近所隣りの遠い所であるからここまでユーカリの盗伐にくる事もあるまいとは思ったが捨ててもおけないので出て見た。片手に日本伝来の鉈を握りしめ懷中電灯で道を照しながら行く。こうして行けば木を切って居る奴が居たら逃げて行くだろうと言う戦略

だ。

何時の間にか起き出してきた長男が手提ランプをぶら下げて後からついてくる。

先程まで立ち込めて居た夜霧も何時しか晴れて星月夜である。周囲は高い森にさえぎられて星空の見える範囲は限られて居るが、それだけによけい強く美しく輝く様に見える。

こわごとと今日清掃を始めたばかりの池のあたりまでくると物音はぼったりと絶えてしまった。二人は燈火を消して道ばたにしゃがみこんでしばらく待つ。

がっかりした様な又ホツともた気持ちで家にかえって床についてと思ったら又聞え出した。こんな事でその夜は三度も起き出して見たがついに音の源をつきとめる事ができなかった。

ただし現代の怪談には必ず解決がなければならぬ。翌朝勢込んだ僕の質問にゲラゲラ笑い出したカマラーダのセバスチヨンの言う所によれば、あれは池に棲む蛙の鳴声だとのことである。

仇名をつける事の得意な僕ら一家は一早速それをトントン蛙と命名した。

その頃から始まった大小六つの池でかなでられる蛙の恋の交響楽はこのトントン蛙を初めとし、ラン（食用蛙）の自動車の警笛のようなや、その他奇音、怪音、妙音とり交ぜてとても恋のセレナーデなどと言うような生やさしいものでは無かった。

このランは十一月頃から子供らがよく掴んで来た。煮える様な熱い池水の浅い所にグロテスクな頭と背中を現わして「ヴーツ

ヴーツ」と言う物すごい声を出して居る。始めはエンシャード1などで押えて来たが、やすを作ってやったら晴天の気温の高い日には七、八つもとってくる様になった。一寸皮をむくのがうす気味悪いが、いかもの食いの僕は早速賞味した。最初は敬遠して居た家内や子供らもしだいに手を出す様になったが、仲々うまいものだ、肉色は僅に桃色をおびた殆ど純白かと思われる。味は丁度二カ月位の雛鳥のものと似て居る。

こうして峽間の小天地に僕ら一家はなれ親しみ、子供等はあらゆる物事に興味をおぼえるようになっていった。

（おわり）

評論 詩

「詩」には何の規制もない

詩は不可解である。

しかし、何ものかを発散する 生きものである。

横 田 恭 平

コロニア文学九号の詩欄を見ると、佐藤氏の作品に永遠という言葉、自分の作品に無限という言葉がつかわれている。また可児氏の作品は、無限というものを意識している人の詩のように見受けられる。

永遠とか無限とか無とかいう言葉は、よく現代詩の中に現われる言葉である。

これらはかつて哲学上の言葉であったが、いまでは詩語としてさかんに使用される。現代知性はその生存する時代環境により、自己自身の存在理念の定立にせまられて好むと好まざると、永遠、無限あるいは無について深い関心をもたざるを得なくなったからである。

かつては宗教は有の宗教であった。

いまは無の宗教が求められる。宗教というよりも、よって自己を実現するための自己宗教又は、自己哲学である。

人間の存在とその社会活動の理念、人類愛、社会愛あるいは性愛の諸問題についての理念は、すべて自己自身の精神の位置に根本

を置く以上、詩は文学の主流としてこの無辺際の、目に見えぬ、しかも厳然として存在するものをつねに身近に捉えねばならなくなった。

自分としては、永遠という言葉は有につながる語感があり、無限という言葉は無につながる語感があるように思う。

日常や常套はつまらないと多くの人が考える。そうして、日常性は詩の素材にならないと思う人もある。もしその人が日常を覆い包む無限というものを意識すると、事態はちがったものになる。現実というものは、過ぎて決して回帰せぬ無限の中の一時点であることを意識してこれを観察すると、日常の経験はことごとく新鮮かつ明哲に感官に灼きつく。

宇宙にただひとつ空気のある地球がころがっていて、そこに人間やけものが棲み草木が花咲くという事実、驚異でなくてなんだろう。吾々はもう一度周囲を見直そう。人が歩く。犬が走る。すでに詩である。太陽に尻を向け、尾をピンとあげて馬が脱糞する。じつに壮麗な詩である。

なぜならば、それらはすべて、無限を意識することによってそこにおのずから詩的情操を培養する内部精神をくぐりぬけて、詩性ある映像として感覚されるからである。

しかし、日常や常套をつまらないとかんずる人も、そのかんずるものを詩想の基盤として万人驚倒の詩を書くことができる。詩はこのように色々のあらわれ方をする。

次に、詩はその発想の深い根部に於て、主としていかなる感情につながるものかを考えてみよう。

「万物は流転する。」

これは真理中の真理、永劫に変わることのない真理である。

仏院はこの真理に深く思いを致し、これに立脚して仏教の無常観の教理を樹てた。

彼が死に臨み、追隨者にのこした辞世の言葉は次のようなものである。

Advertencia final de Buda a seus seguidores
"Todas as coisas e seus componentes
estão sujeitos a mudanças constantes
Lutem com cautela "

エンシクロペデア誌より

吾々は仏陀の発見を確認する。

「万物は流転する。」

そして無限はそのかなたにある。

生命あるものはほろび、さらに新しい生命は発生する。無機物といえども、刻々にその形容と質を変化させる。吾々は確信を以て堅い地殻を踏んでいるが、それは勇氣と冒険心によつて支持されるものである。

で、生命あるものはさびしい。草木虫魚は、そして人間はさび

しい。

特に人間はさびしい。いろいろのことを知って了ったので、なおさびしい。

現代知性の寂寥の精神はこゝに胚胎する。

地殻の上にせせらぎをがれる生命の世界はさびしい。諸行無常である。そしてそれゆえにこそ生命の世界はうつくしい。驚異である。それゆえにこそ生命の世界は詩の世界である。

あるとき

山村暮鳥

たそがれると

それをしつていて

そろそろ

花も

草木も

よりそつて

それもまた

この詩のこころはだれでもわかると思う。さびしいという言葉は、おのずから愛という言葉につながる。生き身

の人間である吾が身をいとしみ、他をいとしむことになる。人間愛の詩、社会を愛する詩、万物を愛する詩は、こんな風にあらわれるだろう。

さびしさは孤独感からもくる。独りで生れ、独りで生き、独りで死んでゆくその孤独感。

さびしさは、人間であることのかなしさ、悲哀感にみちびく。そして私にあつては、人間であることをかなしむ他の大原因がある。それは、吾々人間は他の生物を食わなければ生きてゆけぬ事をもつという事実である。

詩人古田土光良は、若い時、人間が牛を殺して食うことは善であるか悪であるかということに懷疑をもち、同時に詩をつくりはじめた。そしてその懷疑を解決し得たとき、彼の詩は消えた。

諸行無常のさびしさ。他の生物を食わねば生きてゆけぬ人間であることのかなしさ。自分の詩はおゝむね、こうしたさびしい感情、悲哀の感情を深いところに匿し、上を太陽の光線のあかるさで刷く。いとも瞬味な、矛盾だらけの人間のある時の精神のた、ずまいの表現にすぎない。

あるとき、くだものを噛むような清例な悲哀におそわれ、自分是一篇の小説、一篇の詩を考える。

しかしそれは自分の場合である。

詩は、何人（なんびと）もこういう感情からばかり出発するものではない。

人生について寂寥も悲哀もかんじない人もある。そういう人もいい詩を書く筈である。自己の生活に打込んで充足をかんじている人がある。その人は豊満な、あるいは強靱な、生命感のある詩を書ける筈だ。いやその反対の詩も書けるだろう。

人生に意味を与えるためにも、また与えないためにも詩は書ける。肥った男にもやせた女にも、均衡の詩、不均衡の詩が書ける。詩はまた、真、善、美など、各人の認識にもとづく感情にかかわるが、そういうものだけ、が詩になるものでもない。普通の意味で悪といわれ、醜といわれるものにも詩美をかんぜられる場合が多い。

で、とどのつまりこういうことを言いたいのである。詩には規制がない。埒がない。柵がない。束縛がない。定義がない。

詩はどこまでも自由で、天空海潤である。

詩は、現実そのものに深く発想の根部を下している。いかなる空想の詩想像の詩でも、現実を根底としてそのイマジナソンを展開する。現実の風景や状況は刻々と変化して、決して同じところにとどまらない。従って詩もまたつねに動き変化する。詩に埒をつくることはできない。これは詩に於ける決定的の性格である。

しかし、詩はどこまでも詩で、雑ばくに見えるものでも、手に取ってみるとやはり詩である。ガラスのように透明であったり乾いたりしているが、やはり詩である。詩には規制がない。埒がない。時の推移と共に外部も内容も無限に変化するが、詩はいつの時代にも詩としての本性を失わない。

では詩をして詩であると云わしめるものは、果して何であろう。詩人はその作品を詩たらしめるために、いろいろの技巧を試みる。まず省略の手法、また不省略の手法、恐喝の手法、誇張の手法、単純直裁の、あるいは無技巧の手法、反自然の手法、等々、それらのいずれも詩の詩たる所以を決定的にするものでない。また詩は旋律でも空想でもない。

詩を詩と云わしめるもつとも根源的なものは、おそらく作品の中に漂渺する作者の精神の溢れのようなものではないか。つまり思想、感情、理念を昇華して詩性に転化した場合、そこに詩精神の充実と溢れを見る場合に、表現されたものは詩となると考えられる。そうした場合、詩ばかりでなく小説も評論もまた疑いもなく詩である。詩論もまた詩である。

詩は精神のものであると云いたい。

それなら、詩精神とは一体なんだろう。これも意義不可能である。一応、純粹に詩に據る精神、あるいは、すべてを詩化せねばやまない精神とでもいうべきであろうか。詩を思ふ精神、詩をかんずる精神、それを詩に表現しようと思ふ精神、詩を生活しようとのぞむ精神、それらのすべての精神をつらぬいて、なおかつもつとも純粹に昇華されたものであらう。

さて、悪にもまた醜にも詩美をかんずる場合があると前に述べたが、普通に美と称するものはけっして詩美ではない。それは詩精神を通じてはじめて詩美となる筈である。

すべて感覚されたものは、瞬間に意識の中樞で、詩精神を通じ

て詩化される。たとえば詩の中に表われる自然の風景にしても、短歌のようにおゝらかに素直にこれを捉えるものは、ほとんど写生のように見える。しかし、それは作者の視覚を通じて精神内部にとり入れられ、そこで詩性ある映像に変化して作品に現われたものと見る。作者の詩精神に触れる、なんらかの内的衝動があった筈で、単なる写生のようでもけっして写生ではない。そしてその作品のすぐれているかどうかは、作者の詩意識の凝縮と、素材の新鮮さ及び表現方法などに関わると思われる。

しかし現代詩に於いては作品の発想の起原は、外部から受ける衝動すなわち感動に由来するよりも、むしろ内面的に、作者の携える思想や思念が詩精

神の充溢燃焼によって作品化する場合が多い。そして現代詩の詩性が短歌や俳句のそれと異なるのは、この点であることは明白である。

現代詩は、もはやけっして感動だけにその起原をもつものではない。自分としては詩は感動だけでは書けない。

読者を感動せしめる詩は、作者が何ごとかに感動して得られた作品で、その感動が作品を通じて読者に伝わるというのではない。

作者の稟質、教養、認識、思想などが揮然と融合して一篇の詩の基底にかくれていることを考えよう。さらに、ゆたかな心理体験と相俟って、はじめて、その人の詩意識の結晶が他に感動を与え得る詩となる。

「詩は、百の体験の一つの要約である。」と言ったのは尾崎喜八

である。詩を醸成する意識の底の内層が、いかに分厚いものであるかをあきらかにしている。

詩は詩精神あるいは詩意識のあらわれであるとしても、精神の平静、緊張透徹等の場合ばかりでなく、絶望、憤怒、混乱などの異常の精神の状態のぎりぎりの表現も、勿論立派に詩になるわけである。

そしてまた作品の深いところで詩感を揺すものに、詩の暗示性がある。諸作品のふくむ暗示もしくは示唆のエレメントは、読者の支える思想、感情、理念に触れて、小さな襖のような役目を果たし、その内部精神の燃焼と発展乃至実現に役立つことと考えられる。暗示という言葉は *insinuacao* と *inspiracao* の二つの意味を兼ねるものと思う。所謂象徴としての審美的の意味よりも、思想的乃至人生的の意味のひろがりを持ち、読者をして「考えさせる」詩はこの暗示性を含む詩である。

詩作品にこの暗示性を賦与することは、むしろ詩技というより作者の思考の深さからおのずから生れるものと解すべきである。

とにかく、詩精神のあらわれ方は無限である。いろいろのことを書いてみたが、自分にとって詩はやはり不可解である。不可解ではあるが、つねに何ものかを発散する生きものである。かがやき呼吸づくものである。

この発散するものの在否によって、詩であるか、ないかはきま
る。

現代詩に表象されるもの、それが感覚であろうと情緒であろう

と思考の断片であろうと、結局作者の理念の顕現である。理念は主観によるものゆえ、詩についての意見も百人に百人の意見があることは当然である。自分の詩論はもちろん自分の詩につくされているはずであるから、今更こういう文章を書いていることを、自分ながら笑止に思う次第である。

終

評論・川柳

現代川柳の目指す方向

その時代と人間、それを批判するのが川柳の生命線である。それを止めることは自殺に等しい。

小野 蛙 人

今回の第八回全伯川柳大会の午後部に出席することができ久しぶりに各地柳人と交歓して非常に嬉しく思った。

特定選者のひとりとされて、とに角その責めを果してした選と比べ、他の代表選者の選と相当の開きがあったことや、又、時に

は共通点をも見出したりして驚いたり考えさせられたりした。

しかし、私の胸にカチンときたのはある選者の感想の中で「わたしは、今年の大会互選句の句帳を手にして、川柳が昨年に比べてあまりにも低調であるのに驚き、三十句を選ぶのに困るほどであった」という言を聞いた時である。

それで、家に帰ってから、果して今年の大会句が、今までより悪かったかどうかを、第六回から今回まで、つまり三年分の大会句帳を取り出して比べて観察してみたのである。

そこで、私は先ず、五句ずつ三回分を選び出して並べてみた。次に参照するから皆さんにも比べて眺めてもらえるわけだが、第六回も、第七回も、私の選んだ五句は、各々特定選者が天位や地位に選んだものが多いから秀句であると言えよう。

しかし、第八回分は、私だけの選句で、まだ他の選者と比較してみる時間がないから、よく判らないが、私はこれも、今年度大会句を代表する秀句であると思っている。

では、次に三年分を並べてみよう。

（第六回大会句一九六七年度）

手の届く限りに己れの線を引き 伯国 森山天作本心に

目をつぶらしている揉手 北米 松本忠之

三代の箸を明るくつつき合い 北米 金山素朗

一握りの灰となるまで燃えつづけ 伯国 勝原文枝

洗っても洗ってもよごれる掌 伯国 佐藤碧村

第七回大会句（一九六八年度）

強姦された平和の女神アーメン

伯国 原 野人

合掌をとけばがめつい手に戻り

伯国 坪井柳念坊

大夢を抱いた移民の小さい墓

伯国 池田無哲坊

下りた夢知らない喜劇の主人公

伯国 水野ひろし

ミサイルの射程に逃げ場なき平和

日本 中野さとし

第八回大会句（一九六九年度）

春の陽のぬくみ素足になって受け

日本 塩出 大州

だっこした子の瞳にこわくなった嘘

日本 前田 義久

こがらしの鞭全身に明日の唄

伯国 安村 玉泉

昨日も今日もあすも対話のない砂漠

日本 大森よしえ

見上げ見下し宙ぶりの己を視る

日本 渡辺仙利坊

このように並べて比較してみても、私には「春の陽の」や「だっこした子の」句などが、第六回、第七回の句に勝るとも劣るものだとは思えない。これは講評の時に云ったことだが、この二句の素直さ、純粹さは、論理的な迫力のある他の句（六、七回分も含み）などより更に優秀な句であるとさえ思える。凡そ、川柳の中の川柳と云えるものは、この大地自然に抱れた人間の真情を最も適確に表現することができた場合であると私は思っているが、「春の陽」の句には、そういう素朴な人間感情が巧まざることばで表現されていると思う。

それから

「こがらしの鞭全身に明日の唄」の句は、玉泉作であることを知らない時に既に鈴蘭さんに語ったことであるが、句の形成といい、

その含意といい、まことに素晴らしい完成句であってブラジル川柳界の水準を充分に示している代表作品であることを誰も否定できないであろう。これは又、第六回、第七回のどの作品に比べても見劣りがしないどころか、それらのどの句よりも、もっと完成度の高いものである。

私は、この句の中に、ほんの少しの教訓めいた句いのあるのを嗅ぎつけて前二句の素朴、純粹の次に位させたのであるが、それは、しかし殆ど氣にする必要がないくらい、或は全然、氣にせず、氣がつかない人もあろう程に小さな盲点であって、その盲点が作者自身の氣負いにさえなっているかも知れないが、この句の完成度をそれ程弱めるように見えない処はさすがと思う。

更に、次の二句、これは母国の作者のものであるが「昨日も今日も」も「見上げ見下し」も、句形こそ長たらしく思えても、その表わそうとした思想は、第七回分には比べるものなく、第六回分の第一第二、第五句などに比べても、更に新しい発想であり、その批判が充分な力量に於て捉えられ現わされていると思える。

私は、このように年々大会句に現われてくる川柳の動向に、多大な関心と興味を抱いて眺めている者であり、自分自身もその渦中にいる一人であるがその変化と指向は決して退歩や老化現象を示してはいず、やはり、着々と進歩し完成して行きつゝあることを覚えて全柳人と共に喜んでいるのである。

しかし、全然ちがった角度から一抹の憂いが無いわけではないのである。

それは、ブラジル川柳詩第五十一号の中に現われている幾つかの問題点である。

時局批判について

カッコして、注意と横書きし、その下に、「作句やその他を創作される場合、当国の政治や政状に関する一切は “現状に鑑み” 素材されませんよう御注意申し上げます」というお達しを揚げたことである。

この文句について蚊奇智や義信などとも席が近かったので話し合ったのだが、田吾作も「これは怪しからん」といきまいていたし、大体「素材されませんよう」ということばが面白くないとは一致した意見であった。

川柳人が、時局の推移に全然、無頓着で作句している筈はないし、或は誰よりも敏感に観察していると思えるから、こんな揭示は全然ナンセンスではないか。特に「素材されないよう」とは、一体川柳に携わっている者の発言だろうか、それは、川柳とは何かを知らない川柳人だと云えよう。

あの徳川幕府の圧政下の江戸の町民が、唯一の政府批判の拠りどころとして川柳を創作した時代を考えれば、丸腰で何一つ抵抗の手段を持たなかった最下級の人間のうつ憤の吐け口であった川柳は、弱い者の掛けがえのない隠れ蓑であったことが良く判るのである。だから、少くとも、川柳の歴史を知っているものならば、隠れみのかとしての川柳の構成の仕方を当然発明するであろう。要は、生な言葉を露呈して当局を刺戟しないようにすれば充分であ

ろう。それでも、忌憚に触れれば、結局日本語と云わず全ての外国語発行物は禁止されてしまうのだから、書くの書かぬのと騒ぐこと自体がナンセンスになってしまいうわけだ。

大体、川柳と云わず、文学作品というものは、その時代の世の中を批判し又、人間そのものを批判することができなかったら、文学とは云えないであろう。殊に、川柳分野に於ては、それが生命線である。その批判を止めろという声は、自殺しろという命令に等しい。もし、生命ある川柳を発表できない（ブラジル川柳）誌ならば、よろしく廃刊すべきである。

われわれの声は、川柳誌が無くなっても、充分に伝える方法がある。もし日本語の使用が許されているならば生きた川柳を語り合うことができる筈である。

問題は、我々が、その批判を通じてブラジルを建て上げようとしているか破壊しようとしているかの態度に我らの養国ブラジルを愛し、我々の子孫の繁栄のために、我々が川柳を通じて何らかの貢献ができないならば、よろしく、その人は川柳を止めよ、と私は云いたい。

次に川下白舟の玉泉論駁について、一言したい。この論駁は、いくつかの点で無理があり常識をそれている。

第一に、玉泉の論文が、コロニア文学第四号に掲げられたものであるという点である。第四号は一九六七年五月発行のものだ。（現在は第九号まで発行されている）云わば二年何カ月か前の発表である。誰も殆んど、その文章を覚えていない。つまり忘れ去つ

た頃その論文への反駁を出すなんて、いくらブラジルでも時機を逸した失礼な發言だ。この現代のテンポの速い進み方に身を処している人間は、その時間と共に常に自分を改変させて行くものだ。又、そうでなければ、時代の最前線に立って生きては行けない。二年も経つと、自分の云った事も、自分の云った事ではなくなってくる。何故なら、その時とは全然反対な意見や立場になっってしまうことが多いからだ。殊に批評へ批評が加えられ、それへ又、新しい批評が出てくる時、最初の發言者は、その發言の位置を全く変えてしまうものなのだ。

二年前に「コロニア川柳の現状と批判」と題した安村玉泉の一文は、も早現時のコロニア川柳の批判ではなくなっていることを、最初に述べた私の大会句の推移の説明で判って頂ける筈だ。

もし、白舟が、この一文を二年前に書いたものだったら一応、我々に考えさせたであろう、もし、最近これを書いたとしたら、白舟の時代感覚そのものが問題となるわけだ。又、今頃こんな文を掲げるブラジル川柳誌編集者の常識も充分非難されるものがある。

二年も経つと、死んだ子の骸も、すっかり白骨になっている。墓に埋めたばかりなら掘り起して甦生を試めすのもいいけれど、白骨になったものを掘り起して、もう一度検討しようなんて馬鹿げたことは止めてもらいたい。それよりも、今の時点に立った活発な發言をどしどしやって欲しいものだ。

最後に敬老欄の開設について触れて今回の論議を終りにしよう。ある区で、敬老会をやることになり七十才以上の老人を招待し

たところがある七十何才かの人が「俺を老人扱いするな」と、どなりつけて、係りの人間を追い返したという話を聞いたことがある。私は、この老人の気骨にほとほと感心したものである。

いわゆる世俗の中の人間に、このような気骨をあらわす者があるのに、川柳界にまで「敬老」なんて俗臭ふんぷんたるものを持ち込むなんてもつての他のことである。今回の大会句の中にも、

五十年共に白髪 of 愚夫と愚婦

桑原善柳

という佳吟があつたが、この「愚夫と愚婦」なんて、すばらしい表現をするものは老境にあつても決して老人臭くない元気一杯の人間ではないかと、その人を知らない私は想像しているが、「敬老欄」の設置は、老人へのお追従であり、老人をいよいよ老人としてカッコに入れてしまう安楽死的な殺人手段であるに他ならない。

我々は、むしろ、七十、八十の老人たちを、我々壮年の仲間にもいつも曳き込んで、同じ次元で対話ができるように彼らの年令を忘れさせるようにこそ配慮すべきではないか。「敬老」なんて鼻についた美言を止め、老の字を追放しようとは思わないだろうか。

石山白頭よ、六十才から川柳を始めたという素暗しい気骨とエネルギーの持主よ、一万句達成の悲願を忘れたのだろうか、否、忘れてはいまい。

よろしく、敬老欄のカコイの中から脱け出して若い者に負けない勢いを見せてもらいたい。栄光花句碑の前で日本刀を振って魔気を払った熱心を、われらと同列の川柳の中で現わしてもらいたい。

われわれ、川柳の最前線にあるものは

見上げ見下げ宙ぶりの己を視る

という自己検討を絶えず怠らないようにしなければならないし

昨日も今日もあすも対話のない砂漠

の孤独感をも常に味わずにはおれないだろう。対話のない砂漠の中で、飢餓のように対話を追求する姿にこそ、現代に生きる川柳の目指す方向が示されてくるのではないだろうか。

すなわち、その方向はつねに「？」なのである。未知であり、未開であり処女地なのである。その未知の領域に踏み込んで行く勇氣を持たない柳人は川柳から落伍するのだ。いやしくも、一個の柳人ならば、各々、自分の独特の方向探知機を持っている筈だ。そのレーダーによって暗中模索をつづけるのが、われわれ文学人に課せられた生き方であり、方向なのだ。

（完）

第十号記念・特集号

「コロニア文学」

〔乃一九六五年五月―至一九六九年七月〕

第一号から第九号までの歩みをかえりみる

「この特集の中に「俳句」と「随筆」に関する九号までの回顧が含まれていない。編集部として、執筆適任と思われる方に依頼したのであったが、残念ながら執筆頂けなかった。またの機会に、是非掲載したいと思う。

（編）

◆反省の時……鈴木 悌一

◆絃決算的鑑骨と批評 （詩）米村 幹夫

◆許容と共感の系譜 （短歌）高原 純

◆厳しい姿勢で （川柳）安藤 魔門

◆コロニア独自の文学領域を （小説）宮 尾 進

◆たとえ泥臭いといわれても （編集）武本 由夫

◆会費完納が先決 （会計）増田 恒河

反省の時

今の文運隆盛は、いわば尽きなんとする残照のゆらぎか

コロニア文学会

代表 鈴木 悌一

「コロニア文学」も号を重ねること十回、会員は七百人を超え

る。たしかに文運隆盛の証左であろうが、そう手放しで喜んでは
いられない。

「コロナア文学」は文字通りの同人雑誌で、会員の会費だけで
賄っているのだが、集金人としてない組織では勢い会費が滞り勝ち
となる。したがって毎号出す毎に資金面では四苦八苦、そして慣
れない広告取りなんかでこちらも参るし、商社の方々にも御迷惑
をかける破目となっている。

それは仕方ないとして、もう一つ看過できないことがある。会
員の階層である。殆どが一世の老兵で、二世はほんとうの例外に
過ぎない。つまり二世にとって日本語は、話し言葉としてはとも
かく、読み言葉書き言葉としてはや通用していないのである。

なにか奇蹟でも起こらぬ限り、この傾向はますます強くなって
ゆくであろう。そして老兵達の消え去る時、日本語によるコロナ
ア文学の制作も享受も、ともに消え亡せていくであろう。今の文
運隆盛は、いわば尽きなんとする残燭の一ゆらぎかも知れない。

今の間に立派なものを残しておかねば、もうこんな時機は再び
めぐって来ないであろう。またこのようにコロナの特殊事情は
別としても、芸術は刻々が全力を賭けた対決である筈である。

「コロナア文学」は回を重ねるごとに、そのような緊張感の高揚
を見せているであろうか。われ人ともに、きびしく反省すべき時
であると思われる。

総決算的鑑賞と批評

第一号より第九号までの“詩”作品について

米沢 幹夫

作品発表の少ないコロニア詩壇にとって、「コロニア文学」の中に、詩欄のあることは、砂漠の中のオアシス的存在と云える。

従来、定型の枠にはまった短歌や俳句は、案外に好まれやすく、その伝統性をの追求者や賛同者は多い。だが、形をもたない詩は、いつも孤立状態であり、敬遠されがちなのはどうした訳であろうか。孤高を保つあまり、横のつながりをもたないことや、作品批評、も争などによる刺戟の少ないことなどで、その遠因の一つに数えあげるべきであろう。詩壇虐待即ち、各自の態度如何となるようだ。

然し、ぼくはここで、現詩壇の趨勢を云々しようとするのではない。それらのことについては既に本誌四号において、「コロニア詩壇の彼方」の小論を書いたこともあり、それを参照していただくことにして、本論を進めることとしよう。

「コロニア文学」が、第十号を迎えるにあたり、この特集号用に、創刊号から第九号までの詩作品についての総決算的な批判と、意見を求められたがぼくは、ぼくなりの見解と立場において、作品

解剖のメスを振るってみようと思う。

創刊号から第九号までの動静は、作品数は八十九篇あり、作者数は二十八名で、延べ七十名となっている。便宜から云えば、作者別に触れてゆくのが当を得た書き方であるかも知れないが一応発表順による全作品について述べてみることにする。

創刊号より

「たった一度通ったことがある」

横田恭平

知的な感情に訴えようとする心遣いがうかがえる。繊細な筆致と、ダンディなポーズを特長となしている。別な云い方をすれば、リリカルな美意識をモラリスティックな手法で表現しようとしたところに狙いがあったとでも云うべきだろうか。破綻も少なく、よく整ってはいるが、レンズが捉えた風景画のように、感動の焦点の唆味さが気になる。

「朝」 藤田 勇

新鮮味の乏しさはあるとしても、スタイルとパターンに、かなりの気配りが見られ、面白い作品となっている。然し、気どりが過ぎると、作品と作品の間に、趣味的な馴れあいが生じやすくなる。

「今」 「夏の朝」 長谷春子

一応まとまっついていて難点はないように見えるが、現代詩は、こ
うした穀と、甘さから抜け出たところから出発しているのではない
だろうか。

第二号より

「泥をかきまわしている」

横田恭平

こうしたリズムの配在は横田調とでも云うべきであろうか。技
術的にも秀れているし、一種の安定感をもっている。だが、後半
の《なんとかがやかしく気恥かしい、あらわな性であるか》で、前
半の迫力をそぎ、すっかり肩すかしをくった感じを与えられるの
は惜しい。最後の《しかも、汚辱の仲間に寄せる、この泥だらけ
の愛情を恥じないのだ》は、この作品の大きな救いとなっている。

「河面を見詰めると」

由井幸男

素朴な抒情経験に作者の自己投影をなした作品、一応は肯定さ
れると思うが、無条件でついてゆけないところに、現代詩のむ
ずかしさがあるようです。

「或る詩人の像」

大浦文雄

この主題には《横田恭平に》と云うサブタイトルがついている。
大浦氏のこの力量は高く評価されてよい。性格的なものがかなり

力強く出ているし、聯のくぎりも、行のはこびも無理がない。最後の《詩の台木を作っている》は、簡潔にして、詩人横田恭平のプロファイルと本質を余すなく伝えている。

「死の周辺」「旧知」

藤田 勇

整理にそつがなく、しっかりとした骨格が感じられるが、内容が重苦しい割合に迫るものはないのはどうした訳か。前者は、軽いデッサンであって素材の不消化が目立つ。後者は、藤田氏好みの断片かも知れないが、いまだしの感じ。

第三号より

「丘の上の畑ではたらくときは」

「透明な空気の中の市街」

横田恭平

前者は、詩と呼ぶよりは散文の方に比重が傾きすぎているようである。行分けをしているだけの差であって、多少の抵抗を感じさせる。横田氏の作品の多くが、説明的な散文調で占められているのは特長であって、鑑賞する場合のマイナスともなっている。後者は、特別のひらめきなどは見あたらないうとしても、その点豊富な言葉づかいと、独自のムードの醸成と、かなり結晶度の高さを示している。《それらのことは、人々を沈滞の樹木よりもうつくしく見せる》《どこかはるかな星の、ちがった人間の世界を眺め

ている気がする」作者のニヒリズムが、こうした言葉の間からこぼれおちてくる。

「アマリリス」

藤田 勇

一分の隙もなく組立てられた、つまり定規をあてて書いたと云う感じ。詩のための詩として、その技術的なまとめ方は非凡と云う他はない。

「燃えない木」

真木 衿子

一応は頷ける作品であるが、少し整理が足りなかったようである。中間が冗漫に流れ、持味をそこねている。把握したものを、もっと高い次元に昇華させるべきであったようです。《ぶつぶつと泡を出しながら、しゅんしゅんと涙を流して泣いている、燃えない木》この一節は生きている。

第四号より

「曇り日」 永田泰三

内容がドラマチックに扱われているのは、一つの物語が設定されているからであって、絵画的なムードを特色としている。為に、比喻や暗喩が縦横に駆使されていて、巧妙な作者のレトリックに、とまどいを感じる読者があるかも知れない。《たのしい舞踏の広場を失った微風は》《太陽は無辺の成層圏の深みにしずみ》《だが、終

末が近づいた地球の片隅で』のような技法は、常套的な手法かも知れないが、永田氏の独壇上であろう。

「少女よ模様を綴れ」

「女達の大笑い」

狩海 亘

前者は、一種のロマンであり、感覚的なものの処理が巧みに行われ、訴えてくるものがある。メタフォアそのものは月並かも知れないが、強烈な体臭と光彩を放っている。造型的であり、かなりの評価に堪え得ると思うが、最後の《黒や白の小石をたんねんに埋めて、愛憎の模様を綴れ》は、内容に対してどれだけの必然性を持つのか疑問である。後者は構成面でも、内容面でも、面白い味のある作品、狩海氏は奇抜な言葉の選択と、造語が上手だ。《うつぶせの股間に火が触れるとき、ギロチンが落ち、娘達が太陽を流産する》等には、手垢のつかない鮮度を感じるが《サラダのトマト》《男は止むをえず大声で叫ぶ》などのような破綻をきたしているのは惜しい。

「スザノ風物詩」「昼ははだしで」

横田恭平

思わせぶりな云いまわしは、独特なものであり、嫌味はない。横田氏の詩風は多様性と云うよりも、一貫した筋を通しているところをかうべきであろう。この二篇は、土の詩として作者の力価を

遺憾なく發揮していると云えるだろう。前者の《考える、おのれの立っているあたりが 宇宙の中心だろうと》は、最初の《落日のさんらんを見ている》と、どう云う関連をもつのか解らない。後者は、横田氏のパターンを遺憾なく發揮した快心の作と云えよう。

「よわ音」 可児三平

物を見る目の正しさと、把握力の確かさは共鳴できる。圧縮された技巧と、爽雑物のないのはよいが、省略がすぎて記述的な嫌いが感じられはしないだろうか。

「日々」 小石茂行

掘むべきは掘み、打ち出すべきは打ち出してあり、意図も秩序も明解であるが、もう少しヴィジュンの交錯が処理されていたら、もっと純度の高いものが期待されたのではあるまいか。

「母」 由井幸男

「花の中に」 長谷春子

やはり、云いたいことを皆云ってしまったのでは、詩としての価値が弱まってくる。云いたいことを全部さらけ出さずに、言外の意味と余韻をふくませるところに、詩の生命があるのだと思う。

「訪問」 狩海 亘

不思議を感覚である。アイデアと発想が充分に生かされているかどうかは別として、のぞきレンズを見るような、メルヘン的な面白さは買ってよい。内容を、一聯から二聯へ、二聯から三聯へと、もつと密着させたほうがより一層の効果が見られたのであるまいか。

「断層」「譜譜」

藤田 勇

固定的な、形にとらわれた書き方ではあるが、藤田氏の音感に対する鋭い感受性が感じられる。たが、形をととのえると云うだけの、思わせぶりや、馴れあいから蟬脱するところに本領の発揮があるのではあるまいか。《良識深く根をおろした》《不気味の巢喰った象形文字》等には、未熟さがあり、推敲不足の謗りはまぬかれまい。

「クアレズマの花」

可児三平

可児氏は抒情性を大切にする詩人である。この一篇は、ほのぼのとした童謡的な明るさを感じさせるが、クワレズマを桜にたとえ、宮沢賢治をもってきたあたり、常套にすぎはしまいか。《桜は何故散り急ぐのか 勲章が欲しいのか 生きのびて世の噂が怖い

のか≫などの不用意さは救われがたい。もっと、ローカルカラー的な風土色を、クワレズマの花に直結すべきであつたと思う。

「ペスターナ街」

横田恭平

平凡な内容を、平凡に終らせず、流動的に描いているのは流石である。迫力もあり、魅力も感じられるのであるが、テーマとしてはもう少し省略させても、内容は一向に損われなかったのではあるまいか。

「パイネーラ」

吉原エミリオ

自然の中で、自然を見つめていて無理がなく、この人は詩の書ける人だと思う。やや緊迫感に欠けるのは表現が平板に流れている故か。慾を云えば、作者にはこの平板さを打ちやぶる気構えが欲しい。現代詩は、気分だけでは どうにもならないところに来ているようです。

「愚の座」 芳賀芳郎

芳賀氏の諦観から生れた禅味を帯びた詩と云えば叱られるだろうか。ニヒルな一面を刻みこもうとしているのは判るとしても、まだ完全に熟し切っているとは云えない。《ほどよい汗を着て》は面白い表現です。

「しあわせの園」

小野政子

繊細な女性の心使いが、心憎いまで表現されていて好感がもてる。ただ《ここは幸福な人の入る処です》は、幾分この詩の生命を弱めているようです。

「野良犬の独白」

永田泰三

ダイナミックな感じをうける。永田氏の実力を思う存分發揮した重厚な作品。疑人的な方法をとっているが、野良犬と作者が渾然一体となっているあたり流石である。野良犬の強引さを出しきっている割に、最後になって少しダレ気味となったのは惜しい。やはり最後まで激しく生への執着を強調すべきではなかったかと思う。

「旭日」「夜」「ロマン派」

水野 林

水野氏の詩は、作法の型にはまった一つのツボを心得ているようである。

「旭日」には自己統一による、禅味のような、或る種の調和と、精神面での根源的なものの追求が、感じられる。

「夜」は、イメージ過剰気味で、表現がオーバード。表題の「夜」

に、《風が絡み合いながら野を渡って行く》や《広野にひとり
むつくりと起きあがった》などは、情景描写が克明に過ぎて緊張
度を欠き、無意味な徒労を覚えさせる。「ロマン派」は、デカタン
スな雰囲気を現わそうとしたのであろうが、それほど評価に堪え
うる作品とはなっていない。最後の一行の《僕の故郷はそこなの
だ》は、気取りでもあり、また冗漫でもある。

第六号より

「たくらむ」

横田恭平

稀に見る冗漫をはふいた簡潔な作品である。語感の鋭さが、い
つもの耽美的なものからとき放ち、作品に重量を加えている。

「老人とエスカレーター」

可児三平

エレベーターの昇降するさまと、作者の位置が簡潔に要約され、
《老人に戻る》で、上手なしめくくりをなしている。可児氏として
は一つの試みかも知れないが成功している。

「高原抒情」

耕 玄

安定した基盤にのった作品。語感のやわらかさと、音楽的な韻
が、哀傷的 ではあるが、甘く定着したセンスの美しさとあい
まって主題を支えている。前に《春がめぐりくる》と断つてある
のに《めぐりくる季節の使者か》と、最後にダブラしたのが氣に

ならなくもない。

「荒地のなかの雑木のように」

狩海 亘

野生的な一貫性をもっている。言語が非常に感覚的で、つぎつぎと圧縮されたかたちで並び、単なる技巧に流れなかったところによさがある。だが、最後の《おまえはなにものか》で、すつかり底意をさらけ出した空しさを感じさせる。

「瘤鯛」

水野 林

面白いと云うことは、佳いと云うことの裏返しという言葉であるが、ともかく引きつけると云うことは大切である。新しい発見はないとしても、瘤鯛となって遊泳している作者をほうふつさせる。難点は、最後が、前半の洒落た云いまわしとはちぐはぐな肯定をなしていることと、具体性を欠いている点である。

「白い陶器と日光と水に織りなす」

藤田 勇

計算器の中からはじき出されたような、一分の隙もない。特別の不満はないとしても、読後感に打つものがないのはなぜか。一度この奇麗な弟を打ち砕き、そこから其の藤田氏の詩を生み出してみてはいかが。

「海と浜辺」 永田泰三

永田調が遺憾なく発揮されている。最近は目で読む詩が多く、耳で書く詩が少くなっている。永田氏の作品は後者であって、香気も高く、肯定に価する。文句をつけるとすれば、比喻や暗喩の面白さだけを狙ったように感じられるが、どうであろうか。

「もの言わぬもの」

小石茂行

詩に対する努力は称賛されてよい。だが、総体に肌理が荒らく、密度が足りないのは、素材の受けとりかたと、充分な昇華作用をまたなかったところにあるようです。

「静けき木立の中」

竹内頼母

達者な詩ではあるが、三、四、五行あたりの整理不足と、冗漫さが気になる。

「夜の悔恨」 真木衿子

哀傷的なものを小曲風に歌いあげている。二節の《裡なる女》は断りであって不要と思うし、三節の《あるかすかなる痛みよ》と、詠嘆しているのに《痛みにかえてゆく》と、蛇足を加えているのは惜しい。

「病める人」 小野政子

語感が常識的で飛躍に乏しいが、客観性の確かさと、冷静な目を感じさせる。少し、語感に溺れたところや、感傷にもたれすぎた点も見られ、作者はこの辺でそろそろ冒険を試みるべきだと思う。

「大陸の朝」 黒田八重

適確なイメージを力強く捉えている構成、発想などに作者の誠実さが感じられる。ただ、既成の型と、月並を表現に堕さないように注意すべきであろう。

第七号より

「道路について」「主体性」

横田恭平

前者は、横田氏の表白でもあり、また哲学でもあろうか。詩への道を昂然と歩いてゆく作者のヴィジョンが強烈にやきついてくる。後者の「主体性」は、行分けをしてあると云うだけで、詩と呼べるには抵抗を感じる。このだらだらとしたやりきれなさと言つては散文の領域とすべきではあるまいか。

「世代」 可児三平

詩に対する観念が、見事な造型をみのらせている。可児氏のよさは、新奇を街わないところにある。《ユーカリの雄しべは 朝の公園に坐る若夫婦の足許に散り敷く》はふくみをもっており《走り、蹴り、倒れ ユーカリの雄しべを踏みにじる》への伏線となっている。ほのぼのとした温みのある作品。

「失われた時」 佐藤博三

鋭敏な感覚と、激情的な意図をはっきり読者に訴えかけてくる。《巨大な水圧に地面はえぐりとられ》《ずたずたに切られた魚を食べて》等は、荒々とした作者の呼吸であり、体臭でもある。こうした在り方は現代詩の方向を示すものであつて、協々とした抒情への妥協を許さないところによさがある今後の活動に期待したい

「火」 小野政子

柔軟性に富んだ詩と云うだけで、一步も常識を出ていないようです。この器用さを突破すれば、新しい次元の詩が生まれてくるのではないだろうか。

「影法師」 芳賀裸人

省略の効いたよさと、変な技巧にこらない点を推したい。ただ、モノローグ的な内容が作品の重量感を削いでいるのは惜しい。

「言葉を連ねれば連ねるほど」

狩海 亘

今までの四篇に此して、飛躍がすぎ読んで疲労感をおぼえる。狩海氏の作品は大胆を言葉づかいが魅力の要素となっているが、《で首よ打たれよ》《負の方角から迫れナルスよ》は、作者だけの語であろう。口語調の中で、ぽつんと一行《けばけばしきものあるなり》などもどうかと思うし、全体のもつ意味あいからしても、もう少し要約されてしかるべきではあるまいか。

「悪霊」 藤田 勇

藤田氏の作品は一つの方向を示している。抽象表現のサンプルとでも云えようか。この一齣は、氏としても快心の作にちがいない。ただ、凝りすぎると作意が見えすぎる可能性が生じてくる。

「REVOLVER」 良一郎

近代詩は、詩の抒情性と音楽性の否定から始まっていると云われているが、良一郎氏は抒情性と音楽性を大切にすると云われ、言語の斡旋にもそつがなく、モダンなニューアンスを含む知性的なりリズムは安心してついてゆける。それに、技術的な内面処理なども、現代詩の方向に添っていると云えよう。慾を云えば、軽く書き流さずに、もっと積極性を打ち出して欲しかった。

「種子を蒔こう」

瀬古義信

この詩は一応これでよいのかも知れない。常套的で、踏醇的で、ただそれ

だけの感じ。もう少し、感動の焦点の盛り上がりには注意すればもっとよくなったと思う。

「花」「奥津城」二葉史郎

「花」は、小曲ふうなセンチメンタリズムであり、「奥津城」は、ロマンへの追憶を基調とする哀傷である。前者は、通俗的な抒情の追究であり、後者は、没我的な心境の彩を出そうとしている。甘さにだけ浸ってはいけな、抒情形体のあり方が、時代と共に変質してゆくものであることを銘記すべきではあるまいか。

第八号より

「おおいなるものがれる」

「惑わしい礼節は措きましよう」

横田恭平

横田氏の作品は、いつも日常的なものの中から、リリズム的な色彩と、哲学的な探究をもって特長としている。

問題点は、詩と散文の混淆をもう少し整理すれば、観念的なものから救われ、詩としての密度がより一層濃くなるのではあるまいか。

「冬眠」「流れる」

上村俊幸

素材から、一度自分をつき放し、つき放したところから、別の目で自分を客観化している。そこにこの詩を書いた作者の鋭い目を感じる。この詩の弱さは類型を出なかつたところにあるようだ。

「終焉」

藤田 勇

藤田氏の作品には湿潤な抒情はない。抽象傾向の常として、か
らからと乾いた抒情だけである。こうした詩の常として、何かを
解つてもらうよりも、何かを感じてもらうのが先であるかも知れ
ない。

「心象叙景」

狩海 亘

雑多なイメージを象徴的にあつかつて、現代的な成功をみせて
いる。所々、語感の飛躍がすぎて、素直についてゆけない憾があ
る。《たくさんの焦げた箸となつて》《亀たちのように降る》《蜂の
尻をつぶしたとねがい》などの造語だが、狩海氏の作品の中では
一番好感のもてるものと云えよう。

「男」

可児三平

横田氏の言を借りると、可児氏はいつでも冒険家である。人生
の探求、詩の探究もまた冒険である。敢然として書かれたこの詩
に、よむ人は快心の笑みをもらす。然りと云わざるを得ない。

「烈風」

耕 玄

詩をつくる前に、何に詩を感じたかと云うことが大切である。三節の《怒号》にも 哀憐にも似て風は、力の絶えゆくまで 空を押す》は、叙景が躍動している。観念的な云いまわしは、いたずらに言葉の空転をまねきがちであり、突込みの浅さが現われてくる。《一眺の 春崩す》は、再考あつてしかるべきであろう。

「水」 芳賀芳郎

芳賀氏は、思考と情緒の線の屈折を大切に扱う人である。オーソドックスとでも云うべきであろうか。この「水」は、よく出来た作品ではあるが、作者自身もう一度読み返してみれば、五、六行の《いづこより誰がつけ添えるこの はるかなる味か》の不均衡に気づかれるに違いない。

「愁い」「四十代」

小野政子

軽いスケッチ風に見えながら、背後から貫ぬく作者の目を感じさせる。レトリックも確かだし、趣向に於ける純粋性もよい。「四十代」は、単なる手馴れに抛りかかり、思想性の稀薄が、作品の深度を弱めている感じ。

「風」 真木衿子

この作品も、スケッチ調の軽さと明るさをもっている。一節の最後の一行《みんなちっておしまい》は再考あつてしかるべきで

はあるまいか。

「枯野」 鹿毛 至

鹿毛氏の詩は、バランスをくずさないところによさがある。把握力も、載りとり方も決定的だし、内容は風土色に富み、音感的な効果を狙った修辞法も透明で快よい。気になるとすれば、牧歌的な甘さだが、この辺でそろそろ一つのレジスタンスを考えるべきではあるまいか。

「さよならを」 「雨の日に偲ぶは」

蓼科冨智雄

こうした抒情は作者の持味であるかも知れないが、既成的なもので新味に乏しい。手垢のついたこの甘さを抜け出たところで、本領を発揮してみられてはいいかが。

「哀れな女」 山川百合子

ストーリーの面白さをもっている。然し、こうもあつさりと云い切っては、単なる説明であって、散文と混同されやすい。もつとよく咀嚼し、燃烧度をまっべきであつたようです。最後の三行は生きている。

第九号より

「旅」「めすかまきりの立場」

可児三平

ユニークを詩法は、通俗的な言葉を使つてはいるが、通俗性を

抜け出たものであり、作者の経験と、思索を通し、主題の旅を内側から書いている点、成

功と云えるだろう。後者は、諷刺の裁いた作品ではあるが、それほど批評に耐えられるものとは思われない。

「かに」 小野政子

まとめかたと、締括りが非常にうまい。リズムも健康的だし、情緒がのびのびとしている。だが、作者はこの流調なポーズに酔ってはいけない。《それが世間の目 と言うもの》は、単なる断りにすぎないことが指摘される。

「古代紫」 佐藤博三

詩を幾何学的にあつかえばこうもなろうかと思うほど無駄がない。感覚も斬新だし、内的生命の躍動をリズム化した点、作者の力量のほどを思わせる。発想も非常に意欲的だし、屈折度や比重も大きい。明瞭性、或いは伝達性とも云うべき卒直な野心は、高く評価さるべきであろう。ただ、西脇順三郎とあまりにも似通った言葉づかいが気になる。

「握手」「影」 江尻 潤

江尻氏のよさは知性的な素朴さにある。言語の配慮が普遍形であり、かなり高い次元をもっている。「握手」に於ける口語体の中の《吸盤をもてるごとく》は、不用意ではあるまいか。「影」は、緻

密な計算から割り出されたニュアンスが、作者の思考する自己投射と融けあつて、一つのムードをなしている。氏のカムバックは、この詩欄の一つの収穫と云えるだろう。

「地球を枕に」

「地球はうめいている」

矢島健介

斬新とか、鋭敏と云うものはないがかなりの手馴れを示している、「地球を枕に」はちゃんとした起承転結の作法もとり入れているし、抑制された語感も快よい。総体的に感受性が豊富で絵画的な楽しさを抱かせるが、反面、常套的なものに甘えすぎた嫌いがないでもない。「地球はうめいている」は未整理で、批評の対照とするには未だしの感。

「何を視つめて」「鶏糞と男たち」

真木衿子

読んでいて気持がすかつとなる詩である。本質的なものも感じられるし、一応内面の世界を、よく打ち出している。《へうへうと鳴る木枯らしに 身を晒し いっしか 重い霧の中にお前を閉ざす》は、心憎い表現である。だが末節の三行は当を得たものとは思われない。「鶏糞と男たち」この作品の救いとなっているのは、最後の《あたしの知らない素敵な森が その陽焼けした頬と 白い歯の奥に輝いていた》

「かげろう」 鹿毛 至

鹿毛氏は、いつも大陸的な視野に立って詩を作っている。そのイメージは絵のように美しく、その抒情は音楽のように優しい。《二つの孤独の象を》は非凡な表現、慾を云えば概念的な風景描写のみが主で、抵抗と迫力が足りない。

「ミシリツカード」

山川百合子

深みはないが、そつがなく、間然としたまとまりを見せている。ただ、焦点がミシリツカードのみにとどまり、そのアングルの狭さが詩を弱めている。

「胎胚」 藤田 勇

スタイリスト藤田氏が最も得意とするポーズであろう。断片にすぎる嫌いはあるが、モダンな云いまわしや、脚韻を次行に移して効果を狙うあたり、さすがである。だが、こうしたパターンは発見ではない、一見藤田氏の个性的なものに思われるが、北国克衛あたりが盛んに発表した既成である。

「イタペチ村」「分身説」

横田恭平

横田氏の作品はいつも柔軟な抒情をモットーとしていて、日常的なものの中から詩を把握し、煮つめ、エキスを創造する。これは横田氏の個性のようで、他の追従を許さない。作品は総体に透明であって難解性がない。この普遍的なところに読者の目が集ま

るのだと云える。後者の「分身説」は、詩としてかなりの評価に耐えうるものと思うが、前者の「イタベチ村」は、記述的で、冗漫が目立ち、散文の領域を出ていないようである。

○

以上、創刊号より第九号までの全作品について、少しずつ触れてみた訳であるが、読み返してみても、必要以上の饒舌や、意に満たなかった点が多々あり、汗顔の至りであるが、一応ぼくかなりの見方であつてみれば、そのまま発表させていただくことにしたい。

「コロニア文学」の詩欄を一瞥して、一体何が云えるであろうか。数においても、質においても、道なお達しの感じは免れない、然し、総体的に見て詩に対する熱情の激しさや、真摯な態度がうかがえるのは心強い。

実作陣の横田、藤田、狩海、可児、永田、諸氏のベテラン常連は別として、良一郎、江尻両氏のカムバックや、佐藤、矢島両氏の参加は一つの収穫であつたと云える。また、鹿毛、水野、小野、大浦、諸氏らがつついてくれるのも頼もしい限りである。作品面では玉石混淆があるとは云え、韻律の区分、イメージの型の使い方、又は言語の配置等々、技巧面でもかなり高いレベルにあることが云える。詩を書く意図を意義づける言葉はいろいろあると思うが、一つの道を追究すると云うことは、一朝一夕になるものではない。先人の言葉に、成功した詩とは《例えば観察、思考、読書、情緒などがくみ合わされて、もとの離ればなれの姿を失い、一つ一つでは持たなかった意味を持つ、複雑微妙な有機的全体に

なったものである』とあるのは、まことに味わうべき言葉であると思う。

コロニアに於ける現代詩は、作者と読者の距離があまりにも離れすぎてはいないだろうか。詩として抽象される郷愁的なものに對して、一般はどのような理解を示しているだろうか。大方は徒らな感傷としてあっさりと排斥しているのではあるまいか。このところに詩壇不振の問題があるのだと思う。孤高の精神は尊いとしても、それが独善に陥った場合、これは無意味であり救われがたいと云わねばならない。

この詩欄が、今後どのような展開と進路を示すか、ぼくは皆さんの活躍に大きな期待を寄せてやまない。ともかく、コロニアに於ける現代詩の貧困を救うには、もつと詩壇としての大きな層と、幅を持つ以外にはないようである。皆さんの健闘を祈る所以である。

（終り）

許容と共感の系譜

第一号より九号まで

の短歌作品について

高 原 純

いま、ちよつと、思い出しているのであるが、何時だったか短歌関係の某君が、コロニア文学会の研究会で、コロニア短歌についての発表を行なったことがある。

そのとき集ったのはそのほとんどが短歌関係のものばかりだった、と言う話をきいた。

これは、喜劇だか悲劇だか知らないが、この私の小文なども同じ様な運命にある、と言ってもよいのであろう。

コロニア文学研究会の人達などは、短歌などへの関心は先ずない、と言ってもよいのではないか。

そのことについて、私は別に不満とも何とも思わない。

いや、むしろ、それで当然だと思うこれは何も私がひがんでものを言っているのではない。

誤解を恐れずに言えば、一般的理解に逆行する事によってこの短詩型は僅かに詩的願望を遂げ得るのだと言いたい。

短歌を知り味わうためには、やはり短歌の世界に入りこまねば無理だと思う。

短歌は説明し説明することによってシチエーションを作りそこ

へ読者をいざなうて行く、と言った様なことは出来ない。極度に尖鋭化することによって伝達を遂げる他ない。

言わば、その特殊性による以外に手はないのだ。説明しているかにみえてしていないのが短歌である。

前おきが少しなくなっただが、要するに一般的理解と短歌の文学的価値とは別だと思う。そして、ここで言えることは、興味がない、と言うだけの理由で他のあるジャンルを無視するだけの勇氣があるとすれば、それは、表現と言う世界への恐れを知らないやからと言う他ない。

扨て、作者にして二十人、作品数にして、五百六十余首、これがコロニア文学第一号より九号までに掲載された短歌作品の量である。鑑賞や批評ぐらいならと思つて引きうけはしたもののこれは、ちよつとした手ごたえのある質量である。

最初私の計画としては、これらの作品群を一つの素材として消化しながら、文章にまとめるつもりであつたが、いざ、とつかつてみると、現在の私にはそれをこなしてゆくだけのエネルギーも余裕もないのを自から気づかざるを得なかつた。

結局はじめの予定を変更して、号を追つて作品をみてゆく、と言ふもつとも常識的な方法によることにした。言わば安易な方法であつて、勢い歌評的にもなつて行くと思う。

これは、作歌にたずさわっているもの以外にはたいくつ以外の何ものでもあり得ないのではないかと思うが差しあたつて我慢してもらうはかない。

それから、もうひとつ。コロニア文学掲載の短歌作品は一体どのような経過を経て掲載されるのであろうか。

三十首詠などのまとまったものは指名によつて提出されたものであり、四、五、六首、と言ったのは投稿によるものであろう。投稿にせよ、指名にせよ問うところではない。が、作品は、ある量のものをもつと重点的に扱かわれるべきであろう。

今迄のコロニア文学誌上での短歌作品は、杜撰のきらいがあった。

私が、この小文において、否定しなければならないものは否定しようと思うが、それは以上の理由によるものである。

文章は必要なところで抵抗がなかったなら書くのも読むのも無意味である。

次に、文献的意味も幾分ふくまれて来ると思うので、各作者の発表総歌数と、各号別に作品発表者と作品数を記しておく。

川原比露思、七十八、陣内しのぶ、六十一、南条由喜夫、四十九、佐藤博三、四十六、瀬崎涛声、四十二、小笠原富枝、三十九、弘中千賀子、三十、小笠原正好、三十、木村正和、十一、西田季子、十、森元三山、九、貞野雅子、大場時夫、五、秋永三郎、五、小竹清子、五、藤田美砂子、五、森重扶美、四、福田元広、二、大塚正枝、川原奈美、各一、

各号別作者及び作品数

第一号、川原比露思、十、南条由喜夫、四、小笠原正好、七、第二号、川原比露思、八、南条由喜夫、二、小笠原正好、五、秋永三郎、五、大塚正枝一、第三号、川原比露思、九、南条由喜夫、七、小笠原正好、五、陣内しのぶ、十、貞野雅子、二、第四号、川原比露思、七、南条由喜夫、六、小笠原正好、四、佐藤博三、陣内しのぶ、六、河原奈美、一、木村正和、五、森重扶美、四、小笠原富枝、九、第五号、瀬崎涛声、十二、川原比露思、八、南条由喜夫、七、小笠原正好、五、佐藤博三、五、大場時夫、五、陣内しのぶ、十、西田季子、十、貞野雅子、二、福田元広、二、木村正和、六、第六号、川原比露思、五、小竹清子、五、南条由喜夫、五、藤田美砂子、五、佐藤博三、五、陣内しのぶ、五、小笠原富枝、三十、第七号、瀬崎涛声、三十、川原比露思、十、南条由喜夫、八、小笠原正好、四、陣内しのぶ、三十、貞野雅子、四、第八号、佐藤博三、三十、弘中千賀子、三十、第九号、川原比露思、三十、南条由喜夫、十、陣内しのぶ、三十、以上である。

以上の中から、二、三、の作者を除くと、あとは椰子樹誌の關係者ばかりで、コロニア歌壇における新鋭、中堅を求むるとすれば、この中の何人かに指を折らなければならない。

晩夏の風に研がれてゆくものを清き　夕べに想っていたり

川原比露思

散漫になる夜の心まどろめば裡よぎる翳たれとも知れず

川原比露思　第一号所載、心象の変化、一連よりぬい

た。先ず、短歌とは何か、言えばそれは、言葉の文学だと思う。こ

の様な当り前のことを言えば笑われるかも知れないが、案外この当り前のことが納得されていないようだ。

短歌における、言葉は、その内容を説明するためと言うよりも、直接、感動の伝達のためだ。したがって、その抽象性がつよく要求される。

短歌は、営々として千数百年、その方法をつみあげて来た。無論、抽象しない芸術など、この世に存在しない。

しかし、短歌の場合、リアリズムだ写実だ、自然主義だ、ロマンチズムだと言ったスローガンの固執によって多くの誤まれる概念を作りあげて来ているのではないか。

川原の、この、晩夏の一首も、風がー研ぐー言ったきわめて抽象性のつよい用語によって一首を統制し、しかも、清き夕べに想う、言う照応により、きわめてメタフィジカルな世界を構築している。一首全体が一つの、比喻とも言える。

二首目も、二句から三句へかけての省略は短歌独自のもので、散漫になる夜の心、と、まどろめば、の間に、小休止をおき、しかもイメージの世界では、嫋嫋たるつながりを見せる。

この一首も川原の想念の世界で、しかも、いかにも写実的な相を帯びているところに注目したい。

実は、この二首を含む、心象の変化一連は、今迄に一度批評の対象になっている。コロニア文学第二号の座談会形式による合評であって日く、――長い小説を読むよりこう言った凝結したものを読むのも又別な感銘がある。――椰子樹のものよりずっとよ

い。――この作者としては、最高の部にはいる――とてもよい――相当陰影も深い――僕も椰子樹より佳い、と思う。――言わば激賞のかたちである。

私も、前掲の二首などは佳作だと思うし、無論、川原の作品としては佳作の部にいると思う。

但し――一連――となると、そう手ばなしでは居られない。随分と、問題の方が多いのではないか。

コロニアの短歌作品を鑑賞、あるいは批評する場合、少々厄介な問題がついてまわる。

日本での作品とどうつながっているか、作歌傾向、作品の類似性、と言った様なことがからまつて来る。たとえば、心象の変化、四首目の

生活の煩瑣のなかに相對の苦しみいくつ消えゆきしなりの前には、

肉親を負いてあえぐと言う意識相對にして子らさえも持つ
と言う「帰潮」のなかの佐藤佐太郎の秀作がたちはだかる。

あせらずに生きむと思う脚下のかまきりの子は青く透きつつ
と言う川原の歌を読めば、

父遠く病みますなり掌の上のギスは草より青くかなしも
と言う、千代国一の代表的な作品がすぐ頭に来る。これは、単に用語の類似性とか、掌の上と脚下の差ではない。

作歌にたずさわっているものの臭覚に鋭敏にうったえてくる、
発想そのものに関つて来るものなのである。

それにこの川原の一首の作品的価値はきわめて底い。

千代国一の場合、父が遠く病んでいる、と言う想念と、掌の上のギスが草よりは青い、と言う悲傷は、生命感覚の上での連繋である。

川原の場合、あせらずに生きむと思う、と言う觀念と、脚下のかまきりの青さ、との繋がりには、何ら読者を納得せしめるものがない。

ことごとく生くる努力を重ね来て双掌に浮ける青き静脈

この一首は、双の手に浮いている静脈をみて、ながく生き耐えて来た、と言う作者の感慨であろう。それでは、ことごとく、と言う、上の句をどのように解釈したらよいのであろう。ことごとく、は、残らず、と言う意味の副詞ぐらいのことは誰でも知っている。そうすると、残らず生きる努力を重ね来て、と言うのはおかしい。結局、誤用と言う他はない。これを、ことごとく、とすれば一応意味だけは通る。

それから、双掌に浮ける青き静脈、の、双掌の「掌」は、手、と音を通わせて使ってはいるが、元来、手のひら、の意味で、手のひら、を、手、と一音で使用したい場合慣用しているに過ぎない。

手の平に、静脈が浮く筈もないからこれも明らかに不用意な使用例である。

不安とも期待ともつかず扉開きし無人エレバードルの内部明るし海を聴く形にしばしまどろめばひとでは匂う日に乾きつつ人間の肉体の比喩もたらしし木の実の具体に触ることなし

冬の日のぬくとき幹を撫でており昆虫の如き表情をして
斑点を舗道につけて雨過ぎぬまどえる吾にかわりもなく
春の疾風に身を曝しつつゆく徑に土くれの如く悔はこぼれつ
花ひそむ茗荷に春の風わたり信ぜむとする心いましむ

第二号、昆虫の如く（八首）第三号、枯葉色の鳥人九首）から
ぬいた。

こうして書きぬいてみると流石にうまいと思う。このうまさに
こそ川原作品の秘密がある。

彼は、自らの心象を托すべき具体をたくみに選びそれに加える
に抒情味ゆたかな表現をもってする。

所謂、川原調なるゆえんである。これは、容易に他の追従を許
さないものがある。

たとえば、前掲の

海を聴く形にしばしまどろめばひとでは匂う日に乾きつつ
など、絶唱に近い作品と言う事が出来る。この、作歌技術の前に
は、

日に干きし赤きひとでは匂い一つ岩蔭にわが数分のうたたね
と言う、吉本青夢の十余年前の作品があつた、などと言っても始
まらないのである。

私は、川原の作品に、きわめて多彩な、アルチザンのものを
感じる。彼は決して多力者、あるいは多作家ではない。しかし、
営々として発表し続ける。見あげたものと言うべきか。

第一号、二号、三号、へと発表し続けているものに、南条由喜

夫、小笠原正好、がある。しかし、批評鑑賞の対象としては残念ながらよわい。この二人については別の機会にふれる事にして、比較的に発表数の多い、陣内しのぶの作品に移ろう。

陣内は、第三号に十首、四号に六首、六号五首、続いて三十、三十、とかなりまとまったものを発表している。

三号の、一連、死魚の眠、は、十首と言う量にもかかわらず、取りあげたいと思う様な作品はなかった。

何か意味あり気に、手だれの技術によつてまとめあげられているにすぎない。言わば、燃烧を伴わない技巧の空しさか。

とどまりてあれば危うき芋の葉の露に触れたき指先熱く
十指にも余る子等持つ夢醒めてどれも優しき身近のこけし
紫陽花が咲かざるままに夏季逝くを予感の如く淋しみていつ
笑うまで暇どりし貌思いつつ歩める足の少し縛るる

噴き上る想抑うる難聴の耳奥に響きつづくる貨車は

第五号、夏季逝く、十首よりぬいた。ここらあたりまで来てようやく陣内作品は充息の様なものを感じる。

一見、日常詠のようであつて、そうではない。日常性を越えることによつて達成された把握である。

一首、一首、が捉えているのはかなり複雑な心理の屈折であつて、言わば彼女の情緒と生理的感性の相であろう。

森重扶美、の、遠蛙、(第四号)はわずかに四首ではあるが、下手を八首十首にまさるだけの質のかがやきをみせている。

サルビアの末の色失せし花殻を鳴らし過ぐ風かがやきもたず
鳳凰樹翳ふかくしてわがめぐり禁断の城の如き風あり

鷹揚に道を横切る駐鳥らは椰輪する如く羽根ゆすり去る

かがやきを持たない鳳の捉え方も感性的だし、木のかげに禁断の城をみつけることも、不可思議な人間心理の世界をのぞかせる。椰輪する如く、と言う比喻も適切だ。何よりも作者はそこで、感性を通して、ものを見ているのだ。

他、四号には、円かな声、小笠原富枝、無花果の枝、川原比露思、古き鐘、佐藤博三、空中溺死、木村正和、白がねすすき、南条由喜夫、それぞれ、五六首から七、八首、発表を行なっている。流れいるを風と思わず刻おきてはじける栗の青みたしつつ

小笠原富枝

この程度の、ひとりよがり、では、敢てその内部世界をのぞきたい、と言う魅力もない。

川原の作品は、敢て悪いとは言わないが、何となく頭腦的な操作がめだちすぎる。

一本のゴムの若木が伸びていて涸井戸にくろき影をさしいる

佐藤博三

写実のなかに形象以上のものを見ようとしているのが解る、彼の場合こうした方向に活路があるのではないか。

詩の骸かぎりもあらぬ氷原に書く鮮紅の吾の五線譜 木村正和
ボエミヤン吾が網膜が記憶する多肉観葉植物の空中溺死

木村正和

感性によったものを解く鍵は感性である。しかし、ここでは、作中の、もの、が、逆に前面に立ちほだかつて作品の鑑賞をさまたげる。

安良田済説くところの、前衛作品の解読法を逆にした様な作品だ。作中の用語をばらばらにして、一つ一つ、意味づけをすれば作者が何を考えたか、くらいの見当はつくかも知れないが、その程度では安定した一つの世界からの遁走は無理だ。

彼の作品でも、五号の、「さわやかに叛きゆきたる若ものの背のおのずから神をうべなう」は少し面白い。叛く、と言うことと、神の肯定、と言う条理の背反にこそ文学としてのテーマがある。しかし、この思想が借ものでなかったら幸いだ。

五号、には、瀬崎涛声が、いかにも老作者らしい落ちつきのある一連十二首、を発表している。

後ろむきのもののさびしさ竹群は折れまがるかに向うになびく
後ろむき、もののさびしさ、と言う観照、そして、折れまがるかに向うになびく、と言う比喻には人生がある。

しかし、作品全体から言えば、日常の安易さを、そのまま作品世界に持ちこんでいる、と言うところにかすかな不満をおぼえた。
時刻む時計と低き脈博とつながるものをしばらく思う

西田季子

おもむろにきびす返せど同じ地形にて帰るより外なき一日の憂
愁

あざやかに喪うものの見え透きて面あげてそをもうけ止めんとす

西田季子の、喪うもの、十首（五号）のなかからぬいた。

この三首には、何か人生を踏まえた確さ、とでも言った様なものを感じるこの調子で十首を通せば、と思うのであるがそれは無理と言うものか。

残した作品のなかには、生活を”生”なままでほうり出しているもの、や整理が足りないと思われるものが目についた。

たとえば、「放置さるる赤き空車に雨流れいて思索は昨日の周辺めぐる。」傍線の個所には、表現の上においての問題がのこる。

それから、難解な様な作品も幾首か目についたが、こうした表現法を追うこと自体が無意味だ。感性と表現のずれが作品を浅いものになっている。

大場時夫の、つけ入る声、五号、は、まことに処理にくい作品だ。

荒々と吹きすさびいるよるの風こもりて家の内にも鳴りつ
吹きすさぶ、は吹き荒れると、同義語だ。荒々と吹き荒れる、と言う反復はこの場合何らの必然性を持たない。

それから、荒々と吹きすさびいるよるの――風――こもりて家の内にも鳴りつ、の、風は、一体上の句につくのか下につくのか。どう読んでみても音律の必然性から、この、風、は、はみ出して来る。

短歌は、何も、三十一字、でなければならぬ、と言うのではない。茂吉の歌などでも、五字、六字、の字あまり、と言うものもある。

しかし、それは、日本語の言語律としての三十一拍のなかに納まる性質のもので、この場合と同一視できない。

忽ちにつけ入る声にあるふくみ笑いに汝を蔑みやすし

この一首などもまことに意味のとりにくい作品だ。それに、つけない声にある、と言った必要のない間のびのした一語の投入によつて生じた、三句から四句へかけての、句われ、についても、作者は何らの顧慮も示していない様だ。

こうした表現の仕方について、読者も作者も、自在な表現などと、夢誤解してはなるまい。三十一字詩型と言う短歌の特質は、読み下す場合の速度と完結性の三十一音律にある。句われ、句またぎ、によるリズム感の喪失について、新らしい歌学的な意味において、もつときびしい照射があてられるべきであろう。

続いて、私は、コロニアの歌壇では比較的大作の、三十首詠、小笠原富枝以下の作品にふれる事になるのであるが、ここらで、一息いれることにして、今迄読みとばして来た、何人かの作品をとりあげてみたい。

第一号から、殆ど毎号と言っていいくらい発表し続けているものに、小笠原正好がいる。作品は、写実風なものに前衛がかったものがミックスされているが、残念ながら発表回数が多いのに比

べて作品としてまとまっているものは少ない。

緑照る木下は暗きまで深くペカンの莢実拾い見てたつ
路の人の白髪いたく光るとき蔭あるこちらへ横ぎりて来る
合せたる手のひら固く隙ありて失せ去りゆけるもの皆かなし
ふりかえることなき人に距離のびて風よぎりゆくわが白き道
比較的に写実的な作品にまとまったものが多かった。

南条由喜夫も営々として第一号より発表し続けている。老境に
近い作者ではあるが、表現にはなかなか斬新なものがある。

この国に吾が半生はすぎにきと思いはゆらぐ育き夜の闇
悲しみは残りて独り肘をつく窓にみる雨芝生にしずむ

背景に破家あればこの街を中心にして興奮のあり

恙なき日々の翳りに目つむれば白く明るきこの幻視境

信じねばゆだねて居ねばならぬ日々踊場にさす明るみに佇つ

作品の出来不出来の差は比較的に激しい。小竹清子、藤田美砂
子、は椰子樹ではベテラン的な女流だ、コロニア文学では、五首
宛、同じ五号に姿を見せている。

作品にはそれぞれに個性的なものがある

友の通夜明けて帰りぬ底青く水噴き上げぬ噴泉の傍

小竹清子

愚かなる心あやつり生きて来て務めて老を養なわんとす

小竹清子

強いらるるそこより拒否を育てゆくバラの紅を見るともなしに

藤田美砂子

貪婪にうすき日曆剥ぎ奪りて街は歳末の息づき荒し

藤田美砂子

それぞれ、二首宛ぬいてみた。

歌を作り続ける、と言うことは、人生なり生活なりをどの様に見つめてゆくか、と言うことであろう。一般的通念のなかにおし流されてしまったのでは歌も詩もあり得ない。たとえ僅かでも抵抗の理念を伴なうとき、そこから文学が生れる。

夢の国の基準の如き持つならんたとえば綿花最低価格

秋永三郎

七時よりラジオは長き語を重ね貪しき国の政治をたたう

秋永三郎

秋永三郎、くにたみ、二号（五首）は、コロニアでは殆ど稀有と言つてもよい、社会的な視野を持つ作者であろう。彼は、身辺より社会を、社会より又身辺を詠う。

常識と言えば常識、オーソドックスと言えばそれ迄であろう。しかし、常識をもつて常識を越える可能性もある。

そうしたものを持った作者として秋永の名は記憶されてよい。

四十三年度の母国歌壇において、迢空賞を授賞した、近藤芳美的な作者をコロニアに求めるとすれば僅かに秋永あたりに指を屈する外ない。

こうした作者を、コロニアでもひとりくらい育ててもよいではないか。

流浪の眼

小笠原富根

(第六号、三十首)

小笠原富枝の、流浪の眼、一連は、コロニア文学誌上に、はじめて、まとまった短歌作品が姿を見せた、記念すべき作品群であった。

コロニアにおける短歌の、一つのレベルを示すものと言えよう。無論、評価褒貶は自由である。彼女の作品に感覚の遊戯、観念の空転を指摘することも容易である。

しかし、また、どこかきわどいところで現実に根を下している。先まわりして言えば、この根をどの様に養うか、で、この根をたつことによつて彼女の作品は、容易に枯死するとも言える。

入りたれば歩むはかなく踏みゆくを後ろに草の立ち直る音身を透きてゆくものとして聴きており感情の音生活の音

片照らす中歩みつつ不意に吾が耳たば奇形になりゆく思い風致地区へさきがけて翔く鳥の群聴きおり今の心なごみに吾が声に追われゆく犬隔たれば全貌となりて見ゆる尾の張り夏の陽の入りしやすらい夕風の綴れる花の道をゆきつつ

巴旦杏の残り果落ちたり其の幹と吾とのあい鈍き音曳きひとときの感情をぬけてゆきし如土より生るる嵐の濁りは一握となる小鳥なれひびき来る体温に心眩しみ居たり

作者の心のなかの基礎体験を大切にして行けば以上の様な表現をとらざるを得なくなつてゆくのであらう。そして、これらの作品は、伝達は可能であつても説明はしにくい。それは、彼女の感性のささえ、なくしては無意味となる言葉の点綴だからだ。

たとえば――後ろに草のたち直る音――でも彼女の感性を通して聴かなければならないし、全貌となりて見ゆる尾の張り――も感性によってささえられた視覚に他ならないからだ。一般的に言つて、作歌の誘因となる感情的なもの、これを感じ動と言っているが、これは大凡次の様に大別できる。

一つは、独特な外的条件の刺戟によるもの、たとえば、死、病氣、生活苦、など言つたようなもの、と、もう一つは、実体のない、きわめて感覺的なもの、生きている、と言ふこと自体を触媒とする、根底的内的な、生そのものの微々動であつて、抽象的なもの、とも言ひ得るものであらう。

小笠原など試みているのは、そうした内的な感動の把握であつて、たとえば、小とりが飛んでいる、と言ふ平凡な事象も、生命的な実感として、目眩めく様に受けとる。

風景の山でも、それが故郷の山に似ているくらいの感動では、とうてい表現の世界にもちこみ得ないのだ。

こうした、一群の作品に対する批難は、解らない、につきる。解らないと言ふのは批評以前の言葉で別に氣にする必要はない。

しかし、表現の未熟さが、または、勝手な表現が難解さ、となつてゐるのではないか、と言ふ反省も必要だ。

黒き傘の中なれば汚点の垂るる如歩める吾が雨より見えず
何時よりか歩調合わずなりしこと射光強き舗道過ぎむとし
夏の彩染み来るような眩しさに醒むれば深く朝の流れの
以下の傍線の個所などに未整理なものが感じられる。

山の孤独 陣内しのぶ (七号、三十首)

陣内しのぶの、山の孤独、一連を読みかえしながら、今更の様に彼女の資質に目をみはる思いだ。

陣内の作品は、その次元的な高さ、において、小笠原富枝に匹敵する。しかし、作品からうける感銘にはかなり大きな隔りがある。小笠原にとって、女性である、と言うことは、その作品世界においては、さして重要とは思われない。が、陣内の場合は、それが、必須の条件となって来る。

彼女は、自からの、奥深いところで把握した、生、の実体を、生活周辺の点景に托することによって鮮明に表現する。

かまけたる月日のながし冬の灯に烙印の如白し指の根

方位なきかそけさに冬の雷鳴るを聞きおり熱きアイロン持ちて
植えかえすつわぶきの葉の締まりに刷くほどしばし冬の没つ陽
一つの鍵長く手にあり湿りつつ夜のくだちを匂う夜香花

戻り来て街の灯りにかざしいる山の孤独のにおう指先

還るなきものばかりなる墓地に佇ち花密集すねづみもちの木
こうした、一連の作品から、私は、彼女の、生、への願望の強烈さを読みとる。たとえそれが諦念のかたち、をとるとも。そして、

紛れざる思いに掬う谷川の水とめどなし掌よりこぼれて
溺れゆく如き眠りよ垂直に来る死をむしろ希いなどして
灯の下に山草の花萎ませて活づき返る夜の眼は

めくる如鮮らしさあれ唐突に鉢の中にたつ一つ砕音

こうした、対決のいさざよさも見せる。――悲劇の文学である短歌には危機が必要だ、陣内はその、危機、を、自らの女性に設定した。

十年 瀬崎涛声 (七号、三十首)

いかにも老境にある作者の感慨の様なものがうかがえるし、それなりに力のこもった一連である。

畑裾の一群の竹昏れはてて其処のみに涌く如き虫の音

作事にていたみし庭のたわらぐみ漸く一顆をむすびて赤む
躬を揉むが如くに風にあらがえる高草見えて昏れてゆく窓
自生せるアスパラガス見れば蘇るここに苦しみし農の十年
小さき渦うかべて川の水は逝く時の流れの具体の如く

おもおもとアバカテ実り重々ともる日多きこの十二月

明日あるは判らぬ老の命なり机上のものはととのえて寝む

作者が全身をもつて示している短歌の在り方、がここには感じられる。表現に曖昧さを許さない、作者が多年にわたって鍛えこんで来た技法には、いささかのゆるぎもない。

母国歌壇における同人結社誌などの同人作品に比肩するだけのものを充分持っている。

只、こうした作品に、どのような文学的評価が下されるか、と言うことは、自ずから又別な問題であろう。

扨て、今、ようやく私は、コロニア文学第八号を手にもった。

もの憂い、言わでもがな、の作業もようやく終りに近づいた様だ。

いましばし、心をむち打って、三、四の作品にのぞまねばならない。

淡きかげろう 弘中千賀子 (八号、三十首)

雑木々のあわいに低く夕靄が執する如くまつわりてゆく
柔軟な皺を刻める木の幹と吾との対話つつむ暮色は

生の声持たざる樹々の凜々しさに愛慕と言わむ切なさよする
感情の起伏煮つめし如き過去木の年輪のすがしさはなく

と言った様な作品に読者は、作者の感性を見るかも知れない。
私も一応賛成である。

しかし、ここには、作者の、短歌を詩にしなければならない、と
言う、苦悶がある。

この苦悶をぬけたところから、詩、がはじまるのではないか。し
たがって、私は、

蝕ばまれし葉ずれが透す夕空のうつろい迅き朱にじみつつ
つむじ風に似て過ぎゆきし妬みにて呆けし如き若き昼月

網膜に復原したる映像の一瞬にして大群のなか

と言った様な、一見、不用意に見える作品にむしろ詩的充実を
感じる。

そして、更に、

かなしみの色流れたる君の眼を逸らすこけしの首かしげいて

いつまでも空に漂よう夕ぐれに吾が立ち入れぬ君のかなしみ
君の目の黒きがせわしく瞬けるを見てしまいたり門を出でつつ
ここまで来て、作者の呼吸と鼓動にふれる思いがする。立ちい
り難い人のかなしみを知る作者の謙虚さは、あるかなしきをもつ
て読者の胸に伝わって来る。はかり難い人間の心のかなしきは、
説明を要さない、全的なものとなって伝達を全とうしていると言
える。

発想と表現の自在さは、再読、読者の心をひたして来る。大げ
さなことを言えば、この三首のためには他の幾首かは無視しても
よい。

野火 佐藤博三 (八号、三十首)

ここには、どの様な佐藤の意図がかくされているかは知るべく
もないが、読み終つての感想を率直に言えば、事実への依存度は
以外につよい。無論、事実が事実であつていけない訳はない、が、
比喩なら比喩が、単なる、比喩に終っているに過ぎないと言うこ
とだ。

氷片のようなる星のこぼれいる空遠く来し行方なき風
乾きたる風に吹かれている夜のわれの内部の枯れし花々
いつまでも消えぬ灯がほし夜に溶ける街並を灯がつらぬきてゆ
く

氷片のような星、乾いた風と、内部の枯れた花、消えぬ灯がほ
しい、と、夜に溶ける街並の灯、などあまりにも安易な発想では

ないか、

匂いなき花首おとす冬まろみイツペ・ロツシヨにきざす夕光
近づけばさわさわ技を組み鳴らしわれを囲める裸木の群

敷石の固き手のなか眠りにも治癒遠き眼は充血持たず

傍線の個所など表現不足、と言うよりは語法無視にちかい。

蒼白き壁めぐらせるピラニアは追いつめられし冬に真向う

真夜過ぎし月の光りを嗅ぎわけて恍惚持たぬ剥製の驢馬

この二首などは、何らかの意味で読者の想像をかきたてるだけのものを持っている。

第九号にはいって、二篇の三十首を読むことになる。

陣内しのぶの、夜の渚、と、川原比露思の、漂泊記、である。

陣内しのぶの、三十首を読み終って、先ず私は呆然となる。そ

れは、前回の、山の孤独、一連との質的な、落差、のはげしさだ。

山の孤独では、形象にまで高められた、身辺的な具体が、ここでは、単なる、なまのままの具体として投げ出されている。

忽ちに冷ゆる潮風指抜けて真昼の海に指輪失なう

にしても、失なった、指輪が、比喩となるでもなく、事実の報告としてもまずい。

雨期に逢う地ブドウの熟れ斑にて躰にかすかなる獣性をきく
にしても、上の句と、下の句の照応が何ら必然性を持たない、要する説明とすしかないのだ。と言っても、これらの作品が、コロニア短歌として、標準以下の作品だ、と言っているのではない。

只、知的充実が、必ずしも詩的充息とはなり得ない、と言うことを悔しむばかりだ。

川原比露思の、漂泊記、三十首も、川原にしては、と思われる、表現の上におけるの失敗も幾つか指摘できる。それに「移り来てここに命は終らむかふかき樹海を遠景に見て」と、言った様な思いいれも通俗的だ。それから

身の秘密ひそかに匂う昼下り解体ビルの崩るる音す

と言う、具象性の強い作品と、

草原にわが得しまぼろし褐色のシレーマとおとづれし酵母の族と

と言った、抽象型態の作品との混在がイメージの連続をさまたげる。そう言った点に、この一連の作品には問題が残ると思う。

九号には、他に、森元三山の、歳月ありき、九首、南条由喜夫の、恙なき日々、十首がある。回顧詠、境涯詠として、それぞれ、作者は作者なりの感慨を托している。

他に、貞野雅子、大塚正枝、福田元広、河原奈美、などの作品が、一、二首宛散見できた。現代短歌としては幼い、と言うほかない。

今後とも短歌を作り続けられるのであれば、椰子樹にでも入会されたらと思う、余計なことかも知れないが。

以上、私は、コロニア文学に掲載された、コロニアの短歌について触れて来た。

コロニア文学、の短歌作品については、今迄直接ふれたものは

ない様だ。一度は、誰かがやらねばならないことだったのか、とも思う。果して、私が適任であったか、どうか。それに、ものを書く、と言うのは何時もながら苦業だ。ものなどを書く、だけの力を持っていない、と、言うことか。只、作品に食い下って読む機会を得たことを喜ぶべきかも知れない。

それから、もう一つ、私の頭の中で、すっきりしないことがある。

それは、私達が、コロニア短歌、と呼ぶ場合、その作品の中の程度コロニアが含まれているか、と言う、ローカル性、あるいはその風土性についてである。これは、コロニアの短歌が日本歌壇の単なる追従あるいは模倣にすぎないのではないか、と言う本質的な設問であって、コロニア短歌にとってこれくらい痛い質問はない。

私は、コロニア文学、に掲載された短歌作品を読みながら、そこから、コロニア的な、風土的なものは、殆どと言ってもよいくらい、感じとる事は出来なかった。

たとえば、森元三山の

赤鋤く目焼けて野良に鋤を執る移民の妻ら諦念に馴る

にしても、一応この国の移民生活に取材されたものではあっても、これを直ちに風土性に結びつける事は出来ない。問題は、この作品を生み出したところの感性の側にあるからだ。そしてこうした、風土性からの絶縁は、作品の質が高まれば高まる程甚だしいと、言ってもよい。

宮尾進、の言うところによれば（コロニア文学、七号、作品「茸によせて」）南加文芸、を読んでの感想で

われわれの、コロニアの作品と共通した多くのものを持っている。それ故に、それぞれの作品は、親和感、親近感を抱かせられるものであり、いわば、文学的価値とは別の要素に引かれて、時には身につまされて読まされてしまうのが殆どである。――

コロニア短歌にも、そうした時代はあった。移民生活やコロノ生活の哀感を詠うことがそのまま、郷愁につながることで、共感を求めようとし、あるいは求めたのである。

が、そうした時代はすでに戦前に清算されている、と言ってもよい。

その点、短歌の方がある意味において進歩していると言えるかも知れない。しかし、今度は逆に、本質的な意味における風土性が云々され要求されるのだ。

無論、文学一般として当然な要求であろう。それは、私が自身の作品について絶えず感じられていることであるのだ。「お前の歌は、日本の模倣ではないか」と、言われればそれ迄のこと、一言もないのだ。ある点、作歌力の有無、にも関わって来るとも思うのであるが、それとは別に、体質や感性と言った更に根本的な問題が横たわっていると思う。

私は、そこに、日本的な感性の限界としての短歌の宿命のようなものを感じる。

短歌を作る、と言う行為は、短歌的なものへの許容と共感から

始まる。

それは、日本的感性を土壌とし、日本語の韻律と骨がらみになることであろう。

短歌の世界に風土性と言う、言わば異次元のものを求めるとすれば、それは作者の感性的な変革に待つ外ない。

それは、一世代や二世代では不可能だとすれば論外のことであろう。

私達は、孫の孫達に短歌を作ってもらわなければならないことになる。

ブラジルにおける日系コロニアは、現時点においてすらも過渡期的なものであろうし短歌などは更に過渡期的なものと言えよう。

夕映の残照にすぎぬ。

今、僅かに言えることは、短詩型などに依る、と言う抒情性が、どのような形で国民の資質的形成に参加するか、と言うことである。

（終り）

厳しい姿勢で

第一号より第九号までの

“川柳作品”について

安藤 魔門

コロニア唯一の総合文芸誌『コロニア文学』の中で詩、短歌、俳句、川柳と一応短詩文学と名の付くものが採り上げられ、毎号贅沢な紙幅が割かれているが、創刊号より第九号までの等短詩文学の割当てを観ると、詩壇が最も多く三九頁、次いで歌壇の二三頁半、川柳に一一頁半、俳句が一〇頁半となっている。短詩文学界でコロニア一の人口を誇る俳壇が最も低く、一番人口の寡い詩壇が一番スペースを費やしているのに奇異な感がないでもないが、それは兎に角コロニア川柳の水準に在る人々の作品が交替又は継続して掲載発表されていることは喜びに堪えない

『コロニア文学』がコロニア文芸の最高水準を自負する限り、ここに発表された作品は何れもその分野を代表したものとして受取られていると見て差支えないであろう。すくなくとも多くの読者はそう受取っている筈である。私も最大公約数にならない度いのが残念ながら事川柳に関する限りそうとは受取れないのである。

世界の最短詩として俳句と供に一句独立の生命を最も尊しとする川柳は、たとえ指導者と雖もその作品の全てが鑑賞に価する

かどうかという事には問題があるのであって、既発表者がコロニア川柳の水準にあるとは言え自選作品をそのまま連記発表する事には私をも含めて猶且つ多くの問題を含んでいる、殊に一人で五〇句の作品発表は無謀と言う外はない。かりに百歩を譲ってそれが可能としても、果してそれに応え得る柳人が幾人居るであろうか、私見が許されるならば『藤田蚊奇智』ただ一人と言いだ。

川柳は一句独立の短詩であり、その創作に費やされるエネルギーは、又その鑑賞に於ても同様である。第九号で会田北海坊は一連三句づつの配列で各句間の連想を読者に訴える試みをしているが、川柳が前述のように一句独立を尊しとする限りこの発想は遠く自由詩に及ばない事を知る可きである。自選発表が編集部よりの要請と言えどもその要請に甘んずる余り自らの姿勢を崩してはならない。

今日のコロニアの川柳人口は百五十人、その中第一線クラス約三十人、その半数の十五人が第九号までの本誌に登場した訳で、小野蛙人一五句、佐藤閑人四句、芳賀裸人五句、安藤魔門一〇句、堀田栄光花一〇句、坪井柳念坊四八句、藤田蚊奇智五〇句、安村玉泉一〇句、川下白舟五〇句、岡村鈴蘭五〇句、石山白頭五句、黒田不知火五〇句、会田北海坊五〇句、水中口十一五句、水野浩史一〇句の計三百八十二句に達している、この中、小野蛙人が二回、坪井柳念坊が連続五回発表しているだけで他は何れも一回きりで、しかも此の間三ヶ年余りの歳月が流れている、更に高いレベルに在る亜舞凡々、伊井縞破戒、上野明星、勝原文枝、佐藤碧村、池

田無哲坊、森山天拝、瀬古義信、西村千江、宿屋丙坊、其の他の人達の作品を見ずしてコロニア川柳を論ずることは無意味であり、且つまたコロニア文学が特に『指名待遇』した作者の作品に対して批評、批判を試みることは当を待ていないと思推する。従って編集部の意図には反するが折角与えられたスペースを埋めるために発表された三百八十二句を分類して例句を挙げて見ることにする。

まず題別と作品数の比を示すと『生活』が最も多く七五句、次いで下記のような順序になっている『人生』七一句、『自然』五〇句、『社会』四七句、『政治』三〇句、『家庭』二八句、『宗教』二二句、『世相』一二句、『生物』一二句、『科学』四句、『其の他』一二句、この配列は現在置かれているコロニアの立場から考えて妥当ではないかと思う。

次に例句を示そう。

『生活』

絶壁の心―吋責なき十二月

藤田蚊奇智

生活の傾斜へ血税のしかかり

黒田不知火

甲斐性がなくて開いてる妻の愚痴

水中 口十

『人生』

人間への郷愁たそがれの道遠し

芳賀 裸大

風ひようひよう人救われる事ありや

藤田蚊奇智

残照に似たる余生をいつくしむ

川下 白舟

『自然』

海黒く黒い波音あるばかり
一滴の露黎明の陽を妊み
早魃にあえぐ地上に月蒼し

藤田蚊奇智

川下 白舟

岡村 鈴蘭

『社会』

倒産続出河は濁ったまま流れ
明日を生きる顔今日を生きる顔
断水電減―文化が飢えている

安藤 魔門

安藤 魔門

藤田蚊奇智

『政治』

奴隷蟻稼ぐ自由の鐘の下
票田に因果の匂う黒い金肥
天災と人災百姓を裸にし

藤田蚊奇智

坪井柳念坊

黒田不知火

『家庭』

コンドームから洩れた子宝
俺が私が私が俺がと妻と老い
脂粉遠くひたすら妻の座を守り

安村 玉泉

川下 白舟

坪井柳念坊

『宗教』

拍手で神を起こして頼んでる

坪井柳念坊

煩悩を救うに布施の高を読み
神様を信じて神に崇たられる

坪井柳念坊
川下 白舟

『世相』

クリスマス奇蹟もなくて食えぬ群
戦争反対という暴徒の群れ
めんどりも唄い昭和の世は栄え

堀田栄光花
藤田蚊奇智
川下 白舟

『生物』

放し猫迷ったところで仔を増やし
群雀はさえずりタカは爪を研ぎ
魚拓にもならない雑魚で放される

川下 白舟
川下 白舟
水野 浩史

『科学』

月世界売り物にする日を競い
仁術の凱歌五臓を取り替える
億兆を燃やして月で何をす

藤田蚊奇智
坪井柳念坊
水中 口十

以上は題別分類を試みたもので勿論自然と人生、社会と政治、
家庭と宗教などお互い影響しあっている事は論をまつまでもない
ことである。

次に川柳の本質といわれる諷刺、批判の面から考察した場合僅
かにその外面に触れただけで、未だしの感を深くせざるを得ない、

又内面的には内面凝視、思考と共に観念的な作品が多く眼についた。

『思考』

思考の襞黒々打算の底なし沼
星屑燃ゆる一と夜の物想い
黙々と思案が続く石だたみ

安村 玉泉
藤田蚊奇智
岡村 鈴蘭

『内面凝視』

陽に月にそむく心の失語症
音もなく崩れる塔を胸に積む
良心にそむく日太陽のゆがみ

藤田蚊奇智
川下 白舟
岡村 鈴蘭

『観念』

執念の風聞く夜が揺れ止まず
青空に見果てぬ夢を呼んでみる
沈黙の歴史の中を走る汽車

藤田蚊奇智
岡村 鈴蘭
黒田不知火

『諷刺』

左の頬を出せば右の頬を打たれ
秒針まだまだ動き墓場のエロティシズム
フンドシを古いと嘲笑うミニサイア

安藤 魔門
安村 玉泉
川下 白舟

『批判』

ヴェトナムの喪章へ平和ぶら下げる

藤田蚊奇智

作らねば喰えず作れば損をする

川下 白舟

天高く誤算を積んでゆく車

黒田不知火

コロニア川柳が『コロニア文学』誌上を籍りて広く発表紹介される事に敬意と関心を持つものであるが、その方法が一方的に取扱われているところに問題があると思う、今日のコロニア川柳の動向と帰趨を識るには単的に言って新聞柳壇しかない、三紙三様の柳壇には夫れっぞれ特色があつて、この基盤に立つてコロニア文学が川柳を採り上げてくれるなら同誌によつて紹介される作品はそのままコロニア川柳の代表作品として首肯に価するものと言える。

コロニア文学は第十号を記念としてその積み重ねの上に第十一号より新たな発足を約束しているが、短詩川柳の取り扱いに就いて一考していただければ幸いである。

特集

コロニア独自の文学領域を

第一号から第十号までの小説について

宮 尾 進

「コロニア文学」という名の文学同人雑誌が三年余にわたって十号続いた。とかく、同人雑誌というものは、三号雑誌でつぶれるものであり、そのつぶれることの理由はむろん財政的な面もあるだろうが、むしろ、同人間の主義主張の分裂からくる解散といったことの方が多いということである。いってみれば、文学を志すものはある時期、その主義、主張を一にして同志的あつまりをもったとしても個々の作品の発表の上においては激しい競争であり、その競争を通して主義、主張も変化し分裂して行くものである。こうしたことから、本来同人雑誌とは、本当に仲間同志のしぎをけずる場であり、そのしのぎの場において変化もまたはげしいが故に長つづきし得ないものだといえよう。絶対者に近い教祖的存在があり、厳として変らない主義、主張が確立されており、その主義、主張にキエする信者に近いもののみが同人として参加する短詩形文学の同人雑誌とは出発点において異なるのである。

こうした同人雑誌の一般的な運命の中にあつて、わが「コロニア文学」がたまたま財政的な困難を聞かされながらも、三年余に

わたり、十号もの発刊を続けて来たということは一体どのような見れば良いのだろうか。挫折することなく続いて来たことを手ばなしでよろこび、記念すべきなのだろうか。それとも財政面はとにかくとして、分裂に導くような同人間の激しい主義、主張のあらそいもなかったことをなげくべきなのか。そんなことをこの十号を期として考えて見ることも必要なのではないだろうか。

× ×

大体この十号にわたってわれわれの「コロニア文学」が継続して来たことの理由はどこにあるのだろうか。作品を発表する作家があつたから、という理由をとりあげる前に、何よりも、五百人にもものぼるというコロニア文学会員のささえがその裏にあつたことを見のがすわけには行かないだろう。それは何も会費による資金的な面のささえばかりではない。やはり、五百というマスは無形の大きな精神的なささえであつた。これだけ多くの会員を擁するということは同人雑誌としても稀有に近いことであり、自身作品を発表しない会員が大部分を占めているにしても、それは何もコロニア特有のつきあひ的意味においての参加だけではなく、コロニア文学の興隆を願うものが数多くあることを証するものであり、こうした会員のささえというものは無視できない大きな要素である。

では一体これをささえるコロニアの層は「コロニア文学」に何を期待しているのだろうか。一口にいえば、移民としての自分たちの体験の代弁的な作品がこの「コロニア文学」の上に数多く生

れてくることを願っているにはかならないと思う。いわゆる文学作品一般であるならば、比較的豊富にしかもたやすく手に入る日本からの雑誌、書籍を読んでいればみたされるであろう。しかし、こうしたいわゆる一般的な文学作品とは次元を異にしたところで、われわれ移民コロニアは自分たちの共通の体験の中から生れた、身近かな文学作品、いつて見れば血の通うコロニアの文学作品というものを求めているのである。

移民したこと自体が日本人として特異な体験であるわれわれは、それに加えてまったく日本にあつては想像もしなかった特異な体験を数多く経て来た。異常な体験というものは常に他に伝達してみたいという欲求をわれわれは本能に近い欲求としてもっている。そうした欲求にかられる体験的なものをわれわれコロニア人は誰もが一つは胸の中に秘めている。たまたま多くのコロニア人はそれを文学として表現するだけの能力を同時にそなえていないだけの話だ。コロニアのものを書ける人、作家的素質のあるものはこうした多くの人たちの代弁的役割を負わされているのであり、コロニア文学をささえて来た要素というのは、いわばこうした数多くの人たちの作品によせるシンパチアなのである。それなくしてこん日までの「コロニア文学」の継続は考えられないであろう。

こうしてコロニアという共通の地盤移民という共通の体験の上にたったコロニア文学愛好家に支えられてわが「コロニア文学」は続いて来たのであるが、しかし、シンパチアとは文字通り同情、共鳴的支持の感情によるものであり、その心情は何とかしてコロ

ニア文学をハナ咲かせたいと願うところから、本来あるべき文学に対する厳しさはなく、シンパとしての同情的大きな甘さを多分に持っている。『「コロニア文学」はさっぱりおもしろくもない。あんなものはやめてしまえ』といううなきびしい批判的なことばはこん日まで一度もあらわれはしなかった。ことばにあらわれた積極的支持もなかったかもしれないが、常にシンパ的なあまさを持って「コロニア文学」を支えて来たのである。こうしたあまさに支えられて続いて来た「コロニア文学」はその甘さの中で果して成長して来たのかどうか。十号という継続の中に継続して来たことの意義があったのかどうか。

x

x

「コロニア文学」の特徴は文学的思想、主張を、あるいは文学的傾向を一にする同人的な集りではなく、「コロニア」という一見鮮明なようでいてその実あいまいな一応の共通地盤のみを足場として集った同人的な集りであった。したがって、そこに掲載される作品傾向もまさに種々雑多、千変万化といっても良い作品傾向の羅列である。コロニアの文学雑誌として見るとき、それはコロニア的良さのあらわれかもしれないが、文学同人雑誌として見るとき、それはマイナ斯的な弱さとなっているといってもいいだろう。が、それは一応おくとして、果してコロニアの文学はこの同人誌の発刊によって成長して来たかどうか。なるほど、作品の発表機関がふえたということにおいては意味のないことではなかった。コロニアの短詩形の世界では早くよりそれぞれの同人誌があり、

つとに同人を集め、すでに永い歴史の中で活動が続けて来た。ひとり文学の世界のみはそうした刊行物もなく、年に一度の作品募集をする新聞や雑誌がわずかにあったのみであった。そこに「コロニア文学」という同人雑誌が生れたことは文学作品の創作をめざすものにとっては大きな期待の実現であったといつて良いだろう。しかし現実はどうだったか。魚が水を得たように創作活動は活発化しただろうか。この「コロニア文学」を舞台として創作の腕をみがいて行こうと志すものが続出して来ただろうか。なるほど、以前に較べて創作活動が盛んになりはした。だが、真剣に文学ととり組もうというものはほとんど見あたらなかった。それは何故か。おそらく一般的な回答はいたって簡単である。コロニアで作家を目ざしても、結果としてコロニアの中では口を糊するたねにはならないということである。こうした自明に近いことがコロニア作品の大前提となっている。だから、多くのコロニア作家にとつては、作品を書くということは血のにじむような、とはいわないまでも、勉強し、努力することには決してつながりはしない。いや、コロニア自体に、もし、ある作家がそうした努力をささげたならば、それをほめそやすことなく、逆にけい蔑する傾向さえある。なぜなら、コロニアとは移民の社会である。それも多くは農業移民の社会である。こうした社会において、農業から転落したもの、金銭的成功の世界とはつながらない職業に転向したものは、要するに「移民落伍者」にはかならなかった。その典型的なものは「日語教師」であつたろう。教師は天職というの

は古い日本の伝統的考えでありはするが、表面はさておき、現実的なコロニアでは、つとに日

語教師は「移民の落伍者」という考えが強烈であつた。それは今日でも変りはしない。それを救っているのは、教師自身の自尊心以外の何ものでもない。そうした社会において、文学を志すということは、まことに狂気のさたという以外にいいようもないことだろう。日本においてさえ文学を志すことはついこの間までヤクザな人間のやることにはかならなかつたのだから……。そうした伝統の中に生きて来たわれわれにとって、文学に血道をあげるということは異端である。

俳句、短歌という短詩にうちこむことは、農業移民という生活のあり方をさまたげるものではなく、むしろ、そうした現実の移民としての苦しさをそれをよむことによつて慰められるものであつた。いわば、伝統的な短詩は移民にとってカタルシ的な作用を果す働きをもっていた。俳句、短歌がコロニアでこれだけの興隆を見たのは、日本ではうたうことのなかつた移民たちが、そうしたうたの作用を発見し、作歌したからにはかならなかつた。

だが、散文としての文学作品をこれと同列に考えることはできない。が、おそらく、こん日まで文学創作の意欲が比較的少く、というよりも不毛に近かつたまま六〇余年の歴史を過し得たのは、こうした表現意欲を一応満たすことのできる俳句、短歌という表現形式をわれわれは持っていたからにはかならないだろう。そういう意味で散文作品の創作ということはコロニアにおいてはむしろ

ろ、異例の表現形式に属することであった。

短詩形では満し得えない表現意欲、そうした内なる衝動につれて生れて来たコロニア文学、本来ならそうあってもらいなかった。だが、現実はずしもそうではなかった。多少はそうした要素もあったであろうが、実際は短詩をよむ気持のあり方とこん日も大して変っていないように思うのである。つまり、手なぐさみに一句詠むという心境と余り変りないコロニア作家が多いのである。これではすぐれた作品は生れてこないのである。何もこれは散文だけの世界ではない。短詩形の世界においても同じことである。良い作品を生み出すためには不断の努力を必要とするはずである。ただ短詩の作家たちは、そうした努力を続けたとしても、それが生活の道につながるとは思っていない。だが、なぜ、散文の作家の場合のみ、コロニアではいくら努力し、良い作品を生み出したところで飯の足しにはならないということから本気に創作にうちこもうとするものがないのだろうか。少くとも、創作の世界に生きることには垂心をかけてみようという姿勢を持った人たちが生れて来ない限り、コロニア文学の真の向上はあり得ないであろう。

いずれにせよ、この三年余にわたって「コロニア文学」が目ざして来たものは、あくまでもコロニアの文学として、コロニアの作家として、すぐれた文学の誕生なのである。「コロニア文学」を支えている人々の期待はそれ以外の何ものでもありはしない。そしてコロニアの作品を書く人たちはこれにこたえなければならな

いだろう。手すさびに書いた作品を発表するというだけにとどまってはならないのである。もっと勉強をしてもらいたいのである。何かを生み出してもらいたいのである。

さて、前おきはこれくらいにして、過去九冊の「コロニア文学」に発表された作品から現在のコロニア文学の実態をさぐって見ることにしよう。

大ざっぱにいつてこれまでに五〇篇の創作が、誌上に発表されているわけであるが、これらの作品を一つ一つとりあげることはすでに選者たちによってなされていることなのでいま更くりかえすこともないだろうし、また、これを作品の傾向別に分類してみたいところであまり意味のないことなので、これら全部を通読してみて感じたことを、きわめて大ざっぱであるが、記してみようと思う。

まず、結果から先にいうと、これらの作品全部がコロニアを素材、というよりも舞台としているということである。あたりまえのことといわれればそれまでのことであるが、そのコロニアとはまさしく日本人社会を舞台にしているということであり、ブラジルという国、社会の中にありながら、まったくこのブラジル社会とはほとんどいつてもいいほど関りあいのない、閉ざされた日本人社会という、限定された社会の中における現象の描写、できごとが描かれているにすぎなかった。ブラジルの風物、自然が、たとえあらわれたとしても、それは作品の背景でしかないし、日系人以外の人物が登場して来たとしても、それらはすべてワキ役で

あり、点景的な役割を与えられているにしかすぎない。こうしたこれまでの作品結果からみる限り、コロニア文学とはすなわち、ブラジルという、異国の中にあつて、しかも、その異国の社会とはかかわりのない特殊な日本人社会のみを素材にした文学といえるのではないか。一地域の日本人のみが作品の特色である限り、かりにこれを日本の地方文学の一形態としてみたとしても、そこに何の支障も感じられはしないだろう。

われわれ移民はブラジルという国の中に移り住んだことは事実なのだが、それは単にブラジルという国の中に生活の場をおいただけで、日常の接触は相も変わらず日本人同志のものであり、ブラジル人というもの、ブラジルの社

会、文化的なものとはまったく何の関りもない生き方をして来ているのだろうか。そんなバカなことはあり得ようはずがない、とは思っているのであるが、事実として、ここに発表された五十篇余の作品のほとんどが、コロニア日本人社会という、コップの内側に限定された素材をしかとりあげていないのほどういことなのだろうか。作品の世界だけがそうだというのだろうか。それとも、コップの外側の社会・文化との対決を意識的にさけてでもいるのだろうか。さけようとする何ものかをわれわれは持っているのだろうか。それとも、作者自体、このコロニア社会というコップの内側での生活意識、生活感覚といったものしか持っていないような状況に馴らされてしまっているのでもあろうか。いずれにしても、コロニア文学がコロニアという特殊部落のうちがわのみに限られ

た世界の作品である限り、これは日本の地方文学の延長として考えられても致し方のないものであろう。

こうした作品群の中にあつて、わずかに薮崎正寿は、このコップの内なる構成分子としての「移民」とは何なのか、ということとその一連の作品の中でひたすらに追求している。しかし、こうした作者の態度は少くとも作家である以上、当然作品以前の問題として誰しもが対決しなければならぬことなのではないだろうか。薮崎にしてようやくそうした対決の姿勢があらわれ、しかも「CASTIGO」などにおいては作品というよりも、素材をこなれぬままにぶつけたという段階で発表されている。更にまた、作者の「移民」という自己を含めたものの追求のあり方は、あくまでもコップの内側での追求でしかなく、これを超えた世界と直接に対決して行こうとはしていない。それは不可能なことでも、むずかしいことでもないはずなのに、彼にしてそれを超えようとはしないところに、こん日のコロニア文学の問題点があるのではないかと思えるのである。薮崎の「移民」としての自己とコップの外との対決の仕方は、わずかにブラジル人としての二世、あるいは路傍の関りのないブラジル人を通してのそれであり、しかも、そのわずかな接触の中で、すでにブラジルという社会からの疎外者として自己をとらえることに終ってしまっている。しかし、何故こうした消極的な世界にのみ安住してしまおうとするのだろうか。もう一步進めて、外との積極的な接触の中に自己を探ってみようとはしないのだろうか。日常的なブラジル人との接触の中に

も、われわれは文化的なものの相違を常々感じさせられているのであり、こ張していえば、毎日毎日がこうした異文化との対決による葛藤の連続といってもいいはずなのである。こうした葛藤の世界に意識的、分析的な光をあててみれば、われわれは「移民」とは何かをもっと深く追求することができるとみならず、さかのぼって「日本人」としての自分をも追求し得るのではないか。しかも、こうした領域にこそ、日本では書きあらわし得ない特殊な文学の領域があるのではないだろうか。コロニア文学が日本の一地方文学としてのあり方を超えるためにはこうした独自の領域を獲得して行かなければならないだろう。

もちろん、これまでの作品の中にブラジル人社会との接触のある作品がないわけではない。そうした例の一つとして、われわれは川原奈美の「移植」をあげることが出来る。この作品が何故昨年度のコロニア文学賞を獲得し得たかをもう一度考えてみると、何よりもまず、そこにはコロニア文学一般の中には数少ないブラジル人との接触の世界が新鮮に描かれているからにはかならない。しかも、そこには日本人女性である「私」の冷静な目を通して見た「ブラジル人」の姿が細かく描かれており、それも単なる冷たんな傍観者としてだけではなく、ブラジル人そのもののかかわりをもち、その中でなお、日本人としての「私」を失なわない目で観察しているからである。授賞の理由が事実そういうことであつたかどうかは知らないが、単なる筆の運びのうまさとは別の次元において、充分に文学賞にあたいする作品であるだろう。こ

うした作品こそ、コロニア文学の特殊性を發揮し得る文学領域のものだと思えるのである。しかし、同じ領域をとりあげながら、完全に失敗した例として、次に「歪んだ先鞭」（米沢享）と「梔子の花」（福村琳）とをあげておこう。「歪んだ先鞭」は黒人妻をもつた日本人の話である。異人妻の上に黒人という特異な例をとりあげているのであるが、そして、作品としてはある程度まとまりをみせている作品でありはするが、おしむらくはそうした黒人を妻に持つ過程において当然あり得べき大きな心理的葛藤も主人公にはないし、また描かれている黒人妻は、単に黒人であるだけで、その実、あまりにも日本人的心情を備えた黒人である。要するにこの作品が単に奇をねらった頭の中ででっちあげられた作品に終わってしまった切は、作者の表現能力というよりも、登場人物の心情を過体験し得ない作者の意識の問題であろう。同様のことは「梔子の花」の作者にもいえることである。同じ作者は「果実」を書いているが、両作品とも、一見コロニアという社会を超えた社会を描いているのであるが、それはまさに超えてしまった世界であり、超える過程における本当の苦しみといったものはどこにもにじみでてこない。

×

×

結論をいそぐことにしよう。

コロニアの文学作品のすべてが、こうしたコロニアとしての特色を生かし得る独自の領域のものであれ、というのではない。本質的に文学としてすぐれたものであれば、その素材は何であろう

と一向にかまわぬものであるが、しかし、現実にはコロニア文学がこのように、その作品のほとんどが単にコロニアという内側の世界をしか素材としてとりあげ得ないことには何か問題がありはしないだろうか。いや、内側の世界であっても、一向にかまわぬのであるが、それがまったくの内側、つまりコロニア的体験を基盤にしてしか評価できない作品、コロニア人のシンパチアのみによって支えられる作品の多いことに問題があるのではないか。

こうした作品の代表として、例をあげれば本年度コロニア文学賞の佳作授賞の「井戸」（高野耕声）をあげることができるだろう。この作品は「井戸」を掘ることを通して、移民の一つの苦しみの姿を描いている。その限りにおいては体をなしているが、それはまさしく、体験的な苦労話をまとめあげたにすぎない。こうした作品は同じ体験をもつ移民にはもつとも大きなシンパチアを持つて評価されるとしても、その実、文学としての大切な何かがかけている。いって見れば、それは表現以前の作家の日常的な意識の問題だろう。作家としての自分の位置をどうとらえて作品に対しているかということになるのではないか。そうした自己の意識の高さが、問題だろう。自己の視点さえ確立しておれば、たとえコップのうちなる素材であつても、そこにはおのずとコロニア文学としての独自のものがにじみ出てくるであろう。

コロニア文学が単なる移民のシンパチアにすぎない文学ではなく、また日本の延長としての一地方文学に終ることもなく、コロニア独自の文学領域を開拓してすぐれた作品をうみ出して行くために

は、やはり、作家自体が、作品以前に「移民」としての自己のとなえ方を確立しなければならないのではないか。

特集

たとえ泥臭いと言われても

発足以来、今日までの歩みをかえりみる

武 本 由 夫

「コロニア文学」は、やっと第十号に達した。その歩みは、ひどくあぶなつかしく、のろい足どりであった。今後もけっして、坦々たる舗装路を、疾駆するようなわけには、いかないであろう。けわしい山路を、額に汗をにじませながら、揮身の力をふりしぼって、一步步登る、といったかっこうになるであろう。

だが、コロニアの文学を愛し、コロニアの文学を育てたいと思う人がおり、そのコロニアが存続し、コロニアの日本語が消滅しない限り、「コロニア文学」も、命脈を保つよう、努力されていくであろう。

そして、その行旅の果てに立って、来し方をかえりみた時、コロニアという土壌は、まったくの文学不毛の土であったことがはっきりしたとしても、わたしたちには「コロニア文学」が発行されたことに対する悔は、残らないであろう。

誌上に載った作品が、どれもこれも、幼稚であり、泥臭いもの

であり、文学としての価値は低いかも知れない。それを読むコロニアの人々は憤懣にたえないかも知れない。どこかへ、その不満をぶつつけたいかも知れない。でも、いったいどこに、その不満をぶつつけたらいいのか。結局は、コロニアにぶつつけるよりほかはあるまい。そして、つまりは、コロニアに棲息するわたしたち、ひとりひとりが、その不平不満を頭からひつかぶり、噛みしめ、噛みしめ生きる、ということになるのではあるまいか。

そして、コロニアで文学することに、コロニアの文学を味わうことに、その結果として自分自身に不満をぶつつけることに、他の分野で、活動や享受や批判などをすると同様の、積極的な人生的意義を見出すことができればその人は、コロニアの中の人ではなくて、「コロニア」傍観者であろうか。

といった考え方から、コロニアに棲息するわたしは、「コロニア文学」の編集責任を自分でひつかぶった。バカな話で、そんな不器用なモノの考え方は、今どきはやらない、とは思っているのであるが……。

○

コロニア文学会は、一九六五年十一月二十一日、文協小会議室に約三十名の文学愛好者が出席し、創立総会を開き、ただちに発足した。次いで、委員長一名（鈴木悌二）、副委員長二名（武本由夫、薮崎正寿）、委員十名（宮尾進、尾関興之助、前山隆、島木史生、山添良一、山里アウグスト、矢島健介、清谷益次、妹尾三郎、会計一名（弘中千賀子）、監査役二名（増田恒河、田畑三郎）を選出

し、地方委員十四名を推薦した。そして、事業として、「コロニア文学」誌発行（年間三回）、文学団体との交流、日本その他の文学会との連絡、コロニア文学賞設定などを決議した。

こうして「コロニア文学会」は発足したのであるが、その前、一九六五年十月二日に、文学会結成の為の発起人、二十六名が、文協小会議室に集まって、協議し、会名、組織、事業などを決め、創立総会開催の準備をおこなった。コロニア文学会の発足は、以上のように、発起人会の結成へ創立総会と、かなり敏速に進められたのであるが、それまでに、一種の胎動期といった期間があった。戦後、コロニアにはじめて現われた文学賞「よみもの賞（一九四八年十二月号”よみもの第二巻第一号”に第一回入賞作品発表）」に次いで、パウリスタ文学賞が設定され、続いて、農業と協同文学賞の設定をみた（こうした文学促進運動に刺戟されて、文学同人誌発行への機運が醸成されていた。特に戦後來伯の文学青年たちの中から、文学誌発行に対する熾烈な要望が起こった。

彼らは、コチア産組勤務の尾関氏、文協勤務のわたしなどに働きかけ、その実現をうながした。しかし、尾関氏にしろ、わたしにしろ、コロニアで文学誌の発行を継続することが、どんなにむずかしいかを充分承知しているので、にわかに賛同することはできなかった。読者即ち作者といった短詩型誌（椰子樹、木蔭）でさえ、経営担当者は並々ならぬ苦勞をしているのである。まして、読者をどれ位獲得できるか見当もつかず、莫大な発行費を、どうして捻出するか、その方途もない雑誌の発行など、思いもよらぬ

ことであつた。

そうした所へ、忽然と姿を現わしたのが、前山隆という男であつた。当時わたしは、文協機関誌「コロニア」の編集事務に携っていた。前山氏は、サンパウロ大学の社会人類学教室に籍をおく学生であつたが、同校教授の斉藤広志博士の紹介で、文協に就職した。就職といつても、アルバイトで、午後から、わたしの仕事を手伝ってくれたのである。

この前山氏が非常な文学愛好者であつた。何しろ中学生の頃から、高校、大学生時代まで、その時代々々の仲間をかたらつて、文学同人誌を発行してきたという経歴の持ち主で、いふなれば、桁はずれに「同人誌ズレ」のしている男であつた。それに大変な酒豪で徹宵盃を含んで、談論ますます冴えるという態の人物である。わたしとは、すぐに同気相通じて、宵々一杯屋を梯子に飲み歩き文学談に耽つたものであつた。

それは、忘れもしない、一九六五年七月二十二日、竹中正氏の嚴父が逝去され、文協職員みなが弔問した。その帰途わたしは前山氏と肩を並べて、文協までの道を歩いた。

その時、またしても、前山氏は「文学誌発行談」を持ち出した。それまで、彼が幾度、発行必要論を唱えても、あたしは、反対論をかかげてゆづらなかつた。しかし、わたしとしても、内心彼の必要論には賛成ではあつたが、資金集めの方法とか、発行を継続する為の具体的な方策も持たずして、賛意を表するわけにはいかなかつたのである。彼は、歩きながら、例の必要論をひとくさり

弁じたて、”とにかく、同好者に呼びかけてみようではないか、只腕をこまねいていては、話に一寸の進展もみられない。それで反応が無ければ取り止める。反応があれば、その先を考える。”と、いうことを強く主張した。

ここに至って、わたしも、重い腰をあげ、前山氏と握手して、行動を起こすことを約束した。

それから、わたしは「文学雑誌」を発行し継続する可能性があるものか、どうか、鈴木（現委員長）、尾関、宮尾、清谷、木村（パ紙顧問）薮崎、白木、増田諸氏、その他、文学関係者の考え方をきいてみた。樂觀説、悲觀説いろいろであつたが、それら意見の致するところは、「コロニア日本語の将来性から推して、現在の時点で発行できなければ、恐らく、以後は不可能事に属するのではあるまいか」ということと、「文学誌要望の声が挙っている折から、会員制を採用し、広く全伯の同好者、理解者に呼びかけ、多数の参加を得れば、発行不可能でもあるまい」ということであつた。

こうした意見の一致点を足場として、まず会員制による「文学会」創立ということに、話が煮詰って来た。それから、發起人会の成立、創立総会の召集となつていったのであつた。

○

コロニア文学会が発足して、当面の事業とした「文学研究会」開催と機関誌「コロニア文学」発行の準備は、着々進められていった。鈴木委員長は先頭に立って会員の勧誘につとめ、続く中央委

員も、それぞれ各方面に呼びかけ入会を奨めた。文学誌発行機運は、醸成されており、待望の声も各地にあがっていたので、発足後六カ月過ぎた頃には、会員数は二百五十名を算し、ますます増加の形勢を示した。

文学研究会は、早くも会発足の翌月、即ち一九六五年十二月十七日に第一回が催された。以来毎月一回、第三金曜日に、特別の場合を除き、聖美会教室で開催、現在に至っている。出席者数は、時に増減をまぬかれなかったが、最多四十名前後、最少十五名前後で、一九六九年十月現在、第四十回に達している。次に、これまで開催された年月日、研究テーマ、研究発表者名、出席者数なども掲げておきたいが、今回は紙数の都合で割愛し、また機会を得て誌上に発表したいと思う。

「コロナ文学」第一号は、会発足の翌年、即ち一九六六年五月に発行をみた。表紙絵、カットなど、聖美会員の全面的な協力を得て、一段と光彩を添えることができた。鈴木委員長も広告集めに奔走し、中央委員すべてが、各自の部署を担当して発行に努めた。次いで、同年九月、第二号を発行、ようやく軌道に乗せることができた。最初の計画では、年間四回発行を目指したが、実際に取り組んでみると、作品応募の具合や資金面とにらみあわせ、年間三回発行を妥当とする、ということがわかった。

一九六六年Ⅱ第一、二、三号

一九六七年Ⅱ第四、五号

一九六八年Ⅱ第六、七、八号

一九六九年Ⅱ第九、十号

以上のように、年間三回発行を目指しても、なお、六七年度、六九年度は、二回発行に終わっている。それには、会の運営上、または編集者身边にやむを得ない事情あつてのこと、以後何とか年間三回発行の線を崩さないよう努力しなければならぬと思う。そしてでき得れば、年間四回発行にまで持ち込みたいと願っている。「コロニア文学」各号の頁数、掲載作品と執筆者名、表紙絵、カット、題字などの揮毫者名、その他紹介記事などについても、ここに発表すべきであるが、これも紙数の都合で次の機会にゆずりたい。

その他、会の事業とする各地方文学団体との交流と、日本の文学会との連絡は、可能の限り実行してきた。地方や中央の文学行事にも招待があれば、なるべくわたしが出席してきた。また会名儀では在東京の「日本文学振興会」に入会し、本誌掲載作品が芥川賞候補として取りあげられ得る道を開いた。また鈴木委員長は「日本ペンクラブ」に入会し、日本文壇との交流につとめている。「コロニア文学」は発行の都度、日本の有力新聞社、雑誌社、その他日本全国の地方有名文学結社に寄贈しており、その数は全部で約八十部に及んでいる。在北米の文学結社「NY文芸社」「南加文芸社」とも機関誌を交換し、連絡の緊密化につとめている。その結果、毎日、朝日のような日本一流紙をはじめ、その他の新聞、雑誌も、ユニークな存在として「コロニア文学」を紙上に取り上げ紹介記事を掲げてくれた。

会の運営費、「コロニア文学」発行費の捻出にさえ汲々たる有様で、年百年中、資金難に胸を痛めているという状態である。だから、各自それぞれに生活の資は他に求め、余暇を当てて、事業の推進につとめているのである。

このような状態なので、どんなに注意しても編集、会計、事務の処理について、不備、ミス、手落ちがあるかも知れない。いや、一、二度指摘され、その度にお詫びして、補訂正を加えてきた。また今後も、極力注意するつもりであるが、絶対に過誤をおかさないとは言いきれない。その場合直ちに指摘頂くことはよろこばしいが、事さら悪意ある流言などを世間に放たれることは、「コロニア文学会」としても、当事者自身としても「よろこばしい」と言うことはできない。

今日まで、曲りなりにも継続し得た「コロニア文学会」であり、「どうせ三号雑誌さ」と、かげ口を叩かれながら、折角、第十号にたどりついた「コロニア文学」である。今後、会員協力の如何によつて、会を繁栄に導くことも可能であるが、また破滅に導くことも容易である。もし「コロニア文学会が、存在することにより、何らかの意義を認めることができるならば、継続育成の方向に進ませるべく、会員の協力を俟つ次第である。

会費完納が先決

一九六八年末の会計はギリギリいっぱい

増 田 恒 河

本誌もどうやら第十号を刊行することが出来た。世に三号雑誌という言葉、否その事実がはらんする中で、「コロニア文学」が命を保つことが出来たのは、会員諸氏の「コロニア文学」に寄せた情熱と側面援助を続けて下さった広告主と印刷所の特別サービスのお蔭である。これある限り、長命を期待することが出来るであらう。

一九六八年度の収支は別表の通りであるが、同年度の総収入九、七一六・三〇新クルゼイロに対し、総支出が九三四〇・一七新クルゼイロで、差引きわずか四七六・一三新クルゼイロの剰余金ということとは、ギリギリ一ばいを意味する。今後とも総べての費用が騰るばかりであろうから、少しも安心はならない。

一九七〇年度には、季刊の夢を実現させたいのであるが、それには全会員の会費完全前納が先決問題である。会員諸賢並びに後援者各位の一層の御協力を願いたい。

(会計委員)

お願い 御送金の場合は、個人名を用いず、必ず「コロニア文学会」COLONIA BUNGAKU-KAI 宛にして下さい。

(表入る)

深沢七郎とわたし

ラヴミー農場を訪れて

高野耕声

他国に移って、移民のように百姓をやっている深沢七郎に逢って見たい、と移民のわたしは思っていた。

同県人が住んでいると聞く、と一日がかりで馬の背にゆられてたずねて見たり、おなじ部落の者だとなると幾年かの計画をたて、サンパウロ州からパラナ州の奥へでも、幾百キロの道を汽車、オニブスと乗りついで、幾日もかかって逢いにいった、昔の移民のあんな気持ちで逢って見たいと思っていた。

例の、首がころころの「風流夢譚」以後、生家を訪れでも、恐らく家族の者たちは訪問者に神経を使って、にべなく「あれは埼玉の方で病気で寝ているので、だれにも逢わんでしよう」と剣もほろろにいわれるのがおちだと思って、生家にはいかなかった。

大田孝という、深沢七郎とは子供の時分からの友だちで、深沢七郎作品集などに、深沢七郎とその家族のことなど書いているのを読んで、町内で、一番深沢七郎に理解を持つ人だと感じていたので、ある日、深沢七郎の生家と目と鼻のさきにある大田バザーに、寄ってみた。

主人は、きよねん亡くなってしまったのですが、どちらからでしょう、と意外な返事だった。これで深沢七郎に逢う伝手はなく

なった。

逢えないな、と思った。

ブラジルにきたこともあつたりして、いま土地の新聞社の編集次長の男を知っていたが「いまはだれにも逢わんそうですよ」と紹介しようともしてくれなかった。深沢七郎と、その地方新聞との間に、あるいきさつがあつたらしいことをあとで訊いた。

「ブラジルからちよつと帰った者ですが、大田さんにお目にかかつて深沢七郎の話を訊いて見たり、もし出来たら埼玉の深沢七郎に逢つて見たかったものですから」といった。

小さな町のことだから、大田さんの奥さんも知ってくれていて。「あなたが先日ブラジルから帰った方ですか、主人もお逢い出来たら喜んだでしょうね。七郎さんと主人は気の合う友だちで、二人でギターを弾いたり、書いたものなど持ってきて、おそくまで話しこんでいたことがありました。ずっと昔のことで、七郎さんが有名になる前の話ですけれど。」

「大田さんの書いたものが深沢七郎作品集の中にあつたので、大田さんがもつとも近い親友だな、ということを感じておりましたので、活版屋の方へもいかず、大田さんにあがつたわけです」と話した。

いまは印刷所というが昔は「かっぱんや」といっていたので、わざとわたしは活版屋といった、深沢七郎の生家は印刷所である。

深沢七郎との深い交友のきずなも、大田さんが亡くなつてしまつたらそれきりになるのが普通で、話はそれまでだ、と思った。

そこへG I刈りのずんぐりした青年が顔を出した。長男だと奥さんが紹介してくれた。

「お前、いつ七郎さんのところへいくの？」七郎さんという云い方に親愛感がこもっていた。人のいい、世話ずきの人に感じられた。

埼玉へ息子がいくなどということは、夢にも思っていなかったわたしに、これはひよつとすると深沢七郎に逢えるぞ、とはのかな希望がわいてきた。

「ゆかたを持ってきてくれ、といっていましたから、メーデーにならない前にいってきましようか」と青年は丁寧な母親に答えた。

「うん、そうしてあげたら」といった。

こういったことに、この人も一緒につれていってやったらという意味もふくまれていた。

三十五年ぶりに舞い戻ったふるさとで、丁度三十日がたった、四月三十日の日であった。

大田青年の運転する車に便乗して、石和から、埼玉の菖蒲町にあるラヴミー農場へいくことになった。

深沢七郎もわたしも生れたこのせまい町内の道が、今は国道二十号線で、長野県のシャツパをつけた大型カミニオンが、左側の家の廂をこすって徐行してくる。あすのメーデーをひかえて、けさからバス会社のストライキが始まって、バスの運行が止まっているのに、車がひしめいてこのさわぎだ。ぎっしり車のつまった道は、排気ガスがこもってうす暗い。そのぼけた通りの西空の真

正面に、三角にとがった甲斐駒が真白な雪におおわれて、赤石山脈の連峰から、ひとつはなれて立つ姿がある。

大田バザールの前が氏神様の八幡宮である。境内から赤い鳥居をくぐって一羽のつばめがすーっと飛んできて路上の電線にとまった。しばらく車の洪水を見おろしていたが、ひらりとまた境内へ帰ってしまった。

一年ぶりに帰って見たふるさとの、車の多さにおどろいて愛想をつかしたような、つばめの体のひねり工合だった。

この混雑した街道からは、温泉郷石和などと云うあののどかさは、思い出せるよすがもない。

ぶどう園や桃が若葉になって、その上に鯉のぼりが泳いでいる月みな甲州の風景をうしろにして、笹子トンネルを抜けでもまだ山峡の道はつづくが、大月からはことしの三月開通したばかりの中央道となる。右手に富士の姿がある筈だが雲が低いので見えぬ。

上野原町をすぎるとはるか右側の目下に相模湖が緑につつまれている。

このあたりから計器は百を指す。日本の道では百キロの時速の道路は少ない。

大田青年の父、孝さんは北米のサンフランシスコ生れで、幼い時、両親と石和に帰ってきたのだと云う。おばあさんはアメリカ生活が長かったから髪も少しちぢれて、目玉も青くなっていたが、永年外国に住むと、そういう変化が現われるものですかと聞いた

りした。大田青年は日大に通う大学生である。

八王子から左にそれていく。大きな飛行場だな、と思ったら横田基地だった。道路ひとつおいて右側が飛行場で、左側に横文字の看板を出した店が飛行場に沿って大分長くつづいている。アメリカの町があるようだ。サンパウロにいるような錯覚さえ感じる。

大田青年はこの基地を見ても、アメリカ人を見ても、もの珍しい顔もせぬ。

大宮をすぎて、主要道路から菖蒲町にいく道に入る。菖蒲町の入口に大きな川があり、ブラジルの川のように水が止まっっていて豊富な水量だ。甲州の川のように、ざあざあとさわがしく音をたてて流れぬ。実は、これは利根川から引いた見沼用水とかいう運河で、田沼意次という、江戸時代の悪老中が作ったもので、ここまで利根川から七キロも引いたものだそうだ。

その運河の橋をわたって、菖蒲町に入らないで右折して運河の土手をいく、しばらくいってまた運河を対岸にわたると、すぐそこに深沢七郎のラヴミー農場が、農家というより中級サラリーマンの家といった恰好で、水色の瓦屋根で一軒ある。その向うには工場のような大きな建物の建築が始まっていた。ビニール・ハウスがあつて、中のいちごが赤くうれているのが道から見えた。二寸、話してきますから」と車をいちごの見えるところに止めて、大田青年は裏口の方にまわった。犬が吠えだした。わたしも車からでて見た。ひばりがさかんにさえずっている。風ひとつない晩春の関東平野の昼さがりだ。

家の横手にちらり人影が動いた。廁からでてきた人影は深沢七郎だった。わたしは頭をさげて目礼した。

「どうぞ」大田青年が遠くから声をかけてくれて、裏口へまわった。何かの記事で読んでいたボクサーという名のブルドッグがまた吠えた、犬は鎖でつながれているが、犬小屋の前が裏の入口で、履物がごたごた脱がれてあった。深沢七郎と、コック兼ガードマンの若者と二人だけの暮らしには、脱ぎすててある履物が多すぎると思った。

靴を脱いで履物の上をふた足、三足ふんではがると、その部屋にはふとんのかかった炬燵がおかれ、その右にソファがあり、ソファの上には、乱雑に本やごたごたしたものがおいてあった。女気のない暮らしなんて殺風景なもんだ。

となりの部屋から着ながし姿で帯をなおしながら深沢七郎が現われた。

わたしに炬燵にかけろ、とすすめ自分はソファの上のものを一寸かたづけてそこに坐った。子供の頃、炬燵にあがったり、腰かけると叱られたものだが、その炬燵に腰かけた、わたしの方が坐っても高くなった。

「ゆかた地ではなく着れるようにして、持ってきてくれると、よかったのになあ」と大田青年が持ってきたゆかた地を横へおきながらいった

大田青年は月に一、二回、石和と菖蒲町のラヴミー農場の間の連絡係の役をつとめていることがわかった。大田孝が亡くなった

ので、その交友は切れたかと思われたが、親から子に継がれて親子二代で、身内の者以上のつき合いがつづいている。作品から感じる深沢七郎は変人で、文壇との交際も持たず人嫌いかと思ったが、亡友の息子に目をかける律儀さは意外だった。

病いのせいか声に力がなく、しずかに女性のようなやわらかな物腰で話す。女性的といえ、容ぼうも中性的な感じで、禿げあがった額の下が目が小さく、年老いた宦官のような顔だった。

「病名は狭心症で、今日はとても気分がいいが、長く坐って話していると胸苦しくなってくるのですよ。」そういう云いかたに、長居の客に対する予防線とは受けとれない真実さがあった。

「あの時ね、わたしもブラジルへ行って百姓をやろうと本当に思い、ある人から紹介されたブラジル帰りの農場主に、いろいろ話を訊いたのですが、幾百町歩、幾千町歩の農場を経営しないと、ブラジルの百姓はなりたないというので断念して、ここにきたが、行って、やって見たかったね」といった。

偶然かも知れないが、右翼につけねらわれた深沢七郎が、ギターを抱えて放浪のたびにでて行方も知れぬ、という新聞記事をサンパウロで読んで、ブラジルにほとぼりがさめるまでおいでなさい、と本気で手紙を書こうかと思ったことがあったが、そのことは口にしなかった。

柄の先に右手こぶしの人さし指と、中指の間に親指がつき出ている、ほりもののあるペーパーナイフを出すと、「これはハカランダですね。これで作ったギターは最高品ですよ。ブラジルにハ

カランダは多いのですか？。」

「調度品の高級なものはジャカランダですね。街路樹にも植えられる種類もあって、十月頃がブラジルの春ですが、その頃になると、うすむらさきの花がきれいに咲いて、乾燥期から雨期に移る変化の多い空に夢のような美しさです」と答えた。

まだずっとここで暮らすのかと訊いてみた。

「ここにくる時、三年だけ百姓をやって見ようと思ってきたが、三年、まがりなりにもやれたので思い残すことはない、いつ止めてもいいと思っている。こんな病気が出ちゃったから百姓は出来ないしね」といった。

こんな田舎では、突然の発作で助かるものも助からなかった、なんてことになったら惜しいなあ、と思った。

大田青年がくる途中で話した、百姓を止めて石和へ帰り、三階位のビルを作って、その屋上に土をあげて、そこでまた土いじりをやりたい、といていたと云うことを思い合わせ、深沢七郎も近い内に石和へ帰らなくても、ここは引きあげるな、と感じた。

大分前のことだけれど、笛吹川、檜山節考が映画化されたのを見て、深沢七郎作品の感想をパウリスタ新聞に「ギッチョン筆」と題をつけて載せて貰ったことがある。

その切抜きを読んで貰った。

「わたしのものに似ていますね。」

いいのかわるいのか知らないがそういった。ちよっぴり、百姓以外の話をしてもいいな、と感じたので、ブラジルに日本語の新

聞が三つあることや、「コロニア文学」という文芸誌も出ていることや、サンパウロ市内には、日本人と日系ブラジル人が約二十万人住んでいて、甲府は十七万だから甲府より多いといったら、びっくりしていた。

わたしの、活字になったものをひとつ見て貰った。それを持つと、となりの部屋に入って寝て読む、と立っていった。

「これはどういう意味？」寝室から声がかかった。それはポルトガル語で、こうこうだと説明した。

この部屋にも炬燵があつて、その横にふとんを敷いて寝ているのだ。

枕元からすぐメートル位のところはガラス戸であつて、暴漢が外から三尺ぐらいの棒でも、寝ている深沢七郎の頭を打つことが出来ると思った。

本棚らしきものはこの部屋にもなかった。

二、三日前に出荷したばかりで、いいものはないがいちごを出しなさい」と若者にいった。台所の方でまごまごしていた大田青年は、コンデンスミルクがきれたようだから買ってくるよ、と菖蒲町に車をとばした。

わたしも外に出て見た。さっきから風が出はじめて、裏の畠の身のたけ位のからし菜の黄色い花がゆれている。白いチューリップが一行に並んで咲いている。見わたす限りの広い田園が一つラヴミー農場をかこんでいる。秋風にゆらぐ稲穂の黄金の波は美しいだろうと思う。

掌の上にやつとるような、大きな鉢に赤いいちごを山もりに出してくれた。折角買ってきたミルクはかけなかった。砂糖だけかけて喰べるのがわたしは好きだ。

新聞の切抜きもそうだったが、創作の方もゆつくり時間をかけて読んでくれた。

おなじ町の者が外国に暮らして、少年の時から三十年も、日本と日本語を忘れないで、好きとは云え、下手なものを書いたものだ、とびつくりしながら読んでくれたものと思う。

「えがきかたが足りないねー」と返してくれる時にいった。

八王子近くまで帰ってきたら、暗くなって雨となった。

甲府行き急行にわたしを乗せると、大田青年は国分寺にあるという下宿へ車で帰った。

深沢七郎に逢った話をまとめて見たい、とのんき堂の主人に話したら「文芸」に、井伏鱒二のラヴミー農場での深沢七郎との対談が載っているという。早速買って読んだ。

四月十二日に対談しているが、それはわたしが訪れた十八日前のことであった。

見沼用水の話などもその対談の中にあつた。

終り

創作・三四枚

風車のある家

三瀬 喜代志

定は五十才の正月を迎えた。三日は、自動車事故で惨い死に方をした夫勇造の一周忌にあたる。

風の強い晩だ。

屋上の風車が凄い音を立てている。定は、強烈な電燈の光の下で、寝台に腰をおろしている。次女のアンナは、もう寝たのか、彼女の部屋から物音も聞えない。

勇造と二人で暮した定の部屋は、女一人には広過ぎた。

誰も居なくなったサーラに、死んだ勇造が幻のように坐っているのを見た定の心臓はまだ音を立てている。

定は、唇を歪めて、無理に笑った。

――負けるものか。

定は頭から亡霊なんか否定しようとした。

――妾の頭のせいだわ。

夫婦の長かった精神の暗闘は、もう済んだんだ、と、定は口の内で呟いた。

――勇造が悪いんだわ。妻に満足を与えられぬ男なんて、何が男か――。

定は、又しても激しく亡夫を恨んだ。

五十の、三人しか子を産まなかった女の身体は、まだ燃えるの

だった。

その時、壁一重隣から、はげしい女のコ切声が飛んで来た。

ーやってる、やってるー

定の皮肉な顔が、ニンマリと揺れた。

定が、勇造にかくれて密通しているアントニオ晃一と、定が、無理に押し付けた伯人の売春婦アイジニアとの夫婦喧嘩なのだ。

晃一は、定より十五も歳下の若い男だ。

定の、世間体をごま化す術だった。

勇造は、定と晃一の関係はとづくに知っていた。

彼は、日夜それを苦しんだ。夫婦喧嘩は絶えなかったが、どちらかといえば、氣立ての優しい勇造は、しまいには唇を噛んで激情に耐えた。氣丈な定は、黒を白と言い立てて勇造に打ち勝たねば承知しないのであった。

商売の雜貨店は繁昌して、次第に財産がふえてゆくのに反して、夫婦の感情は、年と共に冷却して行つた。

勇造が亡くなったからと言っても、定と晃一の関係は、やはりひそかな密通の形を崩さなかった。十五も下の番頭と、公然と夫婦になるには、世間体と子供の手前、出来ない話だった。

定は、晃一に売春婦のアイジニアを押し附けることに、自分の情交に安堵を見出そうとした智恵から生れた思い附きに独り微笑したものだった。

定は、そうして商売の経営権を晃一に譲って店の貸し代を取ることにした。

定は、そうして、自分のひそかな行為を、周囲の眼から完全に匿すことが出来た思っていた。

だが、そんな事で事実を陰蔽出来るものではなかった。アイジニアは、晃一と定の関係を知ってしまったのである。情交の現場に踏み込んで、浅ましい二人の姿を見てしまったのである。定は、一時の出来心として、その場をごま化そうとした。だが、アイジニアは寛容な女ではなかった。彼女は、逆上した。そこで、定は態度を変えて開き直ったのである。下劣極まる女同志の喧嘩から、晃一はす早く姿を消した。

それからの毎日は、泥沼のような不愉快な空気が家に充満して、畜生の生活が続けられたのであった。

「妾は、絶対に晃一とは別れない。何だ、いい齡をして、あたしは、お前さんのような婆あなんかに負けるか」

アイジニアの憎悪の眼差しに、万一の危険に怯えながらも、定は後に退かなかった。

「お前は、晃一の財産が欲しいのだろう。男から、欲しいだけ貰って出て行けー」

「出るものか、絶対に、晃一も財産もわたしの物ぢやーこの糞婆奴」

日課のように、二人の女は言い争った。

風が弱くなったようだ。電燈の光りが鈍くなった。

もう、此の界限には電燈線が索かれているけれど、定の家だけ

が、風車発電で用を足している。もう十年にもなるのである。

定は、子供の事を思った。独り息子のジョンは弁護士で首都に住んで、もう永いこと親を訪ねて来ない。父の勇造の葬式以来姿を見せてくれない。ジョンは、意識して母に会い度がないように思う。そういえば、長女のエリーザだってそうだ。嫁ぎ先が、距離的に遠過ぎるというのが理由だが、父の葬式に顔を見せただけである。アンナは高校生で、一緒に住んではいるけれど、大人になったアンナの眼差しは、既に母を恨んでいる。

――どっちみち、わたしは独りだ。

定は捨て鉢に呟いた。そして、自分の母もそうだった。七十を越して、まだ矍鑠として或る新興宗数の教師などして独りで暮している。こちらを訪ねもしなければ、自分も訪ねて行かない。

――血なんだわ。

定は、太った腕を撫でてそう呟いた。

あれつきりアイジニアの声も聞こえなくなった。

――糞、パラグワイ女奴、毎日男と喧嘩しながら、しょっちゅう喰い付いてやがる。

定は、いまいまして舌打をした。そう言いながら、定も毎日晃一の身体が欲しいのである。今日も充分、男を堪能した筈なのに、アイジニアに嫉妬する故か、からだが燃えて仕方がないのである。

――何うしてやろう。

定は、何とか打つ手はないか、と思った。そして、或る方法を

思い浮かべた。それは、すばらしい思い付きであつた。肥満した色白い定の肌に血が甦ったかのように活々としてくるのだった。

“これは面白い”と定は思った。

子連れの出戻り女咲子と呼んで一部屋貸そうという思い付きであつた。

咲子は、出戻りと言っても親は居ない。ばくち打ちの亭主と別れて、裁縫をして一人の子を養っているのである。定は、ふとした機会にこの咲子を知って、それとなく親切らしく庇ってやっていたのである。子供は三才でロベルトという男の児だが、咲子は、美人で、あのままだと、何れ男が出来るだろう、それより、自分が利用してやろう、と考えたのである。

翌日、定は、毎朝そうであるが、いらいらした気持ちで寝台に腰を下していた。一月の陽差しは朝から強烈で、部屋は夜気で冷されているので、日中の蒸された暑さとは反対に快かった。晃一がはいって来た。手にオイルの罐を持っている。

「おばさんー風車の油が切れてるぜ。俺、入れるぜ。やかましくて寝られやせん」

時々、そうするように、定は、寝台に向けて顎をしゃくった。

「あかんー」

晃一は眼をパチパチさせて僅かに背後に注意しろという素振りを見せた。扉の向うに、アイジニアの姿が半分見えた。定の唇がギユツとへの字に結ばれた。晃一は、大きな声で、

「おばさん、もう風車なんか売って了えよ」

定も声を荒げて言った。

「あんた、買い手を探しな。売るわ。」

そして恨みがましく呟くように、

「風車の音なんか妾あ馴れてらい。あんた等の痴話狂いの方がよっぽど寝られん」

「馬鹿な、誰がそうさすんかー」

日本語でのやり取りだから、アイジニアには解らない。でもそんな時こそ余計、このパラグワイ女の眼が光るのだった。何時までも日本語が解らないなんて言えないかも知れない。特に、男と女の火花の散るような会話こそ、嫉妬に狂った女は理解しやすいのではなからうか。

晃一は、風車に登った。やっぱり油が切れていた。罐から緑色に光って油が注がれると風車の軋れる音がとたんに止った。

晃一は、朝の太陽が、白と黒との二色に造形した市街にうつとりと見とれた。

「町は綺麗だぞ」

そう言いながら風車から降りた。アイジニアは風車の台の下に立っていた。女はニツコリ笑った。平和な一と時の風景である。何事もないかの如く、二人は自分の店へ帰って行った。

アンナは、母に甘える子ではない。世間を知り始めた娘が大人びるのも当たり前だが、姉娘のエリーザもそうであったように、母への眼差しに冷たいものがある。父の勇造が亡くなってからは一層その眼に酷しさを加えた。

定が、年甲斐もなく、晃一と淫らな関係にあることを知り乍ら、面と向っては何も言わなかったが、その眼、その態度は、明らかに母を憎んでいる。定は、それをよく知っている。それでいて、晃一との不倫を絶ち切ることが出来なかった。

その日、アンナは自分の貯金を下してサンパウロへ旅立って行った。定は、アンナの恋人、ロメオ・ギマランセスが同行することを知っていた。

――自分は自分の思い通りするさ――

定の人生哲学がまたしても口を衝いて出るのだった。

勇造が生前、妻の不行跡を欺いて、

――俺は死にたい、とよく洩した。定は、そんな時間髪を入れず言ったものだ。

「そんなに死にたきや、死んだらいいじゃないの」

そんな父母の争いをエリーザもアンナもよく見せられている。家庭が冷たくなるのも道理だ。将来、独りぼっちになって、老いをどうして養うか、何を希望として生きて行くか、というようなごく当たり前の、誰でもが持つ先々の不安等というものを定は考えなかった。

自分が死ぬる迄の生活費はあるんだから、とのみ思うことが定の処世であった。

十八才の時、従兄妹の勇造の呼び寄せでブラジルに来て、サントスに船が着いたその夜から既に人妻になった定には、ブラジルは青春の国ではなかった。生活は苦しかった。サンパウロ州を

転々と涉り歩いたが、楽しいこととて一度も無かった。定はブラジルに來たことを後悔した。その上、夫の勇造を心から愛するという気持は生れなかった。定は、男の肉体とほそんな物かと思つた。勇造の性は男として稀な所謂薄手という部類であつた。

定が日本から一緒に來た母のムラは未亡人として娘や婿と一緒に暮らしていたが、男が出來て出てしまった。佗びしい女の生涯の途中へ晃一が現われた。雜貨店の店員として勇造の家に入つて來たのである。そして、十八年が過ぎた今日である。定が晃一とねんごろになつてもう十年を過ぎる。晃一の肉体は、夫の勇造とはまるで違つていた。逞しい男に触れて定は狂うばかりに喜び驚いた。晃一も、この過熟した女の肉体の中に、新鮮な果実を發見して夢中になつた。青年にとつて、母親らしい労りと、甘つたるい女の味は此の上なき害毒であつた。晃一は、まともな結婚について者えるいとまもなかつた。青年は、母の如く年齢の違つた女の言いなりになつた。身の為に、定の手から逃げて了え、と忠告してくれる友人のことばも耳には入らなかつた。

氣の弱い勇造は、悩み苦しんだ。だが、晃一を解雇して問題を片付けようとする勇氣がなかつた。長年のこうした疾患も持病として諦めるように、公然の秘密として認めて了つたような結果になつた。

見渡す限り、緑の地平線が続くマ州の高原を縫つて、ウルププンガから來る送電線の鉄柱が、約二百米おきにクツキリと青空に立っている。その鉄柱が六七本目あたりから向うは大陸に吞まれ

て淡く消えている。

定は、見馴れたこの風景を、発展する市街に結びつけて、人並みに感動して眺めるのだった。定は後をふり返ってこの登り道で息を整えた。凹くなっている定の家の辺りも、次々と新築が建つて郊外というより、もう市街に抱き込まれている。たった一つ、定の家の風車が見える。風が無いのに、矢車はゆっくりと廻っている。

ー体裁が悪いわ、風車なんか除けなくっちゃーと、呟いた。

咲子の借りている家は、この高台で、露路を入った奥の小さい板家だった。倉庫であろうか。小さい窓が一つしかない。これではマットグロッソ州の暑さに蒸されて、人間が住むには適当でない。それでいて家賃は月、五十コントと聞いている。家主は日本人だが、余程因業な人なのだろう。

家賃を払い、一人の子を養い、自分も食べる為には、咲子は馬車馬のように働かねばならない。若後家が背負った女の業がそこに在る。

露路の突き当りの狭い漆喰の庭でロベルトが頑具のカミニオンで遊んでいる。定が買ってやった物だ。

「ロベルト、母ちゃん居る？」

聞く迄もなく、ミシンを踏む音が聞こえる。

「うんーター・シン」

日本語ばかりで育っているのに、近頃は外で子供達からブラジル語を聞き憶えて、ちゃんぽんの言葉を使う。

咲子は、父母と共に戦後渡伯して来た新移民である。戦争を境にして、旧移民と新移民に区別して呼ぶのはコロニア一般の慣しである。それでも咲子はもう十年にもなる。けれども彼女の交際する範囲ではブラジル語は必要でなかった。だから咲子は殆ど喋舌ることが出来ない。小さい子供のロベルトから徐々に教えられることだろう。

定は手土産のビスコイトをロベルトに与えた。母ちゃんーと叫んで家の中に駆け込んだ。

「アララーおばさん、何時も済みません」

面長で、強いて言えばちよつと眼が細いけれど、整った顔だけは結構美女である。

「何時も乍ら、後家の頑張りねえーお邪魔さん」

そう言つて定は、如才なく咲子の肩を抱く恰好の挨拶をするのだった。

「アララーそんなんじゃないけど、おばさんいつも 御達者でー」

「ええーあたしやー時にねえ咲さん」

定は、調度の貧しい、飾り気のない部屋をぐりっと見廻した。それが、今から呼びかける前戯でもあるかのように、より効果的であることを計算した定の演技だった。

「咲さんどう？ 大変でしょ。残るの？ 一生懸命 働いてー」

「おばさん、カツツカツーよ。あたしが風邪を引いて休んだら赤字。あたし、どうなるかと思って」

「でしようね。可愛相に――だったら御主人と別れたの後悔する？」

咲子は、両手の指を伸ばして左右に振り、

「真っ平――おばさん。あの人ばかりじゃないわ。愛情なんてこれっぽっちも――そして惨忍な男よ――」

「夜だけ抱いて――ね」

「あたし――あんなの嫌い。愛情なんて無いんだもの――」

「あのね咲さん――あたしの主人の一周忌も済んだわ。」

「アラ――あたしうつかりしてたわ――」

「いいの、そんな事。それでね、つてこともないけど、あたしあ咲さんを思い出したの」

「――」

「妾の家、広いでしょ！ あんたに一部屋貸して上げようと思つて。部屋代なんていらないの。あんたを、少しでも楽に上げてたいと思つてよ。何う？」

「まあ――」

咲子は眼を輝かした。

「此処、五十コントね。それが浮いてご覧、大助かりじゃない？」

咲子は両手を膝において黙って深く頭を下げた。細い双絆は涙で塞がっていた。それを見た定の眼にも涙が滲んだ。女の生理は、他愛ない演出にも真実の仮面をかぶることが容易なのであろう。

「あのね、おばさん――近頃、ここの家主さんいやらしいのよ。しよつ中来るの――」

「まあ――あの爺さんが、あんたを口説くのね――」

「ええーお婆さん、あたし救われるわ」

「お金なんか出すの？」

「まさか――あの欲張り爺が」

「でもお金欲しいでしょ」

「あたし、お婆さん淫売じゃないわー」

「アラ、済みません。からかったりして」

咲子は、勿論、定の家庭についてはよくは知らない。定と晃一の事も知ってはいない。一途に、親切なやさしいお婆さんだと思っている。部屋代も取らないで自分達母子を救って呉れるという申し出か満腔の感謝を抱いて、何度も頭を下げるのだった。

「純情ね、あんた。そんなに有難がらなくってもいいのよ。あたし、お節介なんだから、咲さん、あんた幾つだった？」

「三十よ、お婆さん」

「どうせ、いい人見つけて結婚しなけりやいけないわねえ」

「ええー」

「妾が又、お節介するわ。それはそうと、早速ムダンサの手配するわ。妾に委せなさい」

「済みません、お婆さん」

咲子は、アラ、と叫んで、大急ぎで湯を沸そうとした。一部屋の中に、隅に母と子が寝る為の寝台、それもシングルベッド。片方に簡単な炊事用の道具が、箱を置いてそれが又棚代りを兼ねて、別の箱の上にはフオガレイロがある。仕事用のミシンを据えただ

けで部屋は一杯になっている。

「いいの、咲さん、妾お茶飲みに来たんじゃないわ。じゃ失礼。荷物が少いからカロセイロを雇うわね、明日、此処によこすわよ。その積りでね。」

定は起ち上った。咲子の顔から体を眺めていたが、

「あんたーほら、近頃よく雑誌にあるじゃないのー欲求不満でしよ。あんたの肌、綺麗だわー。」

「まあ、おばさんー」

咲子は顔を赤らめた。何か言おうとしたが薄笑いして照れた。

定が露路を出て行くのを見送って、

「ーおばさん、変な人だわ、と呟いた。

ロベルトがそれを聞いて

「チーア、いいおばさん？」

と、母を見上げた。

「うん、そうよ、いいおばさん、ね」

定は、晃一と浴室に居た。僅かな機会を捉えて情を交えるのに此の浴室を利用した。

「晃ちゃんー駄目ねえ」

「考えてくれよ、おばさん。幾ら俺だって続かねえよ。アイ公だって凄いいんだぜ。同情してくれよ」

「どうして妾ーあんな奴連れて来たのか知ら、癪だなあー晃ちゃん、あのパラグワイに金やって追い出しなよ」

「おばさんー危いぜ、あの女、日本人とは違わあなー俺だって

好きじゃない。まあ、ゆつくり時期を見るより仕方ない」

「晃ちゃんーほら、あの咲ちゃんよ」

「うんあの出戻りが、どうした？」

「家の部屋貸すことにしたわー」

「何に！」

「あの子、可愛そうだから妾、世話してやろうと思うの　ー」

「いらんことーお婆さんの病気なんだ。お節介と言うか、親切の押し売りという奴だぜ。それよりな、お婆さん、俺も近頃は一寸疲れた。これから余り欲しがらないでくれよ。でないと俺の寿命が持たん。お婆さんも幾つだ？、五十だろう。いい婆になった方がいいんじゃないかー」

「晃ちゃんの身体が持たないんなら、休んでもいいけどー」

「チエツー大した婆だ」

二人は、一寸間をおいて浴室を出た。真昼のサーラは明るかった。まだ、アイジニアはひる寝から醒めないらしい。彼女は、アルモツソ時にも、好きなコニヤツキを飲んでひる寝に就くのである。売春婦としての暮らして憶えた習慣である。　、

定は、ブラジルに住んでもう三十二年になる。彼女は普通の会話では本来のブラジル人との交際には不自由がなかった。我が家としては何かにつけての生活様式は日本人の習慣を守ってはいるが、ブラジル式のやり方をも好いていた。物の考え方も、より精神的であるより、より合理性を好んだ。従って、ブラジル人との交際の方が日本人との付き合いより気楽だと思っていた。近所の

外人男女とは気軽に話し合ったが、此の町を中心として作られている日本人会には出入りした事がなかった。亡くなった勇造は小心者で、妻の不行跡に日夜悩み続けたが、同胞の間で、その噂が囁やかれていると思っただけで、もう付き合いの機会から一切逃れて来た。定は、晃一からも、交際の自由を奪っているのである。夕方にも近い時刻、警察から来たと言乗って一人の私服が訪ねて来た。定は、何となく不安を覚えた。だが、考える迄もなく自分が警察から追求せられるような事は何一つないのだ、と思い返した。刑事はおだやかな口調で訊ねた。

「アンナ・ハラダはお宅ですか？」

「ハイ、妾の娘です」

「お宅に、近頃買われたテレビがありましたよね——日本製の小型手携用ですが——」

「ハッ」

定の頭は、此の瞬間、混乱した。娘のアンナが、約一カ月前、とても安い、と言ってある日本人から買ったテレビである——。

「有るでしょうね。奥さん、アンナさんは御在宅？」

「いえ、娘は、フェリアスを利用してサンパウロへビアージしています——」

「あそうですか、では、そのテレビ一寸見せて戴きたいのです」

そう言うのと同時に、刑事の眼鏡越しの眼がキラリと光った。

定は、刑事をサーラに導いた。食器棚の上に、そのテレビは置かれてある。

「あの、何うした理由でしょうか？」

定は不安気に訊ねた。刑事は、例のテレビの側に顔を付けて見ていたが、「これは密輸入物なんです。アンナさんが買われた相手は、沢田という日本名を使っているが、中国人なのです。密輸組織の一人なんです。定はこの時思い出した。アンナが、日本人だと言うのに、使ってる日本語が一寸変で、自分達の日本語と違ってるのよ、と言った事を思い出したのである。

「何うなるでしょうか？ セニョール」

「今、警察で取り調べ中なんです。白状の裏付けをするため見せて戴いたのです。結果は今の所判ません」

「没収されるんですか？」

「判りません、では、お邪魔しました。あ、申し上げておきますが、あのテレビは、警察から何か通知がある迄他へ売ってはなりませんよ。では」

刑事は、必要なだけと言って帰って行った。アンナは、そのテレビに六〇〇コント出して買ったのである。定は不安だった。近頃、この町に見知らぬ日本人が随分ふえている。その中に、日本人だと自称する支那人が混っているという噂も耳に入る。パラグワイが近い故か、コントラバンド（密輸）は此の町でも盛んだと聞いている。アンナは、えらいものに引かなかった。どうなるだろうという不安は、初めての事だけに深刻だった。

定は、晃一に早速この話をした。へえー、と驚いだが、

「何んともないさ、心配しなくても。こちらに罪がないんだもの」

と何気ない風に言い切った。

翌日、咲子等は荷物のカロッサと共にやって来た。

定が、こうした不遇な女を世話するのは初めてではなかった。もう七年か八年前の事だが、矢張り貧しさと闘わねばならない未亡人を引き取って部屋を貸した。それには、定の魂胆があった。自分の不倫に対する勇造の嫉妬を軟らげる積りで、その女を勇造にすり付けようと計ったのである。だが、その計画は失敗した。定の早合点だった。勇造は、性格的に潔癖であつた。定から言い含められて、女は勇造にモーションを掛けるのだが、彼は顔をしかめて不愉快さを露骨に見せた。その女は咲子ほど美しくはなかった。定は、咲子の容貌に男好きのする性的魅力があるのを見て取っている。

――今に見ておれ、今度は面白いぞ――
と独りごつのだった。

タイル張りの、日本式にすっぽり身体を沈められる風呂を見て咲子は大喜びだった。

「おばさん、妾、こんなお風呂ブラジルに来て始めてよ、気持ちがいいでしょうねえ」

「あんた、どんなにしてたの、今迄――」

「アラー――身体を拭くだけですわ」

「まあ穢らしい――」

定は咲子の首に鼻を寄せて、犬のように、クンクン嗅いだ。

「あんたいい匂いがするわ。お風呂で磨いたら凄いだろうな」

「あたし臭いでしょー恥しいわ。お婆さんの肌みたいに綺麗じゃないもの」

咲子は、ほんとうに今夜から此の風呂を使えるのを喜んでいる様子であつた。彼女は、お婆さんに感謝するところで一杯だった。幸福は貧しく不遇である者にとって、どんなにささやかなものでも大きな喜びとなつて現われるのである。富める者、満ち足りた暮しをする者は、新しい幸福を見出すことに困難を覚えるであろう。咲子は、移民生活十年目にやつと風呂が使えるのである。しかも、タイル張りのー。

ミシンの置き場所を決めたり、僅かな世帯道具や寝台を据えるのに、母親のように世話をやいていた定は、

「咲さん、考えて見たらお食事ね。妾の所と一緒にしましょう。あんな達別にするつたつて、家の台所を使えばいいけれど、面倒じゃないー一緒にして幾らか出しあえばいいじゃないの。」

「そうして載けたらー助かりますわ、お婆さん。それで幾ら入れたらいいかしらー」

「そうね。妾がしたり、貴女が炊事したりしてね。その時の都合で、そうー月三十コントお出しなさい。何も妾、儲ける必要ないんだから。仲よくやりましょうよー」 エリーザが家に居た時

は、彼女が自分の部屋にしていたが、結婚して出て行つてからは住人もなかった。窓が大きく採光は充分で気持のよい部屋だった窓から、風車の台柱が見え、顔を突き出したら風車もよく見えた。

その晩、お茶を呑みながら、定はそれとなく咲子を誘惑の第一歩に引きずり込んだ。

「咲さん。妾連ね、あの晃ちゃんの女、パラグワイには弱ってるの。どうしても、あれは別れさせないと、晃ちゃんの将来にも差し支えるわ。妾ね、しみじみ思うの――咲さんが晃ちゃんの奥さんになって呉れたら、どんなに晃ちゃんが幸せになるか。あんたの幸福の為に――妾、もう長い年月、晃ちゃんに働いて貰ってるでしょ。他人とは思えないわ。それ反対ね咲ちゃん、前々から晃ちゃんはあんたが好きらしいのよ。でも、あのパラグアイ女が居るもんだから、口には出さないのよ。どうせ手を切るわ。大分お金が要るだろうけど。あたし、母親代りにも、お金は援助する積りなん けど。咲さん。あんた自分の将来のことも考えて、ね。妾あ、あんたも他人事ならず心配してる のよ――」

見方によったら、移転早々から口説くなんて、口説く為に部屋をただで貸したり、生活も家族なみに待遇したりするのだということが判る筈である。だが、咲子はそういう疑いは抱かなかった。現在を救われ、将来のことまで心配して呉れるおばさんは、咲子等母と子にとって神の如きものと思われるのであった。彼女は、早くも涙ぐんだ。その涙を見た定は、輪に輪をかけて咲子を自分の懐に入れるのだった。感動して口もきけず、定の顔を縋るように見たり、モジモジとする咲子を、――なんて、いい女だろう、と定は愛しくなるのだった。愛情と、惨忍さが、胸の中で滾っている自分を傍から見ているように、巧みなわなに捕われた小鳥を

捉えるように、舌なめずりして眺めるのだった。

定は、自分が知り尽している晃一の男が、この可憐な若い女を泣かせる場面を想像したとき、身内を灼くような欲情が燃え上った。

めらめらと奔とうする情念で頬が赤くなり眼がギラギラと輝いた。

――完全に釘を打ち込んだ、と定は思った。

咲子には、自分の為にこれ程心配してくれる母の年齢のおばさんに手を合わせ度い位であった。

定は、ひそかに、嘗て、勇造が生きていた頃、晃一との密会に利用したホテルを思い起していた。あそこなら、絶対に他人、特に日本人に見咎められることもない。あれなら、何の苦もなくパラグワイ女の眼もごま化すことが出来る。それ迄、充分咲子の心を靡かせておこうと思った。

定は、三人の女から攻撃せられる晃一が可愛相に思われぬ事もなかったが、そういう奇怪な乱交に一層性的昂奮を覚えるのだった。

アイジニアは、最初から咲子を敵視していた。咲子が、ブラジル語が出来ないので誰と話すのも日本語なのが、アイジニアにはもどかしかった。どんなブラジル語も咲子に反応しないのが癪だった。それが尚更、最も自分にとって恐ろしい敵であることを本能的に感じていた。

近頃になって、晃一は時々、定の家へジャンタを喰べに来た。

「あの女、嫉けやがってコジンニヤもせん」

と言うのだ。咲子が側に居ない時の事だった。

「お婆さんの腹判ってるぜ。悪い趣味に病み付いたもんだー」

「判つてりやそれでいいじゃないか。晃ちゃんが得することなんだもの」

「損も得もあるかい。」

「あんた、色々な女味わえてええじやろ。あの子」

定は咲子の部屋の方を顎で指して、

「あの子なら晃ちゃん一生の奥さんに出来るよ。妾あその積りで尽力しているのさ」

「それ程なら、何故俺を欲しがるんだ？」

定は、シツと晃一の高声を制して、

「あたしはもう齢よー火が自然に消えるまで可愛がっておくれ。そう長いことないわ」

と言った。

「俺、お婆さんとのこと咲子に知れたら不味いと思うなあ」

「うまくやるのさ」

そこへ、咲子が現われた。別な話題にす速く切り変えられた。

晃一が、す速く食器棚の引き出しからトランプを手にして椅子に帰った。

「咲子さんービスカ知ってる？」

定が間合いよくそう呼びかけた。

「あたし、出来ないわ」

定と晃一は、黙って何回か勝負をしたが、その間咲子は黙って見ていた。

アイジニアが無言で入って来た。彼女は何故か微笑を含んでいた。別に何かにこだわる様子もなく話しかけるパラグワイ女を、咲子は不思議そうに眺めていた。夫婦喧嘩も日本人的解釈では判らないのであろう。三人はブラジル語で話し始めた。咲子には大体何の話かさえ判別出来なかった。咲子は、こんなに葡語が達者で、ブラジル化している人達の中に到底、自分なんか割り込めない、と考えた。そうした会話の間へ、日本語で、何のお話ですかと聞くのも間の抜けた事だと思うのだった。

咲子は、黙ってサーラを出た。後からついて来るロベルトと自分の部屋に帰った。

咲子は、定から、晃ちゃんとホテルで逢ってごらんと話しかけられたのはその翌日であった。それは、咲子がひそかに想像していたこととは余り懸け離着た実現の方法なので、オヤ、と自分のところに問いかけた。不安が黒い雲のように湧き上った。一体、これは何うなるんだろうと反問した。そして、返事の代りに、定の顔を凝視した。その瞬間、定の表情はしまった、という影が走った。

「あなたがその気になった時でいいの。何も今日に限ったことじゃないわ。晃ちゃんは、とても咲さんを好いてるのよ。咲さんの将来のためだと思っからなの。いい？」

咲子は、「ハイ」と返事をしたが、その次に続くことばが見付からなかった。晃一の奥さんになれるという問題からは、何か、ずれのあるのが感じられたからである。咲子は、その時、カラカラと鳴る風車の音を聞いていた。

(了)

「農業と協同」文学賞

第八回（一九六七年度）までは、当地で入賞候補作品六篇をあげ、日本の作家（石川、浜野、松村の諸氏）の選を経て入賞が発表されていたが、第九回応募作品からは、すべて当地で入賞作を決定することになった。

第九回：二九六八年度）

◆入賞作品、「朝の予感」 醍醐麻沙夫

◆同 「地表」 いこま 正

第十回（二九六九年度）

◆入賞作品、該当作品なし

◆佳作入選作品、「灰色の模索」 由井幸男、「移民という川の流れ」 浦畑艶子、「同行二人」 山崎 準平、「白い陽炎」 杉村士郎、「ある移民の生涯」 松井たろう、「エンポーラ」 松村俊明、以上六篇

創作・五五枚

始めと終り

藪崎 正寿

鏡のようによく磨かれたショウ・ケエスの硝子が店内の両袖に長くつづいた。店の奥行は、内部の壁面いっぱい練瓦でも積むように積み上げてある暗灰色の紙箱のために、どうかするとトンネルの中でも覗き込むみたいに深いのだが、棚の硝子のかがやきは、ずっとつづいてそのなかばちかくにまで及んでいた。一方が男靴、他の一方が女靴という具合に区分され、それぞれ温室の花のように多彩に陳列されてあった。……花のように、型と大きさのうえでも、良くみれば、ひとつとして同じのはなかった。つるぐさの蔓のように絡み合うニッケル管の端はしの萼に似た受け台にそれらはひとつずついていねいに乗せられてあった。男靴のショウ・ケエスは歩道にちかい三分ノ一が斑ら鞣しの瓜先のひどく丸っこいのや角張ったのやで占められ、次の三分ノ一には輸入高級皮革の穏健な型ばかりがさりげなく並べられてあった。残りの奥まったスペースには主に児童靴と飾り紐附や毛皮附やの室内穿きが賑やかに充ちていた。開店時刻の八時からしばらく、M達は、栗鼠のように敏捷な身のこなしで店内のあらゆる部分を拭いて回る。熱中してくると、二列背中合せに並ぶ革張りの客用椅子の上を飛

び交い、仲間同志駆けぬけあい、灰色のフランネルをふりまわして、競う。一人がすでに布懸けしたあとを別の者がぬぐい、そのあとを直ぐ他の一人が拭くという、凡そ、むだのような行為が反復してつづけられる。見ようによっては、こどもの興じる遊戯みたいだろう、がこれは万事に経済性をやかましくいう主任の意向とかならずしも対立しない。事実、床や椅子は回数多くこすればこするほど、深く堅固な輝きを増しもする。それに、やはりこのひとときの作業はM達に必要なのだった。そうでもして閑な時間を消さなかったなら、手持ち無沙汰は冗じるばかりだし、主任の視線にしてもさらに辛くなるばかりだったろう。少少、だからふまじめに見えようとどうしようと、ともかく忙しげに絶え間なく動き回れば何となく店も活気づ

くし、決してわるいということはない。賢明な方法だった、と言える。給料を取っていればそれも義務の内と言えなくもなく、主任にしても同意見にちがいない。

尤も、極く稀にだが午前九時以前に現われる買物客がまったくいないわけではない。そのめずらしい例外の客達を、M等は秘かに喪服連と名附けて呼んでいる。

べつに彼らが麗れいしく喪服を着装して入ってくるのではない。襟に留める慣わしの小さな繻子の喪章さえも、たいていが付けていなかった。彼らの（その日）は、永い予期の果だったにしろ、思いがけない急の事だったにしろ、結局のところ不意を討つ。いつも一回きりの意味と目方とを以ってそれは見舞うので、

たいていが未だよく慣れてもないようだ。がM等は鼠のようにするどい嗅覚で臭ぎあてる。彼らは二十四時間ほか、ひよつとするとつい今し方……肉親のひとりを喪つてきており、その家の広間にはクルスの縫取のある黒の繻子の帽幕が張られてあるのだ。肉親であることをやめたばかりの遺体はその前によこたえられている……。彼らは永く泣いたためでか、あるいは単に寝不足のためでか、瞼を張れぼったくさせているが、決断は速い。物えらびに、ほんのすこしの躊躇いも見せないと言っていい。ふつうの客につきものの、目移りや気迷いやの愉しげなようすを、彼らから見附けだすことはできない。もう、すっかり目星があつてきたみたいにシヨウ・ケエスの中の唯ひとつを、差す。だが、サイズとなると、心許なげに二度も三度も言った側から訂正するのだ。そして余り確信なさそうに、中で一等大きなのへ傾く。彼らの指定するのがいつも一等廉価な値札のものと書割のようにきまつていても、M等からいやがられることは決してないし、冷淡に扱われることも同様にない。彼らが買物に於いて示す決定のすみやかさが、ふつうの客の場合の鷹揚ととても似ていて手間取らせないからだ。まったく……天井ちかくのまで長い椅子で取りおろさせ、際限もなく並べさせ、いちいち足を入れてみるばかりでは納得しないで、絨緞の上で飛んだり跳ねたりする気難し屋あたりと較べれば至って骨の折れない相手なのだ。主任にしても、事の性質上歓迎ビラまでは貼れなかったにしろ、店の運営面で結構効率のよい顧客なのは認めるにちがいがなかった。

その朝、鉄のシャツタアを掲げきるかきらないかに這入ってきたのもこのような喪服連の一人だった。

すくなくとも、外貌では憶かにそう思われた。唯……ふつうの客達の場合からすれば、言うに足りない時間だったにしろ、彼が兎も角（えらぶ）ための刻をショウ・ケエスの前で費したことは充分にMの注意を惹いた。しかもさらに意表を衝いて彼は高価な黒の濁逸クロオム鞣しのを希望した。Mが奥へ案内しながらサイズを尋ねると、相手は自分自身のをいうような躊躇ない語調で告げた。そのこともちがっている感じでMの注意を重ねて惹いた。素早く、目をはたらかせたかぎりと言えば、本人用でないのは瞭かだった。相手の穿いているのは、告げたサイズよりすくなくとも一インチは大きなものだった。靴が揃えて置かれると、そのひとつを両方の掌ではさむように持ちあげ、念入りに吟味しながら泌じみと眺めていた。さらに、掌で受け……も一方の掌を細くすぼめてそつと差入れながら、ふと氣遣わしげないろを目に帯びさせて、Mへ向けた。相手の氣持をすくいにとって、だいじょうぶです、総体念入りな縫製で釘は用いてありませんから……と慇懃に保証すると、相手は脹れぼつたい臉をしぼたたいて、意外なきにはにかみわらいを洩らした。

Mが、だが……ほとんど箱の紐を結びおわる頃、またたいそう遠慮ぽく、合わないときには取替の便宜を計らって貰えるか、とたずねた。Mは思わずその顔をまじまじと見た。間際になって俄かに確信をなくしたみたいな語勢だった。

喪服連（ルツトス）は一樣にそんなことに無関心なはずだったのと、念を押すにしても順序がふつうの客の場合とはさかさまだったのとで、Mがとまどっていると、相手は直ぐ又さつきと同じはにかみわらいになり、大きな綿の山でも押さえつけるみたいな手振をして見せ、問をうやむやにおわらせた。

彼自身用でないことは、すでに慥かだった。喪服連（ルツトス）の一人なのは疑いを入れなかった。すると……今し方覗かせた心迷いのようなものは、石蠟みたいに冷えたものへの……すでに足ではなくなったものへの……不慥かさのためだったのだろうか、考えられる事柄だった。その、嘗っては肉親だったのに肉親を熄めて硬直しているもの、親しくないはずはないそのものは迅速も拒みはじめている。よそよそしく離れて行っている。薄うすながら彼はそれに感づいている。このように高価な品を選ぶのは、たぶんそのことと無関係ではない。親しさを恢復し、身近かに呼び戻そうと意図してだったかも知れないし、あるいは、もつとまへの日目の、悔によるのだったかも知れない。……肉親だったからこそ、様ざまな日日があつて、その記憶からは自責みたいなものや、口惜さみたいなものが幾らでも滲みでてくるのかも知れないのだ。

包を受け取ると、胸の辺に抱きとめるようにかかえた。いかにも持ちにくそうに、いかにも毀れやすそうに、いかにもそういうことが解りかけてきている抱え方で、瓜先をしずかにすべらせて行った。それは、どうやら（愛）をおもいつめている人間の後恰

好だった。

Mは、男の背中を覗いてすすんだ。上衣の縫い目がどういう加減でか、ずっと裾までたいそう毛羽立って見え、まるで痩せた家畜の背筋でも眺めてゆくみたいだ。男はその日のような作業の場合のもっとも思慮深い態度はちゃんと心得ているといったふうには、円匙を担いだ方の肩をつつしみ深くおとし、背を丸め、髯ののびた頤先を襟許に埋めていた。それでも身の丈はMよりよほど高そうだった。もう若くはなく、床屋へ行かなければならない時期を疾にすぎている淡茶色の長い頭髮には白毛が目立って明るいつい灰色に見えた。

径は注意してみるとオメガの字形そっくりに曲りくねり、いつも出だしの地点へ逆戻りするみたいな気迷いを誘って、畳まれた。それは無限の蛇行のように、どんな人間でも、そこでは（みち）について考えずにいられなくなるような、そんな径だった。

通り越したのは夭折したもののたちの区域だったらしく、ひとつひとつの仕切も墓標の十字架も小さかった。埋葬されて間のないらしい盛土だけの所には小日傘だか吸着鉄砲だかの柄らしいものを見懸けた気がした。次の両側はやや年かさのものたちの埋葬区域らしく、それなりに仕切も大き目だったが建ち並ぶセメント製のクルスに嵌め込まれてある写真は、どれもこころが痛むほど若過ぎる少年と少女たちとだった。どうも、この共同墓地の設計者は、死者の来歴の永さにふさわしい埋葬区までの径の長さをきめ

たのだ。棺の中に封じられてある想い出が短かければ、短かい哀惜のみちのりを……永くつきない想い出なら涯しない蛇行のコオスで、それを反芻させようと。

オメガ形のみち筋をすゝんでいるうちに、Mは目差す目的の小さな場所が果して容易に見附け出せるものだろうか、と不安になりだす。若しクルスに取り付けて置いた写真とナンパ・プレエトとが剥落していたら、このかぎりなく反復するように蛇行する道は、そのまま迷路だった。写真にしろ、薄い亜鉛板のプレエトにしろ、脆く、古びるのにたっぷりな時間を経ている、その時間がながれて過去のものとなったからこそ、そこへ向ってすすんでいるのだった。

地形のうねりで疾に見えなくなっている厳しい門の見当から冷たい風が吹きながれた。風はしだいに速度と密度とを加えて頬を伝った。……男の頭髮が枯草のようにそそけだつを見て、Mは両手で自分のあたまをかばった。それからぬすみするように腕と腕との間から空を眺めた。雲とも霧とも知れない灰色のにごりの向うに陽がうつすらと透けてきた。風は意外なことに地表だけのようだった。生憎な風は愈いよ冷たく吹き募った。男の頭髮が縄のようによじれ、背筋の毛羽がたてがみのようになぎたおされる。男は一層胸を折り屈め、背を癖みたいに丸める。Mは急いで男との間隔を埋め、その背中のかげに額をこっそり寄せて風除けにした。円匙が時どきあたまをかすめて、Mは幾度も頸をすくめなければならなかったが、むしろそのきわどさのために夢中に

なってしまう。不意に、男が両足を揃えて停ったときにはMはす
んでのことで鼻をつぶしかけた。

「こゝだったですな」

男が円匙を足許に突き立ててMを振り返る。青苔にまといつか
れて黝む、そばのクルスへ目を遣ると、さいわい写真も輪郭だけ
なら安泰で、ナンパ・プレエトも慥かに証明書通りだったので、
心得切ったふりをしてすまし、みつともないまごつき方はさらさ
ないできりぬけた。Mはいかにも雇い手側らしい弁えきった態度
をよそおいつづけて、では、さっそく始めてみてください、と言
い付けた。

ほんとうの所、Mはずっと、この道具といつては円匙一挺しか
たずさえてきていない男の作業能力に疑いを抱いていた。若し甚
しく手間取りそうならM自身も黙って見てだけのつもりはな
いし、そんなふうに二人掛りでもはかばかしくなければ霊安室脇
の事務所へとつてかえし、追加の人夫を頼まなければならないと
案じていた。ところが……男は、Mの言ったことばが聴えなかつ
たみたいに愚図ぐずでズボンのかくしをまさぐった。やっと曳き
出したのを見ると、折れかかった紙巻で、それを悠長な手附で口
へ持ってゆき、その上二度も三度も火を点けそこなった。

冷たすぎる風だ、と思っていたのが霧をまぜはじめた。極微粒
の花粉のように柔かな霧は顔に触れながら地に落ちるまえに立ち
消えた。それでも少時すると、睫毛がぬれて白く曇った。空を見
上げると、うすにごりの向うの陽の光はかえって明るさを増して

いるらしいのに、このあたりだけが冷えびえとした半透明の空間に閉ざされていた。Mがこんどは瞭り命令する語勢でも一度促した。

「なあに、ちよつとの間でさあ、三十分に、一分と余計には暇取りませんで」

男は落ち着き払ってつて、短く詰った莚を遠くへ拗った。男は、そして……自身のことばの出まかせでないことを証明しはじめた。笞をつけて巖のような外観をもつセメントづくりのクルスが、男の二本の腕にかかる卓子の上に単に置かれてあるにすぎない花瓶か、精せい置物くらいに造作なく取り除かれた。台座の練瓦も、玩具の積木をくずすみたいに簡単に取り払われ、呆気なくふつくらとした赤土が剥き出しになった。男の円匙がその土を、羊羹でもけずるように切り取ってゆき、たちまち左右に盛り上げた。男自身が、やがて下降するエレベエタアにでも乗ったみたいに地の中へしずんで行って、灰色の頭髮さえまったく隠れた。円匙だけが土をはねあげて寄こし時どき刃先がきらめいた。うつとりと見とれていると男の声がした。Mが慌てて生温い盛土の上に四ツ這い、胸をさしのぼすようにして覗くと、長方形の穴の底から男が見上げて、呶鳴っていた。男の場所が生憎狭い穴の中なので、声は調子外れのラッパの音のように訝し合い、徒らに増幅してMの鼓膜を搏つばかりだ。やたらと頭上で腕を振り立てている様子からすると、どうも離れている、という合図らしくもおもわれるので、Mが盛土の縁からいざって掌に附いたどろを払っていると、

間もなくバナナの樹皮のような長いずっしりと湿った物体が次つぎ抛り出されてきた。足許に降ってきたのを屈んでしげしげと見ると、黒い布のつづれが黴のようにこびりついている。Mはそれに見憶えがあった。寝棺の飾の領巾の名残りにちがいなかった。指先でちよつと力を加えるだけで湿気た干菓子のようにたやすくくずれる木片に気を取られていると、こんどは短靴が片方ずつ落ちてきて揃えでもしたように行儀よく目の前に並んだ。それにも、むろんMは憶えがあった。納棺の折に扱った手ざわりまでまざまざと泛んだ。かなり上質で、土つかずのままの新品だったからこそ、原形だけにしろ、保ったのにちがいない。しかし、これは先日の喪服のように、殊更に調べられた物ではない。それは葬られた死者自身によって、幾年も前から、その日のためのように、用意されてあったのだ。その靴を父親に贈り物とした頃Mは奥地の村むらを回る雑貨行商をしていた。ある日、裕福な地主の家の慶事に行き合い、人違いでもされているみたいな鄭重さで招じられた。……その家の高令な父長が、実はしあわせの裾分けをひとりにも多く来訪者に及ぼそうと決意していて、Mも稀有の好意にめぐりあったのだった。めずらしい料理の饗応をうけたばかりでなく荷の半ちかくの量をすこしも値切らないで買い上げて貰った。思い懸けない早めの帰途にめぐまれたMは、はずんだころになり、父親の他所行きの靴を張り込むことになった。いつも留守居をする父親の穿物がひどい状態になっていたのを、前から気には懸けていたのだったMは、まさかそれで感謝を当てにしたのでは

なかったが、箱をひらいたとたん父親が目には火傷でもしたみたいにうめき声を発したのは、意外の成行きだった。

たいへんなことを、して呉れたな。と父親は笛のように震える声で言った。一年寄には要りもしない、むだなものを……とんでもないことをして呉れたな。

父親は、そう芯からつらげな声で言った――おれたちは、おれたちきりなのだから、この国のふつうの人間のように気楽に構えてしまつてはだめだのに……。第一何ひとつ身の回りの品なんか欲しいとも思っていなかったのに、どうして……。父親は掻き口説くように言つて、ことばを詰らせると、もう病人になつたみたい吐息ばかりしつづけて、Mがトランクに次の旅の仕度を調べ終つても、未だ機嫌はよくならなかった。

ところで、それにうんざりしたMが、どうかと思ひながら次の旅から戻つてくると、案外にもうむしかえす容子もなく、そんなことがあつたというのも嘘みたいな、むかしがらのひっそりとした父親に返つていた。その替り靴の方も、いったい何処に仕舞い込んだものか、その後永く見当らなかった。

父親がさいごまで大事にして穿き下さなかつたということに就いては、いろいろに考えられた。

Mのやさしげな行為が重ねては期待できにくい、という覚悟からだったかも知れないのだ、そうだとするとMの気持は重い。やさしげな行為にはまず肝腎の、甲斐性が信じにくい、という思い遣りからだったかも知れないのだ、そうだとすると、それに

もMの気持は重い。

甲斐性なしというのが、その頃も今も、すこしもかわらずもうどうしようもない運命みたいに慥かなことから、それを他愛なく見透かされていたということが、Mの気持を重くする。

……父親は墓所までの長いみちのりにつりあうだけの永い生涯をもったのに、たいていのがきが辛げだった。子からさえ、ほとんど贈り物のようなものを貰えず、貰っても、その悦びを悦びとできないくらい不安がつよかった。そして不安だけが一等慥かな自分たちの現実だ、ということを知っていた。……むだを、むだとしないために、いずれ遣ってくるはずの有効性のために、靴は真新しいままで取って置かれた。たぶん父親は、永代墓地の持てないことも、このような霧のしぶく日に埋葬期間に急ぎ立てられて墓起しの行われることも、全部予想したし、覚悟していた。Mには、巧く生きてゆくための甲斐性がないばかりか、巧く嘘をついて親を安心させる甲斐性さえなかったのだ。

骨というものを、もっとかがやくように暗いと考え詰めてきたMは、勝手のちがった感じで拾いつづけた。……古針ほどの指骨も漏らさないように、穴の中の男へくれぐれもたのみ、自分でも細心に蒐めつくした。霊安室の裏手の厚い植込が見えるあたりまで戻った頃、風が息でもひそめるように、熄んだ。霧はそれよりも以前にあがっていた。

植込の中央に腰丈の水道管が剥き出しに立っていた。そこで、骨を浄めるのだ、と往きがけに男から教えられていた。蛇口の真

下の玉砂利が洗われたばかりのように濡れていて、墓起しが、M だけではなかったのが察せられた。玉砂利の中には骨のかけらもまじっていそうだった。

骨を皓い、と独り決めにしていたのは故国の火葬の骨上げの物語が朧気に記憶されてあったためだった。しかし、土葬の、地中から掘り出してきたばかりの骨は、どれも髄から滲み出でもしたみたいな黝いむらがあつて、粉末のような地虫までつらなり、まるで想像とは異った。Mは、もし骨が皓いものならその本来の暗さに帰えそうと決意し、骨を悉くビニールの風呂敷の上にひろげて蹲まった。はじめてみて判ったのだが、これは、たいそう根気の要る作業だった。それに、脛から膝の辺にまでかけて絶え間なく飛沫がはねかえるので五分間もしない内にズボンが雑布のようにぬれた。靴下まで、気色悪くしめった。こうと判っていたら長靴にでもしてくるのだったのに、とMは少少残念がつてあの蛇腹のように伸び縮みする脛当附の皮長靴のことを思った。父親が亡つて、それから行商をやめた後も、Mは暫くその皮長靴で都会の敷石道を歩きまわった。……貯えが、乏しくなっていたのと、代りのしごとの方が未だ何もはつきりしていなかったのとで、身装をかまうどころでなかった。さらにそれよりもずっと重要な、ずっと大急ぎであたらなければならないことがあるはずで、Mはいつも居堪らない焦りに追い立てられていた。それはあまりいっぱいすぎて、しばしば絶望に襲われた。MはそれくらいFのことだけを気に懸けていた。……しかし、勤め口にありついた

ことのほかは、何ひとつ片附いていない。

総てがそっくりその当時のまま、現在部屋の隅にころがし放しにしてある皮長靴のように未だに抛っ放しになっている。行商につかつた二箇の大型トランクも、その中のやくざな売れ残りさえも、そのまま始末できないで放棄されてける。(甲斐性なし)の移民のねがいには、たぶんいつもこんなふうに芽生えのまままで枯れ、終りをまたずに終るのかも知れなかった。

ともかく、父親が亡った後、Mはいよいよ行商を廃める気で、新たには何ひとつ仕入れず、残品だけをトランクにかきいれて出発した。

Mの手懸ける品物は、だいたい安物の少年持ち小刀だとかおはじきだとか刺綴糸だとか、ミシン針小鋏だとかゴチャゴチャ取り留めないのだが、そのときには、どれもがいわば売れ残りの半端ばかりだったので、見た目にも一段と纏りがなく、折角トランクを開ける段取になっても鼻すじにしわを寄せる小馬鹿わらいぐらいでしか酬いられないことが多かったときには、いくら歩いても中身の目方が一グラムも減らない日があった。だいたい、トランクを振分に背負って田舎回りをする雑貨行商というものが、さすがにこのだだっぴろい国でも時勢外れになってきていて、商いはもうたやすくはなかった。どこの聚落にも商品をはちきれそうに取り揃える小綺麗な売店が増えており、Mなどより遥かに年効を持つ行商人達でさえ、百姓等のお情けのような気紛れを当てにしないなら遣って行けなくなっていた。……そんなわけで、その旅

の口明けの目は惨ざんの不成績で宿屋に着くと疾に夜の食事刻を回っていた。足は囚人の足枷でもつけられたみたいだし、顔は、たぶん汗の塩気で縞目になっていた。

帳場の大きな机の向うに盛り上るように半身を見せている髪の毛の薄い女が経営者らしいのに、いつまでも見ない振りの顔をしているので、Mは仕方なく一旦置いたトランクを持ち直してすぐ側まで寄って行った。

「さあ、部屋が残っていたかしら」

女主人が値踏みしきった口調で突き放すように応えた。

「何ですて、まさかこの時間から次の聚落まで歩け、といわれるのではないでしょうね、何とか都合してみてください、もう、ふたあしと歩けそうにないんです」

口に出して言うてしまうと、Mはほんとうに立っているのにも耐えられない心地になって、女主人の机に凭れかかってしまった。女主人はそれくらいの泣き言には慣れっこになっている顔附で眉も動かさなかった。Mはそれを、やや斜め下からうかがっているうちに女主人の下顎の容ちが獐犷な魚類とそっくりなのを発見した。それはたいそう貪慾そうで、そしてたいそう無情そうだった。

……たかだか決ったコオスのたべものしか摂らず、特別誹えのみものや何やかやに気前よく散財しない者は、この頑丈そうな下顎に決して気に入られることはない、と思われた。すると精ぜいそのような身窄しい泊り客の部数以上でない自分はとうてい客とはなることができないかも知れない、とMは感じ出し、残りの

乏しい氣力が溜息になった。

その時、直ぐ脇のカアテンの所から若い女の声が、女主人へともMへともつかず、怯おず言った。

「あの、13号でしたら、さつき馬車でお発ちになったあと空いたままになっていると思いますけれど」

「そおら、空部屋があるそうではありませんか、ねえ」

Mが甦った声を挙げ、意外な助勢者へ感謝の目を差し向けた。ほっそりとした顔の、とても一所懸命な瞳の女が薄く唇をひらき、心配そうに立っていた「おや、そうでしたかね、……」女主人は別段わるびれもしないで一掃して言い、それから若い女へは邪陰に、余計な口出しはやめにおしよ、お前さんはね、言い付けられただけのことを黙ってきちんとしていさえすればいいのだ、と一喝した。

それでも鍵だけは取出して寄した。

「お客さん、この頃は早つづきの水飢饉なのでね、あまりシヤワアはむだづかいしないでね、と言って汚いままころがられても寝具がたまらないし、とにかく、氣をつけてくださいな」

矛盾する憎まれ口も氣にはならなかったくらいひと安心したMが、トランクを持とうとして身を屈めると、慥かに、両脇に置いたはずの一方が消えていた。ふしぎに思つて見回すとトランクは女が細長い廊下を綱曳のような恰好で曳き摺って行っている。

「おやおや、お客さんによってサアビスのいいこと、いやらしいね、色気づいているんだよ」女主人がくびを伸してみても舌打する

のを聞き捨てにしてMは飛んで行った。

「そいつは重いのですよ、置いて下さい、朝から一日いっぱい歩いたのに何しろ売れなかったものだから、中身は詰めたときのまま、ちつとも減っていないのです、お内儀さんも何か言っているし、さあ、替ります」

Mは空いている方の手を伸べたが女は一所懸命な瞳の色をますますつよくしてあくまで細い腕で曳こうとした。そこでMもトランクの把手の端に指を三本だけ割り込ませ、二人懸りで持つことにしたが、狭い把手の中で触れ合う女の指は燠火のようにほのぼのと温かかった。……一三号室は、宿屋の傭人達もつかう手洗と並んで広さも他の部屋の半分以下だった。寝台の横に、トランクをふたつ置くと、トランクの大きさのせいもあったが、あとはもうあまり接近しすぎないように向い合うのが骨をくらい狭くなるしかった。

「どうも、ありがとう」

Mは感動しすぎたために反って低くかすれた声になり、財布のある上衣の内かくしに手を持って行った。

「いえ、どうぞ、とんでもありませんわ」

女が悟って、くちだけではなく、みるみるかなしそうに顔を曇らせた。直ぐにも背を向けそうにした。

「待ってください、Mが顔を熱くして押しとどめた。きみの親切をかねなんかで済そうとするのは感心した遣り方でないと考えますよ、しかし、どうしたらいいか判らなかつたのです、でも、も

うしませんから……あやまりますから、そんなふうにも悪くしたような具合で出て行かないでください、できるなら、ぼくとすこしの問話をしてください、ぼくはね、実は少年の頃、と言っても十歳にもならない極く小さい時分ですよ、親たちと三人きりでこの国に渡ってきたのです、それだから当然、伯父とか叔母とか旧い知合いとかいった人たちはいず、やさしくしてくれる人間といったら、親きりだった、ところが母親の方は移民になった次の年にもう亡ってしまったのです、それからずっと父親とぼくきりになってしまったのです、ご存じないかも知れませんがおとこ親というのはどうも優しさを表すのに一種独自のですね、例えば嬉しいときほど嬉しくない顔附をしたり、機嫌のいいときほどそれを隠すのに骨折ったり、といったあんばいなのです、要するに、優しさの表現技術にかけてはなっていないのですね、それくらいだから……十五年前、母親に死に別れてからこちらずっと、ぼくには優しくしてくれ手が欠けていたといえます、そしてそのたったひとりの肉親だった父親ももう亡くして愈いよひとりきりになったのです、でも、きみの示して呉れた思い遣り、親切、優しさを、淋しいばかりに余計大きく、実際以上仰ぎようしく感じるのだとは考えません、全然そんなふうには思いません、ぼくにもし、父親が尚健在で更に母親が生き返ったとしても、きみのありがたさはそれですこしもよわまらず、同じだけ大きくぼくのこころを縛ったにちがいないのです、ぜひ、きみの名前を聞かせてください」

「まあ、宿屋は客をお泊めするのがしごとですもの、そして、あたしは宿屋につかわれている者ですもの、さつきは、お内儀さんがたぶんうっかりしてですが、お断りしそうに見えたので気の附いたことを、そう言っただけですわ、そして、もっと広いいお部屋を差し上げたいのですけれど、ここきりありませんの。その点ではお内儀さんはそれほどひどい嘘について いたのではないわけです、どうぞあまり悪くお取りにならないでください、でも、ほんとうを言うにあたしはあなたが入っておいでになったときから、とても身内の者のような親しみを感じてはいましたわ、あなたの素直な黒い頭髮とひと重瞼、あなたのおだやかな顔たちとそれから発音、それらは、言われなくても、何も聞かなくても、同国人だということの証しでしたから。そればかりか、あたしの勘はもっと隠れていたもっとふたりだけに共通の、いろいろなことも瞬間に読みとっていたわけですわ。あなたは小さい頃に親御さんと移住してこられた、と言われましたわね、あたしもそうですわ、おかあさんを早く亡し、おとうさんとも死に別れてひとりきりだと言われましたわね、あたしもそうですわ、ふたりの身の上がとてもよく似ているということを、あたしはひと目で見抜きましたわ、それで、どうかして、…あなたのお役に立ちたいと考えたのです、でも、お部屋のことなどは当然にすぎませんし、お荷物だって、力が足りないものだから疲れ切っておいでのアナタをちつともたすけなくて……それどころかお邪魔にしかならなくて……情けないと思うているくらいですわ、そういう意味では、

あたしの名前など、申し上げるのに応しくないですわ、でも、あたしはやはりあなたに憶えていただきたいので、ほんの少少でもたかぶった心からではなく、申すことにしますわ、Fということです」

「ありがとう、それにしてもきみは謙遜しすぎますね、きみの優しい人柄はお内儀さんのことさえ今のようにな護することです証明されています、でも、こゝのお内儀さんはどうもきみの優しさに相応しいほど、きみに優しくはないようですね、それどころか、ずいぶん辛く当たるときがあるように思えますね」

たぶん過度な水仕事のために痛いたしく赤らんでいるFの掌先をMは見て、言った。

「いえ、そうでもないですわ、たとえそうだとしても、身寄もおかねの蓄えもない異邦人の孤児がコヨオテの鉤爪からも、タマンドアの毒牙からも無事でいれ、飢い思いもしないですんでしいるのは、ありがたいことだと、思わなければなりませんわ、それはそうと、商いの方の成績が良くなかったとか、言われましたわね」

「そうなのです、さっぱりだったのです、だから余計疲れ果てた感じになってしまったのですよ」

「でしたら、い、ことがありますわ」……Fが瞳を明るくして、両掌を音は立てず搏ち合せた。すっかり打ち解けたように幾分顔を近附けた。うすべにいろの耳朵が透けるようなうぶ毛に縁取られていた。「この街道から村の方へ向ってしばらく往きますと、かた

ちのいゝ丘があるのです、丘の上には三本、同じ枝ぶりを見せている高い梢のパイネエラが並んでいるのです、その丘全体が明日はこの近在一帯から人の集るバザアの会場になるのです、たくさんの人が年に一度のこのバザアを愉しみに着飾って、お小遣もたっぷり用意して、出懸ける慣しになっているのです、そこへ朝早くおゆきになり、いゝ場所を見附けて品物をひろげたなら半分か、ひよっとしたら全部だって売れ尽くすにちがいないですわ」

「それは慥かにとてもいゝ考えですね、明日はおことばの通りにしてみましょう、きみもそこへは出懸けられるのでしょいうね」

Mは、Fと賑かな人出の丘で逢う愉しさの方を期対しながら尋ねた。

「むかしは欠かしませんでした、ははが亡ってちちとふたりきりになったあと丘のバザアにだけは行きましたですわ、でも、それから行かなくなりました、ちつとも行きたくなくなったのですわ」

Mは礼儀を忘れない程度に、だが……素早く、Fの身なりへ目を配った。

……男物とも女物ともつかない細かな格子縞のブラウスの襟許は摺り切れて芯布が覗いていたし、スカートは老婆の穿くもののような縫よれの黒木綿みたいで、一二箇所裾が裂けていた。……織い足にはむごさだけが目立つ厳つい木靴がかぶさっていた。立ち働くときの服装とは言っても、しよつ中客の目に触れなければならぬ役目も帯びていてそれだとすると、バザアに出懸ける晴衣など用意できていないと見て間違いなかった。

……足音がした。

それでMはものを言い懸けたのを、やめてさらに耳を澄ませた。長い廊下をすすんでくる足音から、Fは、Mよりもっとさきにもっと聴く、それが誰のかまで聴きとったらしく、毛髪をかすかにふるわせた。そしてMの胸にかかるく指先を触れると同じ速さでもう扉から身を翻えした。

村道は、珈琲園が始まるあたりからゆるやかなカアブをえがいた。聚落の一等外れの屋根も隠れた。そこでは黒のような濃緑の一株一株の厚い茂みが視界をふさぎ、距離を喪わせた。それでかたへに土肌の露わな丘が盛りあがったとき不意の感にうたれたが、それはMがこのあたりの地形に昏かったためにすぎなかった、ちよつと切株の上にもものぼって見渡せば、丘はかなりの遠望も利いた。珈琲樹の茂みのさえぎっているのは精ぜい目の高さの見通しにすぎなかった。そして……丘の頂上には枝ぶりのにぎやかなパイネエラが慥かに三本眩立していた。さくらいろの巨きな弁を満開にした花までいっぱいつけていた。丘を巻いて牧草が密生し、その広さが、仲かななものも近附くにつれて判った。定刻には間があるはずだったが、飾り金具の附いな商人の箱馬車がちらほら見えていて軛から曳き馬をはずしはじめていた。やがて……片手に巻尺のケエスを握った男が散歩でもするみたいにぶらぶらしはじめた。肩や背中や袖口や幾つもついたポケットの辺に派手な襷のある上衣を着ていて、胸には磨きたてのような金色のバッジ

を光らせていた。男が箱馬車の側にゆきかかるとどの商人もバネ仕懸の人形のように畏まり、おじきを重ねた。中には、やたらに大きな笑い声を挙げたり、襷のある上衣の袖にかかるく触れたり、手品のようにどこからかキャンデイや莢の袋を取出して勧める者もいた。たぶん遠くの郡役所から出張した監督官なのだろう、とMは想像した。男の金色のバッジを見懸けたときに、Mは直ぐいやな予感があつて気が塞いだ。もう希望は持てないように思われて足許にころがつている詰らない恰好の石塊に視線をおとした。宿を出たときの弾みはなく萎えたところで石ばかりを眺めていた。輪の裏を、灼れたような眩しさをおぼえて目を挙げると濃緑の珈琲樹のうねりの中から見事な日輪が昇りはじめていた。おどろいたことには、日の出と共に村道という村道に人の群が湧き出し、総てが丘を目差してすすんできていた。商人達の箱馬車もいつの間にか増えて丘いっぱいになっていた。屋号を染めた旗や職を立て、機敏そうな販売員がひしめいていた。バッジの男がパイネエラの真中の幹の側に留って呼び子を吹いた。すると商人達がスタアを囲むフアンのように我れ勝ちに駆けて行つて取り囲んだ。Mだけが、離れて眺めていた。囲みの中から厚かましげな猫撫声や泪声やが一斉に沸き上つても無関心な目を向けつづけていた。そこで決定されようとしている事柄が無関係のはずはなかったが、決定はMと無関係にすすめられており、M自身そのことをもつともよく知っていた際限のない泣訴や哀願やが打ちきられるように、も一度呼び子が鳴らされ、バッジの男が囲みを割つてすすみだした。

男は巻尺のケエスを玩具のヨオヨオのように抛げのぼし手操りこみ、威厳をもって指令を下した。販売所の場所割がこうして頂上から螺旋状に定められて行つた。Mが、実はこころあてにしていたパイネエラの蔭の落ちるくさむらなど、疾に羅紗布屋の脚立によつて占められ、様ざまな店の台が目白押しに並んだ。

Mは重い思いをして運んだトランクを又振分に背負いあげて場所を索めた。来たときには何処でも勝手に直線の最短コースがえらべたのに、ずっと隙間なく連らなつてしまった店に沿つて螺旋状に下らなければならなかったから、氣の急く割に同じ高みをぐるぐるとうろついていた。

村道を溢れるほど埋めつくしてくる人びとの顔が見定められる近さに迫っているのに、Mはまだ中腹の辺で暇取っていた。

村道をふくれあがつて押してくる人びとの服装の色柄まで見定められる間近さとなつてゐるのに店並は末だ渦を巻いて下てへつづいてゐた。Mは、遂に螺旋状の終りちかくの丘の麓まで戻つたところで、村道から流れ込んでくる群とぶつかった。たちまち四半周ほど押し返され巻き込まれ、こづかれ、ほじかれ、やつこのことでそれでも流れの外に連れ出た荷を下してみると、背の方に懸けていたトランクの蓋のバンドがちぎれて半開きになり、中の品の半ばまでが喪われていた。それでもMは氣を取り直して商品を並べるための布を地面にひろげた。四隅に小石をひろつて乗せていねいにしわを伸ばした。厳丈な編上靴が布の端を踏みつけた。「許可証を持っているかね」

金色の楕形のバッジが、ちょうど跨る恰好で見上げたMの目に、鋭く猛だけしく、又木の梢ほどにもそびえた。

州政府発給の営業カードを出して渡そうとしたが、男は把ってみようともしないで、にべもなく、首を横に振った。

「この今日のパイネエラ丘のバザアは全く特別なのでね、こゝの郡役場の判コの押さったものでないし通用しないわけさ、知らなかったのかね」

「そうなんです、それに耳にしたのも急だったのとで、うかつでした。これから役場に出かけてみたつてとても間に合わないでしょうし」

「間に合わないどころか翌日になってしまふね」

「どうでしょうか、トランクもこんなふうにさつき混雑の中で痛めてしまったのです、ほんとうにどうでしょうか」

Mは毀れた蓋を諦め悪い人間のようにガタガタ開け閉めしてみた。平生のMはこんなふうの場合に意気地のないほどねぼりがなくて、その点でも同業の者にバカにされてきていたが、Mにしてはよくたたかった。

「しかし、皆への手前もあるしね、ここだとやはりまずいな」

「そうですね、だめでしょうね」

もうMの方が、たたかいを放棄しかけた顔になった

「困ったな」

バッジの男の方が逆にそんなことばを洩らした。螺旋状の商人達の目が幾段も集って成行をしっこく見守っていた。男はも一度

同じことばを洩らし、鍰広の帽子をずりあげて見回した。

「うん、あそこだったら差支えないのだが、どうかね、ちっとも構わんのだが」

男の腕がほぼ水平にあがって牧場の柵ちかくの溝のような窪地を指差した。柵の向う側では箱馬車を曳いてきて解かれた馬どもが嘶いたり蹄で草の根を蹴散らしたり尻尾の毛を振ってぶっつけあったりしながら草を喰んでいた。

「どうかね、気に入らないかね」

バツジの男は慥かに好意から言っていた。すくなくとも質の悪い冗談をもくろんでいる様子はなかった。ただ商人ほどに商いということを理解していなかった。Mはどうでもいい気になっていて、その程度の好意にしろ示されたことで泌じみとした気特になり、トランクを曳き摺って移った。

晴衣の集団は徐じよに丘を覆って、頂上を目指した。やがて三本のパイネエラのあたりをきわめ、下りのコオスに入ってもその螺旋状はそのまま村道に結ばれている。すでに充分に愉しみ、充分に購った集団の中に、牧場の方へ逸れてくるような気紛れ者がいるとは思われない。それに、よほど頸でも伸ばすのでなければ溝のような窪地は墓穴の中みたいで目にもつかない。Mはそこに立ったときから商いの方はきれいに諦めようと考えた。しかし、それをFのせいだというふうには、思わなかった。Fに言われなかったならこの丘にくることもなかったろうが、この日ばかりは何処も留守の家ばかりのはずだから、たといいつものように歩き

回ったとしても結果は同じわけだった。未だしも、柔かい草の葉の上にねころんで体をやすめれるだけ、Fのお蔭だった。うかつといえ、こういう季節にこういう郡へ這入ってきたということが、そもそもそうなのだった。トランクを振分にする同業にひとりも行き合わなかった理由も、こうなってみると判るのだ。彼らは、つまり遙かに側巧でこうした事情のところは避けてゆく。しかし、Mには、何だか悦ばしさの予感さえあつて悔はなかった。そしてMは目をつぶった。

ようやく人あしの退く時刻となった。気早な商人が馬を曳きにきはじめた。それをしおにMも立って帰途についた。Mの足運びは軽い。Mのその日の事情に通じている者なら、たぶん意外に感じたにちがいないほどの軽さで、歩巾を伸ばす。

宿屋に帰り着いた時刻は前の晩よりよほど早めで、卓子のほとんどが客で囲まれていた。食堂と調理室との境に背も高く、そして肥えた女主人が指揮者のように真直ぐ立ち、Fとも一人赤毛の娘が、卓子の間を走りつづけていた。Mが卓子に着いてもFがこないで、も一人の娘の方が盆を持ってきた。Fはまるで脇見するのを禁じられているみたいに緊張した横顔でずっと離れた卓子の客ばかりを給仕していた。女主人のご機嫌を取る考でMは青い酒を特別注文してみたが、それも赤毛が捧げてきた。

青い酒は、思ひのほかつよくて危くむせかえりそうになった。そうして、たちまち顔の赤くなるのが判り、酒で赤くなったような顔をFに見られるのは好まなかったから心を決して部屋にひき

あげた。そうして待った。永いこと待った。時間にすればそれはさほどではなかったのだろう、そのとき酔の火照りは頓から消えきつていなかったから……が、そのときようやく、Fの足音を聴いた。木靴を穿いているのはFだけだから直ぐ判った。

Fはすこしだけ開けた扉から体を斜めにしてすべりこませた。うしろ手で細い隙間の残るほどに戸を押しやり、上体だけMの方へ突き出す姿勢で「それで、どうでした」とまず結果を聞いた。

「お蔭で、ほら、こんなに軽くなりましたよ」

とMはちぎれたバンドをつなぎ合わせ縛ったトランクの方を腰掛けたまま二本の指でつまみ揚げてみせた。

「きつと、そうだと思っていましたわ。Fは顔一面をあがりの燈つたように明るませ晴ばれとした声で言った。……あなたはさつきお内儀さんに特別注文していたわ、ですからもうたしかに、そうにちがいないと思っていたですわ」

「あれはちがうのです、あれは。きみが叱られたかどうかでもしたみたいに、寄つてもくれないものだから、それで、お内儀さんに気に入られる遣り方をすこしでもして置いた方がいいのではないかと考えてね。ところが、すぐ顔が火照ってしまったのです、末だ幾分そうでしょうし Mは酒好きに見られなくなかったし、商いの成績ぐらいで他愛なく酒を飲む人間とも思われなくなかった。

「それだと、決して賢い方法だったといえないですわ、もうこれからはそういう無理はしないように気を付けなければなりません

わ」

Fは年長者みたいな口のききかたをした。それから極くさりげなく、近づいてきてトランクの目方を憶かめるように下げた。満足と安心とのしずかなわらいを改めて漂わせた。Mは背中のかげに隠していた紙包みを取って、膝の上でいろいろに持ち替えてみた。紙包みは、その日昼食のサンドウィッチを手に入れにバザアを歩いた折、Fのためにと、見附けたものだった。Mは思案を決めたように紙包を置いて立った。Fの両肩を、压えるほどにではなく掌でつつんだ。真剣になっているMも、けげんな顔を向けているFも、その間中、ことばを喪ったみたいに責め合っていた。MはFを自分のいた場所へ掛けさせた。

「これを、きみにあげたいのです」

Mは包の紐をほどいて中の品をFの足許に置いた。紅い女靴が床板の上でぶく光った、何の皮革でつくられてあるのか、薄いわりにこわい手触りで、症のような荒い毛穴の迹が、よく鞣されてないみたいだった。Fは身振で遠慮をしつづけ、泣きそうな顔になっていた。それからやつと……木靴をぬぐと、足を新しい靴に差し入れた。

「どんな具合ですか」

待ち遠しくなってMが尋ねたのとFが早口で言ったのが、かちあった。

「ちょうど、いいですわ」

しかし、Mにはどうもそれが暇取りすぎたように思えたのと、

慌てた早口だったのがあやしまれて、瓜先のところを指で抑えてみた。ちからを籠めるまでもなく、尤に二一センチも余ってへこんだ。

Mが蹲んだきりとても口惜しげな顔になった。……大きすぎたサイズばかりが残念だったのではない。やっと、たった一つの廉いそれしかえらべなかったのが口惜しかった。雑な接しは、足を包んで、一段とみにくく、紅い色もげひんなばかりに見えていた。Fの掌がMの頭の上に、のべられた。

うなじに添って、しずかにいとむように撫でた。「この色は真夏の陽射の下でも映るでしょうが、冬の白い霜の朝ならもっと綺麗に見えますわ、あたしは、厚い毛糸の靴下をこさえて、そうしてこれを穿きますわ、そうすればほんとうにちょうどいい大きさにちがいないですわ」

そして……

Fは幼い頃の憶い出を低い声で語りはじめている。それはかの女が三歳か、やっと四歳になったばかりのことだったらしい。ふた親は、広い棉畑を持つ地主の傭人になって昏い内から作業に出た。それはつよい雨の日のほか一目として欠かすことはなかった。かの女が未だねむりながら靴を穿かされ、ははの背に負われる頃、ちちはすでに二人分の農具と水樽とを下げ、明けきらない戸外に立っている。弁当入れの袋で片腕のふさがっているははの背中からずりおちないように、ときどき肩に懸けている両手と両方の内腿とに力を入れ、未だかの女は目覚めきっていない。棉株の畝は

浪のように涯しなくつづき、指令を受けている場所に着くまでには半身が露に漬く。ちちの方は皮の脛当を付けているから未だしもといえるが、ははの方は野良着の裾を幾度も絞り直さなければならぬほど濡れつくす。このことのほかな露のことがあるから、ははは重いのも厭わず背を与けるのだ。農具が地に下され、水樽が株の蔭に置かれてちちは作業にかかる。ははが、それにほんのすこしだけ遅れて」

つづく。ふた親はそれらの動作をいつも小走りのような慌しさではこぶ。未だ地平は白まない。かの女は自儘にうごくことをしばらくの間禁じられている。かの女の身の丈を越える棉木には露が湛えられ、もし凝つとしていないなら、したたかに全身を濡らしたにちがいない。かの女は弁当箱の置かれてあるふろしきの端に座って待つ。地平が燃え立ついろに染まり、露が雨垂れのように滴り尽くすまで、辛抱つよく待つように言いつけられている。……「やまの子供たちは到る処に見懸ける草の実をいいで、大きなのはオテダマにし、小さなのはオハジキにしますわ、ままごとあそびのオサラもちょうどいい恰好の葉っぱがいくらだって見附かるしそれに盛り込むものも黄や紫や赤やずいぶん賑やかに蒐めれますわ。やまの子供たちにとっては唯の石塊が石蹴りの石にも独楽にもなりますし、棒切は直ぐ玩具のカタナやサアペルになりますわ。そういう子供の創意を眺めて大人は感心もし安心もするのですが、それでも子供たちにとって何時だって一等欲しいのはほんとうの玩具のカタナだし、ほんとうの玩具のオサラなので

すわ。やまの子供たちが棒切にカタナのおもしろみを発見したり、葉っぱにオサラの便利さを見附けたりするまでには、永いたいくつを時間が流れていて、創意はいつもたいくつを持て余した子供たちがやつと手に入れるものなのですわ」

それにかの女は未だ幼なかつたからあそびをいろいろに組み合わせたり、興味をひきのぼしたりする発明に長けていない。直ぐ所在なくなり、爪し止ちをして見回す。芯摘のようなはかどる作業の場合などだとふた親の姿は幾十畝も遠退いてしまっている。かすかに枝の鳴るのだけが日当になる場合もある。そこへむかつてすすむとき、株あいの棉の葉のいちまいいちまいは帳のように巨きく緑一色で、さしかう細枝さえかの女には手強い。諸手で顔をかばつてくぐつたり、目を固くつむつて掻き分けたりしながらしのいでゆく。一度二度までは、それはおもしろい。

だが、場が昇りつめて、しばらく頭上で停止する日盛りの幾度日頃かにはかの女はもう泪ぐんでいる。かの女は穿いていた靴を喪くしてしまっている。だまって、裸足でははの側に立つ　は言の仮借のないうごきにつれてついてゆく。ははに靴を失くしている足を見附けられるときの悚れと悦びとが、予感めいた期待の卓でうずきつづけている。―ははの憤りにまかせたひとまたぎほかの女の精いっぱいのおふたまたぎに余る―やがて、かの女は翔ぶようにひかれ、邪険なまでに地を曳き摺られ、泪ばかりを頬につたわす・はずだった。ただ見喪われと靴を索めて畝間を駆けるははの項にも汗ばかりではない滴りがみえて、それがかの女のこころ

をあまやかに浸すはずだった。

……「それでもその間中、ははの手はあたしの手とつながっていて、あたしの手はしっかりと握り締められていて、まるで一組の走り手のように畑の中を駆っこしているのですわ、遠くの方から誰かが見ていたらきつとそんな光景に映ったはずですわ、あたしは懲りずに幾度でも靴をなくした……靴をなくすと畑のにくらしい棉花たちからははが取り戻せたので……、ははにとっては、でもその度につぶれる五分間か十分間かがとてもつらかったのですわ、畑の作業というものが、根気をつめることで成り立つ性質でしたから……五分間を惜しむころの張りがか細い暮しを保つのでしたから……、駆っ二は聖週間の聖者映画のように始終サイレントの中でおこなわれました、あたしにしてから、泪まみれの顔で、それで声は漏らしませんでしたし、はははなおさらそうでした、そういえば、あたしにはふた親が話し合っていた情景というものがどうしても想い泛ばないのです、笑いごえを撃げたり互いに聴き入ったり領いたり、のどかに向い合ったりしていたというふうな情影が思い泛ばないのです、記憶にあるふた親は、いつでも罰をうけている者ちのように無口で、感情というものを隠し込んでいます、余り奥の方にしずんでしまっていて、もう巧く頭わけないともいえます、それで、たまに物を言うとしても、くぐもった不明瞭なものにしかならず、相手は、それへ頷くという仕事さえ見せることが稀で、ただ作業の上で応えるといった具合です、いつも急せかと息を切らしているようです、想い運べるのも

つらくなる労働だけに明け暮れる姿ばかりです、たぶん、極端に乏しい生活の中では　ことばが喪われるのでしょうか、ことばは無力なものとしてそういう生活の中の人から棄てられるのでしょうか、それともことばの方でそういう人たちを見限り離れてしまうのでしょうか、あたしはいまでも考え込むことがありますわ、その……あたしが日に幾度となく、ははを困らせるためだけのように畑でぬいだ靴は遥ばる故国から持参したものでした、やがてこの国の学校へ登るときの用意にと、ふた親が仕度してきたものの中のひとつでした、編上式でところどころに綺麗なゴムがついていて、当然すこし大きすぎるにしても、とても気に入っていたものでしたのに……」

足音がした。

振り返えると……

灰色の頭髮の男が土のこびりついた円匙を下げて砂利を踏んできていた。

おわり

第二十一回全伯短歌大会

椰子樹社主催、パウリスタ新聞社後援の第三十一回全伯短歌大会は、エスツダンテ街のこけし食堂で開かれた。二十回までは、パウリスタ新聞社、椰子樹社後援であつたが、本大会から、開催側を交替した。

徳尾溪舟司会、中江委員長開会宣言、後援側挨拶など型どおりに進められ、午後六時終了、続いて懇談会に移つたが、五十余人の出席があり、非常な賑いをみせた。

・大会出席者、九十余名

・大会投稿者、百七十三名

・大会投稿首数、三百四十六首

・代表選者選

一位（一四）点、過誤ひとつ吾が夢として堪える夜を浮標は孤り
沖にともりぬ、八巻耕土、二位（一〇）点、海よりの風にひそかに
鳴りながらジャツカの幹も実も乾きいる 佐藤博三

・全投稿者互選

一位56点、代表選考一位と同一作品、二位25点、ことごとく
自負崩さるる日の果てを違いかづちの重きとどろき 水本すみ子

・アベック歌合わせ、特定選者選

一位老いづきて束縛もなきあけくれに（笠原くに）僅かに残るう
ずきも持てり（川上千代三郎）、二位、温めし想いはついに言い出
せず（清水節子） 桧葉垣の角をまわりて帰る（清谷益次）、選者、

西田季子、森重扶美、森谷風男、坂光男、佐藤博三

・席題、(旱魃) 後援側出題一位一三点、井戸水の涸れしを嘆く活題とし今日も隣家の風呂をよぼるる、米沢幹夫、二位一三点、鳳仙花のしおれ実はじかぬままにしてながきセツカの風吹きつける、佐藤いち

・「人と風」詠込みコンクール

一位5点、吹き上ぐる風に青麦波打ちて人影もなき起伏続けり、田上みずほ。

代表選、一般選総合得点

一位74点、八巻耕土、二位三九点、坂光男、三位34点点佐藤博三

コロニア・文学行事紹介

(3)

第二十三回全伯俳句大会

パウリスタ新聞社主催の全伯俳句大会は十月二十六日、文協大サロンで開かれた。この大会は、コロニア短詩型分野最大の祭典で、年々盛大している。ホトトギスの流れを汲む佐藤念腹宗匠主宰の「木蔭」に拠る人々の大会であって、コロニア俳句界に隠然たる大勢力をなしている。

いわゆる明治俳句の花鳥諷詠で、ブラジルの自然に托して、人間感情の機微を詠むという線を守っている。しかし、科学が高度に発達し、社会生活が複雑化し、生活意識が分化し、尖鋭化する

に従って、写生句を標榜しながらも、微妙な変化を見せている。

・出席者、二百十九人

・兼題（春昼、耕、花まんが）投句一千三百四十一句

・席題（牧青む、草青む、墓参）投句四百三十八句

兼題投句の中から、念腹宗匠及び代表選者によって選ばれた

高点句

・一位（四〇点）井上蒼崖、花マンガ靴を嫌って育つ子ら・二位

（27点）北村海牛、肩ずれの替馬もなく耕せる

・三位（25点）大熊星子、春昼やろくろ回せば壺生れ

・同（25点）井上蒼崖、

春昼の戸を搔いて腹減りし犬・同（25点）若林楓葉、

春昼やローマから来し鐘が 鳴る

席題では、念腹宗匠が四十句と特選五句とを採り、それらが発表された。次に念腹席題作品二句を掲げておく

・牧青む沼とり巻いて臥す牛に

・ヒナード花切らんとす雨やまず

（緑）

コロニア文芸誌・紹介

月刊歌誌「朝日短歌」

コロニアの総合短歌誌「椰子樹」は、三十年の歴史を持っているので、広く知られている。しかし、コロニア唯一の月刊歌誌「朝日短歌」を知る人は少ないと思う。

本誌は、北パラナ、アサイ市の「アサイ短歌会」の機関誌である。アサイ市を中心とするトレスバラス移住地は、日系最大の移住地としてよく知られている。短歌、俳句など、短誌型文学会は戦前から存在した。戦後、俳句会はかなり早く復活したが、短歌会が復活したのは、一九六三年二月で、山室新太郎（晶山充）を中心として「アサイ短歌会」が再出発した。一九六四年二月、会員作品の発表機関として、月刊「ゆりかご」を創刊、一九六五年五月、第十六号から「朝日短歌」と改題して今日に至っている。一九六九年七月、第六十六号を発行、北パの一角にあつて、コロニア短歌界に、その存在が注目されている。

本誌は、菊判、謄写印刷、本文三十頁内外で、発行者は、山室新太郎主宰のアサイ短歌会である。毎号巻頭に、日本専門歌人の作品鑑賞を載せ、次いでサンパウロ市に在住の歌人をはじめ、コロニア有数作歌者の寄稿作品も掲載している。アサイ短歌会員作品が主要部分を占めているが、時に歌論（主として武本由夫執筆）、随筆、旅行記、歌会報告などの文章も載せてある。

本誌の特色とするところは、作品に地方色の豊かな点であり、特に、十才未満から十五六才までの少年少女短歌作品が、相当量載せてあることは驚異に価する。

これは、山室氏に指導を仰ぐ、口語教師の感化によるものであつて、日語の情操教育の一助として、短歌がとり上げられているものと思われる。日系最大の集団地の現象として首肯できるものであろうがコロニアとしては珍らしいもので、特筆に価するであらう。

(黄)

一九六九年

・コロニアの文学賞紹介

第二回「コロニア」文学賞

晩年ブラジル日本文化協会が設定した、「コロニア文学賞」は本年第二回を迎えた。これは一九六八年度のコロニア優秀文学作品に授賞されるものである。

全伯百余名の推薦委員中、三十八名が推薦状送付、九月二十四日、選考委員、延満三五郎（委員長）木村義臣、清谷益次、尾関興之助、宮尾進、鈴木悌一、島木史生、藪崎正寿（武本由夫、病欠）により選考会が行われた。その結果、本年第二回は入賞該当作品なし、佳作賞として、第十二回（一九六八年度）パウリスタ文学賞入賞作品「井戸（高野耕声）（パウリスタ新聞一九六八年新年号

載が決定した。

尚、「勝組になりそこねた男の終戦記録（松村俊明）」は推薦八名で、最高点であったが、「文学賞に価しない」とのことで入賞しなかった。

第二回、「岩波賞」

昨年、椰子社が新人発掘のため、コロニア短歌界の先達、故岩波菊治を記念して、設定したものである。

十九篇（各二十首）の中から、「錨音（岩渕静子）」が入賞した。選考委員は、樽崎嘉明、開沼貴代、陣内しのぶ、水本すみ子、小笠原富枝、佐藤博三、高橋よしみの七名 尚、第二位「虻（穂島千代）」第三位「呪術の火（知花清）」となった。（作品は、椰子樹第百五号参照のこと）

第二回「コロニア短歌賞」 昨年、椰子樹社が、奨励の為設定したもので、過去一か年間（一九六八年六月～一九六九年七月）の量質共に最高とみられる短歌作品に受賞される。全伯推薦委員二十名中十四名が推薦、選考委員、西田季子、弘中千賀子、清谷益次、川原比露思、井本惇（欠席、酒井繁一、武本由夫）、選考の結果、本年は、入賞該当者無しと決定した。（詳細は椰子樹第百五号参照のこと）

（黒）

第拾号・応募作品

選考経過発表

座談会風に

出席者

選考委員 尾関興之助

〃 弘中千賀子

〃 梅崎嘉明

編集部 武本由夫

司会「今晚は、ごくろうさまです。これから第十号への応募作品（小説）の選考会を開きます。十二篇を、読んやいただきましたが、その後、四篇ほど編集部に届きましたので、全部で十六篇になりました。今夜は、皆さんに目を通して頂いた分について選考して頂きましょう。最初に作品名を読みあげますから○△×の三段階に分けて、評価の印をつけてください。

①莫逆（福岡吉治）②実生の桜（米沢享）③琉璃夫人（貞野雅子）④風車のある家（三瀬喜代志）⑤異端者の旅路（高橋英二）⑥里い壁（いこま正）⑦春靄（遠藤邦峯）⑧嵐（矢島健介）⑨橋の外人（猪名四郎）⑩溷濁（白木ふみ）⑪誰も知らない（正木知

子) ⑫枯野(堀江一声)(以上の外に ⑭古巣(磯山汐見)、⑮時と風(翻訳物)(田畑三郎) ⑯砂の城(伊那宏) があとから到着した。

以上の中④⑧⑨が入選決定、⑥が入選補欠となった。また遅着の⑭は無鑑査 ⑮は編集部で取捨決定ということになった。

司会「では、落選作、入選作もに、⑰から選評をお願いします。

尾関「この作者の若々しい心境はわかるが、ただ、自分の過去を書いただけでは駄目だなあ。『自伝』として、そつと仕舞っておく方がいいだろう。

弘中「そうですね。移民としての経験自体重さがあるにちがいないのですが、自分も関わりある人々も、深く厳しく取り上げなければ伝記としての価値も薄いものになります。文体も肩肘張った調子で、経験も陳腐なものになっています。

梅崎「最初、主人公は文学青年らしく描かれているが、途中から、正義漢らしく書かれている。どうも性格の変化ではなくて、小説技法上の問題という感じです。情景描写になかなかいいところもあるんですが、『万葉』と『古今』を混同していたりして、不勉強が目立っていました。

司会「では、次に『実生の桜』にいきます。この作者は、『歪んだ先鞭』と同一作者です。

尾関「この作者は題材を追求していくという作家的な意欲を持っている。従って、話は面白いのだが、理屈を言いだすと退屈なものになっている弘中「一応まとまっているのですが、冗慢なところ

ろが目立ちますね。

尾関「親爺に反抗する真澄の行為が、由美子に受け入れられなかったという理由がはつきりしない。伯人娘との恋愛も深く書けていない。経済論も、常識の範囲から出ていないので、むしろマインスになっている。

司会「作者は、書くという意欲のある人ですから、次作に期待しましょう。次の“琉璃夫人”はどうですか。

尾関「作品とまでいかないね。

梅崎「杜撰ですね。“琉璃子”という名が、処々“百合子”に変わっていたりする。

弘中「ブラジルの大学生に制帽をかぶらせていたりしています。もう少し、ものを書くについての慎重な配慮が必要でしょう。

梅崎「筋は面白いが、骨組だけで、肉付けができていません。

司会「⑨は、“三瀬喜代志”風車のある家”です。これは、○○△で、入選とということになっています。

弘中「△をつけたのは私です。私としては、意図があいまいだと思うのです。人物が無性格のような感じで、乱交じみた行為の折りこまれている生活も、空々しいものにしか書けていないと思うんです。

属関「この作者、三角関形を書くのが、好みのようなだな。たいてい出てくる。

梅崎「とにかく読ませるものは持ってますね。通俗といえど通俗的ですが……。

尾関「文章のきめは粗いし、人物設定に不備はあるが、この作者には、一つだけ、僕の好きなところがあるんだ。それは、多くの作者が書くことを避けたがるような現実の中にぐんぐんペンを突っこんでいく。一口に言えば、現実主義的な取り扱い、とでもいうか、その所は、コロニアでは珍しいよ。」

司会「『異端者の旅路』これは、梅崎さんが今回の応募作の中で、一番興味を持って読んだといっていましたけど、

梅崎「異端者というものの行動を浮き彫りにしてあるところがよかった。その行動そのものは、馬鹿々々しいものですが、割り切れない人間というものの姿が書けていると思ったんです。

弘中「前に見た『アマゾン彷徨』、あれよりは良いと思います。でも、まだモチーフがはっきりしないですね。切れ切れのプロットをつなぎあわせても、小説にはならない、ということです。

属関「この人は空想家じゃないかな。冒頭の『母への手紙』は面白かったが、

あとはつまらなかった。第一、オノマトペイアが多すぎて、目ざわりだよ。

司会「表現力量の問題ですね。技術的に貧しいと、ついオノマトペイアを使ってしまう。では次の『黒い壁』にいきましょう。この『黒い壁』と次の⑦『春靄』とが同点なんですけど、④⑧⑨が入選で、もう一篇採るとすれば、このどちらかが入選しなければならなくなるんですが…

弘中「『黒い壁』は形容にオーバーなところがあるが、渡伯当時

のカマラーダの生き残りで、そのベネジツト爺の話から、パラナグワ港の奴隷売買所跡の所見、鉄道工事に使役された奴隷たちの惨状など、かなりよくまとめていると思います。

梅崎「前半はまずまずのできます。しかし、ルミナールを飲んで夢の世界にはいつてからの抒述は前半と重なっていて、無駄がありますね、

尾関「文体が幼稚だよ。例えば“奴隷評価所”なんて言葉、ないだろう。用語に対する無関心は、小説を読みづら　いものにする。想像力の高いのはいいが、現実と虚構の入りくみ方がまずいね。こんなのは、考証に力を入れて、歴史小説にすれば良いような気がしたな

司会「それじゃ、尾関さんは“春靄”の方を採りますか

尾関「いやあ、これも困るな。“春靄”よりは“黒い壁”の方がいいだろうな少なくとも、努力はしているよ。

司会「どこか削ったら、よくなるという点はありませんか尾関「そういう簡単な欠点というのは見当たらないね」

弘中「“春靄”は、一世と新来青年と三世たちとの対比において、コロニア社会を描こうという意向のように思うんです。しかし、人物像が、どれも、公式的というか図式的というのか、観念的なんですね」

尾関「僕も口のいい方じゃないが、弘中さんも、相当なもんだ。(笑)、アクチュアルな問題を提出しているんだが、表面を撫でたという程度に終わっている。三世との相剋なども底が浅いよ。そ

れに、もっと文章をひきしめなくちや……。

梅崎「僕は、三世のことは、よく見てると思いました。だけど、最後の方がギクシャクしてますね。

司会「それでは“春靄”より“黒い壁”の方を上位とみて、入選補欠ということにしましょう。よろしいですか。弘中「結構です。すね。

司会「では次の⑧“嵐”にいきます。

尾関「手馴れた書きぶりで、ソツはないようだな。しかし、作者の目は意外単なる風俗しかないね。家族の動静がよく描かれ悪くいえば、看病日誌だ“嵐”という題も、少々大げさだな。

（梅崎氏は作者なので発言しない）

弘中「事実を克明に書いています。しかし、一つの生命の終焉と対決する作者の死生観というものが出ていない。そこに物足りなさがあります。

尾関「作者は、それに対して感じているに違いない。良い悪いはともかく、それを打ち出さなくちや、

司会「⑨“橋の外人”ですが、これは入選しています。

梅崎「コント風な味があります。パトロンのジイサンに対する見方が面白い。

尾関「オチが面白かった、ジイサンが小便しながら“橋の外人”と思うところなど。突っぱなして書いてあるが、この態度はいいね。

梅崎「あのオチについての伏線が不足してますね。娘の京子を最

後にちよつと出すだけだが、あれでは薄手です。

弘中「達者な書きぶりですが、印象が淡いと思いました。五郎という人物の生き方は、よく描けていて納得できました。ジイサンと長女との接点は、題名から見て、ポイントになっているのでしょうが、突っこみが足りないようです。でも素質のいい人のように思い ました。

司会「次は“溷濁”ですが、尾関さん だけが△です。

尾関「この作者は、語り手としての腕 はあるんだ。娘の家出事件を中心に二つの家族の動きが書けている。助一などという狡猾な人物もかなり書けているんだ。だが、どうにもナニワブシで、安っぽいんだ。手法にも、オーバーラップ、フラッシュアップなどが用いてあつて、えッと思わせるところもあつたな。

弘中「文章が幼稚で、人物の取り扱い、筋の選びも粗いですね。

尾関「精力的に書いてあるが、粗雑なんだな、それに造語がやたらと出てくるのには、まいったな、

弘中「そうなんです。“現然たる広漠のような”なんて表現は意味不明ですね。それに、長篇の一部ということが、内容の解明に、さまたげとっています。

尾関「大河小説の一部らしいですね。濁った河ですか…。河沼を待つ、というところだな。

司会「次は“誰も知らない”ですが…、

尾関「この作者、字はうまいね。

司会「瀬戸さんですよ、戦前に新聞紙上で活躍した。

尾関「ああ、あの人が。気持ちに若さがあつていいね。どうも話が美化してあつてね。

梅崎「甘いですね。この人は書ける人と思いますが、現実への凝視不足で、いいものにならないんですよ。

司会「では、最後に“枯野”、いかがですか、

弘中「読むのに疲れました。悪文ですね。

梅崎「文語体というのは、気になりますね。読者に訴えるところがない。

尾関「消化不良、表現不足というところだな、作中で、下手な説教をブツのは、何も、この作者ばかりではないが、欠点だな。最初の方はいいんだな、ところが後の方でガツタリなんだ。これは、むしろ母親の青春を素材にした方が面白かったんじゃないかな。

司会「これで一応終わりましたが、審査にまわしたあとで、田畑三郎氏の翻訳「時と風」その他二篇采ましたが、どうしましょう。尾関「田畑君の訳ならしつかりしているし、載せていいでしょう。他の二篇も編集部で読んでみて、良いものがあつたら載せてもらていいでしょう。

司会「選考を終えての御感想は……、

尾関「コレだ、というのが見当たらなかったな、

司会「これは点のカラー尾関さんの口ぐせですね（笑）

梅崎「小説を面白くしようとする意識に足をすくわれて、観察描写がおろそかになるきらいがありました。

弘中「書くという意欲には感服しました。この意欲を勉強の方にも、まわしたら、と思いました。

尾関「その点、九号に載っている星野さんなど、勉強してるね。作品が着実に伸びてるからね。

司会「では、この辺で、どうもありがとうございました。

“樽”を書いた頃

グワラサイ

水野 浩志

小学校も終えていない大地を相手に生きて来た若者が、ペンを取った所で、小説らしい物が書けるはずがない、これが常識であった。二十年前のコロニヤの知的水準が現在より低かったとしても無謀であるというより他に言いようない。

文法も知らない一人の青年が小説らしきものに取り組んだ。それは取的が天下無敵の双葉山にとりくむ以上のものであったが、それを知っていて夢中になって取り組んで行った。終戦直後であった。戦争がすんだら此のおくれた国から大勝利の日本に帰るのが、移民の夢であったが、その夢はやぶれた。移民自身が自分の足許を見つめるどころか、時の流れに押されて、食うがために棉を植え、棉をつんでいる時代であった。アラサツバより奥の

土地で移民の九割は棉を作っている時代であった。四アローバ入りの袋をよたよたと担いで随性であるくのは姿だけでなく、心もそのようであった。

戦争が済んで日本に帰る子供にブラジル語教育の必要はなく、日本語の教育するにはなにもかも不足していた。戦争中にぼろぼろになるまで読み古反した雑誌は、「キング」であり「講談クラブ」であった。青年のバックボーンを形成したのは軍歌であり行進曲であった。勝組になれなかった理性があったとは言え、軍歌の支えを外されて、ブラジル人の中に入って行ける葡語も持たないわたくしが暗い気持で棉をつんでいた姿を二十年後の現在幻のように思いうかべる。

家庭的に暗い点もあって、双葉山にたとえ転がされても、その傷口から血が流れても、得るものがあるのではないか、薄暗いランプの下で原稿紙の柵目を埋めた。

頭の中にはいつも鈴木三重吉の「桑の実」があった。プロットがないようで、またあるようで画家と女中の交らない二本の線が去来した。無論調べて書く小説、社会小説が書けるだけのものを内臓している筈はない、日常生活の中から仮空の物語りを作り上げねばならない、現実そのままを書いてしまったら村八分にもなりかねない土壌の中で小説が芽生えるということは、苦難である。「桑の実」のような小説というのが目的であり願いであったが出来上ったものは稚い作品であった。理解者であった母にすじがなくて此れでも小説かと発表されてから言われたが、内心それが目的

だったのだ、と思ったことを今でも忘れずにいる。

二十年近い才月を距てて作品なりその当時を思いだすと余りにも稚なかつた自分がおかしくあわれになる。幸運にも第二位になれたのは作品を投稿する人が当時少なかつたのではないかと、思っている。

選者の古野菊生氏が

第一位（つつじ 山路冬彦）の作と全く対照的なふんい気を持つ。前者を固い粘土板にきざみこまれたスメリア文字によるものとすれば、羽ペンで書かれたかな文字によるものが、この作である。線の細すぎるうらみはあるが、短篇のコツをつかんだものとしては、応募作品中、唯一。「つつじ」の作者と共に成長の期待をわれわれはもつてよいと思う。と、評してくれたのがうれしくて、これを暗記してしまった。

もののはずみで双葉山を倒した取的の姿がそこにあったが、その翌年「よみもの賞」第一位に「牛糞」（コロニア文学第八号所載）が人選し発表された。豊かな人生を踏まえて書かれた渋川和樽の作品の前に、ブラジルの三重吉を自称する青臭い取的は呆然とするより外に術はなかつたのである。

それ以後、わたしは小説を書いていない。書けなくなつたのである。そして馬令を重ねて「牛糞」の作者渋川和樽が世を去つた四十八才という年に達してしまった。

第九号

“誌” 選評

スザノ詩活会

コロニア文学第九号詩欄合評旁々スザノ詩話会を、八月二十四日横田居で行なった。集まるもの、藤田、石橋、芳賀、横田、大浦、不二山は不参、外にサンパウロから可児、スザノ短歌会から八卷二氏の参加があつた。以下批判の大体を書いてみる。

旅、(横田)可児氏独特のスタイルである。棒切れを並べたように、素っ気なく書いているが多くのを含んでいる。

(八卷、藤田)ブラジルに古い日本人でなければ書けぬ詩だ。だが日本の人たちに判らないだろう。

(横田)疎外感や亀裂感だけを取り上げる文学と方向がちがつている。作者はだれにも親愛感をもち得る人である。

何を賭けるでもなく、ひよいと見知らぬ町に下車し、大衆に溶けこんで世間話をする。「ベンソンに泊る」以下は、奥地の小さな町の夜はこの通りである。「昨日にも明日にもつながりのない夜」は作者の精神の位置を暗示している。可児氏は、世界中のどこの邦に住んでもこういう詩を書くだろう。

(芳賀)何か哀感のようなものが漂っている。

(横田)人生的な左漂渺とした気分を誘作者とした気分を誘う。

作者の一篇は諷刺として面白い。

かに（横田）暗喩による表現の痛烈さは好ましい。

古代紫（八卷）素材は短歌的だ。

（可児）幻想的の表現にかんしんする

（横田）第七号の河流の詩とは対照的ですね。

（八卷）この人の短歌も変幻自在である。

（藤田）詩なり短歌なり、どちらかにきめるべきだ。

（横田）西脇氏の詩から詩語が大分入っている。幻影の人、永遠、アンドロメダ、脳髓など。

（藤田）自分のものになっているようだが、あまり多いのはよくない。

握手、影、（横田）江尻氏はやはり書きなれている。

（可児）や、常識的である。

（藤田）影は散漫である。

（横田）握手は緊張がある。三聯目の非常に、是非情の誤植である。江尿氏は過去にたくさんいい詩をつくっていると思うが。

矢島氏作品二篇（横田）この人が詩の魂をもっていることは、その書く小説で判る。この初めて書かれた詩もだれの影響もうけていない。すでに自分自身の詩の基盤をもっている。

（八巻）自分は「地球はうめいている」に共感をもつ。痛烈である。
（横田）この人は佐藤氏と共に歌壇に本拠を置くが、佐藤氏は表現の面で、矢島氏は生活意識の面で各々その方向を開拓し、詩壇を背負うだろう。

真木氏作品二篇（横田）この人もいい詩を書く。「鶏糞と男たち」は愛誦すべき詩である。

かげろう（横田）先号の「枯野」が非常によかったので、この詩は見劣りがする。

（藤田）孤独という文字はこの情景に於ては不適當である。

ミシリツカード（横田）単純で素朴で愛すべき詩。

胎胚（八巻）この詩は不可解だ。批評できない。

（可児）前半はなにかをかんじ得る。だが後尾は判らない。

（横田）あまり表現に凝りすぎた。詩に伝達性はやはり必要だと思う。

イタベチ村（横田）この詩は小説風に書いてみた。

（芳賀）そのせいか叙述にすぎるようだ。

（八巻）糞尿という言葉は詩には卑俗だと思う。

（横田）フイジコの意味ではない。メタフイジコの意味です。
（八巻）農民意識にこだわりすぎる。もっと普遍的立場で書いてもらいたい。

分身説（可児）第三節でとどめた方が効果がありはしなかったか。
（横田）四節にも大切なことを述べているのです。

以上

第十四回「パウリスタ文学賞」

入賞「洪水」高橋英一 大分県出身、一九三三年生 九大外国語部米英科卒 一九五六年着伯、在ベレン日本総領事館勤務、現在に至る。

入選佳作「鶏人」いこま正（生駒正）

三重県出身、一九二七年着 伯、クリチーバ市在住、菓子製造同

「影のあと」泉玉一郎（安村恵定）

沖縄県出身、一九三四年着 伯、サンパウロ市在住、新聞雑誌のバンカ経営 ○

▼選者、古野菊生、尾関興之助、武本由夫、木村義臣、

▼発表、パウリスタ新聞、一九七〇年、新年特集号

「コロニア文学」

作品募集

△左によって、本会々員より作品を募集します。

- 一、小説、①百枚内外、②三十枚内外、③翻訳物六十枚以内
- 二、評論（文学、美術、学術、社会 教育その他）、三十枚内外
- 三、随筆、紀行、記録、二十枚内外
- 四、韻文、①詩、訳詩、一人二篇以内、②短歌十首以内、③俳句十句以内④川柳十句以内
- 五、短文（生活文、地方通信）五枚内外
- 六、特別募集、①コロノ時代の思い出、②わがムダンサ物語、③わが住む町（村）を語る。④この人を忘れないでください（人物伝）、

以上いずれも二十枚内外応募規定：必ず原稿用紙使用、原稿末尾に本名、連絡先を明記。

第十一号掲載作品、選者委員

宮尾進、田畑三郎、山添良一

原稿×切、

第十一号、一九七〇年一月

第十二号、一九七〇年三日

宛名、「コロニア文学会」

Colonia Bungakukai

Rua Sao Joaquim, 381 Sao Paulo

第一回「サンパウロ文学賞」

作品募集

- 一、応募資格・・ブラジル在住の日系人
- 一、種目……………未発表の自作小説
- 一、枚数……………五十枚以内（四百字詰原稿紙）
- 一 締切……………一九七〇年八月三十一日
- 一、選者……………日本の作家、石川達三氏
- 一、発表……………一九七一年、サンパウロ新聞新年特集号 紙上
- 一、賞……………正賞、金時計、副賞一千新クルゼイロス
- 一、宛名……………サンパウロ新聞社、「サンパウロ文学賞 係」

Sao Paulo Shimbun

Rua Tomas de Lima, 573

Sao Paulo

（注）住所、氏名、職業、年齢を明記すること。応募原稿は一切返却せず。著作権は、サンパウロ新聞社に属す。

○

「パウリスタ文学賞」「農業と協同文学賞」に次いで、新しく「サンパウロ文学賞」が設定された。コロニアの文学界にとって、まことによるこぼしいことである。会員諸氏に応募をお奨めする。（コロニア文学編集部）

地方在住

会員へおい

毎号のように書くので、皆さん、もう既に耳にタコ、いや目にタコだろうと思いますが会費滞納の方は、なるべく早く御納入ください。最近の物価攻勢で、印刷費はどんどん高くなり、本会の会計も悲鳴をあげています。

このようなわけで、さきに聖市内在住会員の滞納会費は、文協会費徴集係の皆川氏が、休暇を利用して集金に御協力くださり、大部分を集めましたところが、地方在住会員滞納会費は、御送金に俟つ以外、これまで集金の方法がなく、困っております。こうした会費滞納会員方も、『納入の意志が無い』というのではなく、余りにも少額なので、送金に費す手数をわずらわしく感じられ、つい滞納となっておられるのだらうと思われます。

そこで、地方在住会員中、会費集金連絡などに御協力頂ける方を地区別に求め、集金頂けるよう、取りはからいたいと考えております。地方在住の会員中、居住地区内会員会費集金に御協力くださる方は、その旨会計部へ第一報ください。さつそく、その地区在住会員滞納者名簿及び領収証をお送りいたしたく存じます。

本会としまして、以上のような手段に訴えて集金することは、本意ないことです。どこまでも、「コロニアの文学を育成する」という第一義の道に立つ会員諸氏の自発的、積極的な会費納入に候ちたいのです。しかし、俊つこと自体が文学運動の促進をはばむという結果を招くので……やむなく、集金に地方会員の手数を煩

すことも考えるわけです。この点御諒解頂きたく存じます

(会計部)

新入会員

一九六五年八月―同年十一月

A 青山俊克

E 江原 しんし

F 堀江豊、藤田晋一郎

H 畑尚文

K 石代俊作、上条庫二

N 縄手敏夫

D 岡部勝

T 高瀬徳太郎、高橋渉、樋田徳重

Y 山内盛武、山本昇、山崎一心

後記

◎「コロニア文学」は、ようやく、第十号にたどりついた。牛の歩みにも似ているが、これは、コロニアそのものの姿でもある。根強く文学運動を押し進め、美しい開花期を迎えたいものである。

◎本誌も、この号で、第十回目の八苦なので記念特集号とし、創刊以来の歩みをふりかえってみた。その為増ページを断行、本年二回発行の埋めあわせとした。

◎創刊四年目、そろそろ、コロニア文学運動は曲り角に來たという感じである。新しい年を迎え、捲土重来の意気に燃え、基盤の強化に努めたいものである。

◎こんど、「パ文学賞」「農協文学賞」に続いてサンパウロ文学賞」が設定された。真によろこばしい。会員諸氏はふるって応募されるようお勧めする。

◎相変わらず、台所は火の車なのでコロニアの有名商社におねだりし、発行費援助の意味で広告を頂いている。

感謝にたえない。

(武本生)

コロニア文学第十号

発行一九六九年十一月

(会員へ無料配布)

編集人 コロニア文学会編集委員会代表 鈴木 悌一

発行所 サンパウロ市 サンジョアキン街三八一番

日本文化センター内コロニア文学会

Gremio Literario Colonia

Rua Sao Joaquim, 381. S. Paulo Tel. 278-5519

印刷所 パウリスタ印刷株式会社

オスカル・ントラ・ゴルジーニョ街四六番